

語り継ぐ 14

^{い ま}
現在を生きる私たちができること

～忘れない 阪神・淡路大震災

立ち向かう 未来の災害に～

兵庫県立舞子高等学校
環境防災科 14 期生

題 名	名 前	頁
語り継ぐ	青 井 陽	1
語り継ぐ	阿 部 睦 月	5
語り継ぐ	有 本 夏 希	9
『今に活かし過去を生かす』	伊 藤 瑞 歩	13
語り継ぐ	上 前 望	17
語り継ぐ	浦 崎 翼	21
語り継ぐ	大瀬良 菜 月	25
語り継ぐ	大 坪 直 人	29
語り継ぐ	大 西 一 平	33
父と母の経験	片 山 柚 希	37
語り継ぐ	金 本 虎太朗	41
さらに向こうへ	河 越 悠 太	45
語り継ぐ	黒 田 恭 平	49
語り継ぐ	桑 名 布志子	52
語り継ぐ	後 藤 謙 太	56
「今」の僕ができる「未来」への防災活動	坂 口 柊 矢	60
どうか神様、助けて下さい	崎 田 莉 子	64
事実を事実として伝える	佐 藤 柚	68
繋	菅 野 奏	72
手話を広めるために	千 田 優 美	76
震災の記憶を語り継ぐ	滝 川 拓 海	80
The fear of ignorance ～無知の恐ろしさ～	田 中 大 輝	84
語り継ぐ	土 井 輝 太	88
想いを綴る	中 村 公 貴	91
次の世代へ	沼 田 拳士郎	95
「語り継ぐ」	橋 本 賢 太	99
語り継ぐ	福 岡 祐 輝	103
忘れるな震災・語り継ごう震災	藤 本 健 太	107
語り継ぐ	細 道 壮太郎	111
生き抜く力	程 野 洸 平	115
語り継ぐ	松 本 美 砂	119
語り継ぐ	丸 岡 大 雅	123
語り継ぐ	三 井 唯 菜	127
語り継ぐ	森 本 愛 菜	131
生きよう	山 崎 歩 美	134
語り継ぐ	吉 川 知 里	138
3年間のすべてを語り継ぐ	若 松 龍之介	142

語り継ぐ

青井 陽

1 はじめに

私は阪神・淡路大震災を経験していない。しかし、私の家族はみんなで災害について話をする事が多く、阪神・淡路大震災についてもよく話を聞いていた。その中でも、当時手話サークルの会長をしていた祖母の話をもっと詳しく聞いてみたいと思った。祖母は健聴者である。

2 1月17日、阪神・淡路大震災発生

(1) 午前5時46分

祖母は名谷の団地に住んでいて、いつものように寝ていた。その時に揺れがきた。何が起こったか分からなかった。最初は大型のトラックがドーンっと自分の家に突っ込んで来たと思った。揺れている時間がとても長く感じ、1分から2分間揺れているような感覚だった。

揺れが収まり、幸いにも家族に怪我をした人はおらず、食器棚から食器が落ちたぐらいで家は崩れなかった。少し落ち着いたところで外に出て近所の人達と安否確認をしていた時、空から何か黒いものがたくさん降ってきた。最初は雪だと思っていた。しかし、家に帰ってテレビをつけると長田の町が燃えていた。長田の町が燃えて、たくさんの灰が風に乗って祖母の家の方まで飛んできたのである。その時初めて大変な事になったと思った。

祖母の家は電気が止まり、ガスも止まった。当分は電気が使えなくて家の中でろうそくを立てて過ごした。ガスが止まり、お風呂に入れなかったが、水は出るので冬場に冷たい水で頭を洗った。祖父の家族がいる九州の田舎から神戸の状況をテレビで見て連絡をくれた。そしてガスが止まっている事を伝えるとガスボンベを送ってくれて、温かい物を食べて過ごせた日もあった。

(2) 祖母の行動

地震から数日は余震が怖くて近所の人たちで集まり、一つの家で一緒に過ごしていた。しかし、周りからの情報で神戸に大変な事が起きた事、困った人がたくさんいる事を知り、何か役に立ちたいと思っていた。その時に頭に思い浮かんだのが聴覚障がい者の事だった。

この時代は聴覚障がい者への理解があまり浸透していなかった。「聴覚障がい者」という呼び方もなく、いわゆる「つんぼ」などと差別的な呼ばれ方をしていた時代だ。だから、周りは手話の理解も広がっていなかった。手話で会話をすると変な目で見られるから、親や周りの人に禁止させられていて、手話をしない方もいた程だ。その事を分かっていた祖母は自分が何とかしないといけない、と思い立ち上がった。

まず、ろうあ協会で連絡を取り合った。みんなで協力して担当を決めた。祖母は最初、聴覚障がい者が困っていることを伝え、ろうあ協会に支援物資を送ってもらうようにいろんな所に連絡をする担当だった。その時祖父にも協力してもらい、とても助かったと言っていた。そして、たくさんの支援物資が届き、たくさんの聴覚障がい者に渡すことが出来た。

次に区役所で手話通訳者として交代で入るようになった。災害後でいろいろな手続きをしなくては行けない。手話がなければ、健聴者でも難しい内容を聴覚障がい者は、筆談や口話だけで読み取らないといけない。筆談だけではとても時間がかかるし、ちゃんと理解ができない可能性がある。とても大変だ。しかし、その時に手話を使うことで理解しやすくなったし、聴覚障がい者でも分からないところはちゃんと質問ができるようになった。

避難所にも交代で入った。聴覚障がい者は見た目では判断しにくいので、祖母たちは腕に「通訳者」という腕章をつけて避難所の中を動き回った。そして、あちらから声をかけてくれるのを待った。避難所には、たくさん聴覚障がい者がいた。今までずっと一人で不安だったのか、祖母たちの顔を見てとても安心したようだった。この活動を長田区や須磨区、垂水区などたくさんの避難所に行った。移動はずっと自転車だ。地震でこぼこになった道、家屋や電柱が倒れている横を自転車で走り続けた。それはお尻にイボができてしまうぐらいだった。

阪神・淡路大震災から少し時間が経ち、祖母が震災前から入っていた太鼓の団地で、仮設住宅がたくさん並んでいるところに太鼓を披露して回った。震災から少し時間は経っているが、震災前の元気さはまだ無かった。しかし、太鼓を披露することで仮設住宅の方達がだんだん笑顔になって喜んでくれるのが嬉しかった。あと太鼓なら聴覚障がい者の方たちにも音は伝わらないかもしれないが、振動が伝わるから喜んでくれた。

3 祖母が今思うこと

祖母自身、阪神・淡路大震災で周りと比べてあまり被害を受けなかった。家族、親戚は全員無事で、家も無事だから避難所に行かなくても自分の家で過ごすことが出来る。だからこそあんな行動が出来たんだと思うと言っていた。周りの人たちがあんなに困っているのに、自分はじっとしていいのか。何かできる事はないのか。そう考えていた時に「自分には手話しかない」と行動した。今の自分なら勇気がいることだし、体力の面や自分にも家族がいるからと考えてしまうが、その時の自分は人の役に立ちたいという一心で無我夢中でしていた。しかし、まったく後悔はしていない。聴覚障がい者の役に立てて本当に良かった。自分にしかできない事をしたと思う。今でもその聴覚障がい者との関係が続いているからとても嬉しい。

4 私に伝えたいこと

祖母に今の私に伝えたいことを聞いた。「自分の孫が同じように手話をするなんて当時想像していなかった。当時は手話をしている事が恥ずかしいという時代だったから、こうやって手話に興味を持ってくることがとても嬉しい。世の中に手話は恥ずかしくないという考えや手話が広まった事を実感した。これからも手話と関わり続けてほしい。また人の役に立ちたいという気持ちを忘れないでほしい。特別な学科に入って人の役に立ちたいと聞いた時、本当に嬉しかった。今の自分は年齢的に出来ないことも増えてきて人の役に立ちたいと思っても難しいところがある。だけど自分の孫が人の役に立っている事は自分が出来ない事を代わりにしてくれているようでとても嬉しい。」

5 災害時の聴覚障がい者

- (1) テレビやラジオでの情報や案内放送などの耳から入る情報を得ることができないため、どんな行動をとればいいのか分からない。
- (2) 情報収集やコミュニケーションの道具として使っているファックス、電子メール、字幕付テレビ番組などが、災害時には使えない。
- (3) コミュニケーションの問題などから、聴覚障がい者は安否の確認が難しい。
- (4) 避難所で放送が聞こえないため、救援物資、食糧の配給などが受けられないことがある。人の行列を見て、初めて食料の配給だと分かり、自分も並んだが品切れになってしまったとの事例や、たまたま行動隊が来たときに、避難所内の放送を通訳してもらったところ、医者や無料散髪などの情報が初めて分かり、今までこのような放送をしていたのかと、ますます不安になったなどの事例がある。
- (5) 読解力が難しい場合は、行政機関などからの震災ニュースの内容を掴めない。
- (6) 被災によるストレスや、聴覚障害があるがゆえの、情報障害や人間関係のストレスが重なり、情報からも人間関係からも取り残されていた聴覚障がい者がたくさんいる。
- (7) 災害に関する申請書類を役所に持っていても、通訳者がいないため、戸惑う場面も多い。また、各市町村によって、ファックス機の再申請可否、修理代の負担割合などが違うため、混乱してしまう。

このように聴覚障がい者は、コミュニケーションが難しいことから、人にもものを頼んだり、一緒に行動したり行事に参加したりすることが出来ないから、つい人を避けてしまったり、地域との繋がりが弱くなったり、孤立感を感じてしまうこともある。また、見た目から判断しにくいので、周囲から気づかれない場合が多い。そのため、聴覚障害だと気づかずに話しかけられるが聞こえていないので指示が通らなかったり、相手を怒らせてしまったり、トラブルの原因にもなる。

6 私たちに出来る事

私たちは、だれもが声を使って話をしたり聞いたりするのが当たり前だと思われている環境のなかで過ごしてきた。だからこそ自分の言葉が伝わらない、本当に理解してもらっているのか分からないなど、コミュニケーションを取るのが難しい聴覚障がい者を避けてきてはいないだろうか。この考えを持っている健聴者が多いから避難所で孤立してしまう聴覚障がい者がいるのだと思う。私はその考えを見直してほしい。

まず健聴者のなかには、聴覚障がい者とは手話で会話しないといけないと思っている人が多い。聴覚障がい者とのコミュニケーションは決して手話だけではない。方法はたくさんある。だから、「自分は手話

ができないから。」といって、聴覚障がい者を避けてはいけない。例えば、文字を書いて会話する筆談、話し手の口元や頬の動き、表情などを視覚的に捉えて会話する口話、手や身体を動かして表現する身振り、空間に文字を書いて伝える空書などがある。どれも簡単に出来るのではないか。これなら手話が出来なくても、聴覚障がい者と会話することが出来る。障害があるからといって決して孤立させてはいけないし、孤独感を感じさせてはいけない。

近所に住んでいる聴覚障がい者と日頃から繋がりを持つことも大事だと思う。挨拶をするだけでも構わない。声は聞こえていないかもしれないが、気持ちは伝わっているはずだ。このように普段から少しでも繋がりを持つことで災害時に会ったときに避難場所や現在の状況を伝えやすいし、あちらからも声をかけやすくなる。

7 さいごに

私は小さい頃からこの話を聞いていた。この話が私にとって手話を始めるきっかけになったし、環境防災科に入りたいと思ったきっかけでもある。祖母のように手話を使いたい。人々を助けられるような人になりたいと思っていた。小さいころの私は祖母の事を「災害時に耳が不自由な人を助けたんだ。」とすごいとは思っていた。しかし、なんとなく受け止めて話を聞いていたから、祖母からこんなに細かく話を聞いたり、大変な思いをしたりしていたという事はこの「語り継ぐ」で祖母に詳しく聞くまで知らなかった。

祖母自身も阪神・淡路大震災の被害者なのに、この行動ができた祖母は本当にすごいと思う。私にもそんな行動ができるのかと思うと正直分らない。しかし、祖母の行動がいったい何人の聴覚障がい者を安心させる事ができたのだろう。祖母は私にとって尊敬する人であり、目標である。

私が今行っている手話サークルは、阪神・淡路大震災の時に、祖母が会長をしていたサークルだ。周りの聴覚障がい者から「あなたのおばあちゃんには本当にお世話になった。よろしく伝えてね。」と言ってくださる方がたくさんいる。今でも感謝され続けている祖母を誇りに思う。

私は手話を始めてたくさんの聴覚障がい者とお話する機会が増えた。聴覚障がい者は災害時だけではなく、普段の生活から困ることがあることに気が付いた。そのことに私たちは普段から配慮して行動しなければいけないと思った。

私も行動力のある人になりたい。そのために私は手話サークルに入って手話をたくさん勉強したい。聴覚障がい者の方とたくさんお話していきたい。

私は高校を卒業したからといって聴覚障がい者との関わりをなくすのではなく、もっと広がっていきたいと思っている。

8 夢と防災

私の夢は医療事務である。医療事務とは病院の受付や会計、カルテ整理を行っている。診察や治療が終わった患者の医療費を計算するのも医療事務の仕事だ。病院に行った時に真っ先に会えるのが医療事務で、最後に会計をするのも医療事務だから「病院の顔」だと言われている。患者と直接関わりながら医師や看護師をサポートする。なぜ私が医療事務になりたいかという、理由は2つある。

1つ目は環境防災科に入って人と関わることが好きになったからだ。私は、環境防災科に入る前までは人見知りで人と話すことが苦手だった。しかし、ボランティアや交流をしていく中で人と関わることが好きになった。ボランティアや交流は初対面の方や、さまざまな年代の方とお話や力を合わせていかなければならない。私はボランティアや交流をしていく中で、人と関わることが好きになっていた。今では初対面の方でも目を見てお話ができるし、質問をしたり、笑顔で話したりすることが出来るようになった。そして、もっと人と関わっていききたい、いろんな人とお話がしたいという気持ちが強くなった。

2つ目は聴覚障がい者のお話だ。私は、手話ができるようになり、たくさんの聴覚障がい者と関わってきた。その中で「病院で自分の言いたいことが伝わらなくて困る。医師が言っている事も聞き取れないから、自分がどんな症状なのか、どんな薬を飲んでいるか分からない。」と言っていた。自分の体がどうなっているかちゃんと分からない事はとても不安だ。健聴者なら少しでも不安があると質問もできるのにそれもできない。そこで私は病院に手話ができる人がいれば安心するのではないかと、少しでも役に立てるのではないかと考えた。

医療事務は病院に来た患者と必ず顔を合わせる事ができる。ここで私は患者としっかりコミュニケーションを取りたい。患者にとって近所の人のような話しかけやすい存在になりたい。そうすると普段から病気や怪我の事で少しでも気になった事があれば話してくれる。これは災害時にも役に立つ。災害時は普

段とは違う環境になり、身体的にも精神的にもしんどくなる。その時に身体について気になった事や、誰かに自分の思いを聞いてほしいときに話しかけてくれれば、未然に病気を予防できるかもしれないからだ。

病院は命を助ける場所だ。しかし、災害時は病院でも何が起きるか分からない。だから病院では避難訓練を行いたい。実際に災害が起こった時はどうするのか、怪我をした方がたくさん運ばれてきたらどう対応をするか、入院中の患者をどうやって避難させるかなどきちんと決めておかなければならない。一人一人が役割を決めて、自分たちがその時どう動くかはっきりさせる事が大事だ。そうすることで、災害時にも患者一人一人への対応が早くなり、命を救う事に繋がるからだ。

私は高校を卒業しても防災を広げていきたい。そのために私は病院にその地域のハザードマップを置きたい。なぜなら、診察を待っている時間に見てもらうためだ。この時間は雑誌を読んだり、携帯を触ったりする人が多いと思う。しかし、その時間を防災の事を少しでも考える時間にしてほしい。あと病院で心肺蘇生の練習や怪我の応急処置を教えたい。いつも行っている病院で行うことで今までこんな機会が無かった人でも来ることが出来る。子供から大人までできるので幅広く広げる事が出来る。心肺蘇生や怪我の応急処置ができる人が一人でも増える事で、一人でも多くの命を救う事が出来る。病院だけを頼るのではなく、自分たちで救える命は救ってほしい。

語り継ぐ

阿部 睦月

はじめに

私は阪神・淡路大震災の5年後に生まれた。だから、阪神・淡路大震災を経験していない。しかし、小学校の頃から学校行事として阪神・淡路大震災の事を学んでいた。環境防災科に入り、ボランティア活動をする中で「人の温かさ」を知ることができた。

人の温かさとかくさんの人の協力で今がある。今の神戸がある。経験していない私たちにできることは、経験した人から話を聞き後世に語り継ぐことだ。私は実際に母に聞いたことを書き留めようと思う。

また、知人の話も少しだけ語り継ぐ。

1 阪神・淡路大震災の概要

発生日時：1995年1月17日午前5時46分

震源地：淡路島北部 規模：M7.3

死者：6,434人 行方不明者：3人 負傷者：43,792人

全壊：104,906棟 半壊：144,274棟

「阪神・淡路大震災について（内閣府 防災情報のページ）」より

2 発生当日

長田区に家族4人で住んでいた。当時20代だった母は三ノ宮のカラオケボックスで早朝6時まで勤務していた。「そろそろ仕事終わりや」と考えていた時に、長く続く横揺れ。「地震かな？」と思った瞬間、激しい縦揺れの地震。ライフラインはすぐに遮断され、電線などの火花が飛び散る。母は、すぐに同僚とカウンターの下に隠れる。揺れが納まり、建物の中から出た光景はまさに私たちが映像で見た光景だったそう。三ノ宮は出勤の人がいたため、「大丈夫か!？」の声があちこちで響いていた。

3 家族との再会まで

1週間会えなく、連絡も取れなかった。幸いに家族で亡くなった方はいなかった。祖母と弟は長田区の小学校の体育館に避難していた。叔母の主人が三ノ宮で務めている母を迎えに来た。そして、1週間ぶりの再会。祖母の顔には傷がたくさんあり、母は「無事でよかった」と思った。そして、飼っていた猫を助けに行き、無事だったけど猫も人間と同じで怖い思いをしてなかなか寄って来なかった。猫は人間不信になり、行方が分からないまま別れた。飼い猫だけど家族として過ごしていたからショックを受けたと言っていた。

4 避難所での生活

(1) 食料

自衛隊の方々が作ってくれたおにぎりと、味噌汁がずっと続いていた。その中で困ったことが、ありがたいことだけ栄養が偏っていたこと。配給された真っ白で無味のおにぎりを食べて食あたりしたことが避難所生活での辛かったことだった。祖母が体育館裏にカセットコンロを並べ、料理し配っていたこともあった。たくさんの人には行き渡らないが、知り合いなどには配り、助け合った。

(2) 衣類

支援物資が大量に山積みされている中から自分に合う服をとっていた。支援物資で送られてくる服は綺麗なもののだけでは無く、破れた服も含まれていた。衣類が多く送られてきたため、逆に余り、置き場所が無いこともあった。

(3) お風呂

自衛隊が簡易風呂を設置。多くの人が同じ風呂に入るため衛生的にはあまりよくなかった。時には洗い流さないシャンプーを使ったこともあったが、女性は臭いを気にする方も多いためお風呂は入らないと気が済まなかったそうだ。

5 仮設住宅での生活

震災発生から半年頃に仮設住宅の抽選が当たり、名谷の方に引っ越した。母の弟は小学6年生だった

ため転校。そこでは、被災した子が来たからとっていいじめにもあった。母も仕事に復帰し、少しずつ復旧していった。全員が「前に進もう」という心がけをしていた。そのおかげで神戸の復旧が早かったと感じた。そんな中で三ノ宮には有名ブランドが揃っていたため、外国人がブランドのカバンやアクセサリーを強盗するということが相次いで起こった。

6 母が今思うこと（母目線）

非常用持ち出し袋を用意しておけばよかった。毎回、大事だと言われているがどこかで「まだ大丈夫」と思いがちだった。「地震から〇年」と言われているときは覚えていても、日常になると忘れてしまう。「風化」していると実感した。それは、モノだけではなく阪神・淡路大震災そのものも風化していつている。家族は幸いに助かっていたが、被災者の方の中には亡くなった方の家族がたくさんいる。その人たちのためにも、私たち環境防災科である高校生が阪神・淡路大震災のことを伝えてほしい。毎日朝を迎えられることや、学校に行けていること、日常を生活していることに感謝すること。家族はもちろん、友達のことを大切にしておく。困ったときに助けてもらえるかもしれないから人と人とのつながりを大切にしていればよかったと思える日まで大切にすること。

災害が起こると家族がバラバラになるから、前もって待ち合わせ場所は決めておく。困っている人がいたら助けるのは当たり前にしておきなさい。でも、助けることは自分が生きていなければできないことだから、まず自分が生きなさい。

あなたは経験したことが無いけれど、見たことや聞いたことを忘れないでほしい。いつか、自分が親になったとき自分の子供にも同じように話してあげてね。

7 知人からのお話

私の知人は看護師をしている。大阪の病院に勤めていたため直接は被害にあっていない。発生してから、ドクターヘリで神戸からの患者を受け入れていた。しかし、その患者たちは皆が「神戸とのギャップに罪悪感がある。自分だけが安全なところに来てもいいのか」と身体面より精神面に深く傷がついたようだった。ポートアイランドの市民病院からの患者が多く運ばれていたそうだが、ポートアイランドは橋が破壊されて孤立していた。拠点病院となっている病院がポートアイランドにあっていいのかと言っていた。南海トラフ巨大地震が起こると言われているが、もしかしたら液状化現象で浸水地域が広がる可能性もあるからとても不安に思っていた。

（今思うこと）

- ・事前の準備が大切
どこの家に誰がいるのか、避難所はどこに行けばいいのかなど。
- ・老若男女問わず仲良くする
避難できないとき、助けてもらうため。

私の知人は同じマンションの人で年齢もとても離れている。しかし、動物を通して挨拶から始まり今では家族のようにお世話になっている。もし、震災があったとき知人は高齢者と呼ばれる層になっているから、若い私に助けてもらいたい。私たちがリーダーシップを取って地域の人を誘導する。「高校生に期待しているよ」と言われた。私にとって大切な人だから、自分が生きて周りの人を助けたい。

8 話を聞いた感想

初めてゆっくり話を聞く機会だった。話をする中で、「この部分はどうなるんやろな」と話し合うこともあった。震災が発生してから1週間も祖母と会えなかった時はすごく不安が大きかったのだろうと思った。私が思っている以上に大変な思いをしていた。避難所では「友達」がたくさんできたいが、辛いときに話せる唯一の楽しみだったそう。そんなコミュニケーションを強くして家族を助けたいと思う。それは、「発生したとき」だけではなく「発生する前」のことも伝えきれていないことがあるから、伝えたいと思った。私が知らないことを話してくれた母。それは、映像で見るよりもリアルなことであり、驚くことが多かった。自分のすぐ近くに被災者がいたことを忘れていた。母は「怖い思いをしたことは覚えているけど、いざ話を聞かせてって言われると忘れていたことのほうが多い」と言っていた。幸い家族全員が無事で本当に良かった。

また、阪神・淡路大震災のことを被災された方以外（非被災者）から聞くことで、神戸がどんな風に映っていたのかよく分かった。マスメディアが報道していることは、「〇〇地区に〇〇が支給された」などの放送が多いけど、その裏に隠された被災者の困ったことがたくさん聞けて良かった。色々なことが

ある言葉の裏を伝えるべきだと思った。良い部分も悪い部分もある阪神・淡路大震災。そのどちらもまだ何も知らない子供たちや、同世代に広めていきたい。

9 過去の私と今の私

私は、「舞子高校環境防科」に入学した。理由は、人の役に立ちたいと思ったからだ。中学生の頃から、人のために何かをすることが好きだった。人の役に立つということは、ただの自己満足かもしれない。それでも「ありがとう」という言葉が嬉しくて頑張っていた。環境防災科に入学して、たくさんの経験がある。ボランティア活動をして得た知識もたくさんある。消防学校や熊本被災地支援活動など、普通科では体験できないことをさせていただいた。

小学校の頃から「阪神・淡路大震災」の事は学んでいた。毎年1月17日になると、全校集会で黙とうや阪神・淡路大震災の映像を見ていた。そのときは「怖い」としか印象はなかった。何回か行われていた避難訓練も真剣にはしていたが、それは「先生に怒られたくないから」という理由だったと思う。他にも、家族で人と防災未来センターに行ったとき、実際の揺れを体験するコーナーで幼かった私は、「アトラクションに乗っている気分だね」って母に言ったことが記憶にある。その当時は、「まさか大きな地震が来ることなんて無い、地震来ても大丈夫やろ」と思っていたはずだ。

しかし、環境防災科に入り災害に対する観点が変わった。他人事ではなく私事。それを地域の人や家族に意識してもらいたい。そう思えるようになった。

もう一度同じような災害が来たら、学んできた防災を活かすことができるだろうか。「高校生に何ができんねん」と思う人はたくさんいる。しかし、逆に言えば、「高校生にしかできないこと」もある。地域の防災訓練、夏祭りのボランティア、募金活動、被災地支援活動など。熊本被災地支援活動に行ったときは、私たちが元気を分ける側だったが地元の人たちにたくさんの元気をもらう側になった。人の温かさを感じた活動となった。そのことを家族や友人、近所の人にまで話した。私たち高校生ができることは日常に溢れていることを忘れないでほしい。

10 未来の私と夢

私は、スポーツをすることの楽しさを知ってもらいたい。防災には直接関りが無いと思う。しかし、間接的に関わることはできる。被災地に訪れてスポーツ教室を開くこと。老若男女問わず自分に合うスポーツを探して、健康増進に繋がればいいと思う。

私がこの夢を持つようになったきっかけのひとつに、熊本被災地支援活動での出来事がある。それは、益城町の避難所で高齢者の方と一緒に体操をしたことだ。年をとるにつれて身体が固くなり、動きにくくなる。少しでもほぐすために行われていた。頭を使う体操メニューに構成されていたので、私自身も疲れた。体操している高齢者の方の表情は明るく、楽しそうな笑顔でいっぱいだった。そんな笑顔を増やしたいなと思った。もちろん、高齢者の方だけではなく子供たちにも同じ思いがある。避難所だけではなく、自分が育った地域でも活動できればいいなと思っている。

もっと先の事を考えると、自分の子供にもスポーツの楽しさを知ってもらうために様々な種類のスポーツに挑戦してほしい。その時に私も一緒に運動してアドバイスを与えられる存在になりたい。そして、「ディフェンスアクション」というサッカーやフットサルを通して、防災や減災を学ぶ活動広めるためにサッカー教室を開きたい。防災を広げられる良いチャンスだ。

11 熊本被災地支援活動

高校に入学して初めて被災地の活動をさせていただいた。突然のことだったので、不安しかなかった。しかし、熊本のことはテレビで放送していることしか知らなかった。「それでは熊本の方に失礼だから特産物とか知っていると会話も弾むよね」と先生のアドバイスで気づかされた。私もテレビで放送していることが全てだということを。だけど、そうではなかった。私が関わらせていただいた被災者の方や菊池農業高校の方々も元気だった。

私は益城町の避難所で活動した。避難所ではトイレ掃除や布団の天日干し、ゴミ拾い、被災者の方との交流をしていた。私が思っている以上に元気な高齢者がたくさんいた。「高校生が来てくれて嬉しい、孫みたいやわ～」と言ってくれたことがとても嬉しかったことを覚えている。実際に活動した日は1日しかなく、そのまま神戸に帰ることが嫌だった。そんな時に「微力だけど無力じゃない」と話してくれた先生の言葉が私たち14期生を助けてくださった。熊本の町の視察、菊池農業高校での生徒との交流や歌の発表、田植え、学校見学などたくさんの経験をさせていただいた。私たちが元気を貰う

場面がいくつもあった。そして、神戸に自信を持って帰ることができた。そして、家族や友達に「熊本の人みんな温かくて元気だった」と伝えることができた。熊本への印象は180度変わった。

菊池農業高校で連絡先を交換した人とは今でも連絡を取り合っている。一度だけの出会いで終わらずではなく、離れている今でもお互いの学校について話せていることが嬉しい。熊本へは、これからも支援していきたい。募金活動も含めて、自分が熊本へ訪れて友達に再会する日を実現する。

12 最後に

・仲間の大切さ

3年間クラス替えが無い環境防災科。今思えばクラス替えが無くて良かったと思う。このクラスでしか出せない色が大いに発揮できた。その分私たちの絆は深まった。3年間過ごしてきた仲間のことを忘れない。色々な時と一緒に過ごし、泣いたり笑ったり、馬鹿しあったり喧嘩したりした日々を忘れない。この3年間のことは誇りに思う。それぞれ違う進路であっても定期的・継続的に集まりたい。高校生活も一度しかない。今も未来も全力で生きていきたい。「舞子高校環境防災科で良かった」

・私ができること

「阪神・淡路大震災」という出来事が風化していると改めて認識した。多くの方の命を奪い、人間から様々なものを奪った震災。自然には勝てない。まさにその通りだと思う。それは誰もが分かっていることだ。私たちは何ができるだろうか。自分の命は自分で守る意識を世の中の人に知ってもらいたい。

「災害が発生したら誰かが助けてくれる、自分は助かる」という思い込みを無くす。「備えあれば患いなし」という言葉があるが、日常に備えを定着させることが必要である。日本は地震大国であることを再確認するべきだ。被災者が増えないために行政や会社は様々な対策をしている。各都道府県も対策を練っていると授業で学んだ。神戸にしかできない対策、私にしかできない対策を考えるべきだ。そのひとつが語り継ぐことだ。被災していないからこそ、被災した方に語り継いでもらうことは大切である。語り継いでもらったことを語り継ぐ。私たちがすべきことだ。3年間学んできたことを止めてはいけない。将来、社会人になってからも自信を持って話し続けたい。私ができることは語り継ぐことだ。

語り継ぐ

有本 夏希

1 はじめに

私は阪神・淡路大震災発生後に生まれたため、実際に当時の苦しみを直接肌で感じたわけではない。しかし防災を学んでいる私たちは、過去の災害の教訓やこれからの災害に対する備えなど、様々な面からの防災を広めていく役割がある。そのため「語り継ぐ」を書くにあたって、被災者である家族から当時の話を聞いた。

2 母の話

(1) 震災前日

阪神・淡路大震災の前日、1995年1月16日のこと。

この日の夜7時頃、こたつで横になり寝ていた母は揺れを感じてパッと目が覚めた。今思えばあの揺れは、大震災を予兆させるものだったのだろう。その後続いて揺れることもなかったため、その日は普段通りの生活をし、夜は眠りについた。

(2) 震災当日

阪神・淡路大震災の当日、1995年1月17日のこと。

午前5時46分。まだ布団の中で深い眠りについていた。「ドドーン」今度は地面が割れるような物凄い音で前日と同じようにパッと目が覚めた。その直後、洗濯機で回されているような揺れを感じ飛び起きたが、怖くて足から崩れ落ちてしまった。初めは地震とは理解できず、自分の家だけがトラックか何かに突っ込まれたのだと思った。「あ、今死ぬんや」と思った。

揺れが収まり周りを見渡すと、家の中が生まれ変わったような見たこともない姿になっていた。こま付きの家具はあちこちに散らばり、テレビは足元に落ち、冷蔵庫は部屋の真ん中にまで移動していた。たんすのある部屋では、2つのたんすが重なるように倒れていた。幸いこの部屋には誰も寝ておらず助かった。また、当時飼っていた熱帯魚は水槽の中から1匹残らず飛び出していた。この熱帯魚たちは地震から何か月もたってから、雑誌の間などに挟まって出てきたという。

(3) 長田の街

空もだんだんと明るくなってきたころ、やっと少し落ち着きを取り戻した母は電気を付けようとしたが付かない。電話もテレビも使えない。しかしラジオが家にあったためラジオを付けてみると「長田で火事発生」この言葉が耳に入ってきた。母はもともと長田に住んでおり、実家が長田にあった。急いで車に乗り込み長田へ向かった。まだ朝なのに空は不気味なオレンジがかった色をしていた。板宿の線路の踏切を越えた瞬間、景色が一斉に変わった。何か粉が飛んできた。灰だ。それを見て「無理や、もう死んだ。」と思った。だんだんと渋滞も酷くなってきた車が全然進まなくなった。

ようやく実家についた。1階は崩れずに残っていた。家族はいつも2階で寝ていたがこの日だけはなぜか1階で寝ていたため全員無事だった。家に入ろうとしたが玄関の引き戸が開かなかったため、鉄格子の少しの隙間を利用して押しのけた。家の中は食器が割れてガラスであふれかえっていた。ガラスでフローリングに穴が開くほどだった。家族は靴がなかったためベランダのスリッパを取りに行きそれを履いた。外へ出てみるとだんだん火が迫ってきているのが分かり、初めはただただその火を眺めているだけだった。しかし火が移ってきたため母を含め周囲にいた人達で消火活動を始めた。マンホールの蓋を開けてバケツにひもを付けて水をくみ上げた。みんなで一生懸命に消火した。

迫ってくる火の中、弟が家の中にもう一度入り父の位牌を取りに行った。こたつの布団と子機、落ちてあった白いブラウスと一緒に外へ投げた。写真などの大切なものは取れなかった。煙がだんだんと近づいてくるのが分かった。「煙きた。あかん。」怖くてみんなで叫び弟を呼んだ。ゆっくりと家まで火がやってきた。「家ってこんな風に燃えていくんや。」どうすることもできず、ただただ中の方から燃えていく家、初めて目にする光景をぼーと眺めることしかできなかった。火はたちまち長田の街を飲み込み、消すことができないぐらいに広がった。そのまま家や建物は何日間も炎に包まれた。

余震も続いていた。しかし当時は余震という言葉の知名度が低かったため、また揺れたことに驚いた。誰かが「余震だ。」とつぶやいているのに対し、「余震って何。」との声も多くあった。「また揺れるらしい。」とだけ告げられ、また同じような揺れが来るのかと不安が続く日々だった。あたりを見渡すと、泣き叫びながら家族や友人を探している人が目に入った。本当に戦争の後のような景色だった。

(4) 避難生活

当日は近所の小学校に避難をした。見たこともないような人ばかりで体育館は埋め尽くされていた。その日は毛布も何もなくただ不安の中眠りにつくことしかできなかった。ご飯はおにぎり1つとバナナだけ配給された。長田のスーパーには食品が何も残っていなかったため、母が住んでいる西区まで車を走らせ食品を買いに行った。

次の日、家族を連れて西区の家に避難をした。住み始めたばかりだったため、まだ近所には知らない人ばかりで、誰とも協力して助け合うことができなかった。長田では大火災が発生して学校どころではなかったのに、西区に戻ると学校に行こうとしている子供が何人か見られた。神戸市の中でも温度差があるのだと感じた。

しばらくすると、家の前にある大きな公園やあらゆるところにたくさんの仮設住宅が並んでいた。公園にはお風呂もあった。多くの人々が仮設住宅で苦しい生活をしている中、母は自分が家の中で生活していることに罪悪感であふれた。また様々なところから物資が届くようになったため、ご飯の配給がとても充実していた。普通に生活していても大量のパンなどがもらえたため、お金で食料を買うことに違和感を覚えるほどだった。テレビをつけてみると、阪神・淡路大震災の報道でいっぱいだった。どのチャンネルもヘリコプターの「ブーン」という音から開始された。そのヘリコプターの音でさえ恐怖だった。トラックやバス、電車があちこちに傾いている光景が映し出されていた。本当に何か、プラレールや映画を見ているような気分になった。ずっと見ていると頭がおかしくなりそうだった。また大阪周辺の報道もされており、神戸とのギャップにショックを受けた。同じ日本だとは思えないくらい世界が違って見えた。当時は大火災の灰が飛び散っていたためマスクは必需品となった。服は燃えてしまい、あまり残っていなかったため、おしゃれな街と言われていた神戸なのに、マスクと格好が悪い服にリュックという人が大半を占めていた。三ノ宮では今まで普通に建っていた、大きなビルが倒れていて被害の大きさを身に染みて感じた。

(5) 復興への道のり

大火災が収まった長田の街に戻ってみると木造の家はすべて燃えていた。あたりを見渡すと、中が真っ黒に燃え尽きてしまった鉄筋コンクリートのマンションだけがむなしく残っていた。家に置いてあった金庫の中も真っ黒に燃えており、宝石だけが残っていた。後から見つけた母は今でも大切に持っている。もちろん家にあったお金はすべて燃えてなくなった。燃えてしまった家を建て替えるために「土地をどこにしますか。」との質問があった。しかしいいところの土地に建てさせてもらえるのは、お金もちや立場が上の人だった。不公平だ。道路や道幅を広くするために無償で家の土地を取られた。そのためせっかくお金を集めて建てることができた家をつぶし、二度も家を建て替えることになった。いくら義援金が配給されるからといっても、家を建て替えるのには到底足りず、しかも二度も建て替えるとなるとほぼ自腹だった。

西区の家は目の前に新幹線の線路があり、夏は網戸にしていると新幹線の音で目が覚めるくらい大きな音がする。しかし震災後しばらくは新幹線が動いておらず、窓を開けていても朝から晩まで静かだった。この静かで穏やかに過ぎていく日々が、「何か復興に少しずつ近づいている」そんな気持ちにさせてくれた。でもやっぱり少しの音でも敏感に反応してしまい、電気を付けるときに一瞬「チカチカ」とすることでさえ恐怖だった。不安な日々はまだまた続いた。

今もなお復興への道を歩んでいる神戸。現在は、阪神・淡路大震災の教訓を活かし、次起こるとされている災害に備えている。また地震が来たらまず玄関を開けて避難経路を確保するようにしている。今度は津波が来るといわれているため、ハザードマップを見て自分が今どのようなところに住んでいるのかを確認するようにもなった。阪神・淡路大震災のとき、電気はその日に使えるようになったが、水は遅く大変な思いをした。そのため常に車に水を備えておくようになった。

(6) 大震災を体験して母が今思うこと

阪神・淡路大震災を体験する前は、地震が来ると「うわーすごい。地震やー。」って感じだった。しかし震災を体験した今は、いつ揺れがおさまるのか、これ以上大きい揺れは来ないのかなど警戒心が強くなった。また日常生活の中で、少しベッドが揺れる、上の階の人の襖を閉める音が家に響く、などちょっとしたことで体が敏感に反応して当時の様子が鮮明に蘇ってくる。でも大震災を体験したからこそ、今までは考えもしなかったことに意識が行くようになった。例えば先程も書いたように、災害時に困らないように水や食料などを備えておくことなどがある。もし次に起こるとされている南海トラフ地震が歳をとり動けなくなったときに発生したらどうなるのかと最近よく思うようになった。そのためには、今のうちに何をしておくべきなのかよく考えていかなければならない。阪神・淡路大震災を通して一番思ったこと

は「人はピンチの時は助け合う」ということだ。どれだけ普段の生活で関係があまりよくなかったとしても、災害時は全員で助け合った。中には自分の大切なものを犠牲にして助けようとしている人もいたという。「もし自分があの時命を落としていたら、今の生活はない。」今生きていることに感謝したい。

3 家族の話を聞いて感じたこと

今回初めてこんなにも詳しく阪神・淡路大震災当時の話を聞いた。今まで阪神・淡路大震災の被害状況などをたくさん勉強してきた。でも資料とかではなく実際に体験した家族から当時の話を聞くとやはり聞く姿勢や感じ方が違った。いつも一緒にいる家族だからこそ、その時の状況や気持ちなどを自分のことのように感じ、また考えることができた。母の話の中で印象に残っているのは、燃えていく家をただただ眺めることしかできなかつたという話だ。何年も共に生活してきた思い出のある家。大切なものがたくさん置いてある家。絶対に失いたくないものなのに、目の前で燃えてなくなっていくところをただひたすら見ることもできなかつた時どんな気持ちだったのだろう。悲しい気持ち、悔しい気持ち、様々な複雑な思いが重なったに違いない。もう1つ印象に残っているのは、震災の後は戦後のようだったということだ。今回話を聞く際に、母が残していた当時の写真や新聞も見せてもらった。見たこともないような景色が広がり、また空も不気味な色をしていた。そのような風景から人々の不安な気持ちなどを感じることができた。当時の新聞を見てみると、まだはっきりと死者数がわかっていないなど、何が起きているのかしっかりと理解できていない部分が見られた。当時はこんなにも被害が大きくなるとは誰も想像していなかつたのだろう。今回は母にだけ話を聞いたが、私の祖母は震災で倒れてしまった高速道路の真ん前に住んでいた。また祖父は服屋を営んでおり、服に困っていた被災者で店の中が溢れかえっていた。このように身近にいる親戚も悲惨な状況の中で生活をしていた。今回は聞くことができなかったが、また機会があればぜひ聞いてみたいと思う。

4 環境防災科に入学して

私が環境防災科に入学したいと思い始めたきっかけは、小学校6年生の時におこなった東日本大震災の募金活動だ。これが人生で初めて防災について考えた時であり、正直その時は「大変なことが起こっているからとりあえずお金集めよう。」という風にしか思っていなかつた。でも、中学生になり進路に悩んでいた時、母から環境防災科というものがあると教えてもらった。防災を専門的に学んでいる学科というのを聞いて、小学校6年生の時におこなった募金活動を思い出した。その時になぜかわからないが、環境防災科に入学したいと強く思うようになった。小学生で何もわからないながらも頑張った募金活動が、今の自分を作っていると思うと、どんな些細なことにもでも挑戦することで新しい自分に出会えるのだと気づかされた。入学をしてからは過去の災害や教訓について毎日勉強した。今まで知らなかつた深いところまで授業で教わり、また当時の悲惨な写真などもたくさん見た。正直入学当初は怖くて、家に帰って寝る時も、「もし今地震来たらどうしよう」とか、勉強しているからこそたくさん考えてしまい不安や恐怖感に悩まされた。入学してしばらくは一人で寝ることができず、母と床に布団を敷いて寝ていたぐらいだった。でも、時間がたつにつれて、「いつ災害が起こるか分からないのにこんなに考えていても仕方ない。今は災害が起こった時に何ができるかを考えよう。」と前向きな気持ちになることができた。

熊本に被災地支援活動に行かせていただいたとき、初めて自分の目で直接見た被災地だったため被害の大きさにショックを受けた。資料で見るのと直接見るのでは、その場の空気の違いなどもあり全然違う場所のようにも感じた。そのような光景を見て尚更「どうにかしたい。」という気持ちが生まれた。しかし、実際に活動できたのは一日だけで、何をしに来たのだろうと何もできなかったことに後悔の気持ちでいっぱいだった。活動期間中クラスの中でも亀裂が入ってしまい、言い合いになった時もあった。でも、その中で自分たちにできることを探して、本来とは違う形であつたがたくさんのボランティア活動をすることができた。この熊本被災地支援活動を通して大きく成長できたことは間違いないと思う。このように環境防災科では様々な特色のある活動をさせていただいている。たくさんの方の支援があつてこそできていることであるため、常に感謝の気持ちは忘れてはいけないと思う。

防災を学んでいる私たちだからこそできること、それは「語り継ぐ」ということだ。この冊子の題名でもある「語り継ぐ」という言葉。簡単に聞こえるが決して簡単なものではない。語り継ぐといっても私たちは実際に震災を体験したわけではないため、何を語り継いでいけばいいのかわからない。しかし、備えることの重要性、自助の大切さ、災害の怖さなどは身近な人にでも伝えていくことができる。少しずつではあるけど、自分の周りの人に話すことでどんどん広まっていき、いつか防災力の強い国になればいいなと考えている。その中で私たち環境防災科の生徒がリーダーとなって引っ張っていかなければならない。

それが防災を学んでいる私たちの役目である。

5 夢と防災

高校2年生まで進路がなかなか決まらず、悩んでいた。でも環境防災科に入学する前から、人の役に立てていると実感できる仕事に就きたいと思っていた。そんな時に助産師という職業に出会い、私は「将来、助産師になりたい」と強く思うようになった。助産師は子供を産むという、女性にとって一生の思い出になる出来事のお手伝いをする重要で責任が重い仕事だ。人間の誕生や人生に携わることができるため本当に素敵な職業だと思う。私は助産師になってやりたいことがある。それは産前教育の場で防災教育を行うことだ。産前教育とは妊婦だけでなく全ての女性に親になることの知識を教えるものである。その場で防災教育を行うことで利点が2つあると考えている。1つ目は、防災の話をするとう災害の怖さなどを知り「自分の子供は自分が守らなければならない」などの責任感のある親が増えることにつながるのではないかと、2つ目は、環境防災科で学んだことを外に発信するチャンスになるのではないかと。防災を学んできた以上、防災を広めることは義務でもある。そのためこのような場で防災の話をして、少しでも防災に興味を示してくれる方が1人でも増えればいいなと思っている。

6 これから

「災害時には率先してリーダーとして前に出てほしい。」ある日、母からこのような言葉を言われたことがある。母は続けて「防災を学んできていない人は防災の知識も何もないから、ただただ災害を不安な気持ちで待ち続けるしかない。もし、災害が来たときは環境防災科で学んできた助け合いの大切さとかメンタルの部分での支援とかを率先して行ってほしい。」と言った。その時に私は環境防災科として学んできたことを絶対に無駄にしたいと心から思った。自分が頑張ってきたことで多くの人を救うことは簡単なことではない。でも、しようと努力することは誰にでもできる。私はできないことでもしようと努力できる人になりたいと思う。

人間は時間がたつとどうしても忘れてしまうことがある。過去のことよりも今のことに目が行ってしまう。被災地とほかの地域では温度差が生じていることも事実だ。このように過去の出来事はだんだんと風化してしまう。被災者である母ですら、当時のことを明確には覚えていない部分もあった。でも今回話を聞くにあたって、母自身ももう一度苦労した生活を思い出し、これから起こるとされている災害に備えようという気持ちになってくれた。このように、ちょっとした出来事がきっかけで風化を防ぐこともできると思う。環境防災科として様々なボランティア活動にも参加させていただいた。小学校の時はなんとなくおこなっていた募金活動、また夏祭りボランティアなどでは地域の方のたくさんの笑顔を見させていただくなど、得るものがたくさんあった。よく「ボランティアをする側が元気づけられた。」などの言葉を耳にする。最初はどういう意味かはっきり理解することができなかったけど、たくさんのボランティアに参加させていただく中で、「ありがとう。」とか「楽しかった。」とか前向きな言葉をいただいたときは本当にやりがいを感じられて、自分もまた頑張ろうという気持ちになった。環境防災科を卒業すると今より防災と関わる機会やボランティアに参加できる回数は減ってしまう。でも日本で生活している以上、自然災害とは縁を切ることができないため常に防災については考えておきたいと思う。そして先程夢と防災でも書いたように、助産師になって自分の中だけでとどめるのではなく、できるだけ多くの人に防災について知ってもらい興味を示してほしい。このような思いから、3年間学んできて自分が成長できた部分を活かし、今の時間を大切に少しでも夢に近づけるように頑張っていきたいと強く思う。

『今に活かし過去を生かす』

伊藤 瑞歩

私は 1999 年生まれの 18 歳だ。1995 年の阪神淡路・大震災の 4 年後に生まれ、震災を経験していない世代の一人。阪神淡路・大震災から今年で 23 年の月日が流れ、経験していない世代が多くなってきた。そんな中で最近「風化」という言葉をよく耳にする。風化することは被災した人にとってとてもつらいことだ。

3 年間環境防災科で防災を学んできた。題名にもあるように、過去の出来事を過去ののものにするのではなく、今へとつなげて過去を生かし続けていくことが今を生きる私たちの使命だ。そんな私ができることは、震災を知らない世代と経験した世代を語り継ぐことで繋げることだ。その第一歩として母親から聞いた被災体験・私が 3 年間で学んできたこと・私がしていきたいことを以下の文章に記すことで後世に語り継ぎたい。

1 僕が知らない阪神・淡路大震災(母の体験より)

(1) 阪神・淡路大震災

阪神・淡路大震災は今から 23 年前、1995 年（平成 7 年）1 月 17 日 5 時 46 分 52 秒の真冬に兵庫県北淡町の付近を通過する野島断層が原因で引き起こされ、M7.3 を記録した地震。日本で初めての大都市直下を震源とし、震度 7 が初めて観測された。初めてのことが多く重なった地震だ。死者は 6434 人、多くの人は圧死。密集家屋が多かった長田などの下町が炎の渦に覆われた。阪神・淡路大震災は他府県から多くのボランティアが訪れ、ボランティアが普及したことから「ボランティア元年」とも呼ばれる。環境防災科ができたきっかけであり、阪神・淡路大震災によって日本の防災意識が格段に成長した。また公助の脆弱性が浮き彫りとなり、課題が多く見つかり復興していく中で神戸が日本を代表する強い街づくりを進めていくきっかけとなった災害だ。

(2) 地震発生の瞬間

私の母は当時、母と祖母の二人暮らし。須磨区の二階建てアパートの一階に住んでいた。寝ていた時、大きいものが落ちたような音の後に激しい揺れがあったが、はじめはただの地震だと思い布団を頭までかぶり、そのまま寝続けようとした。今までに経験したことが無いような揺れが長く続く。今まで体験した時間の中で、一番長く遅く感じる時間となった。揺れの恐怖から立つことができなかった。祖母の上にテレビが飛んでくるのが母の目にスローモーションで映った。その瞬間、祖母の頭の上に落ち、絶対に死んでしまった。と思い、今までにないくらいヒヤッとした。祖母はテレビがもろにあたっても奇跡的に無傷だった。

長かった揺れが収まり、外に避難しようすると、天井がはがれて二階に住む人の姿が見えていた。このままでは危ないと思ったがなかなか揺れが収まらないので避難できないでいた。揺れが収まったとき、すぐに外に避難するためドアの扉を開けようとしたが、なかなか開かなくてパニックになっていた。家自体が傾いていたので、扉も傾きにより開かないと思い、裏にあった窓から外へ出た。しかし、出たすぐのところに 2 メートルほどの高いコンクリートの壁があった。先に祖母を避難させ、母は後で避難した。普段なら上るなど考えられない壁を簡単に上ることができた。アパートは高台に建っていたので、高台から下町を見渡すとあちらこちらで煙が上がっていて、すごい地震が起こったのだと、その時初めて落ち着いて考えることができた。

外からアパートを見てみると建っているのが不思議なぐらい、一階と二階がずれていた。はじめの揺れが収まってからも余震が発生していたが余震の度にいつ崩壊してもおかしくないというような状況が目に見え続けている。アパートがいつ壊れてもおかしくなかった状態だったので、貴重品だけを取りに帰った。奇跡的にも同じアパートに住む住民はみな生きていた。避難することとなったが、その当時、須磨区の住んでいた地域はしっかりと地域の連携が図れていなかったため、皆が混乱に陥っていたのがわかった。本当なら祖母はこの日から旅行へいく予定だったが、1 日ずれた。そうでなければ、母は一人でこのように何とか的確な避難行動をすることができなかったかもしれない。偶然に偶然が重なったことは、不幸中の幸いであった。

(3) 地震発生の数時間後

地震が少し落ち着いたときに一番初めに近くに住む祖母の友達の家は無事を確認しに向かった。友達の家は東須磨小学校の目の前のマンションだが、近くの家だとは思えないほど無傷だった。家の中は足の

踏み場もないくらいに散乱していた。東須磨小学校のグラウンドや校門前にはたくさんの人が避難していて混乱しているのがすぐに分かった。

無事が確認でき一安心したが、近くの2階建て一軒家で服屋をやっていた祖父と連絡が取れない。近くだったので祖父の様子を見に行った。祖父の住んでいた地域はさっき高台から見て煙が多く上がっていた地域だったので、とても嫌な予感がした。近くに進んでいくにつれて、全壊している家やその中を捜索している家などが多くみられる。家の様子を見に行くのが、この状況を見ているととても嫌になっていった。実際に祖父の家に着いたとき、今まで建っていた2階建ての家は跡形もなく姿を消していた。祖父は間違いなく死んでいると母は思った。その時、全壊している家を見る祖父の姿があった。祖父は「大きな揺れに襲われたので1階に避難しようとしたときに大きな揺れで階段を転げ落ちた。意識を失いかけた祖父は全壊家屋の下敷きになっていた。しかし幸いなことに階段の段と段の間に挟まり隙間ができた。奇跡的に物の下敷きになることを避けられた。下敷きになったが身動きをとることができて、何とか自力で避難することができた。」という話を必死に母に話した。今まで見たことがないような悲しい顔をしながら「裏の仲が良かった友達夫婦が下敷きになって亡くなった」と、話の最後に小声で言った祖父の顔は今でも忘れられない。祖父の周りの家は全壊家屋だらけで、周りだけでも3人の方が亡くなっていた。祖父が生きていたことも奇跡だった。

何とか祖父の無事は確認することができたので、東須磨小学校へ避難することになった。しかし東須磨小学校には、もう大勢の人が避難していてとても状況を把握ができていない状態ではなく出遅れていた。何とか学校のエントランスの一部で腰を下ろすことができた。その日の晩はそこで一夜を過ごすこととなった。1月ということもあり、とても寒かったということもあったが、周りの人も震災が起こったことの状況整理ができていなかった様子で、夜遅くになってもなかなか眠れない長い夜だった。暗いのが怖くて早く朝になってほしい、もう起こらないでほしいとずっと思い続けた夜となった。

(4) 地震発生の翌日以降

発生翌日、東須磨小学校は避難者であふれかえっていた。救援物資や水を少し取りに行くだけでも長蛇の列が群がり何時間も待つといった状況も当たり前だった。垂水に住む姉とも連絡が取れずにこの先どうやって生活しようと、とても不安だった。祖母の友達で東須磨小学校の前のマンションに住む友達が家に泊まりにおいでと言ってくれた。これからの生活がとても不安だったので、本当に助けられた。友達が持っていた車の中で2日間すごさせてもらった。真冬だったので避難所はとても寒かったが車の中はプライベートが守られていてとても助かった。

水、ガス、電気はしばらくの間止まっていた。生きていくうえで最も大切な水が出なかったのも、毎日、何時間も長蛇の列に並んだり、水を買に行ったりする生活を送っていた。食べ物は近くのスーパーで長蛇の列を並んだのに売り切れていた。朝早くに買いに行っても全く商品が並んでいなかったこともあった。2日間車の中で過ごさせてもらい、4日目からは垂水に住む母の姉と連絡が取れたので家に泊まらせてもらった。垂水は被害が少なく家も全く被害を受けていなかったのも、そこから仕事に行くという生活を長い間続けた。

(5) 地震で特に困ったこと

避難するときになにも用意ができていなくて必要最小限のものしか持って行けず、全壊によって取りに帰ることすらできなかったのも、自分が大切にしていたものなどを一気に失ってしまった。また家に備蓄をしていたとしても家が全壊によって倒壊してしまっただけでは意味がない。水や食料は生きていくうえで必要最小限必要なもの。だから家の外に倉庫を置いて保管するなどの対策をしていればよかった。自分自身が避難するときに持っていくものは寝るときに頭の上に置いていけばよかった。

もっとも困ったのは地域コミュニティ。地域コミュニティがあればもっと阪神・淡路大震災の死者は減った。母の地域は普段から防災訓練など地域とかかわる場面は0に近かった。今はしっかりと対策が取られている地域とそうでない地域との差が激しい。この状態なら、今後の災害が起こった時も地域の関りがもっとあればよかった、と思う場面が再び繰り返されてしまう。

2 「今」から見た阪神・淡路大震災

(1) 母の思い

私の母は阪神・淡路大震災は多くの犠牲者を出してしまったが、だからこそ発生してよかったと思えるような今にしてほしい。言い方を変えると発生して何も変わっていないような今にしてほしくない。23年がたったから話が出にくくなるというようなことは仕方ない。人間である以上は過去に起こった出来事は記憶が薄れていく。しかし、自分自身が家族や知り合いを亡くした、または家をなくした、つらい思

いをした。そのような被害を受けていたら、絶対に忘れるわけがないし、周りが忘れていたら怒りを覚える。皆がこのような思いを持つことはできないが、こんな強い思いを持っている人がいることを理解できれば、風化していくというような事態はなくなる。

神戸生まれの私たちが、経験していないことを伝えるのは難しいことだが、阪神・淡路大震災を生かし続けてほしい。災害が発生したときは自分だけの力ではどうにもならないことだってある。しかし阪神・淡路大震災の時に共助がすごく役立ったように周りとの関係を築いていれば、乗り越えていけることも多くある。近所付き合いなどは大人になってからしなくてはならないが、今はたくさんの仲のいい友達を作って助け合える関係を築いてほしい。

(2) 僕の思い

話を聞くまでは3年間防災を学んできたので、少しでも共感できる部分があり、わかるところがあるのではないかなと思って話を聞いた。しかし、今まで話したこともなかった話がたくさん出てきて、被災した人と被災していない人の思いの違いを改めて感じさせられた。震災当時、公助である自衛隊・消防・警察の力が及ばなかった話になった。母は「それでも警察や消防によって救われた命はたくさんある。だからそんな人の役に立つ職業についてほしい」という。私は小さい時からずっと人の命を救うことができる職業にあこがれを持っていたが、今回の話を聞いて僕自身自分のためだけではなく周りに期待してくれている人がいることも改めて知ることができる、いい機会だった。

今、阪神・淡路大震災から23年目を迎え、年々震災のことが風化している。実際に話を聞けば、その時がどんな状況かを知ることができ、多くの亡くなった人の分まで何かを残していく必要があることを肌で感じるができる。神戸で発生した震災と真剣に向き合うこともできる。私は今回、この文章を書く中で母から何気なく私自身への語り継ぎをしてもらった。こんな些細なことでもいいと思う。被災した両親から震災当時のことを聞く、これでも立派な語り継ぎになる。被災していないからといって震災から逃げるのではなく、被災者以上に震災に興味を持ち、学び、身近な人に今思ったことを話すことから始めることが語り継ぎの第一歩だ。本当につらい体験をした被災者は、同じ被害を繰り返さないように、身近な人に自分自身の思いや体験を伝えることができれば、もっと防災を身近に感じながら生きていける。

3 環境防災科での3年間

(1) 自分だけのものにしない

あなたは阪神・淡路大震災についてどう思いますか？という質問をすると、私は阪神・淡路大震災を経験していないから全く分からない。そう答える世代が多くなってきたのが現状だ。確かに経験していなければ震災当時の揺れや怖さはわからない、被災した人の気持ちがわからない。

今まで環境防災科で3年間防災について専門的に学んできた。防災を専門的に学んでいる高校生はこの舞子高校環境防災科と宮城の高校の2校だけだ。私たちだからこそ、たくさんの知識を学ぶことができる。そこで学んだことは私たちだけのものにではなく、多くの周りの人に伝えることが防災を学ぶ私たちの使命である。過去の出来事を今に活かして、今後の日本の減災・防災を強めていきたい。ただ難しい防災や減災を教えるのではなく、自分自身の命の守り方を教えるだけでも立派に防災を広げている。こんな些細なことでもいい、今まで学んできた知識をよりたくさんの人に知ってもらい、自分だけのものにしないことが、震災経験がない私にできることだ。

(2) 同じことは二度と起こさない

環境防災科は阪神・淡路大震災の教訓を生かすことがきっかけで設立された。今のままで阪神・淡路大震災のような規模の地震が神戸で発生して同じような被害が出ないかということそうではない。はじめは誰もが絶対に同じようなことは起こしてはいけない、絶対に被災した人の分まで強い神戸にすると心に決めた。今は発生から23年がたちいつの間にかもう地震は発生しない。阪神・淡路大震災は過去の出来事となっているのが目に余る。阪神・淡路大震災の教訓を活かすどころか同じことを繰り返し、また多くの犠牲者を出してしまう。犠牲者を減らすためにも、私が学んできた過去の教訓を生かす・同じ被害を二度と繰り返さないということを語り継ぎたい。

4 将来の自分

(1) なりたい自分

私が環境防災科に入学したのは消防士をめざしていたからだ。高校三年生のある日ずっと消防士を目指していた私はある出来事によって夢を失った。長野消防にある消防防災ヘリコプターが墜落し、要救助者やパイロット計6名が命を落とした出来事だ。私はこの時初めて消防士でも救えない命があり、人の

命を奪ってしまうことがあると知り、とてもつらかった。この時本当に私自身、消防士になっていいのか。もっと他にやりたいことはないのかと思い始めた。将来は多くの人の役に立ちたい。多くの命を救うことができる職業に就きたいという思いを小さいときからずっと持っていた。だから、消防士ではなく救助の最後の砦である、ヘリコプターのパイロットになろう。同じような被害を起こすのではなく、空路という最大の武器を生かそう。この時から強く思い始めた。

この3年間環境防災科で学習を重ねてきて、防災について専門的に学んできた。ヘリコプターのパイロットはこの経験も活かすことができる。パイロットという職業は多くの人に興味を持ってもらえる。パイロットについての講演などをしていく中で少しでも簡単に防災についての話を入りたい。ヘリコプターのパイロットは死と隣り合わせの職業で知られている。だからこそ日常から命の大切さを肌で感じることができる職業だ。私は防災を広げていくだけではなく、命の大切さを伝えることで、命を守りたいと思い、延長線上で命を守りたいから防災・減災を学ぼうというような、防災を学ぶきっかけづくりを環境防災科での経験を活かし行っていく。

自分がやりたいことは、ただヘリコプター業界に入り、ただ職務を全うするだけの仕事ではない。今回震災の被災体験を聞き、災害発生時にヘリコプターはとても役に立つことが分かった。阪神・淡路大震災当時、ヘリコプターは全国各地から支援物資の搬送や上空からの偵察、要救助者の搬送・救助のために応援に駆け付けた。しかしその当時の兵庫県には災害時のヘリコプター使用のマニュアルがなかった。私はヘリコプターパイロットになって山間部の田舎と呼ばれ、災害発生時に陸路が遮断される地域を支援したい。今の現代は高齢化が進み若者が全くいない過疎化が進んだ地域が多くなった。そんな地域が災害時自分たちだけで生き続けることは不可能だ。私はそんな自力で災害と立ち向かえない地域に入り、災害発生前から事前に交流を深めて、より多くの方の命を救えるような大人になりたい。

(2) 私たちの使命

阪神・淡路大震災について母から初めて話を聞いた。母が思い出したら辛いことや悲しいことをわざわざ話してくれた。今まで環境防災科の3年間でいろいろな外部講師の方からお話を聞いてきた。その中でも母の体験談を聞くことは私もすごく複雑な気持ちで、とても心に響いてくるものがあった。今までは母がこんな体験をしていたなど、全く知らなかった。私は話を聞くことで3年間学んできた防災をもっと深く学びたいという使命感を改めて強く持つ機会となった。

母は私が小学校の時からよく「あなたは救われた命」、「将来は人の役に立つ職業に就いてほしい」と言っていた。小さな時の私はただかっこいいという思いだけで、人の命が救える職業を夢見ていた。しかし今の私ならはっきりとわかることがある。それは「命」だ。阪神・淡路大震災をきっかけに母は命の大切さを肌で感じられたという。生きていることができれば夢見ることもできない。そんな命を救える職業に就くことはすごく難しいことだ。私が学んできた防災・減災では簡単にできる。確かに直接的に人の命を救うことはすごく過酷なことだ。防災・減災はその過酷な状況を作り出す前に安全を図ることができる。完璧な防災を行うことは不可能だが、もし行えれば死者を0にできるのが防災だ。私の人生の中で3年間真剣に専門的に学んできた防災は絶対に役に立つものになった。今後、もっと学び続け多くの人に伝えることが私たちの使命だ。

5 題名

私が題名を『今に活かし過去を生かす』という題名にした理由は、時間が止まることはない、過去と今はつながっていることを伝えたいからだ。私たちはずっと生き続けられるわけではない。いつ死んでもおかしくない状況だ。何も言わなくても今は精いっぱい生きることができる。過去を生かすということは過去の出来事から学んだことを、今の現代に生かし続けなければならない。すごく難しく、本当に過去を生かすことなどできるわけがないと考えるのが普通だ。

私たちが昔の出来事である過去の失敗から学びを得ようとするのもすべて、今に活かそうとして過去が生きている証拠である。祖先が残してくれたものを現代の私たちが受け取らなくなっていく。今と過去は一本の切れやすい糸でつながっているということを知ってもらいたい。防災だけでなく、人間が生きていくうえで良いものを築いていくには、過去の失敗がなくてはならないものだ。過去がなければ今はない。『今に活かし過去を生かす』この題名は私たちが防災を学ぶ以前に、生きていくための原点となる言葉ではないだろうか。防災において、過去の出来事はとても大切な財産だから、私はこの文章を多くの人に読んでもらい、少しでも防災を広げる語り継ぎをしていきたい。

1 私にとっての阪神淡路大震災

私は1999年の生まれで、阪神・淡路大震災を経験していない世代に入る。私が神戸に越してきたのはごく最近であり、震災に対する私の認識は舞子高校に来るまで特別深いものは無かった。

高校入学以前にも阪神・淡路大震災の存在は当然知ってはいたが、授業で見せられる教育番組や記念日に放送される報道番組を見ても被災者の方々は全員関西弁を喋っていたので「大阪で昔大きな地震があったのか」程度の認識であった。というのも、当時私の兵庫に対する認識は極めて低かった。阪神タイガースも山口組も大阪の組織だと思っていたし、異人館やルミナリエの存在はそもそも知らなかった。神戸市に至っては大阪府の都市という認識でしかなかった。

しかし阪神・淡路大震災と私は必ずしも無関係ではなかった。芦屋にあった父の実家が倒壊した話や、当時大阪に住んでいた両親が現地に赴いて身内に物資を届けた話など昔、両親から何度か聞かされていたからだ。それにも関わらず私は震災の事など気にも留めなかったし知ろうとしなかった。

いろいろあって、舞子高校に入学した後、私は今までの事を振り返り語り継ぐ事の重要性に気付いた。当時の体験を知る事によって私達は次の震災に必要な備えや対応を知る事ができるからだ。

思い起こすと私が東北に居た時、両親は阪神・淡路大震災の体験を活かしていたように思える。

当時の私のような人間を減らす為、阪神・淡路大震災を経験していなくても他者の体験を元に少しでも語り継いでゆく事が防災を広める第一歩なのだと私は思う。

2 阪神・淡路大震災

(1) 阪神・淡路大震災の概要

よく混同されるが阪神・淡路大震災は兵庫県南部地震によって引き起こされた災害名である。

そして兵庫県南部地震は1995年1月17日に発生した震源旧北淡町野島断層、マグニチュードは7.3の地震を指す。

M7.3とは東日本大震災のM9.0と比べると小さく感じるがそれは断層型と海溝型という地震の性質の違いによるものである。数字は違えども我々人間にとってどちらも尋常でないエネルギーであるという事にも変わりはない。

例えばM7.3を爆弾の規模などによく使われるTNTに換算すると約1メガトンにもなり広島に落とされた原爆の約76倍にもなる。地震とは原爆のように派手な爆発があるわけでもないために大した力が働いていないと思いがちだが実はとてつもない力が加わっているのだ。現在淡路市には震災時大きく隆起したこの断層が記念館として当時のまま保存されおり、その姿からは当時の地震の凄まじいそのエネルギーを感じ取る事が出来る。都市で起こったこの直下型地震の死者は6千人以上にも上りこれは関東大震災、東日本大震災に次ぐ被害を与えた事になる。地震が阪神地域に与えた被害は人的被害だけではない。地震はとてつもない天文学的な経済的損害を与えた。

この震災がもたらした経済的損害は約10兆円にも上ると言われる。この経済的打撃は神戸の市政に大きく関わり、様々な視点から完全に復興したとはいえない現状である。

一例を挙げると神戸港である。当時世界第3位のコンテナ取扱量を誇った神戸港はアジアの貿易港の中でも突出して大きな存在であり、アジアを代表する港湾であったがこの震災以降国際ハブ港としての地位を他の港湾に譲り渡し、現在のコンテナ取扱量は世界57位であり、震災前の地位を取り戻す事は出来ていない。

他にも一概に震災が原因とも言えないが神戸市の人口は減少傾向にあり、都市として衰退の一途を辿っている。このように阪神・淡路大震災は神戸市、またその周辺各地域に大きな打撃を残し、その傷は未だ癒える事を知らない。阪神・淡路大震災は歴史において特筆すべきものであり、またその記憶を残す事はその後の防災にも関わる重要な行いである。

(2) 父の体験

私と違い両親はともに関西の出身であった。母は京都北部の出であったが、父は芦屋の出で芦屋の実家が大きな被害を受けたと聞く。震災当時、もちろん私は生まれていなかったが6歳年上の姉と両親の3人で家族は豊中市と吹田市の境目（緑地公園付近）のマンションに住んでいた。

1995年の1月17日早朝、大きな音と共に家族は目を覚ました。

彼らが住んでいた地域は神戸ほど甚大な被害はなかったのだが、芦屋に実家があった父は震災の翌日に小回りの利く原付バイクで家にあった食料や水をリュック一杯に詰め込み下道を走り芦屋を目指した。父がそこで見た光景は信じられないような惨状であった。

父の目に映った芦屋の街はかつて自分が馴染んだ街とは思えず、戦争でもあったかのような惨状だった。崩れた自分の家を見下げ悲しむ者もいれば、家を失い行くあてもなく街を徘徊する者も珍しくなかった。

そこら中の建物が崩れていた。

父の実家も例外ではなかったが幸い身内に死者は1人もでずその日のうちに安否確認が出来たという。

芦屋では444人が亡くなり、3,915棟の建物が全壊、3,571棟の建物が半壊の扱いを受けた。

この数字は神戸市、西宮市に次いで多い。私は父の話を聞きながら阪神・淡路大震災は神戸市だけのものではなかったのだと改めて実感した。

(3) 母の体験

1月17日の早朝。いつもは静かなのにその日に限って近所の猫が数匹ものすごい声で鳴いていたという。

余談だが動物は地震に対して一種の予知能力のようなものがあるとも言われる。無論真偽のほどは定かでないが、このような地震前の動物の異常行動の証言は時代を問わずどうも少なくないらしい。

その時の鳴き声は今までに聞いた事が無いほどに凄まじく、母は当時を振り返って最初は赤ちゃんが泣いているのかと思った程だと証言する。

あまりの鳴き声に、母は一度目を覚ますもまだこんな早い時間かともう一度寝ようとした。その瞬間にもものすごい音が響いたのだった。ドスンというかものすごい轟音で近くに爆弾か飛行機が落ちたのかと一瞬思うくらいの轟音、今まで体験したことのない凄まじい揺れの襲来。とっさに母は隣で寝ていた当時1歳になったばかりの姉の上に覆いかぶさった。

唐突さと恐怖によりその時の母の体感時間は日常生活でのそれに比べ大きな時差が生まれた。

記録によると兵庫県南部地震の揺れはわずか15秒程であったが、その時の揺れは母にとって数分に及んだのではないかと錯覚する程だったという。あまりにも長い大きな揺れだったように感じ、なにがどこで起こっているのかもわからず心臓の鼓動の音はより一層高鳴り、同時に家が崩壊しないかという強い不安にかられた。

揺れがおさまリ寝室からテレビ等が置いてあるリビングに行くとテレビの周りがある様々なものが飛んで行って部屋にちらばっていた。すぐにキッチンのほうにも足を運んだが食器棚は幸い揺れの方向に対して向きがよかったようで中から食器が飛び出さずにすんだ。

母は急いでテレビをつけたが、すぐには正確な情報は流れず、どこが震源なのかどんな被害なのかはテレビでもすぐには出てこなかったという。

当時は携帯電話がなく家の電話で母は母の実家である京都府北部に電話をかけた。そこはすぐにつながったが父の実家がある芦屋市にはまったくつながらずその日は安否がわからないままであった。被害の大きさが把握できないまま、母は公立の保育園で保育士をしていたので、職場に向かった。

母の職場は豊中市。大阪で唯一大きな被害の出た市だった。保育所に行くと大きなピアノが倒れ壁に大きな亀裂がはいっていた。

ガスなども止まったためその日は急遽休園となった。母の目には保育所内での仕事は多く残っているように見えたが娘(私の姉)がまだ1歳で幼かった為に家に帰宅し待機を命じられ自宅に戻った。

自宅に戻ると徐々に被害の大きさがわかってきた。また母の同僚のお子さんが、地震の際上から落ちてきた物が寝ているお子さんの頭に直撃し脳挫傷で亡くなった。また、母の職場の同僚や友人など神戸に実家がある人も少なくなく、安否がわからずみんなが混乱していた。

豊中市の南部庄内地域は古い家屋がかなり倒壊し、近辺の保育所は避難所となりたくさんの人が避難してきた。避難所となった保育所も、はじめてのことでいろいろ混乱する中、手探りの状態で土日返上で職員が対応し続けた。

地震の後、豊中市吹田市のスーパーやコンビニからはあつという間にパンや食品などがなくなり、買って被災地に届けるのもすぐには困難であった。

そんな中自宅にあった材料でおにぎりや唐揚げなどいろいろ作り、芦屋の小学校の体育館に避難していた父の友人家族に差し入れを持って行ったのは地震から3日ほどたったときだった。8人家族の友人家族の家は芦屋にあり家が全壊で帰宅できず、体育館で過ごしていた。

支給されたものは菓子パンが数個だけだったらしく、おにぎりや唐揚げを大変感謝されたという。

避難所ですら支援物資がうまく行きわたるまでにはかなりの時間を要し、少し離れた小学校などの避難所は物資が届かないでいるところもあった。

母は豊中市で勤務していて、しばらく保育所が避難所になったり友人のお子さんが亡くなったり、また父の実家が芦屋で被災し友人家族も被災したのでその間、できることはしなければという使命感にかられ色々やったが、ある日ふととても違和感を持ったという。

その原因は周りの地域住民であった。

母は豊中で働いてはいても先述のごとく住まいは吹田であった為に被害は少なかった。被害を受けなかった人達は何事も無かったかのように出勤、通学を繰り返し震災前と何ら変わらない生活を送っていたのだ。

東日本大震災でもそうだが、すぐに関心がなくなる人たちも多い。2度の震災を経験した母は吹田住民の人格を批判するわけではないと前置きした上でこの温度差やそういったものが、いろんな意味で「こわい」と感じたと言った。

(4) 母の知人の話

母の友人の父は神戸市交通局に勤務していた。地下鉄の板宿駅の駅長だった友人の父は地震のあった日に地下にいて地上が大変なことになっているのがあまりわからなかったらしいが、その後休日もとれないほど忙しく、板宿は被害が少なかったためその区間だけは電車を動かすことができたこともあり多忙を極めたそうだ。

娘は秋田県で仕事をしていたので家族の安否が心配で電話をするのに公衆電話の行列に並び生きた心地がしなかったと言っていた。家族と連絡がとれないというのは本当に不安でありいまだにその話を友人はよくしているそうだ。

3 阪神・淡路大震災の経験と東日本大震災

(1) 当時の私の状況

2011年3月11日、私は宮城県黒川郡富谷町(現・宮城県富谷市)に居た。

当時私は父の仕事の都合上一年だけその町に暮らしており、4月からは地元であった郡山に帰るところであった。

富谷町は内陸にある。大都会仙台市のベッドタウンとしての役割を持っており、多くの新興住宅が立ち並び豊かな自然もあわさり漫画に出てくるような美しい街並みであった。当然内陸部であったので津波の被害は全く無かったのだが、電気、ガス、水道等のライフラインがすべて止まったのを覚えている。

ここでは語り継ぐ事が重要であるという説得力を持たせる為に実際に役立った(両親の)経験を書き綴っていきたいと思う。

(2) 水

私の家族は昔から風呂の水を入れ替えるギリギリの時まで貯めているタイプの人間だった(誤解を招かぬよう一応言っておくと一日毎に新しいお湯に入れ替えている)。私はこれが不潔だと思ってあまり好きではなく抜いたらどうだと何度も促したが、なんかあったときの為といって聞かなかった。

風呂の水が飲めるわけでもなしに「なんか」とは何なんなのだと当時の私は思っていたが、地震が来た時その「なんかあったときの為」の真意に気付かされた。

断水すると困るのはなにも飲み水の確保だけではなく、トイレを今まで通り利用するにも大量の水が必要だったからだ。この貯め水により我が家は文明的生活を崩されずに済んだのだ。

また飲み水の確保も我が家は素早かった。驚かれるかもしれないが私の地域は断水したといっても地震から数日は通常通り蛇口から水道水が大量に出ていた。当時の記憶が曖昧なのでいい加減な事は書けないが少なくとも断水は地震直後にはしていなかったと記憶している。

まだ水が出ている頃私の両親は「これから断水する可能性があるから」といってありったけのペットボトルに水を貯めてくれたので飲み水も特に苦労はしなかった。

両親が阪神・淡路大震災の状況を知らなければこの対応と備えはできなかっただろうと思う。

(3) ラップ

水などライフラインが止まると、皿など洗えないので、お皿にラップを敷いてものを食べた。

そうすることで水を使用しなくてもいいし衛生面でも大丈夫だからだ。

(4) カセットコンロ

阪神・淡路大震災の時にガスなど長い期間使えなかった。そのためカセットコンロとボンベがとても貴重だった。その経験から、電気の鍋などが家にあってもカセットコンロとボンベは常備しておくようにな

った。電池式の懐中電灯とラジオもかならず常備していた為、東日本大震災では、それが役に立った。

(5) エコノミー症候群

阪神大震災でも、家を失い避難所も満員で入れず自家用車で寝起きする人たちがたくさんいて寒い時期でもあり過酷であった。自分は東日本大震災の時に、何度も余震が続き、マンションの部屋は潰れこしなかったが、こわくて2日間ほど、車の中で寝た。3月だったがまだまだ東北は寒いので毛布を持ち込み寝た。熟睡できないし身体が痛くなった。

足を伸ばせない身動きがとれない状態でずっといると血流がわるくなり、トイレに行きたくなるのも困るし何より飲み水がないので水分を摂らないと、とたんに血液がドロドロになり血栓がしやすい。そのため突然死するということがあり東日本大震災で亡くなる人がいた。神戸でもいたのを母が覚えていたので、そうならないようになんか注意してすごした。

また、寒さのため車の中で、炭に火をつけ一酸化炭素中毒で亡くなった人もいた。

地震で直接命を失わなくても、地震後の過ごし方や、避難中にそういったことがおこるということを知っておくことは重要だと感じている。

(6) 物の位置

母の同僚のお子さんは、寝ていて上から落ちてきたものが頭部を直撃して脳挫傷で亡くなった。タンスの上などいっばいに物を載せていると地震が来た時にとっても危険である。

特に寝室では上に置いてあるものがあるかないでは危険度が大きく違ってくる。大きな揺れでは重いものでもものすごく離れたところまで飛んでいくということを頭にいれておかなければならない。地震は早朝や夜中にくることもある。寝ているとき、人間は無防備である。その事からなおさら寝室はリスクがないようにしておく必要があると、母は阪神大震災後の教訓で気を付けている。木造の一戸建てに住んだ場合寝室は2階の部屋。ベッド周りに余計なものは置かない。ものはなるべく少なく。本棚など特に注意するということを常に心がけているそうだ。

(7) ブレーカー

これはかなり要注意である。最重要事項と言っても過言ではない。

停電から電気が復旧する際、電化製品や電気配線が通電される事によって火災が起きる事がある。これは通電火災というのだがこれらの火災は基本的に震災直後ブレーカーを切る事によって簡単に回避できる。

ラップや水などの備えは自身の生活水準をなるべく落とさないだけの技術であり、知らなくても少し困る程度であるが、これを怠ると家一軒失う事もあり得るし、最悪飛び火させて建築物だけでなく人間関係すら失う恐れまである。

阪神・淡路大震災では通電火災を含め多くの火災が起こり多大な犠牲者を出した。東日本大震災は津波や原発などが目立ち、火災はあまり目立たない存在となっているがなかったわけではない。

実際私の身近なところでもそれは起きていた。電気が復旧した途端に同級生の家が燃え始めたのだ。本人に直接聞いたわけではないがタイミングからして明らかに通電火災だったのだろう。

私の両親は阪神・淡路大震災の経験から震災直後にブレーカーを落としていたのでそのような事はなかったのだが、もしあの火災が私の家で起きていたとすればと考えるとゾッとする。

4 最後に

私は環境防災科で阪神・淡路大震災の記憶だけでなく、様々な防災に対する知識を学んだ。学んだ事を挙げるときりが無いがここで学んだすべての事は重要だと思う。しかし防災に対し全知でなくとも少しの知識を持つ事で無知であるときよりも被害を減らす事が出来る。

だからこそ大多数の人には常に危機感を持ち最低限の知識を持ち合わせて暮らして欲しい。また、そのように防災が身近な社会になってほしいと私は切に願う。

語り継ぐ

浦崎 翼

1 阪神・淡路大震災

発生日時…1995年（平成7年）1月17日（火）5時46分
地震名…1995年（平成7年）兵庫県南部地震
震源地…淡路島（北緯34度36分 東経135度02分 震源の深さ16km）
規模…マグニチュード7.3
最大震度…震度7
人的被害…死者6,434人 行方不明者3人 負傷者43,792人
住家被害…全壊109,406棟 半壊144,274棟 一部損壊390,506棟

【阪神・淡路大震災（確定報）（平成18年5月18日 消防庁）】より

23年前に発生した阪神・淡路大震災。僕はその地震を体験していない。僕は震災後に生まれた人の中の「未災者」と呼ばれる人の中の一人である。あの時の揺れはどんなものだったのか、神戸の状況はどうだったのか、具体的に何に困ったのか、あの時生まれてもいない僕にはわからないことだ。僕は実体験で語り継ぐことができない。だから、両親に聞いた話を書こうと思う。当時母は西区に、父は尼崎市に住んでいた。父には少ししか聞くことが出来なかったのほとんどを母に話してもらった。両親とも、あまり詳しく覚えていないながらも、頑張って話してくれた。

2 震災の朝

（1）母の体験

震災の日の朝、「ゴー!!」という巨大な音で母は目を覚ました。激しい縦揺れと横揺れの中、ベッドの上で全く動けなかった。揺れが収まるまで布団にくるまってじっとしていらした。

揺れが収まるとすぐに母の父が子供たちを助けに来た。家が歪んでしまい、扉が開かなかったので扉を蹴破ってはいってきた。天井には穴が開いてしまっていて、食器は割れ落ち、物は散乱し、歩くのも困難な状況だった。ピアノも動いてしまっていた。

平屋だったので倒壊もせず、母の兄と弟、父、母ともに誰もけがはなく、助かった。

なんとか外に避難することが出来た。

（2）父の体験

父が住んでいた尼崎市も地震の揺れにより、かなり揺れた。

「ドーン!!」という巨大な音で目を覚ました父は、初めは地震だと気づかなかった。自分が住んでいるマンションにトラックかスポーツカーか、何かそのようなものがぶつかってきたのかと思った。

横揺れはあまり長く続かなくて、けがはなかった。外に出るまで地震が発生したのだと気づかなかった父は、先日初めて購入した自分の車が壊れていないか、確認しに降りた。

車の無事を確認し、部屋まで帰ってきたときにつけたニュースで、神戸で地震が発生したのだと分かった。市自体、あまり被害がないと感じた父は、普通に職場に向かった。

3 地震発生後から数日間

（1）ライフライン

電気は完全にアウト。部屋の照明をつけても電気はつかなかった。

ガスはプロパンガスだったので使用することはできたがたくさんあったわけではなく、使える量にも限りがあった。

田舎なので水道は山の湧水を使っていたが、地震の影響で水の出が悪くなり何日か後に小野市に住んでいる母の叔母が小野市から運んでくれた。

（2）数日間の様子

地震が発生した1月17日から数日が経過しても余震が多くあり、ゆっくりと眠ることが出来ない日が続いた。出勤するのも、公共交通機関が使えるのは復旧している区間のみで、被害の大きい地区に入るとあとはずっと徒歩で通勤した。通勤に何時間かかるのかは全く分からないというのがものすごく不

安に感じた。通勤途中では、火災などにより大きな被害を受けた長田地区も通っていたが、家屋の倒壊や火事などでジーパン・スニーカー・マスク・リュック・懐中電灯を身に着けるスタイルは欠かせなかった。

通勤途中では時計などもなく、火災が発生した地区を通る上にまったく時間が読めないし、余震もまだ多く続いていたので家族も心配していると思い、通勤中に何度も道中の災害電話から家族や会社に安否の連絡を入れた。

(3) 会社の様子

会社も電気・ガス・水道などのライフラインが完全にシャットダウンされていて、会社も半壊していた。懐中電灯やカセットコンロ、水は湧水をいただきに行ったり救援物資をもらうために寒いなか何時間も並んだりなど本当に忙しく、大変だった。

業務どころではなく、業務縮小によりそのまま数か月後に解雇になった。

(4) 家の様子

家は耐震構造がしっかりされているわけではなかったので半壊した。

物資をもらうのに寒い中何時間も並ばなければならなかったり屋根に上ってブルーシートをかぶせたりなど、やるが多すぎた。

4 母の感想

地震による被害の大きかったところは全国各地から救援物資がたくさん届くけど、田舎のほうでも同じ災害に見舞われたら物資が必要なところもたくさんあると思う。

子供たちのことや家のこと、生活のことなどいろいろなことで両親はものすごく大変だったと心から思う。健全な人でも大変な災害。子供や高齢者、障がいのある方など災害弱者にあたる方はなおさらだと思ふ。嫌なことでも忘れるだけではなくて振り返ることも大切。

あの経験があったから少しでも考えたり、備えたりすることが出来る。前を向くことが出来る。そう思う。

5 高校入学までの自分

(1) 小学生

小学生のころ、僕はあまり災害や防災などといった言葉に興味がなかった。

印象に残っていることといえば、本が好きだった僕がよくいっていた学校の図書室に置いてあった阪神・淡路大震災の当時の様子について書かれた本や写真集だった。初めにその写真集を手にとった時、地震の時の写真だということを信じるが出来なかった。戦時中の写真と間違えているのかと思った。ほかに覚えていることは、阪神・淡路大震災発生の1月17日が近づいてくると行われる追悼行事だ。

正直、話を聞いてもあまり当時の状況がわからなかったし、ただ話を聞いていただけだった。

2011年に発生した東日本大震災。町に襲い掛かる津波の様子をテレビで見たとき、本当にショックだった。たまたま弟と聞いていたラジオで安否確認の情報が流れているのを聞いて、なんとも言えない思いで胸がいっぱいになったことは鮮明に覚えている。

「人間は災害に勝てない。自然の力はものすごく強い」と、痛感した。

(2) 中学生

中学生になって、卒業後の自分の進路について考えるようになった時、僕は英語に関する学部のある高校に行こうと考えていた。だが、その目標は叶わなかった。普通科ではできない国際的な学びをしたいと考えていた僕は、ネパールなどを訪問している舞子高校環境防災科を知った。この学科なら英語専門ではないが、国際的な学びができるだろうと思った。進路決定が遅く、オープンキャンパスにも行けなかったが、受験した。その時は、防災に対して面倒くさいとかいらないなどといった考えはなく、逆に防災は大切だ。やるべきだ。という考えもなかった。いわば防災に対して何も思わなかったのだ。

6 環境防災科に入学して

入学して、環境防災科がこんなにも防災や減災について学習していると知って、驚いた。

将来の夢が明確な人が多く、先生方も将来の夢が決まっているのが前提かのようにスピーチや発表などが進んでいく。自分のやりたいことと今やっていることが違って、「本当に自分がやりたいこと」と「上辺だけ話しているやりたいこと」とのギャップの差に自分自身を見失いそうになり、正直、

辞めたくなることが多々あった。

でも続けてこられたのは仲間たちのおかげだ。授業の「夢と防災」で思い切って自分の夢を仲間たちに話しても誰もばかにせず、むしろ応援してくれた。本当に心強かったし嬉しかった。

環境防災科に入ったから将来も防災にかかわる進路を決めないといけなかったが、そんなわけでもないということに気づいた。仲間たちのおかげで僕は今、自分の夢をしっかり自信をもっていうことが出来る。

よく参加させてもらうお祭りのボランティアは自分の中でもリフレッシュするいい機会になった。ほかにも、防災ジュニアリーダー合宿や東北訪問、熊本の被災地支援活動や募金活動など、環境防災科に入ったことで参加できた素晴らしい活動がたくさんある。今は環境防災科を選んでよかったと思っている。

7 自分の夢

僕の夢は2つある。

1つ目は留学をすることだ。なぜ留学をしたいかというと、人とのコミュニケーション能力を養うには、実際にやってみることが一番だと考えているからだ。現地の方とたくさん話をして、文化や料理を楽しんで、自然遺産や文化遺産を見て。ほかにも留学を通して日本との文化の違いや生活の違いなどについても学びたい。

2つ目は英語を使って世界中を旅行し英語を使った職業に就くことだ。

世界には自分の見たことのない景色や文化、自然がたくさんある。自分の知らない人たちが住んでいて、その人たちが独自に生活をしていて、その国や地域の遺跡や建築物、自然が自然遺産や文化遺産になっている。僕はそのようなものを見たい。写真や動画、話だけでは分からないものがきっとそこにはあると思う。アンデス山脈の空中都市マチュピチュやエジプトのピラミッド、アメリカのグランド・キャニオン国立公園、オーストラリアの一枚岩ウルル、カンボジアのアンコールワットなど例を挙げたらきりが無いほどいきたいところはたくさんある。世界遺産ではないがボリビアのウユニ塩湖にも行ってみたい。

世界中を旅し、たくさんの人と交流し、いろいろなものを見ることは自分の語学力を向上するだけではなく、自分自身を人として成長させてくれるであろう。僕はそう信じている。

そのような経験を積んで僕は将来、通訳の仕事か国際的なビジネスを展開する仕事をしたいと思っている。そのためには今、いろいろなことを学んでいろいろなことを知って、英語についてもグローバルな問題についてもたくさん勉強することが必要だ。

これらの夢は必ず、かなえたいと強く思っている。

8 これからの自分と防災

将来、どんな職業に就いたとしても、僕は自分と家族の身は守れるような大人になりたい。

今まで環境防災科でたくさんの人と交流をさせてもらってきて、自助と日ごろからの備えの大切さについて知った。誰かが困っているとき、支えている人の存在を知った。自分が困っているときは必ず周りの誰かが助けてくれる。人のやさしさも知った。それと同時に、自分は高校で防災や減災について学んできたので、自分は助けられる側ではなくて助ける側でありたいと思うようにもなった。

実際に防災訓練を運営したりまちづくり計画をしたり人命救助をしたりなど、直接防災に深く関わらなくても防災にかかわれるのではないのかなと思っている。

最近ではボランティア活動で被災した来日外国人への通訳を募集しているところもある。

形はいろいろ変わっても、

「自分の命は自分で守る」

「仲間や家族の命を守れるように普段から準備しておく」

「過去にあった災害を忘れず、今自分にできることをする」

など僕が環境防災科で学んだことを伝えられる機会がたくさんあると思う。僕はそういった防災を伝えることを大切にしたい。たくさんの人とかかわり、少しずつでも自分が学んできたことを伝えたい。

一期一会。人との関わりや環境防災科で学んだことを大切に、日本だけでなく世界中の方に自分が学んできた防災や減災について伝え、自分自身もその人とかかわることによって新しいことを知る。そうやって防災を広げていくことが僕の目標だ。

9 感想

今回、両親に阪神・淡路大震災の被災経験を聞いた。実はこれが初めてではない。小学生の時にも、親戚から阪神・淡路大震災の被災経験を聞くという宿題が出たのを覚えている。

だが、なんの興味も知識もないあの時聞いた体験と、環境防災科で災害や減災、防災について学んでいる時に聞いた話とでは感じ方が違った。注目した点が違った。苦しさが分かった。

この話を聞いて強く思ったことはこの体験や経験を決して忘れてはいけないということだ。

今回、卒業研究という機会だが親に自身の震災体験を聞くことができたのはよかったと思う。それと同時に将来、阪神・淡路大震災を経験した人がいなくなって阪神・淡路大震災が遠い昔の「過去」の出来事になってしまうのが怖くなった。これからは阪神・淡路大震災を遠い昔の「過去」の出来事にしないためには「語り継ぐ」ことが大切だ。これからの「語り継ぐ」役目は今回両親から語り継いでもらった僕たちにある。風化させないためにもこの「語り継ぐ」役目はしっかりと果していきたい。

今までは自分自身、環境防災科の一員にも関わらず防災意識が低かったと思う。非常持ち出し袋は用意しているが入っている中身は不十分だ。家族全員が最低2日間生き延びることのできる水や食料は到底、備蓄することが出来ない。家族で分け合うには少ない量しかない。もし用意したとしてもそのものをどこに置くのか、これが一番大きな問題だ。そのような問題で用意を断念する家庭も少なくないだろう。

これからは、そういった問題の解決策を模索しながらも、今自分にできること、やるべきことをしっかりと考えて行動していこうと思う。高校の3年間、環境防災科で学んだことを無駄にせず、自分の中で知識をため込まず、これからのボランティア活動やこれから出会っていく人にもアウトプットしていきたい。

直接防災にかかわることがあってもなくても、自分と自分の身の周りの人は最低限、守りたい。そう考えている。もう一度繰り返すことになるが、人との関わりや環境防災科で学んだことを大切にし、日本だけでなく世界中の方に自分が学んできた防災や減災について伝え、自分自身もその人とかかわることによって新しいことを知る。そうやって防災を広げていくことが僕の目標であり使命だ。

語り継ぐ

大瀬良 菜月

1 はじめに

阪神・淡路大震災から23年が経過した。私は、阪神・淡路大震災から4年後に産まれたため、震災を経験していない。しかし、私が語り継いでいかないと、震災は忘れ去られてしまう。そのために、私は語り継がなければならない。当時、なにが起こったのか、どのような状況だったのか、震災後人々はどのような暮らしをしていたのか。周りから話を聞き、語り継いでいくことが私にできることだ。

2 語り継ぐ

祖母が震災の話をしてくれたのは初めてだった。そのおかげで、周りにいた叔母や母の体験も少し聞くことができた。今まで震災の話を避けてきたわけではなかったが、どうも聞きづらかった。あれだけ被害を出した震災の話を被災した祖母たちから聞くことは残酷なことなのではないか、と思ったからだ。しかし、祖母たちは丁寧に震災当日の様子から震災後の話までしてくれた。思い出したくないこともあったはずなのに話してくれた祖母たちの話を語り継いでいけるように整理していきたい。

3 祖母の話

(1) 震災当時

祖母は当時、垂水区の団地8階に祖父・私の母・母の妹の4人で住んでいた。1月17日は私の母の成人式の後で、ちょうど20歳を迎えたところだった。虫の知らせかわからないが、祖母以外の3人は夜中に何度も起きて、寝付けなかったそうだ。

1月17日 午前5時46分。「バキバキバキッ」という音がした。今となっては、それは家具が壊れていく音だとわかるが、当時は何が起こったのかわからなかった。「飛行機が落ちてくる！」そう思った。必死に布団をかぶって耐えていた。地震の揺れがおさまリ、動けるようになると、家族の安否確認を行った。幸い誰も家具の下敷きになっていなかったが、祖父に重たいタンスが落ちてきて、必死に祖父がタンスを支えていた。そのせいで腰を悪くしてしまい、今でも現場仕事の際は腰の痛みを気にしている。とりあえず、車に避難しようということになった。外へ逃げる際に家族全員が慌てすぎて祖母が私の母を突き飛ばしてしまった。それくらい混乱した状況だったということがわかる。車へ避難すると、大きい車だったので、家族4人が足を伸ばして落ち着けることができた。当時、車にテレビがあるのは珍しかったが、祖父の車にはテレビがついていた。そのおかげで、何が起きているのか確認することができた。しかし、テレビは祖母たちにとって残酷な映像を流し続けた。父が、一番被害がひどかったと言われている長田に住んでいたため、私の母はテレビを見てパニックを起こし、ずっと泣いていた。父と連絡がつかず、父は死んだのだと母はずっと思っていた。数日経ってからなんとか連絡を取ることができたのだが、父はその間亡くなった人を運んで動きまわっていたそうだ。長田の火災は垂水にも山を越えて灰が降ってきたくらい、凄まじいものだった。垂水は比較的被害が少なかったものの、祖母の家は団地の8階だったため、家がまわっているように感じるくらい、揺れが大きく、家具もすべて壊れてしまった。しかし、その悲惨な状況の中でも嬉しかった事は周りからの助けがたくさんきたことだ。当時神戸に住んでいなかった叔父がたくさんの食料を持って駆けつけてきてくれた。涙が出るほど感動したそうだ。また、近所付き合いも盛んだったため、色々な情報交換も出来て励ましあった。近所の人でも一軒家を車で回り、倒壊している家にブルーシートをかけていった。自分の車も壊れてしまっていたのに、車にブルーシートをかけ、窓をガムテープで補強した状態にして近所を駆け回っていたのだ。「あの頃はまさに助け合いの世界だった。」と祖母は言う。

(2) ライフライン

ガスと水道は完全に止まってしまったが、電気は地域差があったようだ。自動販売機だけはなぜか稼働していた。稼働している自動販売機の前にはたくさんの行列ができていた。初めはあるだけたくさん買おうと思っていた祖母も行列を見るとたくさん買えなかったそうだ。結局1.5ℓの水を3本しか買えなかった。しかし祖母は、「みんな困っているのだから、困っているときはお互い様。もう少し我慢すれば水の配給がくるはずだから。」という気持ちだったそうだ。また、水が出なかったのも、銭湯は行列だった。当時は水のいらないシャンプーが飛ぶように売れたという。ご飯を食べる時もお皿にサランラップを乗せて食べ、お皿を洗わないで済むようにした。トイレも5回に1回流すようにし、水がないと本当に不便

だということを痛感した。水が配給されるようになってからは、大きなバケツに水を汲んで8階まで上がらなければならなかった。祖父しか男性がいなかった分、これには大変苦労した。しかし、近所のおじさんが一緒に水を運んでくれ、助けてくれていた。本当に感動した。しかし、ライフラインが止まることによって、悲しいことも起きた。ずっと前からかわいがってきた熱帯魚が地震で水槽が壊れてしまい、死んでしまったのだ。祖母は動物が好きなゆえに、すごく悲しかった。それから動物は一切飼おうと思わないそうだ。

(3) 地震後

阪神・淡路大震災が起きる前は家族全員「大きい地震は絶対に来ない。もし大きな地震が日本に来て、神戸には来ないだろう」と思っていた。阪神・淡路大震災が起きる前は、火山が活発なのは知っていたが、目立って大きい地震はなかった。しかし、阪神・淡路大震災が起きた後、頻繁に小さい揺れも来るようになった。祖母は「あんなに大きい揺れがきたから小さい揺れなんてなんてことない」と言っていたが、母は、「小さい揺れでもすごく怖い。あのときの揺れが忘れられない」と言っている。また、祖母の家の近くには長いトンネルがあった。そこを通る際にずっとサイレンが聞こえていて、空襲警報のような音で気持ち悪くなった。それから今もトンネルを通るときは音が聞こえていなくても、少し怖い。震災のことを忘れたくても、忘れられないと言う。

父はクロス屋をしているので、仕事が再開してからは大忙しだった。建築業の方が忙しさは増していたが、クロス屋も例外ではなかった。仮設住宅の壁紙を貼り、落ちてきそうな屋根のかわらを降ろす作業までしていた。また、地震後は衛生環境が悪かったため叔母は喘息にかかってしまった。病院に行ったが、復旧したすぐ後だったため、すごく混んでいた。

祖母の知人が警察官だったため、こんな話も聞いた。行政の面からみると、警視庁はずっと応援を送ってくれていた。しかし、ある時を境にパタリと姿を消した。そのあとすぐに地下鉄サリン事件が起きたからである。

当時祖母たちは「神戸が復興するには、10年かかる」と言われているのを聞いた。聞いた時は、10年という途方もない数字に目眩がした。神戸を出ることも考えた。しかし、周りからの支援もあったおかげで、ものすごいスピードで神戸の目に見える部分は復興していった。そんな街を見ていくのはとても楽しかったし、ワクワクしたと言う。

4 祖母の話聞いて

身近な人に阪神・淡路大震災の当時の様子を詳しく聞くのは初めてだった。祖母に「阪神・淡路大震災当時の状況を話してほしい」と言うと、「23年も経っているし、あんまり覚えてないなあ」と言いながらも話してくれた。しかし、話している途中でどんどん記憶が蘇ってきて、たくさん話してくれた。ここで私が思ったのは、祖母や母は震災について話す機会・思い出す機会が少なかったのではないかということだ。家族で震災について話し合ったことはない。だから、この機会に母と祖母が記憶を整理する機会になってよかったと思う。祖母たちの「当時は大きい地震がまさか神戸に来るなんて思ってもいなかった」という言葉は、神戸に住んでいる人たち全員が思っていた言葉だろう。しかし、その意識を震災前に変えていれば、もっと被害が減らせたのかもしれないし、母や祖母が悲しむこともなかったのだろう。母は今でも地震や大きい音に敏感だ。特に、夜に大きい音がすると一気に顔が強張る。それほど震災は当時の母に大きなダメージを負わせたのだろう。

5 環境防災科に入って

私が環境防災科に入りたいと思った時期は中学三年生の10月頃だ。夏休みにオープンキャンパスがあり、舞子高校には行ったものの、環境防災科のオープンキャンパスには行かなかった。中学の時に防災に興味を持っていたわけでもないし、環境防災科を知ったのも3年生になってからだった。中学校で合唱部に入っていた私は、文化祭で東日本大震災をきっかけに作られた「群青」という曲を歌うことになった。この曲は、福島県南相馬市の中学校が舞台だ。生徒が東日本大震災で心を痛め、音楽の授業で歌を歌えなくなった。そこから、音楽の小田美樹先生が生徒たちの日記や言葉で詩を作り、群青が歌詞作曲された。この曲は、その年の3年生の卒業式で歌われた。私は、歌詞の意味・情景を理解して歌うのに、東日本大震災について調べていたところ、災害について詳しく知りたい、自分や身近な人を守る術を知りたいと思うようになった。このことがきっかけで環境防災科に入ることを決心した。

環境防災科に入って1年次は外部講師の方を招いて講義を受ける授業が多かった。その中でも、神戸学院大学から来られた船木先生の講義で、私の将来やりたいことが一つ増える事になった。船木先生の講義

は、小学生の防災教育についてだった。神戸学院大学の船木先生のゼミでは、主に防災教育の出前授業や救急救命士の講習の指導を行っている。その講義の際に、当時防災教育について考えたことがなかった私は、「子供たちに自分の命を守る術を知ってもらいたい、防災教育を充実させたい」と思った。将来就きたい職業とは直接関係があることではないが、歯科衛生士という職業は、幼稚園や小学校を訪問する機会もある。その機会を生かして私がやりたい防災教育を小さなことから始めていきたい。これは、環境防災科に入学していなければこの講義は受けることができなかったし、環境防災科に入ってからたくさんの方たちに出会った。たくさんの方との出会いがあったおかげで、私はやりたいことを見つけることが出来た。環境防災科という特殊な学科で特別な授業を受けることができた。それなのに、学んだことを私たちで止めておくことは、とても勿体ない。知識は貯めるだけでなく、整理して、活用することが大切だ。環境防災科で学んだ知識を身近な人はもちろん、たくさんの人に広めていきたい。

6 将来の夢

私の将来の夢は、歯科衛生士になることだ。私は小学生からこの夢を持っていたわけでもない。小学生の頃から一つの夢に絞れていたわけでもない。進路に悩んでいる際に母が勧めてくれた職業だった。他の人に比べれば、大きなきっかけなんてないし、自分でその職業を見つけたわけでもない。しかし、オープンキャンパスへ行って歯科衛生士の魅力を知った時、初めて「将来は歯科衛生士として働きたい」と思うようになった。元々、進路について悩んでいた際も医療関係に就きたいという希望があったので、医療に携わる職につけるのは本望だった。歯科衛生士として防災を広めていく方法も自分なりに考えてみた。

歯科衛生士は、患者さんとのコミュニケーションが大切だ。患者さんが歯科医師に聞きにくいことを聞く相手も歯科衛生士だ。いわば、患者さんと歯科医師の架け橋となる。また、歯科衛生士も歯科医師の補助だけでなく、歯科予防処置という業務もある。歯科予防処置とは、歯の歯石や歯垢を取り除く処置をすることだ。その際にコミュニケーションが大切となってくる。歯科医院を嫌いな人はたくさんいる。無言で治療をされたら、何をされているのかもわからないし、見慣れない器具に囲まれた患者さんはリラックスできなくなる。そこで私はコミュニケーションの取り方として、防災について患者さんにお話していきたいと思う。防災は、言葉だけを聞くとすごく難しく聞こえてしまう。実際に、防災を掘り下げていくとわからなくなるし、難しい。しかし、知っているとは命を守ることができる話はどうだろうか。興味を持つ患者さんがいるかもしれない。そんな人に防災を広めていきたいと思っている。

歯科衛生士は歯科医院で働くだけでなく、幼稚園・小学校・老人ホーム等を訪問し、歯磨き指導を中心とした歯科保健指導という業務がある。私も幼稚園の時に歯磨き指導を受けたことがある。たくさんの視覚教材を使って、栄養・食事の摂り方・正しい歯磨きの仕方などを教えていた。私は、その時間を少しでも防災を広める時間にしていきたい。ただ、子どもたちに防災教育をすることは難しい。地震という単語一つわからない子供だっている。しかし、「知っている」と「知らない」では大きく違う。子供は純粋にその日あった出来事を記憶してくれる。少しでもいいから、地震の時・火事の時・津波の時に自分を守る術を知っていてほしいと思う。具体的には、簡単な劇・クイズを作って広めていきたい。また、体を動かして学ぶ防災ダックも使いたい。教えることは防災教育の基礎的な部分の「地震がきたら頭を守る」「津波が来たら、高い場所へ逃げる」といったことだ。将来子供たちが地震を経験してしまったとしても、私の防災教育がきっかけで命を守る術を思い出し、一人でも多くの子供が亡くならないことを防ぎたい。

7 防災訓練

防災は難しい。そのような考えを持つ人はたくさんいる。確かに、防災は専門的に学んでいくほど難しくなる。しかし、防災は、たくさんの人々が知っている「自分を災害から守る方法」だと私は考える。災害から身を守る方法を知っている人はたくさんいる。地震が来たら頭を守る・津波が来たら高いところへ逃げるといったことだ。しかし、人々の考えで共通していることは、「地震なんて来ない。まして、自分が被災するなんてありえない」という考えだ。阪神・淡路大震災でもそのような認識だったので、大きな被害が出てしまった。もし、神戸に地震が来ることは当たり前だと人々が分かっていたら、もう少し事前に対策・備えをできていたのかもしれない。このようなことを繰り返さないためにも、情報の共有と防災訓練が大切だ。自分の地域にどのような災害の危険性があるか、どのような被害が出るのかを知っている人は少ない。災害による被害が出る地域に自分が住んでいることを知らないのは、危険なことだ。外出先で災害が起きてしまっても、最低限自分の地域でどのような災害が起きるかは知っておかなければならない。自分の地域はどんな災害の危険性があるかは、インターネットで検索するとすぐに出てくる。しか

し、このようなことを考えている人、または、自分の地域の危険性を知る方法を知っている人は少ない。自分の命が危険にさらされるなんて普段の生活の中で考えるだろうか。明日もし災害が来たら・・・と考える人はいるだろうか。このように考えるきっかけとなるものがないのだ。そこで、地域の防災訓練だ。防災訓練というと、堅苦しいイメージだが、地域のお祭りを兼ねたものだとどうだろうか。防災訓練という言葉だけでお知らせするよりは、少し気楽に行けるイメージになる。防災訓練では、将来自分のためになることをたくさん学ぶことが出来る。AEDの扱い方・消火器の使い方・応急手当の仕方など色々なことを教えてもらえる。また、防災訓練やお祭りといった地域の行事はコミュニティ作りに最適だ。いざとなった時に地域で助け合えるよう、地域単位で防災意識を高めていくことが大切だと考える。このように、防災の基本的なことを考えるきっかけ、コミュニティ作りの場となる防災訓練といった地域の行事は災害が頻繁に起きる日本では、必ず必要なものである。このような行事を運営しているのは、大半は若い世代ではなく、年配の方だ。若い世代が引き継いでいかなければ、地域の行事は終わってしまう。そのためにも、若い世代を巻き込んだ防災意識の向上が私は大切だと考える。

8 まとめ

「語り継ぐ」を作成するにあたって、正直身近な人に震災について話してもらうことは気まずかった。生まれた時からずっと一緒にいるからこそ、恥ずかしさもあり、聞くまでに時間がかかった。しかし、聞いた後は、「聞いていてよかった」という思いでいっぱいだ。災害時に役に立つこともたくさん聞くことができた。なにより、祖母や母の考えを聞くことができて、その考えを共有することができた。本当によかったと思う。また、自分の考えを整理するきっかけにもなった。自分がなにをしたいのか改めて確認することができた。私は大きな災害に見舞われたこともないし、阪神・淡路大震災も経験していない。しかし、経験していないからこそ、色々な人の話を聞いて、整理することができて語り継いでいくことが出来る。「経験していないのに」と言われても、将来、自分の身近な人が被害にあわないために、私は阪神・淡路大震災を語り継いでいきたい。

語り継ぐ

大坪 直人

23 年前の阪神・淡路大震災を私は体験しておらず、私自身の実体験から語り継ぐとは出来ない。しかし、母の言う『あの日』とは何なのか。まだ、私が生まれる前の話を聞いて今ここに書こうと思う。

1 私の震災

(1) 母の記憶 震災の形

私は母から話を聞いた。母から話を聞くのは始めてのことだった。私がメモを取り出すとゆっくりと話し出した。いつにもない真剣な表情だった。

うーん、あの日はね。と母が始めた。

ママが体験したのは、地震の前日夕方に父方の祖母が亡くなり、地震の当日が葬式だったの。早朝寝ている時に揺れで目が覚めたの。まさかこんな大きな地震が起こると思ってもみなかったわ。寝ぼけているのもあって最初は祖母の祟りか怖い夢を見ていると思ったの。祖母が亡くなった日の朝までスキーで遊びに出掛けていたからね。けど、意識がハッキリするにつれて、現実起こっていることなのだと理解し始めたわ。本当に怖くて怖くて。布団から出る事も出来ずにいたら、一度揺れが収まりホットしたのに、それも束の間で、ゴォーっていう地鳴りが聞こえたかと思うと又大きな揺れ。意識がハッキリしている分恐怖感も大きくなったし、揺れの時間も長く感じたわ。幸い住んでいた家は大きな被害もなく、早く電気、水道も使えたわ。ガスもプロパンガスだった為に問題なく使えたけど。ただ地震のあった当日が葬式なので、本来来る予定だった人が来られなくなったり、用意する物が出来なかったりとても忙しかったのよ。余震がまだ頻繁に起こる中で、地震に怯えながらの葬式だったわ。その告別式時、祖母の妹さんが泣きながら「御姉ちゃん、怖い目にあわずに済んで良かったな」と、別れをつげた言葉が忘れられない。祖母が亡くなったことで、仕事には数日経ってから出勤するようになりましたが、数日経っても交通機関も復旧しておらず、普段の通勤以上の時間をかけて仕事先に通った。仕事先の事務所も壁にヒビが入っている所があり、屋内も数日経っていてもまだ書類等が散乱している状態だった。

地震の起こる少し前から既に起きて家事と、葬式の時に使う物の準備を一人でしていた母は、そうとう怖い思いをしたのか、精神的に弱っていて、何をするにも一人で居るのがしばらく怖いようだった。震災があってから1年近く経ってから、一緒にスキーへ行ったメンバーと会い、その時に「後1日帰るのが遅かったら死んでいたよな・・・地震のあった時間帯に、倒れた高速道路を通っているはずやし」と話した。自分たちは大した被害にあわずに済んで本当に幸いだけど・・・

(2) 母が今思うこと

震災から23年、大きな震災があったとは思えない程に、よく復興したと思う。直接大きな被害にあってない私は、あの時に起こった事は覚えていても、その時にものすごく感じたはずの恐怖心は薄れている。実際に震災を経験した者ですら、大きな被害を受けていないと、事細かに覚えていないのだから、経験した者が少なくなればなるほど震災があった事すら忘れ去られてしまうと思う。震災では多くの人が亡くなった。もしあの時、今の様に災害に対しての意識や知識、備えが違えば、もっと助かった命があったと思う。

過去に起こった事を忘れないように、次の世代に語り継ぐのは大切なことなのだと経験した今ならわかる。

(3) 母の話を聞いて

母から聞いた言葉の一つ一つに重みを感じた。それは私にとって一番身近な人物だからだろう。いつも側にいてくれる大切な人から出た言葉の「死」は私を恐怖に包み込んだ。もしも、母が震災で命を落としていたならば。母がいない世界を想像させた。真黒な世界だ。私にとって母は雄一無二の存在である。失ってはいけない、守らなければならない命なのだ。その母から語り継ぐことの大切さを教えてもらった。災害は思いもよらないことが重なるということ。それに対処できる知識、備え、発想、地域のコミュニティが必要であること。そして語り継ぐこと。「震災から日が経つことに記憶は薄れていく」地域自体の被害は少なかったという母が教えてくれた。それでも決して忘れてよいものではない。いつか来る災害からいつか居る家族のために、私に出来ることをやっといこう。

私は母から阪神・淡路大震災について話を聞いたことがなかった。なぜ今まで聞いてこなかったのだろうか。たぶん知らず知らずのうちに避けてきたのだと思う。いつも笑顔の母に暗い顔をしてほしくな

かったから、ずっと話を聞いてこなかったのだろう。話を聞いて思うこと。それは、「震災は一人ひとりに違ったエピソードがある」ということだ。一人ひとりの持つエピソードを語り継ぐことが防災に直結し未来を守っていくと私は思う。

2 いつもの先生

(1) 私にとっての阪神・淡路大震災

私は英語の個人塾に通っている。震災当時母は神戸市北区に住んでいたため今私たち家族の暮らす神戸市西区については何も知らなかった。震災当時私の暮らす地域では何が起こったのか。ずっと暮らしているという塾の先生に話を聞いた。

「1995年1月17日のあの瞬間、私はマンション一階の自宅寝室で子ども2人と夫と家族4人で川の字で眠っていました。突然下からドーン！と突き上げられたような衝撃で身体がまるで浮いたかのように感じられ、目を覚ましました。一瞬不気味な沈黙の後すぐに今度は激しい横揺れ。ずっと神戸に住んでいた私は地震の体験は無く、でもこのただ事ではない揺れに、「もう私は死ぬのかな、子どもたちや主人、家族と一緒にいる時で良かった。」と思ったのははっきりと覚えています。揺れた瞬間とまさに子どもたちに覆いかぶさった主人は、大きな揺れがおさまるとすぐにラジオをつけ、寝室を出てリビングの様子を見に行きました。ラジオから流れてきたアナウンサーの声は悲惨さに上ずり、叫ぶように辺りの様子を伝えています。「私は今須磨の離宮道にいます。崩れた家に脚を挟まれた方の家が燃えています。ご家族に逃げて、と言っておられます。なんという事でしょう！！」と信じがたい状況が流れてきます。怖さで動けなくなっていた私はやっとの思いで起き上がり、この揺れに気づかず眠っている子どもたちを見て命が無事であることにホッとし、カップボードから飛び出てぐちゃぐちゃに割れ散らかっている食器類や、テレビボードから落ちそうになっているテレビを呆然と眺めながら、ふとカーテンを開けて外を見ると、普通に犬の散歩をしている人、ランドセルを背負って登校してくる子どもがいるではありませんか。我が家は小学校の道を挟んだ向かいにあり、そのいつもと変わらぬ平和そうな日常の光景に驚いたのも鮮明です。しかし、それから実際の生活は一変しました。電気とガスの復旧は素早く当日で、とても助かりました。水だけが翌日でしたが、大きな余震が度々来ていたので、マンションのみんなでなるべく水を大切に使うと、子ども達だけを一緒に順番にお風呂に入れたり、寒さに困っている避難所の大変な様子が報道されていたので、みんなで暖かい衣類を集めて、電気会社に務める主人が復旧作業で向かう先の避難所に届けてもらったりと、近隣の人々同士で力を合わせて生活していました。西区は神戸市とはいえ被害はかなり少なかった地域で、火事や家屋の倒壊もなく1週間程度で復旧しました。他区の被害は悲惨を極め、倒壊の下敷きや火事で亡くなり、行方不明の方の数が日増しに増え、テレビでは市内のみならず近隣地域の馴染みの場所がまるで戦場のように焼け、崩れ、助けを待つ人の様子が写し出され、学校が始まる見通しも立たず、復旧作業に出かけた主人は、いつ帰るかわからない。そんな日々でした。そんな時西宮に住んでいた私の親友が、生後7ヵ月の赤ちゃんとも4歳の子どもと一緒に我が家に避難して来ました。西宮の彼女の家はガス、水道が来ておらず、赤ちゃんを抱えて大変な思いをしていました。我が家も私と子ども2人の生活でしたので、一緒に助け合って暮らすことに何の異論もなく、学校に行けない娘は喜び、家中に洗濯物を干し、その下を子どもたちが走り回る、余震が来たらみんなで机の下に潜る、と言う恐怖の中にも助け合って生活する喜びのある1ヶ月程の共同生活でした。あれから23年、神戸の街は復興も進み、一見震災は遠い過去のように思えますが、その爪痕は、大きく人口は減少を続け産業も元通りの活気を取り戻すことは出来ていません。ただ、阪神淡路大震災の経験をきっかけに全国に防災対策が進んだ事で、東北、熊本、の震災で役に立ち、23年前に応援して下さった方々との繋がりが今も大切にされている事など、阪神・淡路大震災は人の関わり方を大きく変えてくれたと思います。」

(2) 23年経って思うこと

「23年前に真っ先に救援物資を我が家に送ってくれたのは、熊本の友人でした。去年の熊本地震はいとも立ってもいられず、今年2月家族や友人で集めた義援金を渡しに熊本の支援センターを訪れ、友人に会ってきました。阿蘇山周辺は道があちこち崩れ通行止めが多く迂回だらけ、熊本城は修復のめどが立っていないことを友人は悲しんでいました。でも友人に怪我がなく元気で熊本が復興に向けて頑張っている様子が心から嬉しく、行った事を友人もとても喜んでくれて『お互いに頑張ろうね。』と励まし合いました。地震はよりお互いを思い合う絆を深め、人として大切なことを教えてくれたと思います。」

私は今も西区に住んでいます。あの日失っていたかもしれない命です。生かされたことに感謝し、震災でお亡くなりになられた方や、苦しんでおられる方の事を忘れずに、これからもみんなで思い合う社会であってほしいと強く願っています。」

(3) 先生の話聞いて

自分の住む地域に阪神・淡路大震災による復興住宅が多く建っていたことを私は知らなかった。小学生の低学年ごろまでよく見かけていたものが実は復興住宅だったのだと先生の話聞いて知った。私は知らないことだらけじゃないかと自分に腹が立った。自分が住んでいるこの大好きな地域について私は何も知らない。知らないを知るところから語り継ぎは始まるのだと話を聞いている中で教えてもらった。先生は震災が人の関わり方を大きく変えてくれたと話してくれた。震災があったから人と共に喜び合うことの素晴らしさに気付けたと話してくれた。震災から学んだことで一番大切なのは「思い合う社会をつくることだ」と先生は言う。確かに災害がもたらす被害はとてつもなく甚大である。しかし、協力をすれば乗り越えられないものはないと話してくれた。友人同士互いに励まし合って生きていく、先生が地震に教えてもらったようにこの新しい生き方を私も後世につないでいきたい。

3 環境防災科生

環境防災科に入学し本当多くのことを経験し学んだ。この3年間は私にとって人生最大の転換期となった。なぜこのように思うのか？それは防災とこれからの私の人生を結んだ3年間だからだ。

入学までの15年間防災と関わることがあったらどうか。自分に問いかける。残念ながら記憶に残るものはない。確かに、15年間全く関わってこなかったというわけではないと思う。生きていく中でどこか関わりを持っていたはずだ。しかし、意識はしなかった。そして記憶にも無かった。つまり災害だけでなく防災もまた非日常として私の中に存在していのだ。

入学してからはどうだろうか。いつの間にか日常として防災が私の中に存在し、常に災害について考えるようになっていた。そりゃあそうだ。3年間も防災について学習してきたのだから。だが、入学する前からは考えられないことではないだろうか。もしも、入学前の私に、未来にあなたは毎日災害について考えているよと言うことができたなら、私はどう答えるだろう。おそらく信じないはずだ。ここで感じることは、それは、防災教育の凄さだ。いつの間にか、無意識のうちに災害に向き合うようになっている。防災教育から学んだことは災害の恐ろしさだけではなく、人の温かさ、繋がりなどそういったものも学ぶことができた。災害大国である日本にとって本当に大切な教育とは防災教育なのだ。

4 夢なんて言葉で終わらせない

(1) 将来の夢

私の夢は教師になることだ。きっかけは、中学三年生の時の担任の先生との出会いだ。したいことがなく、なかなか進路が決まらず投げやりになり反抗的だった私を見放すこと無く寄り添ってくれた。そして行きたい学校ができたものの成績が悪く諦めそうだった私に向かい「環境防災科の推薦入試をいくらほかの先生方に反対されても先生がきっと推薦してあげる。あきらめずに一緒に頑張ろう。」と言ってくれた。今私は環境防災科にいる。この時から人に寄り添いともに歩くことができる人になろう、教師になろうと思うようになった。

(2) わからない

夢なんて言葉で終わらせない。だが私の夢は叶うのだろうか。わからない。私は環境防災科に入学し将来の夢に悩まされることになった。理由は二つある。一つ目は熊本地震だ。2016年4月14日に発生し、そこから何かできることはないだろうかと考え募金活動を始めた。協力して集めた募金を私たちの手で直接現地に届けたいという思いと私たち自らの手で何か役に立ちたいという思いから、多くの方々の協力を得て現地での支援が実現した。個人住宅に入り瓦礫の撤去を行ったり、避難所となっている温泉の掃除などを行ったり、熊本市内の視察を行うなど私たちに出来る最大のことをした。やれるだけのことはやってのけた。なのに、心残りがあるのは避難所の景色を忘れられないからだろう。避難所の掃除を行っている時に遊んでほしそうに見つめてくる小学生が2、3人。部屋をのぞいてみるとダンボールで作られた家ばかりだった。退屈そうに過ごす小学生がたくさんいた。ダンボールの上で暮らす生活に慣れている様子だった。私たちの掃除に気を使っている様子だった。いつもはもっと元気なはずだ。遊んであげればよかった。と後悔する。元気な子どもの笑顔を奪いたくない。守ってあげたい。そう思った。だが何かをしてあげたいというのはただの理想に過ぎなかった。目の前にいる子ども一人相手に出来なかった自分。こんな私に生徒を守ることが出来るのだろうか。今も分からない。二つ目は東日本被災地訪問だ。大川小学校を見学し津波の恐ろしさを感じた。子どもがここにいたと思うと胸が張り裂けそうになり苦しかった。私が小学校6年生の3月11日に東日本大震災が発生した。覚えていることはテレビの中に映し出された騒がしい風景だけである。同じ日本で起きていることと私は信じられなかった。どうしてだろう。どうし

てあの頃の私は自分とは無関係でどこか遠くの国で起きているのだと思ったのだろうか。その答えは、高校3年生となった今も私は覚えている。「だってここは被害がないじゃん」と。「ああ、どうしてあの頃の私はこんなことを思ったのだろう、自分とは関係がないと思ったのだろう」被災地を訪問したあの時から後悔してやまない。何が教師になるだ。何が子どもを守るだ。自分が醜かった。自分に子どもを守りたいという思いを持つことさえ許されない気がしたからだ。

(3) それでも

それでも私は子ども達を守りたい。その思いは変わらない。これからもずっと悩み続けていくだろう。もしかするとこの後悔を消すことは出来ないのかもしれない。だからといって諦めることもできない。熊本で見た景色もまた見過ごすことはできないからだ。あのような子どもを少しでも減らせるように、私は私に出来る限りのことをして生きていきたいです。

5 私の道

「カメラがほしい。」「旅行がしたい。」ふとすることがある。どちらもただの私の趣味だ。見たこともない世界を見たい。そしてそれを残したい。そう思うようになったのは初めて韓国に訪れた時からだ。隣の国なのに文化が違う、言葉が違う。「なんでだろう」疑問だらけでうきうきした。ただの街並みもキラキラの宝石のように見えた。国、地域の違いは伝統が脈々と受け継がれているからだと思う。大切にすべきその地域の宝である。海外だけじゃない、日本にも様々な文化、伝統がある。だが、私はほとんど知らない。知らないと知ることができないの二つがある。過去に争いで失われた伝統は山ほどあるだろう。現代でも伝統工芸の減少が問題視されている。同じように災害で失われた伝統、文化はもう見ることはできないのだ。私は日本や世界を見て回りその文化や伝統を写真に収めていきたいと思う。そして、その写真を家族や友人に見せることで語り継いでいく。「その地域には素晴らしい伝統や文化がある。だから紛争や災害によって失われてはいけない。守らなければならないのだ。」と。

自分にしかできないこと。得意なこと。好きなこと。それは人それぞれ違うものだ。自分だけの道を歩く、それもまた語り継ぐということになるのではないだろうか。

6 語り継ぐ

この語り継ぐを通して私は自分にとっての「語り継ぐ」を見つけることができた。母親、先生から話を聞くまでは自分に何を語りつぐことができるのだろうか。聞いた話を私自身が風化させてしまうのではないかという不安があった。それは熊本での被災地支援活動や東日本被災地訪問で感じた無力感からくるものだった。語り継ぎは語り継がれることから始まる。聞かなければ始まらない。そして、語り継ぐことの本当の凄さは継がれた者に生きる意味を教えてくれることだ。自分を生んでくれたことへの感謝、自分が生まれた奇跡、生きなければならないという使命。語り継がなければならないとさえ思われた。

母の言う「あの日」とは命の駆け引きが行われた日である。語り継ぐことで救われる命がある。生きることが語り継ぎにつながるという。一人ひとりに必ず自身の語り継ぎが存在しているのだ。私にとって語り継ぐ、それは生きて防災に関わることだ。人それぞれに語り継がれるものは違う。だが、共通するのは「あの日」1995年1月17日阪神・淡路大震災

皆さんは自身の暮らす地域についてどれほど知っていますか。いつもの学校、いつもの商店街、いつもの公園、日常として存在するものは過去に非日常として存在していたものかも知れません。過去の災害を知る。皆さんにとって「語り継ぐ」とは一体何でしょう。

語り継ぐ

大西 一平

1 はじめに

私は、阪神・淡路大震災発生から4年後に生まれ、震災を体験していない。もうすぐで、18歳だ。生まれてきて今まで、ほかの災害にも被災したことないことは幸せであると思う。被災された方の話を聞いても、授業で習っても、実際に経験してみないと本当の災害の怖さはわかるはずがない。だからといって自分たちが語り継がない、知らないままでいいではだめだ。風化させないことが大事であり、震災を経験していない私たちでは、経験した人よりも説得力がないが、自分ができる「語り継ぐ」をしたいと思う。

2 阪神・淡路大震災

(1) 概要

発生日時 : 1995年1月17日5時46分52秒
震源地 : 淡路島北部(北緯34度36分、東経135度02分)
震源の深さ : 16 km
地震の規模 : マグニチュード7.2
死者数 : 6434名
行方不明 : 3名
負傷者 : 443792名
全壊 : 104906棟 (186175世帯)
半壊 : 144274棟 (274181世帯)
一部破壊 : 390506棟
各地の震度 (気象庁の発表)より

震度7 神戸市須磨区鷹取・長田区大橋・兵庫区大関・中央区三宮・灘区六甲道・東灘区住吉、芦屋市芦屋駅付近、西宮市夙)11 付近等のほぼ帯状の地域や、宝塚市の一部及び淡路島の東北部の北淡町、一宮町、津名町の一部の地域(地震発生直後に行った気象庁地震機動観測班による現地被害状況調査の結果判明。)

震度6 神戸、洲本

震度5 豊岡、彦根、京都

震度4 奈良、津、敦賀、福井、上野、四日市、岐阜、呉、境、高知、福山、鳥取、多度津、徳島、山、高松、大阪、舞鶴、姫路、和歌山、津山、加西、相生、南部川、坂出、多賀、美方、高野山

震度3 大分、名古屋、輪島、金沢、飯田、富山、伊良湖、尾鷲、萩、山口、西郷、広島、松山、室戸師、米子、松江、潮岬、諏訪

震度2 高田、長野、軽井沢、松本、横浜、甲府、持口湖、三島、静岡、御前崎、浜松、伏木、高山、宇和島、稲毛、下関、日田、宮崎、都城、佐賀、熊本、人吉

震度1 小名浜、新潟、水戸、柿間、宇都宮、前橋、熊谷、秩父、東京、千葉、館山、網代、神津島、浜田、足摺、延岡、福岡、平戸、鹿児島、阿蘇山

(2) 阪神・淡路大震災

一年では専門科目の「災害と人間」で外部講師の方にお話をお聞きし、校外学習で行った野島断層保存館では、断層や震災時のそのままの家が展示されていた。地震体験をすることもできた。お話を聞くこともできた。私は、とても大きい揺れを感じたことはない、だから大きな揺れの体験や、実話を聞いた時の衝撃が大きかった。阪神・淡路大震災についての教訓や実態を知らずに生きていた自分がいたことに気づいた。阪神・淡路大震災では、道の整備の弱さ、密集した木造住宅への火災による被害が出た。これにより共助ではどうしようもなかった。公助は、道が狭く救急車、消防車などが通れなくて一向に火災を止めることができなかった。このような被害を詳しく知ることにより、心がキュッとした。実際に火災の被害にあった長田の町へ授業で行った。区画整理がされていて、道幅が広がっていた。本当にここで火災が起きたのだろうかこんなにきれいな街になるのだろうか。ここに至るまで地区の努力が見られた。公園や通りには、焼け跡の木や電灯がそのまま残されていた。実際に見に行ったりすることは大切なことだと思った。

3 両親の話

(1) 父親の話

私の父親は、当時加古川市平岡町にある実家にいた。震災当時、仕事場が神戸の兵庫区で、出勤時間も早く、朝の身支度を行っていた。突然立っていることができないくらいの大きな揺れが起きた。大きな声で「机へ」とそこにいた両親に言った。家が揺れ、音をたてているのがわかった。木造家屋であり、築年数もたっていたため、「もう壊れる」と思った。揺れはすごく長く感じた。家の中はそこら中に物が散乱していた。大きな揺れがあったにもかかわらず、弟はまだ寝ており、揺れが収まってから二階より降りてきて、「大きな地震やった？」と言っていた。

朝日が昇り、外に出ても近所周りはいつもと変わらない様子だった。ただ家の壁に数か所ひびが入っていた。テレビやラジオで情報を聞くまで、地震の規模がここまで大きなものだとわからなかった。特に長田の火災や阪神高速道路の倒壊などは考えられないことで、まるで戦争の後かと思った。

JR 土山駅から JR 兵庫駅まで行っていたが電車はストップしていたので通勤する手段がなく自宅待機の状態だった。神戸に住んでいる社員の方は歩いて出勤され片付けや仕事の準備を行っていた。その後1時間くらいして出勤した。会社自体ダメージが少なく徐々に再開することができた。

(2) 母親の話

私の母親は、当時明石市魚住町にある実家にいた。あの地震のときドーンという音にびっくりして目覚めた。当時二階に寝ていたので一階に降りてみると食器棚の中身が出ていて足の踏み場もないくらいに割れていた。母も降りてきており、状況を理解するためにすぐにテレビをつけた。そのときは地震発生から時間がたっていなかったのもそんなに被害の状況がわからなかった。時間がたってから、テレビをつけ直すと、神戸の街の被害はとても大きいことがわかった。長田の街が火の海に…。

魚住に住んでいたのもテレビでしか被害が理解できなかった。バスは高速道路でぶら下がった形で止まっている。新聞会館も崩れている。知っている町、大好きな神戸が…と思った。ビルも倒れて道をふさいでいる。どれだけの人が苦しく悲しかったのか、本当に自然災害はどうしようもないくらいの破壊力。人間の手で止めることはできるのであろうか。その恐怖に襲われた。

4 話を聞いて

私は、こんなに真剣に母や父に震災について聞いたのは初めてだった。親と全く災害や防災について話したことがなかった。このような機会に恵まれてよかったと思っている。普段と違う雰囲気になり正直なところ恥ずかしかった。これで親と阪神・淡路大震災の話をするのは、最初で最後だと思う。

私は今まで、阪神・淡路大震災での被害などを学んできた。今回は、比較的被害の少なかった場所での被害や同じ兵庫県民としてどう思ったかなどを聞くことができた。僕は、このような話を聞き思ったことがある。災害はいつどこで起きるか本当にわからない。神戸の街が、「大地震が起こる可能性がある」と思っていた人はほとんどいなかった。「近畿地方では大地震は起こらない」と信じていたという人、「地震のことなど考えたこともなかった」という人が多くいた。一部には「地震が起こるかもしれないと思っていた」人もいたが、活断層の存在などと結びつけてそう思っていたわけではなく、漠然とそう思っていた。漠然とした思いが、思いこみにつながり、伝聞によって拡大され、やがて定着し、人々の意識の中に根付いていった。その意識が、まだまだあると思う。だから私は、備えることは大切だと思う。今は、ボランティアでもらったりする、水やカンパンや日持ちするビスケットが家に置いてある。だが非常持ち出し袋は作ってない。やはり、地震が来なかったら意味がないという意識があり用意ができないのが現状だ。僕の周りを見てみた。僕の地域では防災に取り組む活動をしていた。防災について話し合ったりいろいろしていることを知った。

5 環境防災科

(1) 中学生の頃の自分

私は、消防士になりたいと思い環境防災科に入学した。環境防災科という学科を知らない頃は、推薦で行ける場所を探していた。なぜ推薦で行きたかったのかというと早く受験が終わるからだ。単純な考えしかもっていなかった。そして、将来の夢はそこに入ってからでいいと思っていた。はじめは、工業系でもいいかなって思っており、他にはハンドボールというスポーツをしていたので、公立で強豪であり自分の学力にあった高校があったのでそこに行こうかなと思っており、非常に選択に悩んでいた。学校の先生や部活の仲間や後輩などと話したりしているときに、「舞子高校の環境防災科があるで」と後輩に教えてもらった。「環境防災科ってなんなん？」って思い、調べていきオープンハイスクールにすべて参加した。

参加すると「学校は普通の学校やん」って思った。いざ中に入ってみると、環境防災科の専用の部屋があり座布団のゲームをしたのを覚えている。一番の決め手は、先輩が将来の夢について話していたことだ。消防士のことについて話していてしっかりと夢へと進んできているなと思った。こういう環境で学ぶことは大切だと思い、今の考えでは将来の夢がかなわないと思わせられた。

一般入試の勉強と推薦入試の面接・小論文の練習はとてもきつかった。僕の学校からは、初めてだったためどんな質問がされるかはわからなかった。先生や親が必死になってサポートしてくれたおかげで、無事合格することができた。

(2) 入学

三年間、環境防災科で学んできたことを、これからは周りの人に伝えていきたいと思った。環境防災科に入る前は、家族との会話は少なかったと思う。だが、環境防災科で実際に体験的な学習や話を聞くことで、家に帰ったら話したいと思う気持ちになって、母に自然と話すようになった。実際僕の家では、災害に対して無関心だった。だが、カンパンや保存水などの日にちのもつ食べ物を備蓄するようになった。命を守るためのことを教えてもらった。とても感謝している。卒業したら関係ないとは思わずに知っている人にも聞いてもらいたいと思う。

(3) ボランティア

今までたくさんの経験をしたと思う。普通科や違う高校に入っていたらできなかっただろう。僕は、東北被災地支援ボランティアや熊本地震のボランティア、地域のボランティア等と色々な活動をさせていただいた。

ボランティアは私にとって人の役に立つことだけだと思っていた。だが、祭りなどのボランティアに参加させていただいたときに、地域の人に「一緒に楽しみましょう」って言われました。僕も楽しんでいいのかと思った。その言葉をいただいて、楽しみながらお手伝いをさせていただくうちにいろんな方からお話ししていただき、日常の話も聞かせてもらうことができた。

特に印象に残っていることがある。熊本でのボランティア活動だ。私は、地震発生後の街の姿を初めて生で見た。普段防災を学んできていたが、それが活かされるのか、自分が行っても意味があるのかという感情になった。初めからナーバスな気持ちになったが避難所のおばあちゃんたちとお話をしているときに、1人のおばあちゃんが「自分の孫みたい」と言ってくれた。その時、自分ができることは微力だが無力ではないと思った。自分は高齢者や小さい子供たちと遊んだりすることが好きだ。こういった得意であることを自分なりに頑張っていることができた。被災した方に、逆に力をもらってしまった。復旧、復興に向かい、前を向いている人たちの力強さを感じた。

このような体験から、人の温かみを感じることができた。このような活動ができるのも周りの人のおかげである。これからもこのつながりを大切にしていきたい。

6 夢と防災

私の将来の夢は消防士になることだ。これは小学生のころからの夢だ。それまでの夢は、仮面ライダーになるや、水族館の館長になるなど、多くの夢を抱いていた。ころころ変わることが多かった。だが、あるきっかけで夢が決まった。あまり覚えていないが、小学生低学年の頃に身内が救急車で運ばれたことがきっかけだ。低学年だった私は、救急車の音におびえていた。だがその救急車から降りてきた救急隊員が懸命な処置で病院に運んでくれた。そのおかげで無事命は助かった。助かったときのうれしさと同時に、救急隊員にあこがれを持った。

私は、予防に力を入れたいと思っている。災害時では、自助：共助：公助＝7：2：1といわれている。公助の割合が非常に低いことがわかる。だから自助、共助に力を入れたいと思っている。公助は、共助や自助では助け出すことができないところを優先できるような体制を作りたいと思っている。阪神・淡路大震災が起きた兵庫県は過去よりは災害に強い街になっていると思うが、災害はいつどこでどんなことが起きるのか誰にもわからない。環境防災科では、防災について学んできた。消防士になって災害が起きたら人命救助するのでは遅いのではないかと環境防災科に入ってから思うようになった。

消防士になったら、地域や学校訪問での防災教育などをしていきたいと思う。応急手当や煙体験などといった実際に体験して学ぶことで多くの人に興味を持ってもらえるような活動をしたい。予防課に入り、環境防災科で学んできたことと消防士としての知識を絡ませた防災訓練を実施していきたい。

まずは災害に強い地域づくりをしたい。そこから僕が生まれ育った兵庫県を災害に強い街へとしていきたいと思う。

この思いを母や父に伝えると、非常に喜んでくれた。自分のことを応援してくれる。だから、期待に応

えるように頑張りたい。

7 感想

私は、防災を学んできて多くのものを得た。だから、防災を学んでない人よりすごいという過信をしてはいけないと思う。今回私が語り継ぎをしてもよいのか？と思わされた。阪神・淡路大震災を経験していない世代だからである。はじめはそう思っていた。だけど、環境防災科に入り防災や減災について知るだけではなく、実際に自然災害がどれだけ社会に影響を与えているのかを見ることにより、自分の感情を出したいと思うようになった。

大きな地震の被害にあったことのない私たちはこの経験から未来に起きるといわれている南海トラフ地震などからどう助かるか、この経験を活かせるようにしなければならない。阪神・淡路大震災などの過去の教訓から若い世代がどう災害に向き合っていくかで今後の日本が左右される。

私は、風化させないように色々な活動をしたい。私の地域でも阪神・淡路大震災の教訓から活動しているので地域の活動に積極的に参加していきたい。自分の知識を共有しいろいろな意見を聞きたい。災害に強い地域になってほしい。

最後に、環境防災科に入って最高の仲間に出会うことができた。本当に感謝でしかない。行事のクラスの団結力は学校一であると自信が持てるくらいだ。熊本地震支援ボランティアにクラス全員で行けたことも大切なことである。実際に感じたことをこのクラスなら本音が言える。みんな考えてくれる。仲間思いのクラスである。このメンバーで防災を学ぶことができてよかったと思う。将来みんないろいろな職業・大学に進んでいくので、その仲間とのつながりを大切にしていきたい。

父と母の経験

片山 柚希

1 はじめに

私は、阪神・淡路大震災を経験していない。大きな災害に遭ったこともない。だが、私の住む長田の町が、阪神・淡路大震災によって大きな被害を受けたことは知っている。

小学生の頃から、阪神・淡路大震災や長田の町の被害について、学習してきたからだ。中学3年生のときに「全国被災地中学生サミット」に参加させていただいた。このサミットに参加させていただき、さまざまな被災地の中学生の想いを聞いたことが、防災を深く学びたいと思ったきっかけの一つだ。

阪神・淡路大震災で被害の大きかった長田の町に住む一人の地域住民として、環境防災科の一員として、知らないことを語り継いでもらい、知っていき、語り継いでいくことが必要だと思う。その第一歩として、被災経験のある親から当時の話を詳しく教えてもらうことにする。

2 被害状況

	長田区	神戸市
死亡者数	921	4,571
全壊棟数	15,521	67,421
半壊棟数	8,282	55,145
火災総数	27	175

(<http://www.city.kobe.lg.jp/ward/kuyakusho/nagata/jyouhou/quake/quake03.html> より)

3 地震発生前

(1) 生活について

父は、灘区で一人暮らしをしていた。母は、長田区（長田港近く）で祖父、祖母、母の兄の四人で、文化住宅の二階で暮らしていた。

(2) 前日の様子

真冬の夕方にしては暖かく、夕食時は窓を少し開けて食事をしていた。震度1の地震があり「神戸で地震ってめずらしい。真冬ののに、やけに暖かいし、地震やし、なんか気持ち悪いな。」と話していた。約一か月前には、今まで出たことのないネズミが出て、気持ち悪く嫌な予感がしていた。

父は体調を崩していたため、灘区の家ではなく、長田区の母の家に16日から泊まっていた。

4 1995年1月17日午前5時46分

母の「地震！早く逃げて！」という声で目が覚めた。寝ていた場所が食器棚の前だったために、布団の上に割れた食器が散乱していたこと、突然の大きな地震に動揺していたこと、揺れが大きく普通に歩くことができなかったことなどが重なり、外へ逃げようとしたが難しかった。寝ていた場所から、家の外まで出るのに時間がかかった。

玄関を出てすぐに、揺れ戻しがあった。文化住宅の二階に住んでいたため、玄関前の柵に母とつかまり、しゃがみ込んで、大きな揺れが落ち着くのを待っていた。このまま死んでしまうのではないかという思いだった。

揺れが落ち着き、二軒北側にある幹線道路を出たとき、斜め向かいの木造二階建て住宅が崩れていた。その家の奥様のみが、台所に取り残されていると知り、父、母の父、兄は助けに行った。崩れた壁を持ち上げ、中に入った。奥様は台所で冷蔵庫と流しの間に挟まれた状態で亡くなっていた。奥様を見つけたときには亡くなっていたが、肌はまだ暖かった。即死だと思われる。

その時の空全体が、朝焼けなのかオレンジ色だった。今までに見たことのない空だったため、今でも忘れられない。

5 地震発生後の生活

家の隣の市立保育所へ避難した。自治会長さんが保育所の鍵を預かっていたため、自治会長さんの判断で、保育所を避難所として近隣住民と使用した。

避難生活三日後に判明したことがあった。それは、使用していた市立保育所が指定避難所ではなかったということだ。近隣住民は、保育所が公共の建物であるから、指定避難所になっていると勘違いしていたのだ。

指定避難所ではなかったことから、救援物資が届かなかった。避難を一緒に利用していた方が、校区の小学校へ救援物資を分けてもらえるようお願いに行った。保育所に約 150 人が避難していることを伝えるも、指定避難所である小学校へ移動してほしいと言われた。だが、保育所には年配の方が多く、人があふれかえっている小学校へ移動してきても、生活する場所がないことを伝えたと、保育所を避難所として認めていただけた。認めていただけたことから、救援物資が届くようになった。

地震発生から数日経ってからこの保育所に子供が通っているという理由で、避難してきた家族がいた。この家族は、物資を保管してあった調理場奥の二部屋のうち一部屋を使用したいと言い、引き下がらなかった。この二部屋のうち一部屋は、当日亡くなられたご遺体を安置していた。遺族の方もおられた部屋だった。家族は二部屋のうち一部屋を使用した。使用し始めた二日後、急に避難所を出て帰宅した。家族が避難所を出た後、保管していた救援物資のカップ麺や飲料水が十数人分なくなっていたことがわかった。この家族が食べたのかなどはわからない。

地震発生翌日、父の友人と連絡をとることができた。救援物資がないことを友人に伝えたと、友人の会社の社員全員でおにぎりを作り、カップ麺を買い集め、届けてくれることになった。友人は岡山を、父は長田区を出発し、携帯電話で連絡を取り合いながら、会える場所まで行くことになった。同じ時間車を走らせるが道路が渋滞していたため、会えた場所は舞子駅南側だった。たくさんのおにぎりやカップ麺を受け取り、長田区の避難所へ急ぐもなかなか車が進まず、避難所に帰ってきたのが深夜だった。

母の従兄は東京に住んでいた。神戸が大変なことになっていることを知り、地震発生当日すぐに、新幹線に飛び乗り神戸に向かうも、新大阪止まりだった。新大阪から JR に乗り換えようとしたが、全線運休のため新大阪から徒歩で長田区を目指してくれた。長田区へ来る途中、あらゆる商店に立ち寄り、運べるだけの水を購入し持ってきてくれた。

ボランティアの方々が保育所を訪れ、豚汁を作ってくださった。すごく美味しかった。その時隣町から何か食べさせて欲しいと言う夫婦が保育所に来た。その夫婦は豚汁を食べ「まずい！こんな物食べられへん！犬のお前が食べとけ！」と言い、その夫婦の飼い犬に豚汁を食べさせていた。ボランティアの方々はその場にいなかったが、一生懸命にとっても美味しく温かい食事を作ってくださった方々のあたたかく優しい心の反面、作ってくださった食べ物を「まずい！食べられへん！」と言う、非道な心に直面し、怒りを覚えた。その出来事がすごくショックだったことを今でも鮮明に覚えている。

地震発生約一週間後に「病気の方はいませんか？なにもできませんが処方薬を持ってきました。いる分だけとってください。」と言う男性の方が来られた。その男性は京都の病院から来てくださった方だった。数時間後、同じように処方薬を持って女性の方も来られた。避難者それぞれ体調が違うので、安易に薬を受け取れないことを気遣ってどの人にもよく処方される風邪薬を置いていかれた。その方々が帰り際に「まだまだつらい生活は続きますが、体調には十分気を付けて、笑顔で生活してくださいね。」と言われた。このあたたかい言葉が、心をあたたかくしてくれて嬉しかった。

自衛隊の方々が給水車で水を運んでくれた。給水だけでなく、母や父が仕事で家を離れていて母の母しか家にいない時には、給水した水を家まで運んでくださった。この自衛隊の方々は熊本から来てくださった方々だった。近畿地方の自衛隊の方々が来てくださっていると思っていた母は、驚いたのと感謝の気持ちでいっぱいになった。

両親とも一週間程度、会社を休んだ。会社は違うが、父、母ともに灘駅近くの職場に勤めていた。だが、JR が止まっていたため父は車で、母は自転車で通勤していた。父が当時勤めていた会社の仕事内容が冷凍設備会社であったため、企業、店舗などの冷凍設備の復旧作業に夜遅くまで追われていた。母は、空調設備代理店の事務職で、震災前とそれほど変わらない事務職をしていた。母は、会社に勤めながら避難所の掃除、避難所の名簿作成、救援物資の配布を手伝っていた。

6 地震が残した良かったこと、悪かったこと

(1) 良かったこと

近隣と協力し、地域が一つにまとまるできるようになった。また、災害に対する考えがいろいろと生まれた。災害に対する考えが生まれたことから、次に起こるだろう南海トラフ地震に向けて、準備ができるようになった。

(2) 悪かったこと

多くの犠牲者が出たこと。その中には、今もなお後遺症に苦しんでいる人がいること。区画整理が行われた地域においては、区画整理が行われたことで地域が分断され、以前のような近隣との関わりが薄れていったこと。

7 東日本大震災と熊本地震

(1) 東日本大震災についてどう感じるか

原発や津波によって、北から南まで広範囲に至るまで被害が起こった。津波の恐ろしさやすごさを感じるようになったことから、神戸での被害も考えるようになった。日頃から看板などで、海拔何mかを確認するようになった。

原発についての考え方が変わった。以前までは、必要なものだと思っていたが、原発が動いていなくても電力が賄えているので、必要はないと思うようになった。

(2) 熊本地震についてどう感じるか

震度7クラスの揺れが二度も起こったことから、今後どのような形で地震が起こるのかわからないと感じるようになった。日本全体が活火山であると思うぐらいの心構えが必要であると思うようになった。

熊本県の自衛隊の方々に支援していただいた恩返しを、自分の代わりに娘が被災地の熊本へ行き、支援活動をし、被災者の方の心に寄り添って欲しいと思った。

8 今、何を思うのか

(1) 復興について

一人一人が復興という定義をどのように捉えるのかによって、復興ができているかどうかは違いが出てくると思う。地震前の状況に戻ることはないので、変化しながら戻していくという考えでもいいのではないかな。

(2) 過去の長田と現在の長田

下町風情がすてきな町だった。商店街も趣があり昭和初期のなごりもあった。しかし、区画整理が行われて、近代的な集合住宅が建ち並び、人も入れ替わった。

(3) 地震を経験する前と後の心情の変化（地震に対して、命に対して）

神戸で大きな地震が起こると思っていたが、いつどこで起こっても不思議ではないと思うようになった。生きることについて当たり前のようには考えていたが、いつどのようにして突然命を落としてしまうかわからないので、一日一日を大切にしようと思うようになった。

心肺蘇生法の手順を知り、救命救急の講習を受け知識を持っていれば、助け出した被災者の命を助けることができたのではないかなと思うと残念でならない。だから、一年に一度小学校での簡単な心肺蘇生法の体験会に参加し、二度と同じような悔しい思いをしないように備えている。

(4) 今、自分にできること

いつ何時地震が起きても、どのように対処して家族と合流するのかを考えることや救命救急の講習を受けること。

(5) 防災教育についてどう思うのか

小さい頃からしっかりと教育しておけば、考える前に体が行動に移すことがすぐにできるようになると思う。東日本大震災でもすぐに高台に避難して津波から命を守ることが出来たのも、日頃からの教えがあったからだと思う。

(6) これからの生活

地震などが起こらないほうがいいが、起こらないという保障もないので、常に起こることを想像しながら、避難訓練を行う。家族との連絡方法や合流場所などを、しっかり確認しておくことが大切だ。

9 まとめ

(1) 管理栄養士と防災

私の夢は、管理栄養士だ。管理栄養士になって、スポーツの現場で選手を食事面から支えたい。大人になっても、小さい頃からしてきたスポーツに関わっていきたい。それを、仕事にできればやりがいがあるだろう。そう思ったからだ。環境防災科で学んでいくなかで、管理栄養士は三年間環境防災科で学んできたことを活かせる職業でもあると思うようになった。

被災地では、救援物資中心の生活になる。食事面でも救援物資中心の食生活になってしまうことになる。救援物資中心の食生活では、栄養に偏りが出てしまい、持病の悪化や体調不良を引き起こす原因にも

なりかねない。持病が悪化した場合も、体調不良になった場合も平常時の生活ならば、病院へ診察に行くことができるが、病院も被災している被災地では、そのように簡単に病院へ診察に行くことなどはできない。ならば、栄養に偏りが出ないように栄養バランスの良い食事を摂れるようにすればいい。そんな食事を提供できる人がいればいい。そのような人がいて、被災地でも栄養バランスのいい食事を摂れるようになれば、栄養面・食事面からの不安は解消されるのではないかと思った。そのような食事を提供できるのは、私が目指している管理栄養士だ。

管理栄養士として、スポーツの現場で選手を支えることが今の夢である。実際、管理栄養士としてどのような現場で働いているのかなど、なってみないとわからない。だが、どの現場で働いていても、管理栄養士としての知識を活かし、防災に関わっていきたい。大学で学ぶ、災害栄養の知識を活かし、防災食の開発にも関わっていきたいと思う。

(2) まとめ

環境防災科の生徒として、防災や減災を学んでいく中で、何度も感じたことがある。それは、私が防災や減災をやっているのかということだ。環境防災科の仲間と募金活動などを行っているとき「何もあんたらには、わからん。」「そのお金、あんたらで使うんやろ。」などと言われることがあった。そう言われるのが悔しかった。どれだけ、阪神・淡路大震災のことを知りたい、学びたいと思って防災や減災に取り組んでいても、すべてを知ることは不可能であって、その人にしかわからない辛さや悲しさ、想いがあることを突き付けられるようだった。それでも、防災や減災をやりたいと思えたのは、過去と同じ被害を繰り返したくないと思えたからだ。これから先も、被災者の方に寄り添えきれない部分がたくさんあるかもしれない。それでも、少しずつでも寄り添っていき、被災者の方が落ち着く場所になれると嬉しい。

今までも何度か話を聞くことはあった。だが、今回の話の内容の中で新しく聞くことがたくさんあった。このように、まだまだ知らないことはたくさんある。これまでの環境防災科での授業で知れたこと、まだまだこれから知っていくべきことがある。残りの環境防災科での生活の中で、どれだけ新しいことを知ることができるかはわからない。だが、新しいことを知っていく姿勢を忘れないでいたい。

環境防災科に入学し、人との出会いや関わりを大切にできるようになった。命がなければ、会うこともできない。たくさんの人と出会い、関わる中でこうして今元気に生きていられることのありがたさや、喜びを忘れてはならないと思うようになった。これから先、たくさんの人と出会い、関わることになるだろう。そのときに忘れたくないことは、出会えたことへの感謝だ。当たり前のことだが、命があることへの感謝と出会えることへの感謝を忘れずに生きていきたい。

語り継ぐ

金本 虎太郎

1 阪神・淡路大震災の概要

平成1年(1995年)1月17日5時46分、淡路島北部で深さ16キロを震源とするマグニチュード7.3の地震が発生した。この地震により、神戸と洲本で震度6を観測、神戸市や淡路島の一部地域では震度7に相当する揺れが発生し、甚大な被害をもたらした。気象庁はこの地震を「平成7年(1995年)兵庫県南部地震」と命名、政府はこの地震によって生じた災害を「阪神・淡路大震災」と呼称することを閣議了解した。この地震により6434名の命が奪われた。

2 震災当時の天気

震災発生が冬だったこともありとても寒い朝だった。最低気温1.4℃、最高気温は8.0℃だった。天気はおおむね晴れていたが、時折雪がちらつく時間帯もあった。地震発生の次の日、火災の影響で神戸海洋気象台(現在、神戸地方気象台)が煙霧を観測している。

3 震災発生時の行動(父)

(1) 直後の対応

父は兵庫県の加古郡にある工場で橋や船などを建設する重工業で働いており、震災当時は橋を建設、その管理をする仕事をしていたという。

阪神・淡路大震災の発生を知った後、急いで車に乗り会社に向かうと、皆事務所でラジオのニュースを聞いていた。当時、携帯電話はほとんどなく、あったとしても現代のスマートフォンのように高性能なものではなかった。そのラジオから橋桁の落下や倒壊の一報が聞こえてきたが、誰もその情報を信じなかった。日本の橋は設計の段階で想定される地震の何倍もの安全係数を加えた設計をしており、当然今回の建設も地震などのあらゆる自然災害が襲い掛かる想定をしたうえで設計をしていた。自分たちの設計に自信をもっていた社員たちは当然橋が破壊されるなど信じられる訳がなかったのだ。

父が働いていた工場は人工的に埋め立てられ造られた人工島にあるため、地震の揺れで液状化現象が発生し工場内はガタガタになった。水道管も破裂し水があふれ出た。このため、工場内の機械の多くは使用不可能となった。また、その日は出勤できない社員も多く、会社は臨時休業となり、多くの人は午前中で帰宅することになった。父は、会社に残る人のためにコンビニに食料を買いに行ったが、すでに食べ物ほとんど売り切れており、わずかに残っていた菓子パンを皆で分け合い食べていた。

(2) 会社・橋の復旧

会社ではまず2つのグループに分かれた。1つ目のグループは故障程度を調査し、修理・復旧する班。2つ目のグループは神戸の橋の損傷程度を調査しに行く班だ。父は1つ目のグループに配属され、工場での故障した箇所を調べ、修理の計画を立てる仕事に就いた。修理には優先順位をつけ、重要な機械から仮復旧させていき、全部の修理が完了するまで数か月かかったそうだ。2つ目のグループでは、神戸の橋の損傷程度は調査するために現地に行く必要があった。しかし、地震後は鉄道などの公共交通機関は寸断されており、道路も車の通行規制の影響で車でも行くことはできなかった。現地に足を運ばなければ調査することもできず、復旧することもできない。そこで海のルートで向かうという提案があった。工場が所有していた小型のボートを使用し、工場のある加古郡と神戸の間を往復させた。そこからは徒歩でそれぞれの橋まで向かい調査した。通常、鉄道を使えば約1時間で着く距離をこの日は数時間かけて移動する必要がある。食事を買う場所もないので、調査する人は各自お弁当を持参していった。しかし、調査作業中に持ってきていたおにぎりを盗まれる人もいたそうだ。現在の状況から考えるとれっきとした犯罪だが、当時の被災地はそのくらい食べ物に困っていたことがわかる。

製作作業中だった明石海峡大橋は、地震の地殻変動の影響により2本の主塔の間隔が1メートル長くなっていることが分かった。このため、中央で併合する橋脚ブロックをもととの計画より1メートル長くすることにより解決することができた。このため震災前の明石海峡大橋の計画では全長3910メートルだったのが1メートル延び、3911メートルになった。この計画変更による安全面の低下には影響はないという。

工場ではこれまで製作してきた工事を一旦すべてストップさせ、震災復旧工事を優先させた。まずは公

公共交通機関である鉄道橋の復旧に取り掛かった。父は元町と神戸間にある神戸高速鉄道の橋桁の復旧工事を担当した。これまでの通常工事との違いは、とにかく早く復旧させる必要があるということだ。このため、会社ではどのようにしたらより早い復旧ができるかを考えた。例えば、材料はすでに購入している他の橋用の材料を転用したり、交代で休みながら日中だけではなく夜間も連続して作業を行ったりし、省略できる作業は極力省略した。同じ会社の関東の工場からも応援が来て、一緒に復旧作業を進めていった。鉄道橋がほぼ復旧した後は、道路橋の復旧を行った。倒壊した阪神高速道路3号神戸線だけではなく、神戸付近のほとんどの橋は損傷を受けていた。このため、道路の重要性や損傷の程度に応じて優先順位をつけて復旧を開始した。父はまずハーバーハイウェイの復旧を担当した。橋と橋のつなぎ目が損傷していたため、橋の端部を現場で切り出し、工場で製作した端部ブロックと交換するという作業を行った。切り出した寸法に合わせて新しい端部ブロックを製作する必要があったため、とても難しい作業であった。復旧工事の間、テレビやラジオで毎日、鉄道路線や道路の開通予定が報道されていたので、作業員一同それを遅らせることはできないという気持ちで仕事をしていた。

(3) 震災後の設計

阪神・淡路大震災を受け、全国の橋の設計基準が見直され、より地震に強い構造で設計・製作されるようになった。日本中のすでにある橋も、新しい設計基準のもとで、耐震補強工事が行われている。

父は最後に阪神・淡路大震災が発生していなければ、東北地方太平洋沖地震や熊本地震でより多くの橋が崩壊していた可能性が高いと言っていた。これは阪神・淡路大震災の経験によって新たに建築基準が見直された結果だという。このように日本の建築基準は世界で最も進んでおり、他の国々は日本の建築基準を学び、自国の基準として取り入れる国も増えてきている。日本の建築技術は災害のたびに強くなってきているといえるだろう。

4 発生時の行動（母）

(1) 直後の行動

母は高砂市に住んでいた。震災発生時は寝ていたが、背中の下が回るような感じがし、下から突き上げられる体感だったという。高砂市には震災当時震度計は設置されていなかったので詳しい震度はわからないが、母の話から震度4程度だったことが推測される。震度4となると眠っている人のほとんどが、目を覚ます。電灯などのつり下げ物は大きく揺れ、棚にある食器類は音を立てる。座りの悪い置物が、倒れることがあるほどの地震である。実際本棚から本が落ち、食器棚からもいくつか食器が落ちたそうだ。地震の揺れの長さは非常に長く感じ、今も忘れられないらしい。母は当時会社に勤めていたが、交通公共機関がとまっていたため会社を休まざるを得なかった。そのときテレビのニュースで阪神高速が崩壊しているのを見た。被災地は大変な被害を受けていることに気づいた。そこで、会社で被災した同僚に差し入れをすることにした。被災地ではライフラインが止まっているため、お風呂に入るのは難しいだろうと思い、水がいないシャンプーを差し入れすることにした。その同僚は震災後口数が少なくなり差し入れをすることは余計なおせっかいなのではないかと心配したが、とても喜ばれ、感謝されたと言っていた。

(2) ボランティア

母は仕事ができない間、ボランティア活動も行った。阪神・淡路大震災をきっかけに災害時に何か助けられることはないかと集まった人々、ボランティアという言葉が注目されるようになった。この年のことをボランティア元年という。母によると他県からもボランティアに訪れる人がたくさんいたと言っていた。しかしその多くは初心者であり、何をしたらいいのかわからない人もたくさんいた。母は会社の同僚にボランティア経験の豊富な人がいたので、いろいろなことを教えてもらった。母がしたのは鷹取中学校に炊き出しのボランティアだ。ボランティアをしていると様々な人がいた。中には順番を守らないで炊き出しを取りにいく人もいた。そのときボランティア経験の豊富な同僚のアドバイスを思い出した。「自分のしていることはいいことだとは思わない、相手はどのように思っているのかわからない」という言葉だった。この言葉を私が聞いたとき、「ボランティアはおせっかい」というひまわりおじさんの言葉を思い出した。ボランティアは相手に認められて初めてボランティアだということだ。炊き出しをして渡すときにありがとうと言ってもらえる事が一番うれしいと言っていた。これは相手の役にたっている実感が一番わかる言葉だからだと思う。

母はこの災害ボランティアを経験し、被災地の過酷な状況を経験した。長田地区は火災の被害が激しく、言葉も出なかった。もう20年以上昔のことになり、母の話もところどころ忘れていた部分もあったが、話を聞くことにより当時のことを思い出すことができ、地震、震災の恐ろしさがよみがえってきたそうだ。母の話からボランティアの難しさ、重要さを改めて認識することができた。

5 私の夢と防災

(1) 私の夢

私には気象予報士の資格をとり、気象予報の仕事ができる会社に就職する夢がある。

(2) その夢を持つようになったきっかけ

気象予報士になりたいと思い始めたのは私が幼稚園児だった頃である。幼い頃から日本地図を描くことが好きで、ほぼ毎日のように日本地図を描いていた。ある日ニュースを観ていたとき、天気予報のコーナーになり、テレビの画面に日本地図が出ていることに気づき、その日以来毎日のように天気予報を観ることになった。このときはまだ天気についてはあまり興味を持っていなかったと思う。卒園式の日は大雪だったことを覚えている。その当時私は、普段降らないこの地域になぜこんなに雪が降るのだろうと疑問に思った。そして、その日の夜いつもどおり天気予報を観ていると、「今日は南岸低気圧の影響で近畿地方の広い範囲で雪となりました」とテレビの画面から聞こえてきた。私はそのとき、今日の降雪の原因は南岸低気圧だったと知った。それと同時に、普段空から降ってくる雨や雪などの降水現象のメカニズムについて興味を持つようになり、自分で天気図を作成したり温度計などで気象観測を行ったりし、気象学について深く興味を持つようになった。小学生になり友達や先生から天気予報を聞かれるようになり、毎日のように学校で天気予報を発表していた。人に伝えるようになったと同時に間違った情報は教えることはできないという思いが強くなり、もっと天気について詳しくなろうと思った。その日から天気の本を愛読していた。小学校5年生のとき2分の1成人式というものがあり、そのときに自分の好きなことを発表するという時間があつた。そのとき私は初めて教壇に立ち黒板を使って、西高東低の冬型の気圧配置について説明した。このときとても楽しかったことをよく覚えている。このあたりから、気象予報士という資格があることを知り始めた。中学生になり、気象予報士の試験を受けたいと思い徐々に専門知識を学習するようになった。高校生になり防災を学ぶことができる機会が多くなったことで、気象災害と防災について深い関係があることに気づいた。このように、この夢を持つようになった幼稚園児のころから今に至るまで気象に関係する仕事に就きたいことは変わっていないが、気象に対する考え方は深いものになっていった。

(3) 気象業界における防災の位置

気象と防災という位置関係は真横にあると思う。気象庁では気象・地震・火山などを含め災害から身を守るための情報を「防災気象情報」と呼んでいる。私たちが一般的に防災と言われ思いつくのは、防災グッズの準備や避難経路の確認、家具の固定など、いつ来るかわからない災害に対して備えることだろう。しかし、気象業界で防災と呼ばれるのは観測された気象データから数値予報で今後発生される現象を予測し、すぐそこに差し迫った災害を未然に警告することだ。災害につながる現象に対して事前に予測する点は、非常に重要な防災といえるだろう。

(4) 気象業界からの防災の広め方

私が気象業界に進むことによってどのように防災を広げていきたいか。気象業界は防災と深いかかわりを持っているが、市民の防災意識からすると、地震や津波、火山災害などは発生頻度が低いものの、広範囲で被害をもたらした過去の災害などがニュースとして取り上げられやすいことなどから防災の意識としては高い傾向にあると思う。しかし、気象災害においては毎年のように発生しているにもかかわらず、範囲が狭いことやそれほど甚大な被害が発生することはまれであることなどから、防災意識は低い傾向にある。近年は、地球温暖化の影響もありシビア現象が多発している傾向がある。その中でも局地的短時間に降る局地的短時間大雨（ゲリラ豪雨）は発生頻度が高くなっている傾向がある。また、海水温の上昇に伴い台風の大規模化や強い台風が発生する可能性が高くなっている。このように、気象現象がシビア化する中で、気象業界からの防災意識向上を呼び掛ける取り組みは、今後発生する気象災害による被害の軽減に大きくつながるのではないと思う。住民に対しての取り組みも重要なことだが、行政に対しても気象に関する知識は重要になってくる。警報・注意報を発表するのは気象庁の仕事だが、避難準備情報、避難勧告、避難指示を発令は各自治体の判断である。この判断は非常に難しいものであり、しっかりと知識がなければ適切に発令することができなくなり、住民にも大きな被害を出すことになる。そこで、しっかりと知識を持った気象予報士が配置されていることによりそのようなエラーは減少し、被害軽減につながるのではないと思う。私は気象予報士の国家資格を取得し、気象現象の防災をしていきたいと思う。気象予報士の合格率は約5%ときわめて低い。学科試験（一般知識、専門知識）と実技試験にすべて合格しないと行けないのだ。そのためにも、しっかりと防災・気象学について学び、将来に向かって進んでいきたい。

6 感想

今回、父母に阪神・淡路大震災当時の話を聞き、二人とも被災者の役に立てるような仕事やボランティア活動をしていたことがわかった。特に父は交通にとって非常に大切な橋を直す仕事をしていたと知り、神戸の復旧、復興に大きく関わってきたと思うとすばらしい人だと思った。また、阪神・淡路大震災をきっかけに、橋の耐震設計が新基準となり、より自然災害に強い構造になっていることも初めて知ることができた。これらの知識は学校では習うことができないため、非常にいい話を聞くことができたと思う。後半で述べたように私の夢は気象関係の仕事に就くことである。気象と防災は欠かせない関係である。私が高校で学んできた防災の基礎知識とこれから学びたい気象の知識を組み合わせることにより、気象現象だけを予測するのではなく、その現象によって引き起こされる気象災害の予測をすることが可能になると考える。この防災気象を今後発信し、気象災害に伴う被災者を少しでも減少させることを目標に頑張っていきたいと思う。

さらに向こうへ

河越 悠太

私は、阪神・淡路大震災以降に生まれた。大きな災害を経験していない私には、自分の体験を語り継ぐことはできない。従って、両親から聞いた話を語り継ごうと思う。

1 概要

それは、寒い冬の早朝の出来事だった。1995年（平成7年）1月17日午前5時46分。淡路島北東部を震源とする、兵庫県南部地震が発生した。地震の規模を表すM（マグニチュード）は7.3。最大震度は7を観測した。死者6,434人、行方不明者3人、負傷者43,792人、全壊約105,000棟、半壊約144,000棟、全半壊合計約250,000棟という大きな被害をもたらしたこの災害は、阪神・淡路大震災と呼ばれる。

2 震災の記憶

（1）1995年1月17日 早朝 母

震災当時、私の母は三木市に近い西区の実家に祖父・祖母の3人で暮らしていた。母には兄がいたが当時、家にはいなかった。1995年1月17日午前5時46分、母は2階で寝ていて突然突き上げられるような振動と横揺れに襲われた。小窓に飾っていたガラスの小物は床に落ち、こなごなに割れてしまっていた。揺れが収まったので下に降りてみたところ、食器棚にあった食器は落ちて割れていて、テレビなどの家具も元にあった場所から移動していた。しかし、両親は2人とも無事であった。その後、兄も無事なことが分かった。そのことは、不幸中の幸いと言えるだろう。

（2）母の記憶

母の場合は、家が倒壊するなどの大きな被害は出なかった。母の実家は断水がしばらく続いたので、水に少しだけ困った。お風呂に入ることができなかったため、給水車に水をもらいに行ったり、小野にある親戚の家にお風呂に入らせてもらいにいったりした。母は、1994年の年末に仕事を退職していたため、公共交通機関を使うことはなかった。しかしテレビを見てみると、電車は再開していたにも関わらず途中で停止してしまい、線路の上を人が歩いている光景を見た。また、長田区が燃えている様子や、家が倒壊し潰れてしまっている様子など、悲惨な状況が映されていたのを覚えていたと母は話してくれた。

（3）1995年1月17日 早朝 父

震災当時、父は垂水区の実家に祖父・祖母の3人で暮らしていた。1995年1月17日午前5時46分、父は実家の2階で寝ていたところを激しい揺れに襲われた。細かい揺れから激しい横揺れになった時、咄嗟に仰向けで寝ていたのをうつ伏せに変えた。手足を大の字に広げて、必死に揺れに耐えるためだ。布団に乗った体が畳の上を右往左往したことを今でも覚えている。しばらくして、揺れが収まって急いで1階の祖父母の無事を確認しに下へ降りた。家の中は、棚の物が少し落下していたが、それほど散乱していなかった。しかし、一部のドア等が最後まで閉まらない、または、閉まりにくくなっていた。外に出てみると、まだ薄暗く火災発生時に出るような黒い煤・白いほこりのようなものが空気中を舞っていたのを覚えていた。しかし、近所で完全に倒壊した家は見当たらなかったようだ。

（4）父の記憶

地震発生翌日から、父には会社の出勤要請があった。公共交通機関は動いてないので自身の車で出社したが、勤務地の神戸駅前までに片道4時間以上もかかった。父と母は会社で出会い、母は結婚したため退職していた。ところが、会社の要請で1週間弱ほど請求事務作業の応援で出勤せざるを得なかった。神戸市営地下鉄の大開駅近辺の道が少し陥没していて、車が斜めになりながら走行したり、長田・鷹取付近は住宅の倒壊や火災で行き止まりが沢山あったりと、迂回ばかりだった。鷹取から東は建物やビルそして線路など全てがぐちゃぐちゃだったようだ。事務所はビル6階なので机、棚、パソコン等が散乱していた。しかし、帰りの時間も考慮しなければいけなかったので、1時間ほど片づけただけでまた4時間以上かけて帰った。断水のためトイレが流せないなのでバケツに水を入れ、エレベータが使用禁止なので階段で6階まで何往復もしたのがきつかったと話す。

電気の復旧は早かったが、ガスと水道の復旧には二週間ほどかかっていた。水道が使用できる家の前に無償で「水道出ます。みなさん使ってください！」の表示があり感動したのを覚えている。水道の影響のため、お風呂に入ることができなかったのも、加古川の親戚に一度入れさせてもらいに行った。震災から数

日間は信号機も作動してなかったが、交差点など譲り合いでスムーズであった。交通事故など無かったような気がする。震災時に、みんな助け合い・思いやりが自然に出ていた場面の一つだと感じたそう。

父は地震が発生するまでグループ会社の銀行でサッカーをしていた。しかし、地震で銀行のグラウンドやそのグラウンド・空き地は全て仮設住宅用地になり、それからサッカーは一度もしていない。

地震発生から1週間後には、結婚式後に住む予定だった現在住んでいる西区の家の復旧作業が完了した。2月から父と母は、その家で生活がスタートすることができた。結婚式場の舞子ビラも復旧作業が完了し、5月4日に結婚式を挙げた。元々は、3月19日に舞子ビラで結婚式を行う予定だったが、地震によって延期せざるを得なくなってしまったのだった。

根こそぎ倒れてしまったビル・阪急三宮駅の崩壊寸前の様子・押しつぶされたフロア・阪神高速道路の横倒し。これがもう少し遅い時間で多くの人が動きだした9時前後だったらと思うと、予想することができない死者・行方不明者の数とその安否確認にすごい時間かかっただろうと思う。

私の姉は、1996年1月17日生まれ。もう1年遅かったらと思うと・・・と父は話してくれた。

3 両親の話を聞いて

今まで講義や語り部さんのお話で、たくさんの語り継ぎをしていただいていた。また、ビデオの映像などを見て地震の様子を見せていただいた。そこでのお話は確かに強烈な印象を残すものばかりだった。例えば、北淡町での米山先生のお話などは今でも衝撃的だったのを覚えている。しかし、今回両親から阪神・淡路大震災の話を聞いて、初めて知ることが多かった。それは、本当の近所・馴染み深い地域での経験であったからだ。なじみ深い地域での出来事は、やはりよく知らない地域よりも驚きや衝撃も大きかった。

その話してくれた中でも一番強く感じたのは、この地震は本当に多くの物を奪ってしまったということである。多くの人の命、建造物などを奪ってしまったが、父にとってそれはサッカーであった。成人しても、会社に勤めていても続けていたくらい好きだったのだと思う。そのサッカーをする場所、時間、コミュニティ、もしかすると仲間も奪ってしまったのかもしれない。このように、地震は父にとってかけがえのないサッカーとの関わりを絶ってしまった。

私の家族の周りの方々は奇跡的に全員無事で、両親は共に人をなくす経験はせずに済んだ。本来は喜ぶべきことだ。しかし、このことが家族の防災意識の薄さに繋がっているのではないかと感じてしまった。あの時は、確かに近い人はだれも亡くならなかった。しかし、次はどうなるか誰にも分からない。両親の話聞く限りでは、今現在住んでいるマンションには地震の後から住み始めたということだった。このマンションも、もしかすると私たちが住んでいる階だけ潰れてしまうことだってあるかもしれない。ちょっとした備え不足で、家族全員が窮地に陥るかもしれない。そんなことが決してないように、1995年のあの日までは考えもしなかったであろう、“備え”を家族でしようと思う。このように、父母から震災の経験を語り継いでもらうと同時に、私たち家族の防災力が少しは養われたのではないかと感じる。

そして、改めて私はこれからも忘れないでおこうと思う。いつも当たり前のように共に過ごしてきたが、私たちを育ててくれているのはあの地震を生き抜いた尊敬すべき人たちであることを。

4 舞子高校環境防災科

(1) きっかけ

舞子高校環境防災科は、全国で初めての防災専門の学科だ。現在では、宮城県多賀城高校に災害科学科が設置され、高校生で防災を専門的に学べるのはこの2校だけである。では、なぜ私が、舞子高校環境防災科に進学しようと思ったのかというと、母に勧められたことがきっかけである。消防士になりたいという夢を持っていた私に、災害に対する防災の知識が身につくこの学科はぴったりだと感じた。あの時勧めてもらえていなかったら、災害の本当の恐ろしさを知らずに今も過ごしていたかもしれない。そう考えるだけでも恐ろしいことだ。

この環境防災科に入学し防災を学ぶまでは、防災に対して知識は全くなかった。しかし高校生になるまでに、防災に関心を持つようになった3つの出来事がある。

1つ目の出来事とは、東北地方太平洋沖地震が発生したことだ。2011年3月11日に発生したこの地震は当時、テレビでも報道されていた。しかし、あまりの規模で映像を見ても現実味を感じなかった。そして、これがどこでも起こりうるという事実を受け入れられなかった。その後、死者が多数出たことや、津波による被害が多かったこと、福島原発の問題等影響が様々出ていることを知った。この地震は、私が初めて目撃した大規模災害であり、とても衝撃的だったことを覚えている。

その東北に、私は3年生になってようやく東北被災地訪問として行けることとなった。最初で最後の東北訪問であるが、行かせていただけることに感謝しようと思う。後に紹介する平成28年熊本地震被災地支援活動で見た熊本の6年後の姿も、想像しながら今の東北の姿をしっかりと目に焼き付け、記憶に刻み込もうと思う。

2つ目の出来事とは、私たちの先輩にあたる環境防災科の方々が私の中学校に出前授業をしてくださったことだ。当時私は、中学1年生だった。その光景は今でも鮮明に覚えている。自分たちと歳があまり変わらない人たちが、前で堂々と喋る姿に強い感銘を受けた。彼らの話を聞いていると、自分が目もくれなかった防災にとっても真剣に取り組んでいる方がいることを知った。同時に、今までの自分が恥ずかしくなった。それは、他人事と思っていた非日常はいつもすぐそこに迫っていて、日常を脅かし得るのだと気づかされたからだ。後に私は、彼らが舞子高校環境防災科の生徒であることを知り、この出来事は、防災に対する興味や関心を持ち始めるきっかけの1つとなった。

3つ目の出来事とは、中学生の時に震度3程度の地震が発生したことだ。震度3というと、兵庫県南部地震や東北地方太平洋沖地震、平成28年熊本地震等に比べると大きくはない。しかし、そのような地震を経験していない私には、この震度3の地震はいろいろな意味で衝撃的なものだった。

この地震は、中学2年生の授業中に発生した。突然の初めて感じる揺れにより、この後大きな地震が来るかもしれないと思い、周りにいた生徒も一瞬パニックになるかと思われた。だが、次の瞬間驚くべきことに、私を含めるクラスメイト全員が机の下に素早く隠れたのだった。考えるよりも先に体が動いていたという感覚であった。その速さは、今でも忘れられない。“平時から素早く机の下に隠れる”という訓練はしていたわけではなかった。この体験から、避難訓練や防災訓練をしないよりかは、したほうが良いのは明らかだった。また、この地震により「自分が住んでいる地域に地震なんか起きないだろう」という甘い考えはなくなった。

(2) 環境防災科としての3年間

環境防災科では、カリキュラムの3分の1が防災の専門科目である。その授業の内容を知ったときは驚いた。座学として防災を学ぶだけでなく、外部講師の方に来ていただいてお話を聞かせていただいたり、外部の施設の見学をさせていただいたり、授業を返上して現地に行ったりすることもあった。

私は、この学科で多くの経験をさせていただいた。やることなすこと全てが初めての体験であった。その活動を簡単に振り返ってみる。1年生では、外部講師の方々の講義を受けることが主だった。この1年間で、災害に向きあうための基礎知識を培うことができた。2年生になるにつれて、授業内容が徐々に活動的、体験型になっていった。その例としては、六甲山フィールドワークなど挙げられる。ここで、調査力等の力も身についた。3年生では、今までの集大成としてそれぞれの進路と防災を関連させ、かなり専門的な内容も加えて学ばせていただいている。

私の高校生活の3分の2は部活と勉強に取り組んだ。勉強では、より良い大学に進むために定期考査に励み、部活動では、チームで掲げた目標を達成するためにテスト期間も活動した。充実した2年間だったがやはり、悔いが残る。それは、環境防災科に進学するときの目的の一つであった「多くのボランティアに参加すること」ができなかったことである。たびたび、部活や勉強の合間を縫って募金活動や地域のボランティア活動に参加できた。しかし、クラスメイトに比べるとその回数は雀の涙ほどであった。その悔いを3年生の夏、私は晴らそうとがむしゃらにボランティア活動に参加している。どうか後輩たちには、その悔いを残さないように上手に参加してほしい。

(3) 熊本被災地支援ボランティア

そのような濃い3年間で過ごした中でも、最も活動的で印象的であった活動がある。それは平成28年熊本地震被災地支援活動を行い、現地に行かせていただいたことだ。この活動は環境防災科13期生～15期生の全員が参加することができた。4泊～5泊の中での活動で、それぞれがいろいろな思いを持って活動した。不幸なことに、他の学年が多く活動できたのに対し、私たちの学年は豪雨の影響で、たった1日しか活動することができなかった。初日の悔いを次の活動の力にしよう。そう思っていた次の日に警報が発令され、そのまま最終日まで私たちはボランティア活動をすることはできなかった。確かに、1日の活動だけで納得がいく生徒は少ない。「ここまで何をしに来たのだろうか」という無力感を訴える生徒が多かった。しかし、私は「1日も活動することができた」と思うようにした。「この活動は地域の募金活動で募金してくださった方々のように、行きたくても行けない方々の代表として参加させてもらっている」そう思うことによって現地にいることにも感謝することができた。この活動を振り返ると、自らの無力感を知ることとなった活動だった。学生の私たちには、やはり限りがある。その限りの中で何ができるのか。結果的に、クラスメイトと悩みに悩んでたくさんの方々の協力を得て最後まで活動することができ

た。この活動は、私の人生の中で忘れられない経験になるだろう。

5 最後に

(1) 私と夢と防災

環境防災科卒業後私は2つの夢を叶える。

1つは、国語科の高校教員になることである。私は、環境防災科に進学する前も進学した後も消防士に憧れてきた。南海トラフ巨大地震は私たちが生きているうちには起こると言われている。その南海トラフ地震時にこの環境防災科の思いを背負う一員として、まずは自分が生き残り、そして神戸の役に立ちたいという意志で目指していた。しかし、東北訪問に3年生で初めて参加したことによって私は防災における学校の役割の重要性に気づいた。教員は、災害時多くの生徒の命を任せられ、避難所になると地域の人々の統率をとることも必要となるように、消防士以上に密接に地域の人と関わることができる。私はそういった災害時に、環境防災科で培った知識を活かしていきたいと考えている。日常時においては、高校生だからこそ持つことができる「発想力」を授業の中で最も、考えたり・表現したりする機会が多くある国語科で、さらに豊かにし、人に伝えられるように指導できる教員になりたいと考えている。その考える力や表現する力は災害時にはもちろん、社会に出て多種多様な職に就いても必ず必要となってくる力である。加えて、災害時にリーダーとなることができる高校生が防災を学ぶ支えになったり指導したりすることにも取り組みたいと考えている。

もう1つは、防災を担う一員として、教員として環境防災科に戻ってくることである。私たち環境防災科生徒は、多くの先生方に支えられて、今の活動が続けられている。私もその一員となって、教えられる側から教える側になって帰ってきたいと考える。そうすることで、今まで私たちに語り継いでくださった皆様の意志を繋げる事ができるのではないかと、私たちに防災を1から教えてくださった方々への恩返しになるのではないかなと思う。

(2) さらに向こうへ

我々が住んでいる神戸には、南海トラフ巨大地震による被害が懸念されている。また、首都の東京には南海トラフ巨大地震だけでなく、首都直下地震による被害も懸念されている。よって、これからの環境防災科にいる私たちには、“さらに向こうへ”進む必要があると感じる。

環境防災科は阪神・淡路大震災の教訓を語り継ぐことを目的に設立された。しかし、なぜ語り継いでいるのかという点に注目してみよう。私たちが語り継いでいるのは、震災を風化させないためだけだろうか。いや、それだけではないはずだ。経験を伝えるだけで終わってはならない。その教訓を次の災害で生き残るための力として、活かすこと。これも必要となってくる。実際、南海トラフ巨大地震が発生してどの教訓がどれほど活かされるかは分からない。「日常が非日常を支える」という言葉があるように、日常できないことは災害時でも出来るはずがない。

また、災害を完全に防ぐことは不可能に近い。したがって、災害が起きた後どうより良い街にするか、そのために自分は何ができるのか。被害を防ぐことや減らすことだけを考えるのではなく、その先のことを具体的に考える必要がある。

よって、私は備えにおいても、災害が起きてしまった後の復興においても“さらに向こうへ”という貪欲な意識をもって、自分ができることに取り組もうと思う。

語り継ぐ

黒田 恭平

1 阪神淡路大震災の概要

- ・阪神淡路大震災は平成 7 年（1995 年）1 月 17 日午前 5 時 46 分、淡路島北淡町野島断層を震源とするマグニチュード 7.3 の地震。
- ・阪神淡路大震災での死者 6434 人
- ・直接死（兵庫県）5483 人
- ・関連死（兵庫県）919 人
- ・行方不明者 3 人
- ・負傷者数 43791 人
- ・重傷 10683 人
- ・軽傷 33109 人
- ・避難者が多いときで 316000 人
- ・倒壊家屋閉じこめ者数 20 万人
- ・仮設住宅孤独死者数 233 人
- ・復興住宅孤独死者数 897 人
- ・震災孤児・震災遺児 573 人
- ・もし日中に起きていたら 1 万人の犠牲者（推定）

<http://shinsaihatu.com/data/hito.html#16>

2 祖父の阪神・淡路大震災の記憶

私は、阪神・淡路大震災を経験していない。だから実際に経験した祖父から当時の様子を聞き体験談を書こうと思う。祖父は神戸ではなく、大阪府吹田市で震災を体験した。同じ北摂でも豊中市などと比べると吹田市の被害は少なく、祖父の家も壁のひび割れ程度ですみ、建物倒壊情報の記憶はないそうだ。震災当日いつもより早く目覚め、再び布団に入ろうとしたときに激震が起こった。その場に四つん這いになり静止していたが頭は真っ白で、気が付けば頭の上の照明器具が大きく揺れていたのど落ちると危ないと思い、体を移動させたのが祖父のとれた精一杯の行動だったそうである。その時二階の床から一階の天井に水がこぼれ落ちる音がしたので、二階のトイレの排水でも壊れたのかと思ったが、一輪挿しの花瓶が倒れていただけだったので、ほっとしたとのこと。しかし二階では叔父が、机の上のガタガタ動くパソコンやプリンターを必死に落ちないように頑張っている様子だ。幸いケガ人も家具類の倒壊もなかった。すぐに被害情報を知ろうとテレビをつけたが、被害状況の詳細はまだ明確ではないものの、地震の大きさや被害の大きさが局所的にも知ることができた。

通勤のためいつもの駅に向かって歩いていると、前から歩いて来た男性が指をさし、電車が途中で停車しているのを教えてくれた。家に帰り、自転車で職場のある豊中市へと土手の上を走っていると、いきなり警官が現れて止められた。見るとそこには地面に亀裂が入り、一部がせり上がって、危険な状態になっていた。知らずにバイクや自転車が乗り込むと大事故になる状態だったようである。仕事場に入ると室内の本棚は倒れて書類などは散乱し、すべてのものが激震で移動や転倒をしていた。祖父は、神戸市魚崎にある協力会社へお見舞いと状況把握のために電話、ファックスをしたがもちろん返事はなく、神戸の被害がこれほどまでに大きいということは、その時にはわからず後で知ったそうである。その協力会社の親切で温厚だった女性社員が一人行方不明のままとなってしまった。また勤務先には息子さんが車の運転中に、阪神高速道路神戸線の倒壊で亡くなった方もいたそうだ。

祖父が震災前年の 12 月 28 日に仕事納めで神戸に出張した時、三宮はとても活気に溢れていた。年が明けて 17 日に悪夢が襲った三宮。その明るい歳末風景が、今も祖父の脳裏に焼き付いているとのことである。

3 中学の先生の体験

2 階で寝ていたら、経験したことのない揺れを感じ、さらに柱のきしみ音と共に、屋根瓦が落ちて割れる激しい音がした。揺れが収まると同時に 1 階に降りようとしたが、扉が開かずとなりの部屋を開けて行

こうとしたが、物は倒れまくっているし、ガラスも割れて散乱している中、無我夢中で1階に降りた。ケガをしなかったのが不思議なくらいだった。1階では、息子がまさに家を出る寸前だった。息子にとっては地震というのは初体験で、ガスコンロを消し、そしてテーブルの下にもぐり冷静だったらしい。台所は物が落ちて壊れ、破れ物で散乱していた。でも、息子はそろそろ行かないと電車に間に合わないと言った。

外に出てみると近所の人も出てきていて、みんな何が起きたのかと啞然としていた。ブロック塀は倒れ瓦の落下でひどい状況だった。電気、水道、ガスがとまり、何の情報もないまま時間が過ぎた。この段階では、大惨事にまだ気づいていなかった。学校に駆けつけようとしたが道路が通行できなくて帰ってきた。その後、近所で倒壊している家におばあさんがいるということで、僕と近所のひとや息子らで2時間ぐらいかかって救出した。さらに、こっちもあそこもと頼むと言われて計7人ぐらい救助した。電気はその日のうちについた。テレビで悲惨な状況が映っていた。それを見てやっと自分たちは大きな被害と思った。

3日後、息子の友達が須磨にいてテレビで見るとそちらの方は倒壊だらけ。よし行こうと2号線を自転車で向かった。途中大きな地震の亀裂がはっきり分かった。多くの人がバイクや自転車で走っていた。排気ガスだらけの中、ようやくたどり着くと家の上に家が重なり、何とか空洞をくぐり抜けてその子の家に着いた。無事だった。途中亡くなっている人も見かけた。自衛隊も警察も、消防も全く入ってきていないとのことだった。避難所となっている中学校も満員だった。この間何度も余震が襲ってくる。

その翌日、学校に行った。生徒たちはみんな無事で良かった。学校付近はほとんど何の被害も無かった。だから、体育館が避難所だが誰も来なかった。近くの人が車のプールの水で洗車に来ていたらしい。僕の任務がすぐに出た。太田中学の支援に行けである。無茶苦茶で大混雑の道を進み到着した。あふれかえってる避難者の数、あふれるほどの食料があった。仕分けする人も必死である。僕たちの作業は、グラウンドにプールぐらいの穴掘りだ。ゴミ捨て場、トイレの糞尿や紙おむつなどをすてるためのゴミ箱作り。掘ってるところにもどんどん捨てに来る。思わず放送室に行って捨て方の方法をアナウンスしたら早速クレーム。勝手に余計な指示を出すな。本部にだけ言いなさいとお叱りを受けた。なるほど指揮官がたくさんになると余計な混乱を生むと再認識した。ゴミ捨て場作成に小中学生も手伝ってくれ、思ったより早く、完成した。学校に戻れば、今晩は須佐野中学に行って昼間働いてる先生に休んでもらって、君がかわりをしなさいとの任務だ。もちろん、他校からも同じ任務の人と合流して、一晩中1000人はいるであろう人の管理の手伝いを行った。そんな日が二日おき、また穴掘りも不足したので追加した。自衛隊の人とともに給水や屋台を作って豚汁の配給のようなこともした。

傾いた阪神高速の下も何度も走り急病人を近くの病院にも運んだりもした。他には仮設の住まいの建設の手伝いも少しした。もちろん学校では授業も何時間かは再開した。一対どのくらいの日数こんな日が続いたか分からない。

4 自分の夢と防災

(1) 自分の夢

僕の将来の夢は銀行で働くことだ。この夢を持ったきっかけは3年間環境防災科で、一般の高校生がわずかしら学習しない内容を深く掘り下げて学び、防災にさらに興味を持ち、防災にかかわる職業に就きたいと思ったからだ。そして、あれこれ職業を調べていて、銀行の貸付業務に興味を持った。銀行というと利益追求のみで本当に困っている中小企業などには融資しないなど、経営的には正しいと思うが、あまり良いイメージがなく防災に関りがないというイメージがあると思う。しかしながら、銀行と防災には、かなりの関係性がある。銀行と防災のかかわりについて語り継ぐ前に、常識かもしれないが銀行の仕事の内容について説明したいと思う。

(2) 銀行の仕事内容

銀行の仕事の内容は大きく分けて預金業務と貸付業務、為替業務の3つがある。預金業務は銀行口座を通してお金を預けたり引き出したりするお客さんの預金を管理する業務である。貸付業務とはその名の通り、資金を必要としている人にお金を融資する業務である。そして、銀行はその利率をもらうことで利益を得ている。

貸付業務は、企業が事業拡大のための運転資金（経営を行うための資金）を確保するときや、個人が住宅を建てるために大金を必要とするときに、その資金繰りの土台を支える役割を果たしている。一方で、万が一にも融資先が倒産したり破産したりして資金を返せなくなってしまうと、銀行は大損害を被ることになる。バブルが良い例だと思う。そのため、融資にあたっては、金額や貸付の期間が妥当かどうか

の判断を含めて、銀行員の調査や審査がある。一般的には、銀行で事業資金貸し出しの審査は以下のような項目にそって、総合的に判断している。1. 財務内容（資金、負債の管理、資金の調達の内容）が健全かどうか。健全でなくても好転する材料があるかどうか。2. 融資希望額とその資金を何に使うのか。また、申込金額は今の状況からして妥当か。3. 今回申込みの事業資金融資金額はどのようにして返済するのか。事業資金の返済の確実性について見通しはどうか。

為替業務とは債権や債務の決済をするために振り込みや送金を行う業務である。このように一般の人たちの生活に深くかかわっているのが銀行である。この業務のなかで貸付業務が耐震と深くかかわっている。

（3）耐震と銀行

耐震は確かに地震の揺れに効果的で素晴らしい。しかし、耐震工事にかかなりお金がかかり、なかなかできないと思う。耐震工事にかかる値段は建物の大小でかわるが約 152 万であり、年代別の貯蓄額から考えても一度に払うのは一般のサラリーマンには無理があると思う。そこで、銀行を利用することで無理なく耐震工事をする事ができる。

年代別貯蓄額の平均値・中央値（参考）

20 代	貯蓄のない世帯 41.0%	平均値 183 万円	中央値 30 万円
30 代	貯蓄のない世帯 34.2%	平均値 415 万円	中央値 130 万円
40 代	貯蓄のない世帯 30.4%	平均値 615 万円	中央値 300 万円
50 代	貯蓄のない世帯 29.5%	平均値 1124 万円	中央値 740 万

<https://allabout.co.jp/gm/gc/18693/>

ある 2000 人を対象にしたアンケートでは耐震補強をしている回答者の割合は 5.3%であり、耐震補強工事をしていないと回答した 1,894 人に対して、その理由を尋ねたところ、「お金がかかるから」をあげた回答者の割合が 30.5%で一番高かった。次に多かったのが「めんどくさいから」。また、違うアンケートであるが 3037 万戸のなかで耐震改修工事をした住宅は 107 万戸で、持ち家全体の 3.5%となっている。

職業というのは、自分の生活を守るための方法であるが、人の役に立ってこそ人間の尊厳があると思う。人は人のために生きていますと僕は思う。あらゆる職業の人たちが一生懸命働くことによって今の自分たちの生活があると思う。だからこそ、自分も他の人のために努めたいと思う。そういうことから耐震補強をしたい人に協力したいと強く思う。また、周りで働いている人は防災について詳しくないと思う。だから、僕が防災の知識を雑談などの際に伝えることにより、地震が起きた際、周りの人の命を脅かす要因となるものは減るし、同様にその家族も安全になると思う。

4 感想

震災体験者はどんな辛い体験をしたのかわからないので、日頃、話を聞く勇気がなかった。「語り継ぐ」を作成することで祖父や先生の体験談を聞けて本当に良かったと思う。

地震は多くの人の命、大切な物を奪う。だから、それを守るために地震に備えることが大切だと考える。僕は、環境防災科に入って様々な勉強をして備えることの大切さを様々な分野の方々から教わってきた。しかし、備えたからといって 100%安全ではないと思う。絶対に安全と言われていた阪神高速道路が良い例だろう。僕は、備えることの目的は危険を減らすことであり、備えたからと言って安心してはいけないと思う。

「語り継ぐ」を書いて地域のつながりの大切を再確認することができた。外部講師の先生が、人は大切な人ほど、優先して助けると習った。だから、普段地域の人とつながることによって共助の関係ができ、助かる可能性が高まる。これもまた防災だと思う。

防災は、難しいことだけではなく日々の生活で挨拶をするなどちょっとした事の積み重ねも防災だということを学んだ。

卒業してもどんなところでも防災とかわかるとできると思う、これからも備えることを忘れず、安心しないように心がけて防災と関わりたいと思う。

語り継ぐ

桑名 布志子

はじめに

「阪神・淡路大震災」それは 23 年前に起こった大規模な地震である。早朝の出来事で、ほとんどの人は家で眠っていた。そのため多くの方が家屋の下敷きになった。その大地震は街を襲い、6434 名の命を奪った。その時、私はまだ生まれていなかった。その当時の話を家族や親戚から聞いた。

1 母の話

母は当時上京し、東京に住んでいた。「阪神・淡路大震災」の揺れは経験していない。その当時の東京での状況や神戸に帰ってきてからの状況を語ってくれた。

私はその頃東京に住んでいた。テレビのニュースを見て地震のことを知った。最初は何が起こっているのか全く理解できなかった。というより、信じられなかった。どこの国のどこの地方の話か分からないような感じだった。灘区の方の住宅や、ビルというビルがほとんど倒壊してぐちゃぐちゃになっているし、阪神高速はなぎ倒しになっている。そして長田の方は見たことないくらいの大規模な大火災だった。長田区の街ごとほとんど全域が焼け広がっていてそれは地獄のような映像で本当に信じられなかった。

私の実家は明石の方だった。地震直後、電話をしても繋がらず、家族の安否確認ができなかった。

数日後、やっと電話が繋がりが皆無事であることを確認した。家が半壊しており、余震も続いていた為、西の方の身内の家に避難していたことを聞き、私はホッとした。

神戸ではそんな大事になっているのに東京の人達は意外と普通だった。自分も当時、若かったのもそんな気がしていただけなのかもしれないが、自分の周りにいた人達の中には「実家とか地元の人は大丈夫？」と声をかけてくれる人もいた。だが実際その事に対してそこまで本気で考えてくれている人は少数だったような記憶がある。他県だから他人のことに思っているかもしれない。そして自分の気持ちに折り合いがつかなかったことを覚えている。気持ちに整理がつかず、仕事に行っても家族や地元の友達の事が気になる仕事を手につかなかった。JR も再開のめどがつかず高速道路も寸断されていたが、帰りたい気持ちでいっぱいだった。その状況が落ち着くまで数日間、帰る手立てなどなかった。1 週間か 2 週間経ってからバスで帰れる手段があると知り、大阪からバスに乗って神戸へと向かった。バスから見える風景はあまりにも悲惨だった。TV の映像で見ていたものよりもはるかに被害がひどく、ただただ驚きとショックで言葉もせず、思わず涙してしまった。そして大阪から明石の方まで通常だったら JR で、1 時間ほどで着くのに、その時は 8 時間くらいで明石の実家にたどり着いた。それほど瓦礫で道が塞がり、混雑していた。

明石の方はまだ被害がましだった。それでも実家は古かったので半壊になっていた。そして父は数年前からパーキンソン病を患い少しずつ体が弱っており、その病気がさらに悪化した。そういう父の姿を見て、大震災という現実とかけ離れた状況を目の当たりにした。自分は元々夢を追って上京していたのだが、一気に自分の夢の事などどうでもよくなってしまった。気持ちが冷めてしまったのだ。そう思い数日後に帰郷を決意し、3 月に東京の家を引き払って地元に戻ってきた。でも無職でいるわけにはいかなかった。ので職安で職探しをした。ご縁があり就職させていただいたところが長田区の鷹取にある高橋病院というところだった。そこは、周り一帯が震災で焼け野原となりその病院だけが唯一残っていたのだった。私が勤める 4 月の頃にはすでに焼け跡の建物はほとんど撤去されていたので、病院周辺の震災後すぐのすさまじい状況は見えない。そこで起きた惨状やその地域の方達がどんな思いをされたのか知らずに働いていた。働いていくうちに入院されている患者様方から震災時がどんなに大変だったかという話をいくつも聞かせて頂いた。辛い思いをされたはずなのにどこか勇気づけられ、「私も負けてられへん！」とはげまされた。ほんとに神戸の方たちは馬力があるなあといったそんな印象が残っている。実際、復興までの道のりが早かったように思う。

2 祖母の話

祖母は当時、中央区に住んでいた。その時の状況を語ってくれた。

家で寝ている時に、「ガタガタガタガタ」という大きな音が鳴り響いた。聞いたことのない大きな音と、大きな地響きで何が起きているのか分からなかった。寝ぼけて夢を見ているのか、なぜか戦争だと思っ

た。ベランダに洗濯機を置いており、それが右や左へ行き来して大暴れをしていた音だったのだ。そして家の中ではタンスやテレビ、仏壇や大きな冷蔵庫など何もかもが宙を舞い、家の中は一瞬にしてぐちゃぐちゃになってしまった。大きな揺れが止まってから外に出てみた。そしたら近所の人が居り、皆口々に「これは地震や！神戸に地震が来たんや！」と言っていたのを聞いて、そこで初めて大地震が起こったのだということを把握することができた。

飼っていた犬もおびえていた。元気を失い、だんだんそのまま弱っていつてしまい、暫くして死んでしまった。地震の影響で埋葬をしているところがあまりなかったので加古川にいる知り合いに頼み、後日埋葬してもらった。

余震がおさまらなかったのでもここにこのまゝいては危険だと思った。皆が避難所となっている近くの小学校へ向かうということを知り、私も向かった。けれども結局避難所でも落ちつかなかった為、もう一度家に帰った。電話もつながらず困っていた。そうこうしているうちに息子が垂水から迎えに来てくれた。車が通れる道が寸断されていたので垂水から三宮まで 8 時間くらいかかった。当時垂水の方の被害は少なかった。

私は困っている方々のために何か出来ないかと息子と話した。そして自分の車でたこ焼き屋をした。材料は被害が少ないところから取り寄せた。現在の須磨の水族館あたりでその屋台をした。食べてくれる方は皆笑顔だった。それを見て私も元気をもらった。

3 親戚の話

私は当時、明石に住んでいた。大きな揺れが来る前に淡路の方から「ゴォー」という大きな地響きの音が聞こえてきた。この世の出来事だとは思えなかった。怖かった。それが地震かどうかも分からなかった。まさかここにこんな大きな地震がくるなんて誰も思っていなかった。予期せぬ事態でもう死ぬかもしれないと覚悟した。神戸ではもっと怖かったのだろうと思った。

4 話を聞いて

話を聞いて、被害が少なかったところでもこんなにも苦勞をしていたということを知り、地震というものの本当の恐ろしさを身に染みて感じた。母は東京に住んでおり、地震そのものを経験した訳ではないが心に深い傷を負っている。それくらい地震というものは恐ろしく、軽く見てはいけないものだと感じた。経験していない母ですら、このような気持ちを抱いている。本当に被災し、家族や友人を失った方はもっと辛く、苦しい。そんなことにならないためにはもっと多くの方が地震という自然災害に目を向けるべきだ。だが、学ぶだけで本当に大丈夫なのかと聞かれるとそうではない。3 年間防災を学んできた私ですら分からないことはある。それをもっと日本全体で話し合うべきだはないかと思う。日本ではどこでも地震が起こるという基本的なことでもいいからきちんと皆が分かっているべきだ。そうでなければ、また阪神・淡路大震災のようなことが起こってしまう。それはその時のことよりも恐ろしい。

私は大きな地震を経験したことがない。だから想像がつかずとても怖い。

私は三人の方にお話を聞いた。家族でも一人一人経験したことは違う。一人一人生き方も違うし性格なども違う。だから自分に合った防災をすることも必要だと思った。例えば、非常用持ち出し袋の中身を工夫することだ。基本的なものは皆同じで良いが、個々でもまた必要なものは違う。眼鏡を必要とする人がいたり、赤ちゃんのおむつを必要とする人がいたりする。人それぞれ必要としているものは違う。自分に必要なものを用意することが大切だ。それが生命を守ることになる。私は、目が悪い。だから眼鏡が必要だ。非常用持ち出し袋には、コンタクトと眼鏡を入れている。これで目が見えなくなるという不安は取り除かれた。そして、非常用持ち出し袋は置く場所も重要だ。一般的には物置などに置きがちだが、それは災害時すぐに取り出せない。そうすると非常用持ち出し袋の意味がなくなってしまう。それは玄関に置くのが良いと言われている。もっとベストなのが複数の非常用持ち出し袋を準備し、家のあちこちに置くことだ。それで持ち出しやすくなる。

防災は集団ですることでもあり、個々ですることでもある。一つの命も無駄にせず、備えをしていこう。

5 将来の夢

私の将来の夢は「プロのダンサー」になることだ。ダンスは小学 3 年生から習い始めて、現在は 9 年目になる。ダンスを始めた頃はその言葉すら知らなかった。友達に誘われ、中途半端な気持ちで習い始めたが、やってみると面白くて自分の中でなにかがマッチした。

始めたばかりの頃はただただ踊っていることが好きで、楽しいからというだけでダンスをしていた。そ

れがいつの間にか仕事としてやっていきたいと思うようになった。これがプロのダンサーになりたいと思ったきっかけである。

ダンスと防災はなかなか関連がないと思われがちだ。実際私が高校1年生の頃に行ったボランティアの場でも大人の方に言われたことがある。確かに直接防災とは関連がないかもしれない。だが、防災は日常に欠かせないものだ。だからどんな職業についても防災をするべきである。警察官や自衛隊、消防士などの直接関わりがあるのもだけでなく全ての職業が防災に関わらなければならない。なぜなら、日本は地震大国だからだ。いつどこで地震が起こるか分からない。そして今後起こるとされている南海トラフ地震のことも考えていかなければならない。ダンスと防災もそれと同じで、繋がっているのだ。私が将来、プロのダンサーになることができたならその仕事が日常になっていく。その防災の日常とプロダンサーとしての日常は繋がっている。だから決して関係がないものではないのだ。そこでダンスと防災の繋がりについて3つのことについて考えてみた。

1つ目は「防災ダンス」だ。防災ダンスとは災害時の避難行動を体で表現しようといったもの。体全体で表現することによって、小さい子供は覚えやすく、楽しく防災を学ぶことができるといったものだ。そして、しっかりした内容の防災ダンスであれば、災害時にとっさに行動することができる。このような利点が備えられている。

そしてその防災ダンスを全国で統一すると良いと考えた。そうすることでもっと分かりやすく、覚えてもらえる。そして地震や火事などの災害別に踊りを変えると細かく対処法を取り入れる事ができ、もっと良くなると考えた。

昔の歌はなぜだか分からないがいつのまにか覚えているといったことが多くあると思う。例えば、「あんたがったどっこさ」という歌は皆知っているだろう。小さい頃は歌の意味も知らずに何度も何度も歌っていた。そして成長した今でも覚えている。私はこれを防災に生かせるのではないかと考えた。だから、全国共通のダンスにし、災害別に分けて創り、小さい子供を中心に遊びながら踊っていくと良いと思う。それで昔の歌みたいな反響があると、たくさんの方が知ってくれるのではないかと考えた。

そして、簡単かつ正しい防災ダンスを創りたい。そのためには、間違った防災を教えないようにきちんと勉強することだ。今まで習ってきたことプラスもっと防災を学ばないといけないと感じた。

2つ目は「被災地や復興地でのパフォーマンスをすること」だ。パフォーマンスすることで、被災した方々の心を少しでも元気づけられると良いなと思った。ユニバーサルジャパンなどのパレードには見ただけで元気づけられ、感動させられる。そのように私も被災地に勇気や感動を与えられたらなと思った。だがそれらは実際簡単な事ではないと思う。パレードが好きな方もいれば、騒音や賑わったことが嫌いな方もきつという。だからそういった迷惑な行為にはならないように、あくまでもボランティアという気持ちで行うことが大切だ。それについては体育館や室内でダンスパフォーマンスを見たい方だけ集まって頂き、実施すれば良いと考えた。そして1回だけではなく、出来れば定期的に何度も訪れてみたいと思った。ダンスを見て少しでも元気になってくれる人がいて下さったら光栄だ。その為にも自分自身がもっともっと色々な意味で成長し、人に感動を与えられるようなダンサーになる事、人の気持ちが分かる人間になる事が大切であると感じた。

3つ目は「ダンスインストラクター」だ。被災をしてダンスが出来なくなった子や体を動かしたい子にダンスの楽しさを教えるといった事だ。ダンスは音楽さえあれば、どこでもすることが出来る。これはなによりも良い利点だと考えた。その時その場で踊れる場所を見つけ、踊っていきいたいと思った。

そして慣れてきたら誰でも踊れるような簡単なダンスから難しい上級者向けのダンスをしたい。なぜなら、レベル別にしないと楽しくないと思ったからだ。私自身、ダンスを習っていて「自分には難しすぎて楽しくない。」または「簡単すぎて楽しくない。」そう感じた事が何度かあった。だから、楽しく踊ってもらう為にレベル別にしてみようと思った。実際にやってみないと分からないかもしれないが今現在の自分はそう考えている。そのインストラクターを実現する為にはまず自分のダンススキルをもっと上げていかないといけないし、ダンスの楽しさを人に伝えられるような教え方を学ばないといけないと思った。

それらの三つが防災とダンスの直接的な繋がりがかなと思う。それらを実現させる為に今から防災とダンスの両方を頑張っていきたい。そして防災とダンスをやっている人は少ない、だから私が繋げていきたいと思った。

そして私がこの仕事をするにあたって大切にしていきたいことは自分の中の防災をし続けるということだ。例えば、学校の周辺や仕事の周辺をハザードマップで調べたりすること。これはどんな仕事をしていてもできることだし、誰にでもできることだと思う。私が次にいく専門学校の近くに、津波が来ても壊

れないビルと書いてあるビルを見つけた。それがとても気になったので海拔何メートルにあるかなど調べてみたいと思う。そのように自分が暮らしていく周りの状況を把握していきたいと感じた。そして友達や家族には絶対に防災で学んだことを伝えようと思った。誰も命を落としてほしくないそう強く思う。

ダンスは表現することが大切だ。そのため、たくさんの経験をしていきたい。そして防災のことをもっと表現することができたら良いと思っている。ダンスだけでなく、もっとたくさんの職業の方が防災を日常に取り入れると、強い社会ができていくのではないかと感じた。

語り継ぐ

後藤 謙太

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分52秒に発生した兵庫県南部地震は、後に6434人の命を奪う阪神・淡路大震災を起こした。発災から23年経った今、阪神・淡路大震災の影は徐々に薄くなっている。私は、震災から20年の節目であった3年前、多くの人が追悼に足を運び、「阪神・淡路大震災を忘れない」とメディアも大きく取り上げていたのに、今年の追悼に集まる人々の数が明らかに少なくなっているのを目の当たりにした時、その事実に気づかされたのだ。経験した人々の記憶から災害がなくなることはないだろう。つまり震災を風化させるのは、経験していない世代である。また、経験した人々の数が年々少なくなってしまう中で、語り継ぐことが出来るのも私たちのような経験していない世代なのだ。経験していない私たちの世代に語り継ぐことが出来るのは、僅かなことだろう。だがその僅かなことを、できるだけ多くの人に伝えることで、経験していないから語り継げないと思っている人や、経験したことを話せていない人に、一歩踏み出す勇気を持ってもらえるだろう。今回は阪神・淡路大震災の時の体験を家族や人と防災未来センターの川原耕一さんから当時のお話を聞かせていただいた。

2 阪神・淡路大震災 当時の記憶

(1) 母の体験

・震災発生時

私は、1か月前に結婚し、当時は神戸市東灘区の4階建てのアパートに父と二人で暮らしていた。大きな揺れは地震のことなど何も考えずに寝ていた私たちを襲った。地震で目を覚ましたが、被っていた布団の上にはテレビが乗っていて、腕はガラスの欠片で怪我をしていた。部屋は散らかっていて家の鍵を探すことも、上着を取りに行くことも出来なかった。ドアを開けると外は真っ暗で、ガスの臭いが充満していて、火事や爆発が起こるのではないかと思った。すぐに自分たちの安全確保と、家族の安否確認をすることにした。車はJRの高架下にてどまり、高架が崩れてフロントガラスがボロボロになっていたが何とか動いたため車での移動を決めた。まだ警察が動く前で、信号も止まっている道路の交通が事故を起こすことなく、手信号などでコミュニケーションを取り、譲り合っていたことに驚いた。母方の祖母の家は神戸市灘区の六甲にあり、私たちは北に車を進めていった。すると、高羽の交差点を境に別世界が広がっているようだった。そこには犬の散歩をしている人がいて、家屋の倒壊や火事が起きていたそれまでの景色との差に驚いた。祖母の家は、食器が少し落ちる程度の被害だった。

少し落ち着いて、次はどのようにして生活するのかを考えた。山に近づくにつれて被害が軽くなっていたため、祖母の家の付近で車中泊をした。復旧は早く進んだため、もとの生活には比較的早く戻ることが出来た。

・どのようなことに困ったか

阪神・淡路大震災をきっかけに、今の防災や減災は進んだため、発生当時はすべてが初めてで何がどうなっているのかが分からなかった。今でこそ、こうしておけばよかったと思えることはあっても、当時はそんなことを考えていられないほど悲惨な状況だった。それは、何をしても無駄だったのではないかと感じてしまうほどの出来事だった。

・母の後悔

私は、結婚してまだ1か月しかたっておらずその家に住み始めたのもそのタイミングだったため、地域の方々とのコミュニケーションは当時全く取れていなかった。阪神・淡路大震災で多くの被害が発生していた地域だったのに、私たちは自分が助かってよかったという思いと、早く安全なところに行かなければならないという考えしかなく、地域の方々を救うという共助の意識がなかった。私には、やろうと思えばいくらでもやるべきことがあったはずなのに誰一人として救うことが出来なかった。事前に地域とのコミュニケーションがとれていて、顔や名前を知っていれば、すぐに思い出して助けに行けたと思う。また、職場の大学では、安いアパートに暮らしていた学生が何人も亡くなった。職場の後輩は、免許を取りたてで、まだまだ運転も慣れていないのにも関わらず、バイクで生徒一人一人の安否確認を行っているのに、何も出来ていない自分がとても嫌だった。テレビで再現VTRなどが流れていたり火事の現場が移されていたりしているのを見ていると、自分の生きていることに罪悪感があつた。

- ・母が語り継ぎたいと思うこと

私は、「命」を語り継ぎたい。阪神・淡路大震災を経験して一番後悔しているのはやはり、人の命を救えなかったことだった。当時、地域との関わりなんてなくても大丈夫だろうと思っていたため、隣に住んでいる人さえ知らなかった私たちは、地域の人たちの命を助けなければならないという考えが咄嗟には浮かばず、家族の安否確認や、できるだけ安全なところまで逃げたいと思うだけだった。事前から地域との関わりをもって地域コミュニティを強くして入れば、助けられる命は多くあったと思う。

(2) 父の体験

- ・震災発生時

私は当時東灘区に住んでいた。震災の朝は地震の揺れで目を覚ました。ガラス障子が倒れてきて頭にガラスが降っていた。頭にけがを負ったが、まずは逃げなければならないと思い、車のカギや財布を探した。しかし、真っ暗だったため、何も探すことが出来なかった。その時に、近所の人から懐中電灯をくれてとても助かった。家を出て車のところに行くと、買ってから3か月も経っていない新車がボロボロになっていて涙が出た。しかし、何とかエンジンがついて車を動かすことができたため、祖父母の安否確認に行った。実家はそれぞれ六甲と明石だった。全員無事で安心した。水などはそこで安易に手に入れることが出来た。六甲の比較的安全な所に車をとめて車中泊を二日ほどしていた。二日後に家に戻ったが片づけにとっても時間がかかった。一通り自分たちの身の安全を確保することが出来たところに六甲アイランドにあるコンテナターミナルの職場を見に行ったら、船が到着するコンテナバースのコンクリートが裂けていてそこにトラックがはまってしまっていたことにとても驚いた。神戸港には船が来ることができなくなり、海外の船は大阪の南港に行った。

- ・震災後の仕事

コンテナターミナルで働いていたが、仕事場は地震の揺れでコンテナバースが破壊されたことで船が入れなくなったため、大阪の南港に会社のバスで行っていた。大阪では泊まり込みで働いていたが全然慣れない場所だったため、仕事が多く毎日徹夜だった。たまに神戸に帰っては大阪に戻るという生活が続いた。しかし、2か月ほど経つと、次は六甲アイランドの公園に仮設住宅を作る仕事をするようになった。全くの素人ばかりだったため、ドアや窓が逆向きについていたりすることもあった。

- ・父の後悔

母と同じように、当時は家族の安否や、自分の身の安全ばかりを重視していたため、生き埋めになっている人を救うことが出来なかったことが一番の後悔だった。自分が暗闇で身動きが取れなかった時に地域の人に助けてもらったのに、人のことを助けることが出来ず、すぐに助けていれば1人でも多くの人を救えたと思う。災害が過去の出来事になった今でも、その時の後悔が残っている。

- ・父が語り継ぎたいこと

私は、地域の人を助けることが出来なかった。その原因は、自分の命を守ることばかり考えてしまったということもあったが、地域の人との関わりが全然なく、地域コミュニティの結びつきが弱かったために、どこの誰を助ければいいのか分からないという問題もあった。事前に地域の方々の顔や名前、どこに誰が住んでいるのかを知っておくことが大切だと思う。そのためには日々のあいさつや、地域の会議などを大切にしなければならない。また、家具がすべてあちこちに飛んでしまったため、家具の固定が絶対に必要だと思う。

(3) 祖母の体験

- ・震災発生時

当時は、灘区の鶴甲の家で祖父と二人で住んでいた。揺れが発生した時は台所でお弁当を作っていた。火を使っていたためまずは火を消そうと思ったが、足がすくんで何回やっても消すことが出来なかった。祖父は増築された部屋で寝ていたため、その部屋が離れてしまわないかが心配だった。幸い家の中はあまり被害を受けていなかったため、大切にしていた食器なども無事だった。揺れの向きが家の建っている方向と合っていなかったら被害はもっと大きくなっていた。家も家族も無事で、避難所に行くことはなかったが、水道が止まって水が出なかったため、近所にある六甲山の湧水で食器を洗ったりしていた。ガスも止まっていてお湯を沸かすことができなかったが、親戚が届けてくれた電熱棒を使ってお湯を沸かすことが出来た。発生から2日ほど経ち、生活がある程度安定したところに、知り合いの安否確認のために東灘の町などを徒歩で見に行ったら、発生直後に神戸全体を見渡した時に見た火の海のような街を目の前にしたときは、あまりの衝撃に涙が止まらなかった。

- ・祖母が語り継ぎたいこと

震災が発生してからしばらくは、地震が来た時どのようにして必要なものを持ち出すかを考えていた。年を重ねると重くて大きなものを持てないため、本当に必要なものだけを持ち出せるようにしなければならないと思った。震災を経験してからは、非常食などを用意していても持ち出せないと思い、今はパンなどが無くならないように常に少なくなれば買いに行くという習慣がついた。災害が発生した時に何を持ち出さなければいけないのかということを個人で考えるべきだ。

(4) 人と防災未来センター川原耕一さんの体験

・当時の記憶

当時は27歳だった私はポートアイランドで中学校の教師をしていた。震災が発生した時は中央区の家に住んでいた。家は建築基準改正後に建てられたため、無事だったが、隣に住んでいたおばあさんの家が潰れていた。おばあさんの家は旧建築基準だったため筋交いなどの耐震化がされていなかった。近くに住んでいた若い男性と一緒に助けることにした。新聞配達の人が、おばあさんのいる場所を把握していたため、瓦礫を持ち上げ、中から救い出すことができた。ほっとしている間もなく、中学の生徒の安否が気になったためポートアイランドの学校にバイクで向かった。途中で警察官に、ここから先は液状化が発生しているから行かないほうがいいと言われたが、無視して進んだ。警察官の指摘通り地面は液状化でガタガタだったため、バイクの操縦は困難だった。やっとのことで学校に到着したが、マスターキーなどを持っていなかったため、学校を開けることが出来なかった。他にも3人ほど若い先生が来ていたため、体育館の窓を壊して中から鍵を開けた。避難所には大勢の人が入ってきた。マンションに住んでいる人も地上にいたことが一番安心できると言っていた。当時は、災害への対策や、知識がなかったため、様々なデマが横行し、避難所に入れなかったら死んでしまうのではないかという考えを持つ人も多かった。

それからは、避難所運営をするようになった。避難所運営では24時間体制で自衛隊などからの物資の受け取りをしたり、避難所に誰が避難しているのかをホワイトボードに書き込んだりするなどの作業を行っていた。また、一番大変だったのはトイレだった。水が出ない環境では流すことが出来ず、人が処理するしかなかったため、山のようにになっている排泄物をバケツに移し、グラウンドに持っていくという作業を繰り返した。避難所では、高校生のボランティアがとても役に立った。体力が必要な作業が出来る高校生はとてもいいボランティアだった。

・川原さんが語り継ぎたいこと

当時は災害が起こるとは思われていなかったため、知識のある人はとても少なかった。知識不足が原因で、下敷きになっている人を助けたつもりがクラッシュシンドロームによってなくなってしまうというケースが多かった。今は知識があるため、対策をしてから助けることができる。つまり、知識をつけることが大切である。また、知識をつけながらも地域の人とコミュニケーションをとるべきである。おばあさんを助けられたのも日頃から少しではあったが、挨拶などをしていたことが活きた。だからこそ少しでも関わりを持つことを大切にすべきだ。

3 話を聞いて

私は、4名の方に当時の話を聞かせていただいた。阪神・淡路大震災の当時は震災に対しての意識がほとんど無く、知識をつけておくことや、耐震化や避難経路の確認や地域コミュニティの強化などを行っている人はほとんどいなかったことが共通した問題点だった。それらのことを行っていれば助けることが出来る命は多くあったことから、地震についての意識を日頃から持つことが必要だと考える。

意識を多くの人が持つためには、災害がどのようなものなのかを語り継がなければならない。しかし、語り継ぐ世代が経験した世代だけになってしまうと、阪神・淡路大震災の記憶は消えてしまう。その記憶を残していくためには、経験していない世代と経験した世代をつなぐ世代が必要だ。しかし、私自身今までにも当時の話を経験した方に聞くことは何回かあったが、今回のように詳しく話を聞いたのは初めてだった。話を聞いていると、被災した方々にはそれぞれに違う体験や思いがあった。私は今まで、それぞれの体験を簡単にまとめ、表にしたような教訓を勉強して、阪神・淡路大震災で起きた出来事や、当時困っていたこと、また語り継ぐべきことを理解して知っていたつもりになっていた。しかし、被災した方にはそれぞれが個人個人で感じることがあり、それぞれの語り継ぎたいことがあるということが分かった。つまり、災害は多くの被害をもたらす、数多くの人々の中に強く残る出来事であり、語り継ぐべきことには、一人一人の思いを残していくことが大切だと思った。しかし、思いをつなぐことは被災者にとってとてもつらい経験を思い出すきっかけになってしまうため、経験した世代と経験した世代のどちらも受け身になってしまえば、次の世代に災害の恐ろしさを伝えることが出来ずに、また同じ被害を繰り返してしまう。私は、語り継ぐことの難しさと、語り継がれることの難しさを理解し、両者が一歩踏み出す

きっかけを作るために、これからも身近な人からでも阪神・淡路大震災を語り継いでいきたい。

4 人々の防災意識を変えたい

私は、災害による死者が出るのは当然のように思われている現状がとても悔しい。確かに、災害を100%予測することはできないし、いつ来るのかを明確にすることも今の技術ではできないため、災害を常に意識することはできないだろう。しかし、災害に向き合うのが国や地方自治体だけではこれからも災害による死者をなくすことはできない。災害時に自分を救うことができるのは他の誰でもなく自分である。つまり一人一人の防災意識が一番の対策に繋がるのだ。防災意識を持ってもらうために、防災は簡単でなければならない。防災と聞けば専門的な言葉に聞こえてしまうが、誰からでも簡単ですぐに始められる防災を目指したい。そうしてその簡単な防災意識を全員が持てば、被害を大きく減らせるのだ。

5 これからの防災への取り組み

災害を語り継ぐ。と聞くととても難しく聞こえてしまうが、私は様々な形の語り継ぎがあると思う。それは人によって語り継ぎたいことの内容も違えば、語り継ぐためのやり方も大きく異なるからだ。私の場合は、防災を専門にした研究職に就いて、防災についての知識を深め、過去の災害を研究し、その教訓を広げたい。そして、災害による死者を無くしたい。この夢はほぼ不可能な事なのかもしれないが、少しずつでも防災を広げていくことが出来れば、可能なことだと私は考える。この夢を実現させるために、以下の3つのことをテーマにして活動したいと思う。

1つ目は、過去の災害を語り継ぐことだ。今年の1月17日は震災から22年だった。しかしその日の追悼式は二年前の20年の日の追悼式に比べると参加者の数がかなり少なかったため、震災の記憶は被災していない人の中から徐々に薄くなっていることを実感した。このことから、過去の災害に目を向ける人は少ないことが分かる。しかし、過去の災害を知らなかったために命を落とした事例は多くある。例えば、阪神・淡路大震災の時に市役所などの防災拠点が地震によって使い物にならなくなる問題が発生したが熊本地震の時にも同じような問題が発生した。他にも、被災した方のほとんどが「まさかここで地震が起きるとは思わなかった」と言っているのも教訓が活かされていないことの一つだろう。過去を知らない限り、また同じような被害が発生してしまい、次に起こる災害で被害を無くすことはできないため、過去の災害について研究し、過去の教訓を活かせるようにしたい。

2つ目は、現在の社会で危険なところ、改善すべき所を伝えることだ。教訓を活かすためには、現代社会で危険なハード面をまず強くする必要がある。次に起こる災害や、日常的に危険な場所を研究して強くするように呼びかけたい。また、災害から身を守るためには災害と向き合うことが大切であるため、人々に防災の重要性を伝え、ソフト面を強くするための活動もしたい。

3つ目は、今後起こる災害を予測し、伝えること。この役割は私の目指す研究職に就く人にこそできる大切なことだと考える。例えば、今後起こるとされている南海トラフを震源とする巨大地震は様々な被害想定が出ているが、それらの想定は研究によってわかったものである。また、その被害想定に基づいて対策が進んでいることから、研究者の出す研究内容はとても重要になる。また、どのような被害が予測されるのかを人々に伝えることで、災害に対して関心を持ってもらい、災害時に自らの命を守ることが出来るだろう。これら3つの過去・現在・未来に目を向けた活動を大切に、日本全体が防災に対しての意識を高め、災害に強い社会をつくり、災害による死者を無くしたい。

最後に、私は防災を学んでいるが、まだまだ分からないことがほとんどである。しかし、防災を学ぶ中で、自然災害から被害を無くすことは不可能だと思うのではなく、災害についてもっと深く学ぶことで、死者を0にすることを可能にしたいと考える。私は、研究職に就いて社会の災害対応について研究したい。なぜなら、災害が起きたとき、行政や地方自治体、企業、各個人がどのように対応するかによって被害を抑えることが出来るからである。社会の災害対応は様々な所に目を向けなければならない。人々の心や文化の違い、災害時要援護者への配慮など、多くの視点から災害に対応する必要がある。私はこのような分野を研究して災害が発生する前に社会の脆弱な点を発見したり、災害時にすぐに復旧作業に移したりするためにはどのようなことが必要になるのかを伝えたい。しかし、私の研究したい分野だけでは災害による死者を0にすることはできない。様々な分野が協力し合うことで可能になるのである。だからこそ、防災をより大きな範囲に広げ、「全体で取り組む防災」を実現したい。

「今」の僕ができる「未来」への防災活動

坂口 柊矢

1 はじめに

僕は、阪神・淡路大震災を体験していない世代の一人だ。当時の状況や心情などをより鮮明に語り継ぐことはできない。しかし、震災を体験した人から直接お話を聞き、それを語り継ぐことはできる。僕は身近な存在である両親と祖父に話を聞いた。今から聞いたことをまとめ、自分にはこれから何ができるのかを書いていく。

2 母の話

(1) 震災当日

母は播磨町に祖父と祖母と3人で暮らしており、当日の朝は2階の自分の部屋で寝ていた。突然、ドーンとした感じがして目覚めた。とにかく揺れて、家のギンギンという音がとても気持ち悪く、崩れると思った。揺れがおさまるとすぐに、祖母のところへ行き、抱きついたまましばらく離れなかった。テレビをつけて情報を確認しようとしたが、すぐには詳しい情報は出ていなかった。その後、友達に安否の確認をするために電話をした。震災後すぐには繋がったが、友達と話し終わってから以後は全く繋がらなかった。

母は当時、生田神社の近くの会社で働いていた。震災当日は、会社のお茶当番があったため家を早く出なければならなかった。ひとまず駅へと向かうと、そこにはたくさんの人がおり、運行情報は全くなかった。しばらく電車を待ったが、全然来なかった。その後、近くの同じ会社の人の家に行った後、自宅へと帰った。

(2) 翌日

昨日電話した友達の家に水の入ったポリタンクや電池、手作りの食べ物など生活に必要な物資を可能な限り持って行った。その友達は神戸市北区に住んでおり、ライフラインがストップしていたからだ。兄に車を出してもらい、普通なら1時間で行ける距離だったのだが、かなり時間がかかってしまった。無事に到着して物資を渡したとき、とても喜ばれた。

(3) 震災後初の出勤

震災から1週間後、上司から会社に来るようにと指示があった。山陽電車で須磨駅まで行くことができたため、同じ方向から来ていた同僚の人たちと会社へ向かった。須磨駅に着いてから会社までひたすら歩き続けた。道の途中は信じられない光景が広がっており、悪夢を見ているようだった。そして、何時間かけて会社に到着した。会社ではひたすら片づけに追われた。しかし、また帰るのに何時間もかかるため、少しだけしか会社にいることができなかった。家に帰ると、「神戸がすごく変わってしまった。」と言い、涙を流した。そんな日々が何日も続いた。

何日か過ぎて須磨駅からバスが繋がったという情報が入ったため、それに乗って会社まで向かった。バスの中は何とも言えない雰囲気だった。ある人は顔が真っ青になって震えていた。ある人たちはなぜそんな話ができるのかと思うくらいその場にそぐわない話をしていた。様々な感情が入り混じっていたバス内だったという。

3 父の話

(1) 震災当日

父は当時奈良に住んでおり関西空港で働いていた。早朝からの勤務で朝5時半の時点で関西空港島内の控室に居た。その後、上司から社員の送迎をするように依頼され、社用車で迎えに行った。その運転中、車のラジオから「地震がありました。」と放送があった。関西空港島でも揺れは発生したのだが、運転中だったため気付かなかった。そして、送迎を終えた後、控室にあるテレビで神戸付近での地震速報が放送されていた。テレビの放送を見てから、空港島内から神戸方面を眺めると、炎のようなものとともに煙が立ち上っていた。とりあえず、作業時間になったため、飛行機が駐機されている所に行ったところ、タイヤの輪止めが外れており違う場所へ移動してしまっていた。それが地震の影響によるものだと知った時はとても驚いた。この状態では作業ができないため、上司に報告後、控室に戻った。地震の影響で公共交通機関が一時不通状態という事もあり、飛行機の定時運行ができないだろうという事になった。そのた

め、作業は断続的なものになった。

仕事が終了し、自家用車で帰路についた。一般道を通行して通常2時間で帰れるところが3時間かかった。帰宅途中の状況としては、特に家や道路の被害はなかった。帰宅してから両親に自宅の地震被害のことを聞くと、壁にヒビが入ったぐらいの程度で、それ以外の被害は特になかった。

(2) 震災から数日

数日後、会社が持っている飛行機に給水する専用車両が、被災地の方々への支援として飲料水を運搬したことを聞いた。この支援は、何日続いたか不明だが継続された。

仕事に関しては、震災後3日程度でほぼ通常に戻った。そして、出退勤時の所要時間は、一週間程度で通常に戻ったようだ。

4 祖父の話

(1) 震災当日

普段であれば起きていた時間だったが、扁桃腺を腫らして39度の熱が出たため寝込んでいた。すると、突然地鳴りがしてガサガサと家が大きく揺れた。その時、家が潰れてしまうのではないかととても不安になった。逃げようにも揺れが大きすぎて逃げられなかった。しばらくして揺れが収まると、祖父は神戸に本社をおく工場の加古川工場で組立ロールスタンドという工程の長をしていたため、職場にいる人の安否を確認しに車で職場へと向かった。道の途中では、物置小屋が何件か倒れていた。職場に到着すると、土地が埋め立て地だったため液状化現象が発生していた。それが原因で自分が担当している工程の持ち場へ行くことができず、安否を確認することができなかった。しかし、しばらくして、全員無事だという情報が入り安堵した。その後、家に帰って体温を測ると熱は下がっていた。大変な時こそ人は強くなれるのだと実感した。

(2) 復旧工事

液状化現象がおさまり工場全体を見て回っていると、クレーンが落ちかけていたり設備が故障していたりした。特に岸壁の被害が著しく大きかった。このままでは、原料を積んだ船舶が港に入って来られないため製鉄に欠かせない存在である高炉を止めるしかなかった。しかし、その時他社からの支援によって助けられた。航路がダメなら陸路で、と原料をトラックで工場まで運搬してもらった。そのおかげで、高炉を稼働し続けることができた。普段はライバルという立場にあるが、災害時は同業社として協力してもらいとてもありがたかった。約1か月後、復旧工事が完成し、いよいよ本格的に復旧工事がスタートした。数日後、兵庫県にもう1つある工場の神戸工場から「こちら側の工場の復旧を優先させてくれ。」という依頼があった。神戸工場は、車の重要部品を扱っており、ここが止まってしまえば車を製造することができないという状況だった。そのため、加古川工場から祖父を含む多くの従業員が神戸工場へ向かうことになった。陸路は緊急車両が行き交っていて通れなかったため、船で最低限の荷物を持って移動した。12時間神戸工場では復旧工事をしてからまた加古川工場に戻るという仕事は何日間も続いた。

(3) 炊き出し

神戸工場の復旧も終わり、加古川工場の復旧も終わりの兆しが見えたところ、よく通っている飲み屋へと足を運んだ。そこで、いつもの飲み屋のメンバーと自分たちは何ができるのかを話し合った。その結果、北須磨小学校で天井を作ることになった。大きな避難所では物資は送られてくるが、炊き出しなどといったボランティアはあまり来なかった。だから、そのような所を探して見つけたのが北須磨小学校だった。天井を配ると、避難していた人たちはとても嬉しそうに食べていたようだ。

5 両親、祖父からお話を聞いて

阪神・淡路大震災について身近な人に聞く機会が今までなかったため、驚くべきことばかりだった。話から気付いたことがある。それは、母や祖父の話に合った「協力」の大切さだ。災害が発生すると人は無力になってしまう。そういう時こそ手を差し伸べてあげることがとてもうれしくありがたいことなのだと気付かされた。それがたとえ目に見えるものやそうでないものだとしても。そして、たとえ自分がつらい状況にあっても他人を気遣ってあげられるところに非常に感銘を受けた。僕もそのような人間にならなければならない。

また、企業の復旧は規模の大きな会社になればなるほど大変だということが伝わった。被害の確認や復旧案の作成などとても簡単にできるようなものばかりではなかったからだ。そのようにならないためにも、事前から災害に対する備えをしておくことが重要だと感じた。そして、企業から市民への支援も様々で、少しでも早い復旧や復興のために自分たちができることを精一杯取り組んでいたことを聞いてとて

も感動した。僕も進学した時や就職した時、自分はどのような立場で何ができるのかをしっかりと考えていきたい。

6 将来の夢

僕の将来の夢は消防士になる事だ。保育園に通っていた時に、消防士の方が子供用防火服を身に付けた僕を消防車に乗せてくれ、カッコいいと思ったことがきっかけだ。それから思いは変わることなく今まで消防士になることを目指して頑張ってきた。環境防災科に入ったきっかけも消防士にある。

高校3年間防災を専門的に学んできた。外部講師のお話を聞いた。フィールドワーク、校外学習もした。そんな中で、もう1つ将来の夢が見つかった。それは、災害時要援護者を災害時だけでなく平常時から地域で見守る事のできるまちづくりをすることだ。まず、災害時要援護者とは、寝たきりの高齢者や要介護者、障がい者、妊産婦、乳幼児、外国人などといった災害時に自力で避難することが困難な人を指す。今日において、災害時要援護者は増加傾向にある。そして、今後発生すると言われている南海トラフ巨大地震などの巨大災害に備えるためにも、阪神・淡路大震災や東日本大震災と同じ被害を出さないためにも配慮が必要になってくる。だからこそ、将来の担い手である僕が少しでも被害を減らす努力をしていかなければならない。

そのためにこれから英語や手話を身に付けていきたい。助けたいと思ってもコミュニケーションをとることができなければ意味がない。時間はかかるかもしれないが、しっかりと身に付けてそのスキルを利用できるようにしていきたい。僕個人だけで取り組んでも災害時要援護者を助けることはできない。地域住民の助け合いが必要だ。しかし、交流する機会が少ない。だから、防災訓練や清掃活動、お祭りや運動会を催して積極的にコミュニケーションがとれる場を確保し、災害時要援護者についてよく知る機会を設けていきたい。この人にはどういった配慮が必要なのか、誰が配慮をするのかなどを理解し、決定する事で、災害が発生した時に自然と声をかけられるような意識付けをしていきたい。

今挙げたことを実現させるには、長い時間と労力が必要になる。それを途中で投げ出したりせず、最後まであきらめずに取り組んで、災害から地域住民を守っていきたい。

7 今後の災害に備えるために

日本は災害大国であり、いつ、どこで災害が発生してもおかしくない。そんな災害から自分の身を守るためには常日頃の備えが必要だ。

(1) 家庭内では

家庭内では、家族で家の中に災害が発生したら危険だと思われる箇所を見つけることから始める。危険だと思われた箇所があれば適切な対応をして未然に防ぐ。なぜなら、家は憩いの場であり、一日の中で一番長く過ごしている場所である。そんな大切な場所で被害を出したくないからだ。実際にどのような箇所が危険で、どのように対処すればいいのか。例を挙げると、家の外に出るための避難経路の途中に進路を妨害するようなものがあれば、邪魔にならないところに移動させるといったことや、寝室に地震によって倒れてきそうな家具があれば、突っ張り棒などで固定することなどがある。しかし、ほかにももっと危険な場所が存在しているかもしれないかもしれないため、何回も見直して見つけたい。

そして、災害が起きたらどこに避難するのか、どの道を通って避難するのかなど災害が起きた時の避難場所とそこまでの経路などについて家族で話しあう必要がある。もし、それぞれが外出していたときに災害が起きたとしても困らないようにするためである。あらかじめ避難場所や避難経路を決めていれば、迷うことなく避難ができ、家族に会うことができる。だからといって、災害が発生した後に決めた避難場所に逃げることは必ずしも正しいとは言えない。その場の状況をよく見極めて臨機応変に行動することも必要になってくる。もしかしたらあらかじめ決めていたルートが通行不可能になっているかもしれない。決めていた避難場所が被害を受けているかもしれない。そういったことも踏まえながら、予備の避難場所や避難経路を決めておく必要がある。そうやって何重にも保険をかけておくことで落ち着いて行動することができる。

最後に、非常用持出袋の準備と中に何を入れるのか話し合う必要がある。災害が発生したとき、生活に必要なものを入れておくことで自分たちが困らないようにするためだ。食料や電池、衛生用品など必要なものはたくさん挙げられる。生活必需品を入れるのはもちろんだが、他にも個人で必要なものも入れたい。例えば、もともと病気を患っているのであれば常備薬を入れておくことや、目が悪いのであれば、もしもの時のために予備の眼鏡を用意しておくことなど、個人においてなくては困るというものも入れておくことが必要だ。そして、非常用持出袋に必要なものを入れた後で重要なものが、定期的に中身をチェッ

クする事だ。食料は、賞味期限や消費期限があるため、いざ災害が発生して食べようと思っても期限切れで食べられないといったケースが発生するかもしれない。それを無くすためにも、定期的にチェックし期限が切れそうなものがあれば、食べてまた買いなおすといったことが重要だ。

（２）家庭外では

家庭外では、近隣住民とのコミュニケーションが重要だ。阪神・淡路大震災の時、共助によって多くの命が助け出された。その中でも北淡町は、周りとのかかわりがとても強く、あの人はどんな服装でどこに寝ているのかという事でさえみんなが知っていた。だから、地震で家屋が倒壊してもおおよその場所はわかっており、すぐに助けることができた。それくらいかかわりを持てなくてもよいが、せめて家族構成くらいは知っておきたい。もし災害が起きて避難した時に誰がいなかすぐに確認することができるからだ。そうすることで迅速に対応でき、助けることができる。そのためには、地域のお祭りや防災訓練など地域住民が集まる機会に積極的に参加する事が大切だ。地域住民と関わる機会はそんなに多くない事だ。実際、僕が住んでいる地域でもあまりかかわる機会が多くない。だからこそ、家族ぐるみで参加しやすい行事に積極的に参加して地域住民と交流することが大切だ。

8 最後に

僕はこの３年間で多面的な視点から防災について学んできた。この３年間で学んだものを今後で存分に発揮したいと考えている。震災を「語り継ぐ」ことも大切にしていきたいが、環境防災科で学んだことを「語り継ぐ」ことも大切にしていきたい。ここで学んだことはどれも大切なことばかりだ。それを伝えることによって周りの人の防災力を向上させることができる。そして、ここで学んでいなければ僕は本当に防災について何の関心もなかったはずだ。防災を学ぶ機会をくれた環境防災科にはとても感謝している。だから、環境防災科に誇りを持ち、この２つの「語り継ぐ」について話す機会があれば震災を知らない世代へと伝えたい。そして、それがずっと語り継がれてほしい。

どうか神様、助けて下さい

崎田 莉子

はじめに

1995年1月17日。この日まであたりまえだと思っていたことが、あたりまえではなかったと気づかされた日。大切なものや人の存在がなくなった日。私は、そんな日を体験していない。だから、母に聞いた話を、母の目線で語り継ぐ。そして、それを聞き思ったこと、熊本支援ボランティアとネパール訪問で感じたこと、将来のことについても書いていく。

1 阪神・淡路大震災の概要

1995年1月17日午前5時46分に発生、マグニチュード7.3の地震。死者6434名、負傷者4万人以上を出した。

2 母の話

毎年、秋の初め頃から震災の記事が掲載される。それを見るたびに、あの震災の事が昨日の事のように思い出され、頭の中で走馬灯のように駆け巡る。震災後、毎年のことだ。

当時、マンションで生後3か月の息子と主人の3人暮らしだった。

(1) 震災が起こる前日

私たち家族は明石市大久保町に住んでいた。1995年の成人式は1月15日と決まっていた。この日15日は日曜日だったため、16日月曜日が振替休日。家族で明石に買い物に出かけ、1週間分の食料品と息子に絵本を買いたくて大手の本屋さんに行き、3人で選んで購入したことや、その夜は冷え込んでいたのでお鍋にしたことなど今もはっきり覚えている。震災が起こる数十時間前のことだ。鍋も美味しく頂き、私が鍋の片づけをしていると背中越しに主人が「今、揺れたな？」と問いかけてきた。私は洗い物に集中していたのか、立っていたから揺れたことなど全く感じなかった。「えっ！揺れた？」と主人に返事をした。すると主人も「気のせいかなー」と一言。何もなかったかのようにいつもの休日の夜を過ごした。まさかこの翌日にあの阪神・淡路大震災が起こることなど誰も知らなかったことだ。

(2) 震災が起こる当日

1月17日午前5時半に主人が起床し、私が続いて起き、コーヒーを入れるためやかんに水を入れ火にかけた。主人は仕事の支度をし、歯磨きをするため洗面所に行った。私は玄関に行き新聞を取りキッチンに戻って、湧いたお湯をコーヒーカップに注ぎ、主人が戻ってきたらすぐに飲めるように準備した。私は主人を送り出してから息子と二度寝しようとコーヒーは注がず、新聞をテーブルに広げ、イスに座り新聞を両手に広げ持ち上げた時、私の左斜め後ろの下から「グオー」という、うめき声のような音が聞こえた。思わず音の聞こえてくる方を見て1人で「なににな」と叫んだ。その瞬間、目の前の食器棚の扉がバタバタと大きな音を立てながら、開いたり閉まったりするのが私の眼の中に飛び込んできた。家の中の全ての物が前後左右に揺れまくり、イスから立ち上がるにもスムーズにできなかった。その場から息子の名前を叫び、壁に体をぶつけながらやっとの思いで息子のもとに行った。幸い息子のベビーベッドの周りには何もなくて、息子の上に覆いかぶさり「大丈夫やで、大丈夫やで」と息子に言いながら自分自身にも言い聞かせていた。その時ぐらいに全ての電気が消えた。停電だった。主人が洗面場から歯ブラシをくわえたまま喋りにくそうに「大丈夫か？」と私と息子のところに来た。でも揺れは収まらず正直、このまま死ぬのではないかと思った。本当に怖かった。恐ろしかった。「どうか神様、助けて下さい」と泣きながら叫んでいる自分がいた。すると、息子が声を出し私たち2人の顔を見て笑った。母親の私がパニックっているのを見て、息子は泣くこともせず笑顔を見せてくれた。その時、私は冷静な3ヶ月の息子に救われた。

やっと揺れが落ち着いた。主人は歯磨き粉で口いっぱい泡をふいている状態に気づき、キッチンに行き口をゆすいだ。「取りあえず電気がつかへんから暖が取られへん、車に行こう」と素早い判断でビックリした。普段はものすごくのんびりで屋さんなのに。少し見直してしまった。そして、息子を毛布に包み私はパジャマの上からコートだけを着て、真っ暗な家の中をまるで瓦礫の山を歩くかのようにつま先で歩いた。そうしないと割れた食器の残骸で足を怪我しそうだった。主人が前を歩きその後ろをピッタリついて歩いた。玄関まで行き、散らばっている靴を履き外にでた。ものすごく寒かった。息子を力一杯抱き寄せて階段を1歩ずつ降りた。マンションの敷地内にある駐車場に置いている車に乗り込んですぐに、主人

がエンジンとラジオをつけた。

少ししたら雪が降ってきた。本当に寒くてエンジンがなかなか暖まらず、腕に抱いていた息子を思いっきり抱き寄せた。暖も取れるようになってきてからか、自然にラジオからの声も聞こえてきた。耳を疑うようなことばかりラジオから聞こえてくる。そのことに主人と2人啞然とするしかなかった。阪神高速道路が傾いているとか神戸大丸が全壊しているとか。思わずラジオに向かって「うそお」と。いったい何が起こったのかと自問自答していた。あまりにも現実的でないことばかりラジオから流れてくるので、だんだん怖くなって少しパニックってしまい、車の中で「神戸がなくなる～」と言いながら大泣きしてしまった。息子は私の腕の中でぐずることもなく、しっかり目を開けてニコニコとしていた。

(3) 震災を経て思うこと

息子達は阪神・淡路大震災を知る最後の世代として、震災を風化させないためにも、次世代に必ず伝えていく義務があると思っている。あの震災を経験した私たちは、必ず大なり小なり人生が変わったに違いないと思う。

私の父、息子からしたら祖父が、震災が起こった年の6月にこの世を去った。脳出血だった。震災に直接関係はないが私は、震災さえなかったら父はこの世を去ることはなかったと未だに思っている。だから直接震災で身近な方を亡くされた人だったら、あの震災さえなかったら・・・と思う気持ちは私の数倍いや数十倍思っていることだろう。

(4) 震災当時のニュース

あの震災さえなかったら、消防士や自衛隊の人が罵声を浴びたりすることはなかっただろうに。

1・17の特別番組を観て、ふと震災当時のニュースの事を思い出した。

当時、神戸大学の学生さんで親元を離れ、1人で神戸市東灘区に下宿をしていた所が、全壊してしまい亡くなられた。その学生さんのお父さんが来られ、自衛隊の人たちと救助現場を一緒に見守られていた。ぺちゃんこにつぶれた家屋の中から遺体として見つかり、茶色の毛布に包まれながら屋外に出され、お父さんと対面された時、お父さんが思いがけないことをされた。そのことにテレビの前で只々ビクビクすることしか出来なく、やがて、とどめなく涙が出てきたことを今もハッキリ思い出される。そのお父さんが娘さんの遺体を見つめ直ぐに顔を上げ、大きな声で「自衛隊の皆様、娘を探し続けて頂いた皆様、こんなに早く娘を見つけて頂いて本当にありがとうございます。」と深々頭を下げられた。このことに私は、衝撃を受けたことを今も鮮明に覚えている。つぶれた家屋でたくさんの方々が下敷きになり、散らばった瓦をどけてもどけても助けられない。その焦りと怒りでパニックになるのが当たり前の光景だっただけに、本当に何とも言えない気持ちでテレビを見ていた。

(5) 震災後の特別番組

震災から数か月経ったころ特別番組だったと思うが、神戸新聞社のカメラマンの方が取材されていて、震災直後にそのカメラマンの方がとった行動が放送された。私の中では一生忘れる事の出来ないことだ。

そのカメラマンの方は震災当時、垂水区星が丘に住んでおられて、奥様と幼いお子さんと3人で暮らしていた。今からは、カメラマンの方の目線で書く。

激しく揺れている時に目覚め、その後すぐに、服に着替えてカメラが一式入ったバッグだけを持って妻と子供の無事を見届けて玄関を出ようとした。その時、「私たちを置いて行かんといて」と妻が泣き叫んだ。それでも、妻と子供を置いて家を飛び出した。バイクに乗り、まず会社に向かった。自分がどこを走っているのか、いったいここはどこなのか、まるで映画のセットの中を走っているようだった。会社に行くのを諦め、取材をしようと無我夢中でカメラのシャッターをきった。必死で家族や近所の人を引っ張り出そうとしている人が、あちらこちらにいた。

その光景をカメラで撮っていると1人のおじさんが「お前、何写真を撮っとんや。写真撮る暇があるんやったら手伝ったらどうや。」と怒鳴られ、カメラを取り上げられ投げ捨てられた。その時に私が「申し訳ない。この震災を風化させないために俺は写真を撮り続けなあかんねん。」と涙流しながら言った。そして、神戸の街を撮り続けた。

数日してから鎮火した長田の現場に行くと、焼け野原を呆然と見るしか出来ず、気が付いたら涙が出ていた。すると、傍らで、震災前日まで使っていたと思われるステンレスのボールに、大事な人の骨を入れている男性がいた。その人のそばに行き行って写真を撮ろうとしたら、男性の方からボールを差し出され「俺の家族の骨や」と見せられた時、改めてこの震災を一生、風化させたらあかんと思っただけ。

私が家に帰れたのは、震災から数週間が経った頃。震災で撮った写真の枚数は2万枚以上だった。

(6) 今思うこと

今回、子供から震災の時の事を語って欲しいと言われた時、一瞬語れるかなと思ったが、昨日の事のよ

うに思い出された部分も多かった。それは私の中では絶対に風化させたくない思いがあるからだと思っている。

3 話を聞いて

毎年震災の日が近づくと、母が独り言のように震災当時の事を話します。だから、震災の事は全て聞いてきたと思い込んでいた。しかし、それは違った。父が冷静な判断をしたこと、母が泣き叫んだこと、兄が両親をパニックから救ったこと。知らないことだらけだった。この語り継ぐがなかったら聞いていなかったかもしれない。本当に聞いて良かったと思った。

もし、この阪神・淡路大震災が起きていなかったらどうなっていただろう。毎年辛いことを思い出さずに済んだ。大切な人やものを無くさずに済み、悲しみに暮れることはなかった。このように悪影響しか及ぼさないというわけではないと私は思う。今よりもっと防災への意識は低くなっていたかもしれない。大切な人やものが在ってあたりまえの生活になっているかもしれない。というように、生きていくうえで大切なことも教えてくれたようにも思う。

私は、震災を経験していない。だから、いくら当時の話を聞いても、経験しない限り、経験した人の辛さや苦しみは分からない。しかし、その話を伝えていくことは経験していない私にもできる。それを改めて感じられた機会となった。

4 熊本支援ボランティア

私は熊本でボランティアをさせて頂いて、色々な形のボランティアがあることを知り、人の温かさを改めて感じた。

熊本に行く前、普段から学校で募集される夏祭りや募金のボランティアには参加したことがあった。そこでも、人の温かさは参加するたびに感じられた。しかし、色々な形のボランティアがあるということには気づけなかった。

熊本市にある女性のお年寄りの家での活動だった。主にがれきを運ぶ活動だった。炎天下での体力仕事であったため、正直きつく感じるがあった。しかし、「ありがとう」と言って頂いたり、私たちの体調を気遣って頂いたりした。また、警報で活動が出来なかったときも、宿泊先である菊池農業高校の方々が私たちに、田植えや馬術の試合の見学や地震直後の状況をお話しして頂いた。貴重な体験となった。本当に周りの人の温かさを感じた。それと同時に、周りの人の支えがあってこの活動が出来たのだと思った。しかし、このように思うだけではなかった。警報や雨の影響でボランティアセンターを通しての活動は1日しかできなかった。「何しに熊本に来たんやろ」と無力さを感じた。しかし、街の視察でお土産を買ってお金を使ったり、お茶碗プロジェクトのお茶碗に添えるメッセージを書いたり、色々な形でボランティアをさせて頂いた。「微力だけど無力じゃない」この言葉に救われた。

5 ネパール

(1) ネパール地震

2015年4月25日マグニチュード7.8の地震が起こった。死者7600人を超える大きな被害が出た。ネパールは、脆弱な構造であるレンガ造りの家が多く、それが倒壊し下敷きになって亡くなる人が多かった。

(2) ネパール訪問

舞子高校ではネパールとの交流が行われている。私は、その交流ができるネパール訪問に参加した。この時の訪問では、例年とは違う目的があった。それは、舞子高校が集めたネパール地震の募金を届けるということだ。

地震が起こってから8か月弱が経った頃だった。初めての海外ということもあり楽しみにしていた。しかし、空港に到着し、バスでホテルに向かう道中で衝撃を受けた。がれきがそのまま残っていたり、木で壊れそうな建物を支えていたり、竹や木と布で作られた仮設住宅があったりと地震の被害を目の当たりにした。また、観光で行ったお寺も破損が多く見られた。訪問した学校では、壁がはがれてしまっていたり、図書室では本が散らばったままになっていたり大きな被害を受けていた。しかし、学校に通う子供たちは、私たちに元気な笑顔で接してくれた。本当に温かかった。このような地震の被害だけでなく、日本との違いにも驚かされた。道路は舗装されておらず、町には信号がない。たくさんの車やバイクが入り組みながら走っていた。日本で住んでいると絶対に目にしない光景がたくさんあった。

2年で参加したときは、地震から1年半が経っていた。このころには、すでに町はほぼ復旧していて、

仮設住宅やがれきや倒壊しかけの建物はほぼなくなっていた。1年のときに行ったお寺もきれいに元通りになっていた。訪問した学校も、舞子高校が送った寄付金を修繕のために使ったり、壊れた机やいすに使ったりしていた。地震を機に立てられた貧しい子供たちや障がいのある子供たち向けの計画も、順調に進んでいると聞いて安心した。

私の1つ上の先輩が、高1のときに参加したネパール訪問の話聞いた。「私が前に来たときは、いまより町が整備されていなかった。」と聞いて、復旧だけでなく復興もしているのだと思った。

この訪問だけで終わらせるのではなく、将来もネパールとかかわりをもっていきたいと思う。

6 将来やりたいこと

私は将来、国際協力や海外ボランティアをしたい。

発展途上国では、防災に関する教育や訓練が十分にされていないことが多く、助かることができた命がたくさん失われている。だから、現地へ直接行き、今まで学んできたことを伝えて、防災を知ってもらい、少しでも多くの災害で失われる命を守りたい。

事実を事実として伝える

佐藤 柚

1 はじめに

私は阪神・淡路大震災を経験していない。当時の様子は、テレビや本で見たこと、授業で学んだことしか知らない。しかし、誰かが語り継いでいかなければ忘れられてしまう。忘れてしまうと、また同じことが繰り返されてしまう。そうならないといけない。だから、体験者から話を聞きこの場を利用し伝えたい。

私がお話を聞いたのは、通っていた中学校の先生だ。先生は当時大学生(当時の大手前女子大学：西宮市御茶家所町)で、実際に地震を経験されている。先生は、よく授業で震災当時の話をしてくださっていた。また、地震発生後の新聞を持ってきてくださりみんなでディスカッションをしたり、神戸新聞の方を招き当時の様子を聞いたりし、災害や防災について考える時間を設けてくださっていた。中学生の時に聞いた話は今でも覚えている。この体験談を多くの人に知ってもらいたいと思い、今回改めて先生に話を聞いた。

2 地震発生前

当時、日本列島では震度3から震度4程度の地震が多く起きていた。大学が冬休みに佐用町(旧南光町)西下野の実家に帰省していた。大学のある西宮に戻る16日、祖父が「次はここに(地震が)来るかもしれない」とニュースを見ながらぼつりとつぶやいたのを鮮明に記憶している。また、家族は西宮に戻るのを渋り、17日の朝の列車で戻ってはダメかと聞いてきたこと、夕方佐用駅で見送ったホームに立つ姿がひどく寂しげに見えたことを覚えている。

あの頃は、1月15日が祝日で、16日の夕方に東に向かった人も多く、先生もその一人だった。寮の門限時間に間に合うように阪急夙川駅に到着し、駅前のダイエーで朝ごはんの材料を買い、寒くて暗い夙川沿いの道を歩き寮に戻った。寮は、運よくキャンセルがでた新築の物件だった。当然のことながら家賃は高かったが、お母さんはすぐに申し込んでくれた。まさしく母の愛ゆえだった。そして、明日の授業に向け日付が変わらないうちに寝た。

3 地震発生

(1) 直後

目が開き、一階の玄関脇の窓からは月が見えていた。窓がカタカタと揺れている。「まあでもここ、西宮だしな。まだ朝早いしな」そう思い、もう一度目を閉じた。「ごおおおおおおお」「どんっ」「がしゅんがちゃんがり」「しーん…」最初の揺れで体はベッドの上に飛び上がり、次の南北の揺れで振り落とされないようにベッドにしがみつき、全身汗まみれだった。暗い、音がない、なんやなんや、まだ寝ときたい、そう思った。扉の向こうで大きな声がした。カーテンの隙間から玄関の明かりがいつも通りついていることがわかった。とりあえず出ようと思ったが、冷蔵庫の上に置いていた電子レンジが床に転がっていたり、冷蔵庫の扉が開いていたりして、やっとドアを見つけ友達のもとへ行った。「足…」友達に言われて見てみたら、どうやら食器の破片で切ったようで血が出ていた。全然痛くなかったが、友達が差し出してくれた絆創膏を貼った。すると余震がきて「わ、わわわわわ」とみんな立てないで座り込む。約5分後、佐用町の実家に電話するとすぐつながり、「とりあえず、大丈夫だから」と伝えた。実家も揺れたみたいだから、山崎断層が震源かなと思った。部屋に戻り、電気屋をしている叔父さんのおさがりのブラウン管型テレビポータブルを持ち、みんなのもとへ行った。置いていた柵から転げ落ちていたため映るか不安だったが、テレビをつけると燃えている映像が映し出された。「え。なんじゃこりゃ。」外に様子を見に行っていた子たちが帰ってきた。「あかんよ」「大学、つぶれとった」「ガス臭い。あちこち潰れてて…」「大学あんなんじゃ、私たちなんてあとまわしだよ」「理事長があなたたち、ローソン行ってきなさいって」そう言われ、ローソンに行ったがもう何もなかった。寮に戻り「次の揺れでドアが開かなくなるかもね、開けとく？」という意見が出たので、いざというとき開かなくなったら確実に困ると思いドアを開けに行った。寮の扉は、カードキーで解錠するタイプでセコムが管理していた。緊急用のカギのカバーを何人かで壊した記憶が残っている。「ピー、ピー、ピー…」と警報は鳴り続いたが、セコムの人に来てくれる訳もない。警報の音、国道2号線にできた亀裂や段差で立ち往生している車から発せられるクラクション、緊急車両のサイレンなどあの時鳴り響いていた音は未だに苦手だ。

(2) 徐々に理解していく

寒かったが部屋に帰るのも余震が来ると怖いし…という状態で、寮の廊下に集合していた。毛布を取りに行ったり、実家に電話したりしてなんとなく廊下にいたが、電話はガイダンスが流れるばかりで繋がらなかった。一緒にいた子たちは全員兵庫県外の出身者で、あっさり電話が繋がっていた。それをまねし、鳥取県智頭町に住む祖父母に電話すると繋がり「寮は電気が点いているから」と伝えて電話を切った。以後は、電話での連絡はすべて鳥取経由だった。

その後、大学を見に行った。もとは4階建てだったが2階建てくらいの高さにペしゃんと尻餅をついたようになっていた。1階の学生サービス課や総務課の辺りからは、パソコンのピーという電子音が鳴っていた。通学路は、ブロック塀が壊れ、古い借家が屋根しかなかったみたいになっていた。ガス管が破裂しているのかガス臭く、ほこりが舞い、建物は壊れて木材やコンクリートや鉄筋がむき出しになっていて、町の色が変わっていた。そんな状況のなかびっくりすることに、普通にスーツを着て国道沿いを歩く人がいた。今思えば異様な光景だった。

まさか兵庫県で、しかも淡路島が震源の地震が起きるとは思っていなかった。小学3年生の時、震度4の山崎断層地震を授業中に経験したので、地震が起きるなら山崎断層と勝手に想定していた。当時、思いがけずすごい地震の被災者になってしまったこと、大学が倒壊したこと、火災が発生していること、交通インフラが大きなダメージを受けていることなど、おおざっぱな情報から徐々に理解していくしかなかった。

(3) それでも夜は明ける

部屋は片付いておらず、怖かったため明かりをつけたまま廊下や談話室に布団を引き、余震が来るとみんな無意識に頭まで布団を引っ張り上げた。「きゃあ」「わあ」とは言わないけれど、揺れに対する条件反射だった。口に出すと恐怖は連鎖するため、行動でお互いをいたわりあっていたように思う。口に出さなくても、実際怖かった。

翌日、避難所に指定されておらず食料もない大学にさえ人が集まり始めた。大学の職員が、いつになるかわからないが被災者支援で食料が届けば、寮にも食べ物を届けてくれると伝えてくれた。しかし、西宮に住んでいる人達のために届く食料を私たちが食べていいのか、いっそ実家に帰った方がいいのではないかと考えた。この時点で、阪急も阪神（山陽）もJRも使えないことが分かっていた。また、国道2号線や橋脚の倒れた阪神高速、その下を走る国道43号線も使えなかった。もちろん救急車や消防車も走れない状態だった。ところが、ポータブルテレビやラジオからの情報で、阪急西宮北口から東へは行けることが分かった。そのため、みんな荷物をつめて伊丹空港を目指した。駅までの町の様子は鮮明な記憶ではないが、ミドリ電化（現エディオン）のビルは倒れてはいなかった。しかし、分厚いガラス片が飛び散っていて、見上げるとサッシとガラスとの間のパッキンのゴムか何かがだらんといくつも垂れ下がっていた。車が走っていたかどうかはあいまいな記憶しかない。途中にあるATMに並びお金をおろした。公衆電話ボックスも何もかもが行列だった。

(4) 違和感

駅で切符かラガーカードを買い、電車にのった。帰れるか帰れないかわからない状態だったため、その時の気持ちは覚えていない。しかし、電車を乗り換えた時からとんでもない違和感に見舞われたことは強烈に覚えている。それは普通だということだ。数時間前までひどい映像を見ていたのに、同じ伊丹市内かと思うほど、駅から見る風景は普通だった。駅を降りればタクシーがいる、コンビニが開いている。そこには当たり前の日常が広がっていた。

(5) 神戸上空

伊丹空港に着くと岡山行きはキャンセルまちの人であふれていた。そこで、米子行きをキャンセル待ちした。待っている間に、チケットを手にできほとした表情で公衆電話に駆け寄る人や、同じようにキャンセル待ちをしている人などを見た。そして、夕方の便にキャンセルがでて飛行機に乗ることができた。この時点で、一緒に来ていた県外組はすでに飛び立っていた。キャビンアテンダントの方に、天候の影響で着陸できず引き返すかもしれないがそれでも乗るか尋ねられたが、乗らないわけにもいかないので「乗ります」と答えゲートをくぐった。飛行機に乗るとキャビンアテンダントの方が、「今どこの上空です」とアナウンスしてくれていたが、あの夜は「神戸上空です」と言われなくても神戸だとわかった。なぜなら、建物が燃えていてオレンジの炎が走っていたからだ。あんな夜景は二度と見たくない。

(6) 家族

米子に降りると雪が降っていた。終電で智頭駅までしか行けなかったため、祖父母の自宅に一晚泊してもらい、翌日の朝家に帰ろうと決めた。智頭駅では、家族が待ち構えてくれていた。西宮を無事に脱出で

き、蛇口から水が出て、電車がダイヤル通り運行し、原因不明の渋滞がない。電気が普通に点いている、何より死の危険がない、そんな状況に、もうすぐ安全な家に帰れると浮かれていた私たちは面食らった。家族は、鬼の形相をしていた。現代のように簡単に連絡がつかず、時々公衆電話からどうするか伝えるだけの短い電話は必要以上に不安をあおっていた。結局、その後1 か月は鳥取で過ごしていた。

4 地震発生後の大学生活

大学の再開は5月のゴールデンウィーク明けだった。全壊した校舎の周囲に、2階から3階建てのプレハブの校舎が作られ、そこで授業を受けていた。生徒も教員も被災し、命も失った。直後に「復興祭」が開催された。1996年の秋に本館が再建され、文化祭は地域にも開放された盛大なものだった。ちなみに、この大学では1月にテストが行われる予定だったが、すべてレポート提出などに切り替えられた。しかし、住居の倒壊等で教科書を失った学生が多数いたため、さほど厳しい評価はつかなかった。

5 とにかく伝える

震災直後から、家族との会話で確信したことがある。それは、他人の苦しみは決して体験することができない。だが知ることが出来る。知って自分に置き換えることが出来るのは人間だけということだ。教師として母として、

- ・事実を事実として伝える
- ・自分に何ができるか考えさせる
- ・災害時の混乱を防ぐためには、自ら行動することがいかに大切か伝える
- ・学級活動や生徒会行事、部活動を通じ「一人では出来ないことでも、たくさんの知恵や力で何事も成すことができる」という経験をさせる
- ・過去から学んだことをどう生かすか考える

これらのことを子供たちに伝えたいと思っている。幸いなことに、毎年1月17日を担当する生徒たちと授業しながら過ごせる。祖父が置いてくれた1995年1月18日から1か月分程の新聞を生徒に見せ、当時の状況、これから私たちが考え、実行しなければならないことを話し合う機会を作れる。自分自身にとっては、震災はつらくて嫌な思い出だが、少なくとも1年に1度は語ることによって思い出しては決意を新たに、また忘れずに1年を過ごそうといういい機会になっている。1月17日、8月15日など、日本人には数々の忘れてはならない日付がある。その日を迎えるたびに、その日を語り、聞き、思うことが、避けられない災害に遭った時の力になると信じている。

6 話を聞いて

私は、小さい頃からいろんな人に震災の話を聞いてきたが、身近な人から具体的に聞くのは今回が初めてだ。これまで、語り部さんなどからは避難所での生活等を聞いてきたので今回もそのような内容だと思っていた。しかし、先生から聞いた内容は予想外で、受け止めるのに苦労した。なぜなら、自分たちも被災しているにもかかわらず、迷惑になってはいけないからと西宮から出ようと考え行動されていたからだ。震源地に近い＝避難所生活という考えがあった私は、とても驚いた。被災地では、たくさんの人がそれぞれいろいろな思いや考えを持っていることが改めて分かった。仕事やボランティアで現地に入る場合はそれを理解したうえで行動しなければならないと思う。

今回先生から聞いたお話はほとんど初めて聞く内容だった。中学校の授業で聞いたお話はほんの一部にすぎず、先生の中で生徒に伝えたいことがもっとたくさんあると感じた。また、教師として母親としての考えを聞いて、本当に生徒思いのよい先生だと思った。私が環境防災科に行きたいといった時背中を押してくれたのは先生だった。今回、私のためになるならとつらい内容まで話してくださった。だからこそ先生から聞いた話、思いはしっかりと語り継いでいきたい。

7 環境防災科

私が環境防災科を目指した理由は、災害に興味があり、将来災害現場で働きたいという思いがあったからだ。入学してからは、インフラについてやボランティアについてなど様々なことを学んできた。その中でも一番印象に残っているのは、心のケアについてだ。環境防災科に入学する以前は、災害で影響が出るインフラや救助、災害医療にしか視点がなかったが、学習していくうちに心のケアはとても大切だということを知った。先生のお話の中にも心に関する内容があった。東北の地震と津波の映像によってPTSDの症状が出た高知県に住む友達がいるという内容だった。東北から遠く離れた高知県にいても災害によっ

て傷つく人がいる、災害は多くの人の心に爪痕を残していくととてもつらい話だ。また、先日参加したオープンキャンパスで出会った先生からも、心に残っている傷の話を聞いた。その先生は、震災の数日前に神戸に出張に行かれており、地震当日は大阪におられたそう。神戸には友達がいたがたくさんの方が亡くなられたため、悔しくつらいため神戸には出張以外では行かない、行きたくないとおっしゃっていた。自分の近くでは被災が大きくななくても、心が受ける影響は回り知れない。そして、目に見えないからこそしっかりとケアしていく必要があると学んだ。しかし、心のケアについてはまだまだ知られていないと思う。なので、環境防災科で培った情報発信力を活かし多くの人に知ってもらい、災害により傷ついた人をケアできる環境が整えればいいと考えている。

8 将来の夢

私の将来の夢は、看護師になることだ。看護師になってしたいことは4つある。1つ目は、災害現場で医療活動を行うことだ。DMATという災害派遣医療チームに入り災害急性期の人命救助活動にあたりたいと考えている。一人でも多くの人を救うことができれば、心に傷ができる人も少なくできるはずだ。2つ目は、災害時における病院と消防・警察・自衛隊・海上保安庁などの機関が効率よく人命救助にあたるような組織作りやマニュアルづくりをすることだ。地震に関する本を読むと、発生するごとに組織のあり方を変えてきているのがわかる。だが、まだまだ効率よく活動できるように改善できると思う。また、阪神・淡路大震災後に配備が進んだドクターヘリは、機能を発揮できないまま時が過ぎているという状況だ。ドクターヘリを飛ばす目的は、昔よりは周知されるようになったが、実際には使用すべきところで使用されていない。ある記事には、東日本大震災発生後、当時日本で配備されていた26機中18機が初動機に被災地内で医療救護活動を行い多くの命を救ったがそれでは少ないと書かれていた。阪神・淡路大震災ではヘリコプターにより救い出せたのは最初の3日間で17人だったのに比べると、教訓が活かされていると感じるがまだまだだそう。しかし、思うように飛ばせないのには理由がある。災害時色々な機関のヘリコプターが飛んでいるため、安全を確保するために各機関との調整が必要になり時間を要することや、通信連絡がうまくできないこと、最大の問題点は燃料補給が行えないことだ。このように問題はあっても、改善をしていくことは可能だと思う。具体的なことはまだ考えていないが、各機関並びにドクターヘリやDMATがそれぞれの能力を十分に発揮し、一人でも多くの命を救えるような組織作りを行いたい。3つ目は、病院の防災計画の改革を行うことだ。命を救うべきは場所が崩壊しては意味がない。そこで、建物を耐震化したり、平常時からマニュアルを職員全員に理解してもらい訓練を行い、非常時に混乱が起きないようにしたりしたいと考えている。また、マニュアルも変えるべきところはどんどん変えていきたい。4つ目は、心のケアや医療ニーズに答える災害支援ナースとして働き、被災地の復旧・復興の役に立っていきたいということだ。以前、「死者や傷病者が少なければ少ないほど復旧・復興は早く進む」と教えていただいたことがある。当たり前のような気がするが、その時なるほど確かにそうだと思った。上記に述べた4つのことを行うには多くの人達との協力が必要になる。周りの人とのコミュニケーションをとること、そして何よりも、誰かのために何かしたい、命を救いたいという気持ちを大切にしていきたい。最終的には、自分が学んだこと経験したことを次の世代に語り継げるような人になりたい。

1 はじめに

今から 23 年前の、1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分に、阪神・淡路大震災は発生した。この地震による被害は、死者 6,434 名、行方不明 3 名、負傷者 43,792 名、住家全壊 104,906 棟、住家半壊 144,274 棟、全半焼 7,132 棟にのぼる。

私は当時まだ生まれておらず、震災を体験していない。しかし、これまでに小学校での防災教育や環境防災科の授業で、震災当時の様子や、体験した方のお話を聞く機会が多々あった。そこで学んだことから、この阪神・淡路大震災を神戸市民だけでなく全国の人々に「忘れない」でいてほしいと感じたため、私は被災者の思いを語り継ぐ。

2 母の体験

当時、神戸市西区の戸建て住宅(築 1 年)で、父、長女、長男の 4 人で暮らしていた。ここからは母の目線で書いている。

(1) 地震発生

「ドン」という衝撃があり、縦に揺れた。すぐさま、横にも揺れ始め、強い揺れが止まらなかった。最初、何が起こったのか分からなかった。とっさに、横で寝ていた長男に被さった。すると、たんすの襖が倒れてきた。一瞬、天井が落ちてきたのかと思った。テレビが頭の横に吹っ飛んできていた。揺れがおさまってから、長男を抱っこして 1 階へ降りた。1 階へ降りると、食器棚から約半分の食器が飛び出し割れていた。冷蔵庫も 30cm 程度、前へ出ていた。物置の中のものも飛び出していた。

(2) 情報収集

5 分～10 分程度、停電が起り、そのあとテレビをつけると地震速報が流れていた。外へ出ると、隣の家の瓦が全部自分の家の方に落ちていた。近所の人も出てきた。近所で 1 番被害が大きかった家では、外壁がはがれ、ブロック塀が崩れていた。数時間後、テレビをつけると東灘のほう映っていた。長田の火事も映っていた。そこで地震のすごさを知った。自分のところが 1 番ひどいと思っていたが、くらべものにならないくらいひどく、ショックを受けた。

(3) その後

この時点では、ガスと水道は使えず、電気だけが使えた。余震が何回もあり、こわかった。ある程度落ち着いたところで、食料の確保のため、近所のお店へ行ったが客が殺到し、一瞬で売り切れたようで、何もなかった。ガスはプロパンガスだったためその日に復旧したが、水道は 2 週間止まった。ガスが使えても水が出ないため、あまり意味がなかった。義父の家にさつき盆栽の水やりのために掘られた井戸があったため、水をもらいに行き、お風呂も入らせてもらった。近所の人も断水していたため、義父の家でお風呂に入った。義父は畑もしていたので、畑で採れた野菜で鍋をした。今思うと、義父の家に井戸があったのは、偶然のことであり奇跡だと思う。

そして救援物資が届いた。インスタント食品やおむつ、ガスコンロなどがあった。水もあったため、並んで受け取った。長男のアレルギー用のミルク、長女の発作の薬が手に入るか心配だったが、支援物資としてきていたので助かった。あまり被害を受けていない高砂方面からの車で道が混雑していた。家は風呂のタイルと外壁にヒビが入りドアが開かなかったりしたため、一部損壊と判定された。

(4) 震災を体験して感じたこと

この地震で、テレビの情報と水の大切さを知った。蛇口をひねると水が出てくるのは当たり前だと思っていたが、そうではないことが分かった。水が出たときは、安心感で胸がいっぱいになった。そして、次の災害に備えておくものとして、水、ラジオ、懐中電灯、寒さをしのげるもの、非常食などが必要だと考える。

3 父の体験

ここからは父の目線で書いている。

(1) 地震発生

ばかみtainな揺れで目が覚めた。地震だということは、すぐに認識できた。とりあえず、情報が必要だ

と思い、ラジオを手にした。自宅のすぐ裏にあるアパートに住んでいた友人の家族（奥さんと娘）が家に来た。友人は仕事のため、電車で職場に向かっていた。電車は動かなくなり、舞子から歩いて帰ってきた。街はガスのにおいがすごかったそうだ。近所では、家は潰れていないが、瓦が落ちている家がほとんどだった。余震がとても多かった。

（２）数日後

仕事を何日か休んだ。場所は詳しく覚えていないが、物資の受け渡しが行われているプレハブに使わない靴を届けに行った。前の職場が長田にあり、気になったので長田を通って行った。須磨でガラッと景色が変わった。想像より大きな被害に驚きを隠せなかった。伊川の新幹線が通る橋が落ちていたところが近所で１番大きな被害だったと思う。そして、当時の職場があった二見へ車で向かった。明石・加古川方面はあまり被害を受けていなかった。

（３）今だからわかる問題点

当時は、地震への関心や意識がなかった。今の若い世代は、東日本大震災や熊本地震など大きな地震を経験してはいなくても、地震がどのようなものなのかを知っている。自分たちは地震を知らなかった。そして１番こわいのは、細かいことをあまり覚えていないということ。その日に自分がどんな行動をとったのかもあまり覚えていない、物資を届けに行った場所さえ曖昧である。23年前ではあるが、自分にとって大きな衝撃であったはずなのに覚えていないことが問題だと思う。

（４）震災を通して感じたこと

近所のコミュニティや自治会が機能していないと感じた。今だと、訃報があった場合にチラシや近所同士で情報伝達をするが、震災当時はそのようなことは行っていなかった。当時は寒かったので家で石油ストーブをつけていたが、今思うと余震が何回も起こっていたので危なかったのかもしれない。そのことも含め、あらゆる情報が必要となる。二次災害を防ぐためにも防災無線や広報車で呼びかけが重要だと思う。そして、次の災害に備えておくものとして、水、ラジオ、寒さをしのげるものが重要だと考える。

４ 母と父の話を聞いて

私は、今回初めて両親に詳しい震災当時の話を聞いた。この「語り継ぐ」がなければ、これからも聞くことは無かったと思う。環境防災科の授業で外部講師の方のお話や、校外学習での語り部さんのお話とはまた違った緊張感があった。

母と父の話を聞いて、生活をする上で水はとても大きな役割を担っているということを改めて感じた。今までも水は2L×1週間×家族分を備えておくようにと学んできた。通常の生活では蛇口をひねると水が出てくるのは当然である。しかし、それは当たり前のことではない。私たちはいま、ライフラインに対して何も不自由なく暮らしているため、ありがたさを感じることは無いに等しい。電球が切れたり、雷などで停電になったりして電気のない生活を体験したことはあるが、それも数十分程度だったと思う。人は体験して窮地に追い込まれないと、備えようと思わない。私もそうだが、どうしても大丈夫だろうと思ってしまう。しかし、窮地に追い込まれてからだと遅い。それを、母と父の話を聞いて実感させられた。そして、母と父が１番重要だと言った水道は、ライフラインの中で復旧するのが１番遅かった。そのことから、日頃から備えておくことが本当に大切なのだと思った。

水の次に大切なのは、テレビやラジオから得られる情報だ。電気が止まると、テレビを見ることができない。そのため、テレビに頼るのではなく、ラジオを備えておくことも大切だ。しかし、ラジオは聴覚だけの情報となってしまう。最低限となるとそれでいいと思うが、聴覚＋視覚の情報入手はとても重要だと思う。私の母もそうだが、テレビで被害が大きい地域を見てこの地震のすごさを実感した人もいる。それがなぜ重要なのかというと、自分の地域が１番大きな被害を受けていると思ってしまい、精神的にもしんどくなってしまうからだ。父の話の中で、使わない靴を原付で届けに行ったという話があった。その話を聞いて嬉しくなった。被害は比較的小さいが、自分も被害を受けたはずなのに、もっと大変な人がいると思って届けに行った父を、素直にすごいと思った。でも、こうして届けに行こうと思ったのも、大きな被害を受けたところや、物資の受け渡しを行っている場所を情報として知ったからである。これらのことから、テレビやラジオでの情報は災害発生時には欠かせないことが分かった。

そして父から話を聞いた際に、忘れていることが多いと感じた。母から話を聞いたときは、比較的すらすらと話してくれたので何も思わなかったが、父はあやふやなところや「忘れてもたな」と言いながら話してくれた印象がある。23年前の出来事だが、衝撃的だったはずなのに忘れていているという現状だ。父もこのような現状が問題だということは自覚している。しかし、このような人は父だけではないと思う。父は、この震災で家族や友人など大切な人を失っていない。このように人それぞれの被害状況にもよると思

うが、これが風化につながってしまうのかと思った。体験していたとしても、大切な人を失った人と、失わなかった人とではこの震災に対する思いは全く違う。こうした受け止め方や価値観の違いが、この震災の印象を大きく変えてしまう。

5 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科を受験しようとおもったきっかけは、地震に興味を持ったからだ。阪神・淡路大震災が兄の1歳の誕生日だったこともあり、震災を少し身近に感じ、関心を持った。舞子高校の普通科のオープンハイスクールには参加したが、環境防災科の方には参加できなかったため、学校全体の雰囲気をつかむことはできたが、環境防災科について詳しくは分かっていなかった。そして、舞子高校のホームページで環境防災科の理念や活動などを調べていると、市民のリーダーを育成するという言葉が目に入った。リーダーと聞いて、カッコいいと思った。私は進んでリーダーなどをする方ではなかったが、素直になりたいと思った。そして、中学生のころに震度3ほどの地震を体験した。2階にいたため、震度3以上の揺れのように感じた。その地震を体験してさらに、家族を守りたいという気持ちが生まれた。地震のメカニズムなど基礎知識を身に付け、災害に対してどう備えればいいのかなどを学びたいと思った。そして私は環境防災科に受験を決めた時、防災に関する職業に就きたいとも思っていなかったし、明確な夢もなかったので、面接官の先生に思いが伝わらなかったかなと思った。しかし、環境防災科に合格したときは大げさだが、認められたような気がして本当に嬉しかった。この気持ちを絶対に忘れてはいけないと思った。

(2) その後

環境防災科に入学し、今までたくさんの校外学習や環境防災科にしかできない経験をしてきた。

その中でも印象に残っているのは熊本地震ボランティアだ。最初、熊本に行くとき聞いたときは、突然のことで複雑な気持ちになった。被災地ボランティアは初めてで、現地に行きついたらニーズにこたえることができるのか、無事に帰って来れるのかなど不安が大半だった。その気持ちは出発日まで消えなかった。しかし、現地に着き、被災地の現状を実際に自分の目で見た途端、やるしかない、何か力になりたいと思った。初日は、熊本市の家屋の片づけなどのボランティアを行う予定だったが、ボランティアセンターのミスで益城町へ行かせていただくことになった。益城町はとても被害が大きかった。がれきの撤去などをさせてもらう中で、その家の方のお話を聞くことができた。面識のない私たちに一生懸命話してくれた。最後に「本当にありがとうね」と言ってくださって涙が出そうになった。しかし、実際にボランティアが出来たのは初日だけだった。梅雨の季節で、天候が悪く外での活動が出来なかった。私は、何をしに来たのか分からなくなった。でもそれは私だけではなく、クラスの間みんな同じ気持ちだった。でもそんなときにこの言葉が私に熊本にボランティアをしにきた意味を教えてくれた。それは“微力だけど無力じゃない”という言葉だ。この言葉を聞き、自分の心の中でもやもやしていた部分が晴れた気がした。2日目以降は、菊池農業高校の方の配慮もあり、思っていたボランティア活動はできなかったが、無駄ではない4日間を過ごすことができた。今回の熊本地震ボランティアで支えてくれている方への感謝の気持ちの大切さに気付くことができた。優しく「頑張れ」と言ってくれた親や、宿泊場所やご飯を用意してくださり、快く歓迎してくださった菊池農業高校のみなさん、舞子高校の先生方、現地のボランティアセンターの方々、他にもたくさんの人たちのおかげで、私たちは熊本でボランティアを行うことができた。このような感謝の気持ちはこのボランティアで気づくことが出来たが、これからの日常生活でも大切なことである。今、私が苦労なく過ごしているのも、たくさんの人に支えてもらっているからであり、そのことを忘れずに生きていこうと思った。

6 防災教育

小学校での防災に関する授業で、阪神・淡路大震災でマンションの中央部分が大きく崩れた写真を見て、そのときに受けた衝撃は今でも忘れられない。私の小学校では、1.17 光のつどいという追悼行事が毎年行われていた。それは、小学校高学年の生徒が司会・進行を務め、震災を忘れないために震災当時の写真などをスライドショーにまとめてその日の記憶を伝えるという防災教育の一環である。その行事の最初には必ず黙とうをするのだが、小学生の私は黙とうの意味さえ分からずただ周りにあわせていた。今思うと恥ずかしいが、他にも意味も分からずしていたという子は少なからずいたと思う。黙とうというと今では意味が分かるが、小学生に何も説明せず黙とうと急に言っても形だけであり、する意味がない。小学生はいろいろなことを吸収する力がある。私がそうだったからこそ、大人は当然だと思っていることも小学生の立場で考える必要があると思った。

7 これから

私は将来人の役に立ち、人を笑顔にできる仕事に就きたいと思っている。これは中学生のころから変わっていないが、明確にこの職業とはまだ決まっていない。しかし、テレビで取り上げられていた自分の好きなことを職業にしている人たちを見て、私もそうなりたと思った。自分の好きなことをしている人たちは、働いているのにキラキラして見えた。そんな人たちを素敵だと思った。私は花とインテリアが好きだ。この色にはこの色が合うなど色の組み合わせを考えたりするのもとても楽しく感じる。自分のセンスで組み合わせたりして、自分だけにしか作れないようなものを作りたい。そして、たくさんの人に快適に幸せな気持ちで毎日を過ごしてもらいたい。そんな生活の空間をデザインする仕事に就きたいと考えている。一見、防災とは関係のない職業に見えるが、今まで学んできたことを無駄にはしたくない。今までの知識も生かしていきたいと思う。そのためにはどうすればいいのか、これからじっくり考えていきたい。

手話を広めるために

千田 優美

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に私たちの町、神戸を地震が襲った。私は、阪神・淡路大震災から4年後に生まれた。だから震災を経験していない。変わり果てた神戸の町も知らない。この「語り継ぐ」を書くにあたって、当時から東灘区にある人工島の六甲アイランドに住んでいる母と、須磨区の名谷に住んでいる祖母に話を聞いてみた。

2 母の話

(1) 1月17日

3連休が終わり、なぜかその日の夜に限って眠りにつけず、明け方に布団の上に座っていてやっとうにか眠りについたかと思っていた。すると、今までに聞いたことのない地面からゴーンという地鳴りの様な物凄い音がしたかと思った途端、ドッカーンと地面から突き上げられた。全ての物が壊れる物音と物凄い揺れで全く立ち上がる事も出来ずに、とっさに自分と一緒に寝ていた猫の首を捕まえて自分のお腹の下に抱え込み、隣に寝ていた父の頭の上に覆いかぶさった。その瞬間、ライトや大きな絵など色々な物が母の背中を直撃した。揺れがおさまるまで四つん這いの姿勢のまま大声で「地震だ!」と何度も叫び続けた。揺れがおさまると、シーンと静まり返り、母が1番驚いた事は明かりが月の光しかなかったことだ。人生で本当に真っ暗というのをこの時初めて経験した。全てが真っ暗で何も見えず、とっさに目が慣れるまで待ち、どうにか玄関まで行き靴を履いた。

朝になると家の中はとんでもない事になっており、何度も何度も来る余震に恐怖を感じていた。その日のうちにマンションの住民たちから「長田の方でどうも火が出ており、沢山の人が亡くなっているようだ。住民の代表の数名でどうにか現地へ行くので住民全員で今家にあるご飯でおにぎりを握ってくれ。」と言われた。悔しさと悲しさで泣きながら1人でおにぎりを沢山作った。毎晩毎晩NHKで夜通し神戸市の何区、死亡した人の名前が出てくるのをじっと見て、知り合いがいないことを祈り続けた。父のいここが新長田の方で亡くなり、全ての乗り物が動いていなく、父は1人で新長田の体育館に歩いて行き遺体を確認した。何とも言葉では言い表せられない世界だったそうだ。父はそれ以外何も話してはくれなかった。

(2) 自分との葛藤

母はボランティアに登録し、長田の方にバスで現地入りし救援物資を配る役に回った。果てしなく続く瓦礫の山と損壊した家にダンボールや紙が貼られていた。家族の生死と避難場所が書かれた紙を見ながら黙々と公園へ通った。言葉も全く発せられず、戦争を経験した事はないが、まさに町全体が破壊されたような悲惨な様子だった。公園で全国から集められた救援物資を配ったが、1番驚いたのは温度差だった。この悲惨な状況でこんな派手な下着は着ないだろう、この寒さの中でこんな南国のような服は必要ないだろうと思えるような物が沢山あり、送る側と送られる側の温度差に驚いたそうだ。ボランティアのリーダーが「この状況で沢山の救援物資を大量にグループで取り、商売に使う者がいる。」と言われ、実際に救援物資を貰う為に待機している住民のグループを指さし「あのグループとあのグループには極力渡さないように。」と指示された。ボランティアを行っている最中は決して泣いたり怒ったりはしてはいけなく、自分の感情をコントロールしなくてはならないと決めていた。だが、何度も何度も色々な場面で発狂しそうになった。1人の高齢の女性が住民に連れられ救援物資を貰いに来たが、「ありがたい。お気持ちだけでありがたいです。」と全く何も受け取ろうとしない時に「お願いですから、貰って下さい。おばあちゃんはこれから生きて行くんだから、お願いします。」と初めてその時に自分の感情が爆発した。泣きそうになりながらも唇を噛みしめて我慢したが、その時には全く分からなくなっていたそうだ。たった数秒の揺れで全てを失った側と失わなかった側の間でこんなにも差があることに戸惑っていた。

兵庫区の友達は「家も潰れ、沢山の人が目の前で生き埋めになっているのをがむしゃらに何人も助け出したが、火が出た時は目の前で生きたまま焼けていく幼い姉妹を見て、そのお母さんが半狂乱になって火の中に飛び込もうとするのを力づくで止めた。」と泣きながら母に話したそうだ。その人は「自分は自分が死ぬまであの地獄絵図は頭から離れない。地獄だ。」とポロポロ泣いていた。別の友達も垂水で毎日毎朝から夜まで給水車にポリタンクを持って行っていた。飼っていたペットが地震の時にショック死し

たと肩を落としていた。

新長田の避難所になっている学校へもボランティアで訪れた。1つ1つの狭い教室の中にパーテーションもなく畳3畳分の広さが1家族ずつ適当に与えられていた。そこでも、家が全壊し、仕事もなくし途方にくれる人たちに救援物資を配った。しかし、自分の親以上、祖父母以上の人たちに頭を下げられ、感謝される度にとっても複雑に心が揺らいだ。この人たちはこの先どうなるのか。何に一体自分は感謝されているのか。どの様な言葉をかけるべきなのか。全てに対して疑心暗鬼になり初めてボランティアの難しさ、人が想定外の場面で人を支えようとする難しさ、もどかしさを感じた。その当時、結婚したばかりで人生の経験も浅く、どうにかして隣人の支えにならなければと独りよがりの思いや焦りの気持ちばかりが前に出た苦い経験だったそうだ。皆が本当にくたび果てていた。しかし、少しずつ電車が通り、道路が直り、お店が開き、今思えば時間が経つことでどうにか少しずつ少しずつ元気を取り戻したのではないかな。けれど、家も全て焼けて失い、家族を亡くした人たちの苦しみを思うと何とも言葉に出来ない。

3 祖母の話

祖母は、震災当時祖父と団地に2人で住んでいた。5時46分、2人は布団で寝ていたが激しい揺れで目が覚めたが身動きが取れず、起き上がることができずにいた。タンスや本棚の上にあった全ての物が落下し、家の中でもスリッパを履かなければ歩くことができなかった。外を見ると周りの家では火災が発生。家は崩れておらず、全ての窓やドアは開いたので祖母はひとまず安心。家は水や電気が次の日少し止まったが、その他のライフラインは止まらず、避難所へは行かずそのまま家で過ごしていた。

何日か経過し、祖父が車を出し、祖母は暖かいお風呂を準備し、違う区の被災された方々を家に招きお風呂に入れてあげた。1週間に1、2回程家族全員で来るのですぐお風呂場がごみだらけになってしまった。お風呂に入れてあげて祖父が送っている間に祖母はお風呂を掃除し、何度も繰り返すと自分たちがお風呂に入って寝られるのは夜中の2時をまわっていた。高い所に物を置かないこと、ストッパーを全ての物にかける事、備蓄を少ししておく事、祖母は阪神・淡路大震災を経験し皆に伝えたいそうだ。

4 思うこと

初めて阪神・淡路大震災当時の話を詳しく聞くにあたって、聞く相手が1番身近な親でも聞きづらさがあった。日頃から「あの時はこんなだったよ。」などと少しでも話を聞く事はあったが詳しく聞いてみることで初めて知ることがたくさんあった。親がとった行動や、周りの人たちの様子、当時のボランティアの難しさなど、考えさせられる事が山ほどある。この「語り継ぐ」を書きながら、私自身も辛くなるばかりだった。当時はボランティアが主流ではなく、何をしたらいいのかも分からない状況の中で地域ごとに協力し合って違う地域の人々の為に動くことは素晴らしいことであり、忍耐力の強さが必要だと思った。被災地で救援物資を配る際に、「私は大丈夫」と言われたらどういった対応をとるべきか今の私には、その状況の中ではきっと頭が真っ白になってしまう。

生きたまま焼けていく幼い姉妹とその子の母の話を聞いたのは今回が2度目だった。もし自分がその状況に遭遇したらどういった行動をとるか、考えることができなかった。火が出ていなかったら助かっていたかもしれない命。もう少し早く助けてくれる人が来ていたら助かっていたかもしれない命。そんな命はたくさんある。姉妹の母親は、自分の子供が目の前で生きたまま死んでしまい、悲しさや、自分の無力さ、言葉に表すことのできない感情をたくさん抱き、一生その光景を忘れることはできないだろう。助かっていたかもしれない命をどう救っていくのか。それは我々人々の課題である。地域のコミュニケーションの取り方や、事前の防災学習、備えることなど、今からでもできることはたくさんある。災害時どこに避難するのかを知っているだけでも、それは防災への1歩と呼べると思う。環境防災科の先生は「1人が100段の階段を上ると、100人が1段の階段を上るのは同じだ。」とよくおっしゃる。環境防災科の生徒は1人ずつが100段の階段を上れるよう日々努力している。だが、みんながみんなたくさんの階段を上れる訳ではない。地域などで防災を教える時は、100人が1段の階段を上ることを目標に、私は防災を伝えていきたい。

5 南海トラフ地震

今後30年以内に70%の確率で南海トラフ地震がくると言われている。最大死者数は33万人と考えられない数字だ。私の住んでいる神戸市東灘区には地震から110分後に4メートルの津波が来ると言われている。私の町の海拔は低い所で3メートルだ。母は私に「当時はボランティアがどういったものなのか何も分からずにやっていたからきつかった。舞子高校の環境防災科で防災について専門に学び、緊急対応

などについても学んでいる私は頼もしい。」と言われた。地震が起きた時にこういった行動をしたらいいのかわかっていても、大きな揺れを経験したことのない私からすると、母の言葉に疑問を感じた。

私は高校1年生の時から南海トラフ地震がくるまでに地元である六甲アイランドを防災の町にする事を目標に勉強をしてきた。だが実際、防災に興味のある人に防災を教えることができて、防災に興味のない人に防災を教えることは想像以上に難しい。防災は面白いことでも楽しいことでもない。だが、防災は誰しもが知っておかなければならないことだ。防災に興味のない人にどう防災に興味を持ってもらおうかという方法はたくさんある。では、防災に興味のない人に防災を教える機会はあるだろうか。舞子高校生がよく参加させていただいている地域の防災訓練では、防災を教えるには最適な場所だ。だが、そもそも防災訓練には防災に興味がある人しか参加しない。防災に興味のない人に防災を教える機会をもっとたくさん作っていくべきだと感じた。

6 手話を通じて

私の祖父は聴覚障がい者だ。後天的な中途難聴者だ。

環境防災科1年生の授業に「災害と人間」という授業がある。その授業には消防士や、警察官を含め様々な職業の方をお招きし、阪神・淡路大震災当時のお話をお聞きする。ある時、垂水区聴力言語障害者福祉協会の方にお越しいただき、聴覚障がい者や手話について教わった。私は、祖父が聴覚障がい者ということもあり指文字を知っていたので、その時手話ということにとっても興味をもった。それから私は1年間手話の講座を受講した。受講しようと思ったきっかけは、祖父だ。私が小学生の時に祖父は聴力を失った。その当時、私は聴覚障がい者というのがどういうことなのか全く理解できなかった。むしろ、話しかけても何も通じない祖父が怖かった。祖父が聴力を失ってから、家族でいるともめ事が絶えなくなった。それは、小学生の私にも分かった。中学生になり、祖父は1人だということに気が付いた。耳が聞こえないということはどれだけのコミュニケーションを失い、どれだけの友達を失うのかということを知った。私は祖父を1人にはさせないと決めた。祖父の家に行った時に「この手話はどういう意味でしょう」と嬉しそうに言ってくる。私は、手話を勉強したら祖父と会話をすることができるという事を知った。コミュニケーションをとる方法は言葉だけではないことに気が付いた。

祖父の趣味は山登りだ。1か月に1度は必ず山登りに出かけている。六甲山系の尾根沢はほとんど案内ができるほど登っている。だが、鳥のさえずり、小川のせせらぎ、森の木々のざわめき等何も聞こえない。山道ですれ違った人にあいさつをするが返してくれたかどうかは口元(口話)をずっと見ていなければ分からない。見ていても分からない時がある。そんな祖父は山登りを心の底から楽しんでいるのだろうか。聞こえないからといって、いつでもどこでも補聴器で音を入れられる訳ではない。健聴者なら無視することのできる、暖房の音やハイヒールの音などという背景音を全て補聴器は拾うのだ。補聴器をただつけさえすれば聴こえの問題が解決する、という簡単なものではないのだ。

そんな聴覚障がい者に私たちはどう接しているだろうか。私は高校に入学してから、地域の聴覚特別支援学校の人との交流会に何度も参加させていただいた。最初は、どう接したらいいのか分からずに笑って鎮くことしかできなかった。だが、3年目になると知っているほんの少しの手話や筆談等で話が盛り上がることも多くなった。私たち健聴者が言葉だけがコミュニケーションの方法でないように、聴覚障がい者の方々も手話だけがコミュニケーションの方法ではない。手話を知っていない人でも聴覚障がい者の方々とながっていくことはできる。私は、聴覚障がい者の方々のことや、手話について広げていきたいと考えている。もっと聴覚障がい者のことを知ってもらい、もっとたくさんの人に理解してもらいたい。聴覚障がい者の人が暮らしやすい町を作る為には、まずは知ってもらうことから始めたい。聴覚障がい者の方々はほんの少しでも手話を知っていたら、とても喜んでくださる。健聴者が「おはよう」や「ありがとう」などといった簡単な手話だけでもすることができたら、それは聴覚障がい者の方々が暮らしやすい町に1歩近づいたと言えるのではないかな。もっとたくさんの健聴者と聴覚障がい者が理解し合える社会を作っていきたいと思う。

7 環境防災科

私は、中学2年生の時に環境防災科の存在を知った。母に「舞子高校という学校には防災を専門に学んでいる学科があるんだよ。」と言われたのがきっかけだ。私は当時、消防士になるのが夢だった。防災を学び災害時に1人でも多くの災害時要援護者の命を救いたいと思ったからだ。

環境防災科に入学し、たくさんの防災の事について学んだ。高校1年生の冬、全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加させていただいた。合宿中、グループごとに各校の防災の取り組みを発表し合う時間が

設けられた。他校の防災の取り組みを聞いて私は圧倒された。私たちは、環境防災科という専門学科がある為、日々防災を専門に学んでいるが、他校は、自らの力で先生に声をかけ活動をしている。その差は小さいようでとても大きいもののように感じられた。私たちでは考えもつかないような活動や企画をされていて、舞子高校の小ささをその時初めて知った。舞子高校環境防災科は先生や大人の人に敷いてもらったレールの上をただ走っているだけだ。だが、他校は土台となるそのレール自体を自分たちの手で作っている。私たちはこれから皆違う道に旅立つが、各自が各自のやり方で防災を広める方法を編み出し、防災を広めていくべきだ。

8 私の夢

私の将来の夢は、まだ決まっていない。だが、上記にも述べたように手話を1年間教わってきた。1年間教わることでたくさんの方々と出会い、沢山の思いもしないような喜びにも出会えた。今後どんな形であれ手話を続けて行きたいと思う。手話通訳士や聴覚特別支援学校の教諭など手話を生かした職業は沢山ある。そういった職業に就けなくても、ボランティアなどを通じて手話を行い聴覚障がい者の方々とこれからもつながっていききたい。日常生活で手話を使う機会がなくても、災害時に手話のできる人は必ず必要となってくる。聴覚障がい者の方は災害時1人になりやすい。何も聞こえないと、救援物資がきたことや、今の状況など情報を入手することは難しい。話す相手がいないと心を閉ざしてしまう可能性も低くはない。災害時、支援する側ではなく支援してもらおう側になったとしても、避難所などで1人になっている人に寄り添っていけるような人になりたい。その為にも、地域の祭りだけではなく、防災訓練などにも参加し、コミュニケーションの取り方を身につけていきたい。この3年間で様々なボランティアに参加させていただいた。失敗することも多く、その失敗からたくさんのことを学んだ。学んできたことだけではなく、その時に感じたことなども忘れずに生かし続けたい。そして、災害時には地域のリーダーとして1人でも多くの人の命を救っていききたい。

震災の記憶を語り継ぐ

滝川 拓海

1 はじめに

神戸には地震が来ないと思われていたが、阪神・淡路大震災が発生し、甚大な被害を被った。私の母は当時長田区に住んでいた。母から阪神・淡路大震災について初めて詳しく話を聞いた。

私は阪神・淡路大震災の4年後に生まれた。私は幸いにも大きな災害を体験したことがない。大きな地震に遭ったこともないし、津波に遭ったこともない。そんな何の経験のない私にできることは、被災者の方たちのお話を聞いて、それを多くの人に語り継ぐことだ。

2 震災の概要

地震名：兵庫県南部地震

発生日時：1995年1月17日 午前5時46分52秒

震源地：淡路島北部

震源の深さ：16km

マグニチュード：7.3

3 震災の朝

・叔父の話

震災当時、山口の徳山にある会社で働いていた。電話で地震が起こったことを知り、急いで車を使って神戸に向かった。140kmくらいのスピードを出していたそうだが、捕まってしまうという考えは無かった。須磨に入ったところで、渋滞や道に出た瓦礫のせいで車が入っていけなくなり、車を置いて駒ヶ林まで歩いた。駒ヶ林に着くと、瓦礫や火事の煙が街を覆っていて戦後のようだった。家の近くにあった商店街は火事で燃えて火のトンネルと化していた。家に着くと、みんな無事だったのでほっとした。食料が足りていないと思い、山口からカップラーメンを持ってきたが、断水していることを全く考えていなかったので作れなかった。

・母の話

震災当時は長田の長屋に住んでいた。震災前日にスーパーに買い物に出かけた。その際に地震に遭った。体感では震度2か3だった。その晩、屋根裏のイタチがいつもより暴れていると感じた。そして次の日の朝、阪神・淡路大震災が起きた。大きな揺れに襲われる中で、必死に0歳の長男に覆いかぶさって守った。揺れがおさまり、隣に住んでいる人が気になり外に出てみると、隣の家がなくなっていた。母が当時住んでいた家は、震災より少し前に梁だけ変えていたから潰れなかった。

とりあえず、母の家の近くにあった祖父の家に行った。すると、祖父は「人」の字の形に倒れた二個のタンスの間に寝ていた。祖父の家は二階建てだったが、元々三階建てにするつもりだったので基礎はしっかりしていた。そのおかげで家は潰れなかった。祖父の家にはソーラーパネルがついていたので、近所の家の中では一番早くお湯が出た。お湯を水でぬるくし、浴槽に30cmほど溜めて体を洗った。また、祖父の家には地下からひいてきた水道があったので、近所の人に開放していた。

・祖母の話

看護婦の資格を持っていた祖母は、被災直後は救助活動をしていた。潰れた家の中から遺体を運び出し、その家の前の歩道に並べた。渋滞が起っていた為に消防車が通れなかったり、車が消防車のホースを踏んで水が出せなくなっていたりしていたところを見た。

4 被災直後

父は仕事に行き、母は明石に避難し、家で長男の面倒をずっと見ていた。しばらくすると、父方の祖父の双子の弟が長田区久保町にある古いビルの一室を貸してくれた。そこを掃除するために、明石から向かったが、車が道路を走れる状態ではなかったので自転車での移動になった。あかぎれで雑巾がうまくしぼれなかった。その家にはエアコンは無く、湿気が多く、ムシムシとしていた。長男がその家で寝付けなかったのも、外で涼まして、寝付かしてから家に入っていた。

食料は祖母が配給されていた弁当やパンを毎日持ってきてくれた。数日同じ物ばかり食べていたので、途中から味がしなかったと感じた。その生活は数週間続き、贅沢を言うが食事は味わうことはなく、飢え

を凌ぐために機械的にとっていた。

私が小学校2年の2学期まで通っていた「旧二葉小学校」は避難所と遺体安置室になっていた。校舎のすぐ裏側まで火が迫っていて、多くの人々は校舎内から出ようとしていた。

5 これからの長田

震災から未だ復興を続ける長田区周辺。しかし、その復興は成功しているとは言えない。どんどん新しい家やマンションが建ってきているが、震災以降、人口は減少し、高齢社会となった。商店街は一見賑わっているように見えるが、奥に進んでいくとシャッター街と化している。過疎化を何とか食い止められなければ、長田区はさびれた街になってしまう。

長田区には震災復興モニュメントが多いが、多くのものはそれが復興モニュメントと理解されていないものが多い。例えば鉄人28号。あれは長田の復興のシンボルとして建てられているものだが、多くの人からは町おこしだと思われる。鉄人28号ができた当初は観光客が多く集まったが、今はもういない。私は15年間長田で過ごしたが、この15年間でも過疎化が進んだことがわかる。このように、長田区は今、過疎化という大きな課題に直面している。その原因の一つに、震災で県外へ避難した人が戻ってこないということがある。震災以前の長田は、人に溢れ、地域コミュニティが強かった。隣の家の人はどこで寝ているのかも把握していた。しかし、震災以降そういった地域のつながりは消えていった。今では近所の人とあいさつはしても、名前は知らなかったり、ましてや、あいさつをしない人もいたりする。

現在の長田区は、高齢者同士のつながりは強いが、私たちのような若い世代のつながりがほとんどない。災害には物理的に強くなっただけでは、昔のような活気のある長田区には戻れない。町がどれだけ新しいマンションを建てようが、震災復興モニュメントを建てようが、過疎化を食い止め、多くの人が長田区へ来なければ長田区はいつまでも被災地のままだ。

私はこれからも長田周辺で過ごしていくと思う。長田周辺で生きていく者として、この課題を行政に任せきりにするのではなく、自分が長田にできることを考えていきたい。

6 環境防災科に入るまで

私は母と同じく、長田区で生まれ育った。小さいころから避難訓練をやってきたが、長田区が阪神・淡路大震災で最も大きな被害を受けたと知ったのは小学校高学年になってからだった。当時の私は防災に何の興味もなく、防災教育の時間も「授業が潰れてうれしい」と思うだけであった。しかし、小学校5年の終わりに東北地方太平洋沖地震が発生した。日本で大変なことが起こっているんだなあと軽く感じていただけだったのだが、テレビで黒い津波が絨毯を敷くように街を飲み込んでいく映像が流れた。それは当時の自分にとってはとてつもない衝撃だった。日本で起こっていることだとは到底考えることもできなかった。ただテレビの向こう側から被災地を見ることしかできなくて、無力感が私を襲った。自分は傍観者で、何もできないと強く感じた。テレビを観る度に増えていく犠牲者の数。もしその中に一人でも自分の大切な人が入っていたら、自分は耐えることができないと感じた。しかし、今増えていっている犠牲者の数の一人ひとは誰かの大切な人だった。そう感じたときにみんなを守らなければならないようになった。中学に入り、年上の知り合いが環境防災科に入っているという報告を受けて、環境防災科の存在を知った。何が何でも入ると心に決めた。

7 環境防災科に入って

環境防災科に入って感じたのは、震災を経験している人との差である。それは経験している人との年が近ければ近いほど感じさせられた。石巻西高校と交流させていただいた時も、多賀城高校と交流させていただいた時も、菊池農業高校の生徒さんたちと話しているときもずっと差があると感じた。私は大きな災害に巻き込まれたことがない。それはとても幸運なことだが、経験しないとわからないものがたくさんある。私はこの差をどうにかしなければ、経験していない私たちが語り継ぐのは難しいと思う。震災当時に見たもの、聞いた音、臭い、感じたものは人それぞれである。人から聞いた話だけでは人には伝わりにくい。

私は環境防災科で一番深く学んだことは、「自分の目で見て、耳で聞いて、心で感じること」だ。1年の時から東北被災地訪問に続けて行かせていただいている。そこで見たもの、聞いたもの、感じたものはずっと忘れずに心の中に残っている。東日本大震災を経験してはいないが、津波の恐ろしさを体全身に思い知らされた。自然の脅威には人間の力は到底及ばないと感じた。

前述したように、私は長田区で生まれ育った。しかし、災害に対して危機感を覚えていなかったのは、

「震災を記したもの」が近くになかったからだ。震災復興モニュメントはたくさんあったが、震災の被害を残したものがなかった。私が生まれ育った長田区は復興している長田区であって、震災当時の長田区ではない。だからこそ、阪神・淡路大震災の被災地に住んでいるという実感が湧かなかったのだ。震災の語り継ぎは、「話す」だけではなく、「モノ」としても残していかなければならない。震災の記憶をモノとして残すことで、経験していない私たちが何を感じたのかを語り継ぐことができる。私はこれから、震災を経験している人との差を埋めるために、被災地へ行って、震災の記憶を見て、経験していない立場から見た災害を語り継いでいきたいと思う。それが現在の環境防災科の使命であり、私なりの「語り継ぐ」の在り方である。

8 他校生との交流

私は環境防災科に入って色々な高校の生徒と交流してきた。福島西高校、石巻西高校や多賀城高校、真庭高校、菊池農業高校等多くの高校生と出会った。今でも会いに行ったり、連絡を取り続けたりしている。私が出会った高校生の多くは震災に遭った人たちである。同世代ということもあり、すぐに仲良くなり震災のことについて話してくれたり、震災時の写真をくれたりする。いつも震災の話を聞くときは、大人の方が多いので、高校生の立場から見た震災の話はとても興味深かった。寮生は学校の校庭で寝泊まりしたり、親に放置されたり、親が震災の影響でイライラし、すぐに怒られるようになったりなどの色々な話を聞かせてくれた。子供から見た震災は、地震の恐怖だけでなく、震災直後の身の回りの変化にも怖がらなくてはいけなかったと感じた。災害では子供のほうが大人より、大きい心の傷を負うかもしれないとわかった。大人と子供の立場から見た震災は全然違う。災害時は、大人は大人と一緒に、子供は子供と一緒に過ごしたほうがいいのかもかもしれない。

災害が起こったことによってつながった高校生が多くいる。もし、東日本大震災が起こっていなかったら、熊本地震が起こっていなかったら、私たちはお互いに見知らぬ人同士であった。私と同じように、大きな災害には巻き込まれていないが、何らかの影響を受けて防災を学ぼうと思っている人ともたくさん出会った。高校生で防災を学んでいるのは環境防災科が多賀城高校の災害科学科だけだと思っていたので、こんなにも多くの高校生が防災について学ぼうと思っているのかと思うとうれしかった。

災害は人と人をつないでくれることに気が付いた。この関係は高校を卒業しても切らず、もう一度現地に行って交流したり、遊んだりして続けていきたいと思う。私たちは震災を風化させないために語り継いでいく。しかし、現地に行き続けること、現地の人と連絡を取り続けること等、こういったことも災害支援につながるはずだ。

9 将来の夢と防災

私の将来の夢は2つある。1つ目は防災を全国に広めていくことだ。具体的には中高生へ向けて防災を発信したい。

中学の時は、住んでいる地域が長田区ということもあって、学校の先生や友達、近所の人みんなと災害について一度は話したことがある。しかし高校へ入学して普通科の生徒と話してみると、全く防災に興味がないことに気づかされた。私は防災を学ぼうと思う前の自分を思い出した。私もあの東日本大震災がなければ災害や防災に興味は全くなかった。「災害が起こったらその時はその時や」という声が聞こえた。みんな災害が起こった時に「自分は死なない」という思い込みをしている。それは脳の正常な働きだと授業で知った。その思い込みを無くさなければ、災害が起こった時に大きな被害が出る。私はできるだけ多くの高校生に災害や、防災・減災について広めていきたい。

2つ目は、人に寄り添える人になることである。環境防災科に入って、たくさんの将来の夢を持った人たちに会った。消防士や教師、警察、自衛官や防災の専門家など、皆ははっきりとした夢を持っていた。夢を追いかけ人を応援してあげたい、サポートしてあげたいと思う。それは環境防災科の生徒だけでなく、全国の人々皆である。夢を一心に追いかけている人を見ると、自分も頑張ろうと思える。

人に寄り添うということは災害直後の心のケアで必要なことである。大きな災害に遭うと心は元気をなくし、閉じこもってしまう。そんな人たちを元気にさせ、夢を追いかけられるようにさせあげられるような人に私はなりたい。

これまでに交流してきた高校生には本当にたくさんの人がいた。色々な考え方を持っていて、みんな個性があり、話していて学ぶことがたくさんあった。こんな人たちを災害から守りたいと心の底から思ったのが、この夢を持ったきっかけである。私は全国の中高生と交流がしてみたい。災害に対する意見を交換し、この夢を叶える材料としたい。そして、私は全国の防災を学ぶ高校生をつないでいきたい。全国の高

校生がつながることで色々な意見が出てきたり、新たな防災を発信するグループができたりする可能性がある。人と人がつながる場所になることも、防災を広めていくことにつながると思う。

10 語り継ぐ

母や親戚に阪神・淡路大震災の話を書くのは初めてではなかった。小さい頃から、稀に話してくれていた。しかし、文章に起こして記すのは初めてである。今回、震災の話を書いて感じたことは、被災者の数だけ阪神・淡路大震災があるということだった。

環境防災科は阪神・淡路大震災の語り継ぎを目的に設立された学科であるから、1年の頃から色々な立場の阪神・淡路大震災を聞いてきた。警察、消防士、自衛隊、水道局、大阪ガス、NTT 西日本など、多くの立場から話を聞かせていただいた。しかし、親や親戚から震災の話を書くのは新鮮なところがあった。先輩の「語り継ぐ」を読んで、本当にたくさんの震災の記憶を見た。親の震災の記憶も聞いた。多くの人々の震災の記憶が阪神・淡路大震災を作っていると感じた。この阪神・淡路大震災の記憶を、記憶を持たない私たちが語り継いでいかなければならない。震災を風化させないために私たちにできることは未だにわからないが、震災の記憶を持っていない私たちが語り継ぐことで広がる防災もあるはずだ。

私は、阪神・淡路大震災だけではなく、他の災害に関しても語り継ぎたいと思っている。それは、東日本大震災と熊本地震である。東日本大震災は何度も書いており、私が防災を学ぶきっかけとなった震災だからである。全く防災に興味が無かった私を、防災を全国に広めようと思う様になるまでにさせた衝撃的な震災だった。震度7の地震だけでなく、津波を伴い、多数の犠牲者を出した。そして原子力発電所を襲い、放射線が町にばらまかれた。未だなお、避難生活を余儀なくされている人々はたくさんいらっしゃる。仮設住宅も減ってはいるが、未だにそこで暮らしている方もまだまだたくさんいる。福島県出身だからだといじめられたというニュースも、最近耳にするようになってきた。東日本大震災はまだ終わっていない。避難していた人が地元に戻るまで、いじめがなくなるまで、以前の活気のある東北になるまで震災は続いていく。大川小学校で感じた無力感と守れなかった悔しさはいつまでも私の心の中に残り続けるだろう。私は震災以降も苦しめられ続ける方々のことも、実際に現地に行って感じたことも全部語り継いでいきたいと思います。

熊本地震を語り継ごうと思ったきっかけは、私が環境防災科に入って初めて日本の中で起こった大きい地震だったからである。地震が起こったという報道を聞いてから自分に何かできることはないかとずっと考えてきた。募金活動に積極的に参加し、初めて自分なりの支援をできる限り行った地震だった。環境防災科の全員が熊本に支援を行けることになったと聞いて少し不安になった。初めて被災直後の被災地に入り、活動をするので役に立てるかすごく心配だった。しかし、そんな不安を吹き飛ばすほどの強いショックを受けた。現地に入り、車に乗ってボランティアをさせていただく家まで移動しているときに、全壊した家屋を目にした。1階と2階が潰れ、屋根だけになっている家や瓦礫の山と化している家。とてつもなく大きな無力感に襲われた。初めて大川小学校を見た時の感覚と同じ感覚になった。私たちは環境防災科で、こんなにも防災を広めようとしているのに、自然の脅威を目の前にして、本当に防災を全国に広めていくことはできるのか、自分がしていることは無駄なことではないのかと感じた。しかし、熊本でのミーティングで和田先生がおっしゃった「微力だけど、無力じゃない」という言葉に励まされた。私がボランティアをさせていただいた家の方にも涙を流しながら何度も「ありがとう」と繰り返され、初めて人の役に立てたような気がした。

熊本地震はたくさんのことを私に教えてくれた。地震の恐怖をこの目で見て、肌で感じた。人とのつながりの大切さ、自分の力不足、被災地の方々はふんばって頑張っていること等、学校では勉強できないことを多く学んだ。熊本被災地支援に行き、地震は多くのものを奪っていくが、大切なものを残してくれることに気が付いた。熊本で見たもの、現地の人に聞いた話、感じたものの全部を語り継いでいこうと思った。

しかし、大川小学校や熊本で感じたあの無力感は未だに心の中に残っている。あの無力感を拭き去るためにも、災害のことについてさらに勉強して、災害は地震だけではなく火災や豪雨災害、高潮や地震によって引き起こされる津波などの災害の種類と、その種類に応じた対応への知識を広めていきたい。防災を広めていく前に災害を広く知ってもらわないと、どれだけ防災を広めていこうとしても備えができなければ意味はない。自然の脅威に勝つことはできないが、被害を減らし、自然と共生していくことはできるはずだ。自然と共生していくには、全国の人々が自然に危機感を抱かないといけない。私は自然の怖さと、自然の脅威に襲われた方々のお話、被災地支援に行ったときに感じたこと、そして自然の脅威から身を守るための防災を全国の人々に語り継いでいく。

The fear of ignorance ～無知の恐ろしさ～

田中 大輝

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分早朝に兵庫県南部地震は発生した。震災名は阪神・淡路大震災とされ、今年でもう23年の月日が経つ。私は震災が発生してから4年目の1999年に生まれた。震災を経験していない神戸っ子だ。幼稚園、小学校、中学校と神戸っ子として阪神・淡路大震災をそれなりに勉強してきた。そして高校では、阪神・淡路大震災を語り継ぎ、次の災害に備えるために設置された、環境防災科に進学し本格的に防災・減災を勉強している。

私は父、母、祖父、叔母に阪神・淡路大震災当時の話を聞き、内容を以下にまとめた。当時、父は消防職員、母は銀行員、祖父は会社経営者、叔母は看護師であった。

2 父の話

父は当時、消防職員であったため以前から震災時の話は詳しく聞いていた。しかし今回、改めて聞くことで阪神・淡路大震災の言い表せないほどの悲惨さが伝わった。以下が父の話した内容である。

(1) 震災発生

私は当時、消防職員として3年目で、3名の後輩もできて先輩としての自覚が芽生えてきた頃であった。またその年は成人式の年でもあった。

震災当時は非番日であり、家で就寝していた。地鳴りのような音に驚き、直後には床から非常に強い衝撃を受けた自身の体が飛び上がり、枕元には高さ1メートルの冷蔵庫が倒れてきた。

須磨区の高台にある独身寮の五階に住んでいたため、須磨から長田の西側を見渡すと、十数か所で火柱が上がっていた。すぐに勤務先である西消防署に電話連絡するも、明確な判断が得られなかったため、自主参集することを決めた。当時付き合っていた妻に連絡し無事を確認後、実家の熊本に連絡しようとしたが電話は不通になった。

自家用車で西消防署伊川谷出張所に向かう途中に、ラジオを聴くと神戸市全域で火災や家屋の倒壊があり行方不明者が数千名いるとの情報があった。淡路が震源地であるため対岸にある西区の南側は壊滅状態を予想していたが、思った以上に伊川谷町は被害が少ないようであった。伊川谷出張所に到着すると、このみか被害が甚大で、地盤沈下し隣の農協の建物とはズレが生じ、事務所内の棚はすべて倒れて壊滅状態だった。

(2) 長田区へ出勤

事務所内を片付ける途中で、乗務していたポンプ隊が長田区に派遣が決まり、慌てて先輩の所持していたカップ焼きそばを三人で分けて伊川谷出張所を出発した。途中、西消防署に寄り用意されていたおにぎりを一個食べ、長田消防署に寄り指示を受けるよう任務を受け、西消防署を出発し長田消防署に向かった。

長田消防署に向かう西神中央線、西神戸有料道路はかなりの渋滞であり、サイレンを鳴らして向かうも、車両が通ることできる状況ではなかった。途中私を含めた隊員が下車し、一般車両を制止し消防車を通すよう指示した。長田消防署に近づくほど空が煙で真っ黒になっており、長田天神の近くでは昼間なのに薄暗いという異様な光景であった。

長田消防署へ着くと、前の路上には多数の消防車が到着しており、川を隔てた隣の工場が炎上中であった。隊長と共に事務所内の所長室に向かうも、事務所は誰もおらず、署長室には数名の幹部がいたのみであった。その幹部からの明確な命令や情報はなかったため、隊長が長田消防署から直線距離で二百メートルほどにある御船通で火災防御することを判断し向かった。

道路にある消火栓や防火水槽はあらかじめ使えないという情報を得ていたので、当時あった長田の市民プールからホース延長することを判断したが、おそらく他の消防隊も十分な水量の確保は難しいと思っていた。しかしプールにある消防車は一台のみであったため、十分に水量は確保できた。御船通はプールから数百メートルの距離があるため、1本20メートルあるホースで足りるか心配であった。何とかホースカーや背負いのホースを繋ぎ、一線を確保し火災防御にあたったが水圧が十分でないうえに、二丁目分くらいある敷地を我々の一線で消さなければならない状況であった。最初は炎上中の文化住宅を消しており、隣にあった新築の一戸建てを守ろうと思っていたが、水圧が十分でなかったため、窓から火が入りすぐに燃えてしまった。どの角度から放水してもまったく消すことができずであったため、

角に建っていた耐火構造のマンションを守ることを念頭に置き火災防御を実施した。

途中で生き埋めになっているおばあさんの救助を求められたが、こちらからの問いかけにまったく応じることがなかった。家族も納得していたのか諦めており、この建物は燃やさないで欲しいと希望のみを私たちに伝えた。

（３）寒さと空腹

一切飲食せず火災対応をしていたが空腹はさほど辛くはなかった。防火服がずぶ濡れになり、かなり寒かったので燃えている家の熱で暖を取り、防火服を乾かした。長田消防署に食料があるとの情報があったので、全員で長田消防署に行くとお菓子が数個転がっている状況であった。満足に空腹を満たすことはできなかったがすぐに現場に向かった。その頃には空腹感が強かったが、まったく食料がなかったため、我慢して火災防御を続けていたところ、住民が私の肩を叩き「兄ちゃん、腹減つとるやろ！家は燃えとるから諦めてこっち来ておにぎり食べ！」と声をかけてくれた。そこはキリスト教の教会で、壊れた家から米を、壊れた自販機から水を持ち寄って炊き出しをしていた。声をかけてくれた住民は後から分かったのだが、文化住宅隣の新築一戸建ての住民だった。ありがたくおにぎりを一個食べて、お礼を言い現場に戻ろうとしたところ、「もっと食べ！」と言ってくれたものの被災している住民には悪い気がしたので、さすがに断った。

そうこうしていると消防車に食料が届いているとの情報があったため、消防車に久しぶりに戻ると、水と食パンの耳が届いていた。普段なら絶対に食べない組み合わせであったが、空腹を満たせばいいと思い一気に食べた。

（４）長田区の火災防御終了

ほとんど町が燃えてしまったが、何とか当初の目標であったマンションだけは守り、気がつけば午前２時であった。一段落したところで西消防署から交代要員が現場到着したため、交代した。伊川谷出張所に帰ったが、よほど疲れていたのかそこからの記憶は全くない。

（５）火災防御と救急出動

次の日から須磨区や長田区にいろいろと現場に行った。ほとんど救助されていたのか、埋まっているのかわからなかったのか、そこでは遺体捜索することなく火災防御ばかり実施した。数日後になって燃える現場もあり震災後数日は火災防御や、急にガスや水道が通ったため管の破裂でのガス漏れ警戒や漏水対応に明け暮れた。

火災防御と共に交替で救急出動もした。現在は救急救命士であるが、当時は救急隊員の資格を取ったばかりであり、年齢も若かったため休まず現場活動させてもらった。その中で初めて自殺未遂の現場に出動した。

傷病者は四十代の男性で、比較的被害のないマンションに住んでいた。根が真面目であったのか、震災で辛い思いしている方が多い中、自分は何事もなく生活していることがおかしいと思ってしまったらしく、精神的不安に陥ってしまい、四階から飛び降りてしまったとのことであった。幸い下肢の骨折のみで済んだが、こういったところも震災の影響が出てきていると感じた。

（６）震災後の住民生活

災害対応は一旦終了したため、自宅の寮に戻り落ち着きを取り戻しつつあった。私自身は被災していないが、寮ではガスや電気が来ていないという状況と、買出しに店に行っても買うことができる商品がないという状況であったため不便を強いられた。

西区には広大な土地があったため仮設住宅が多数建築され、町並みや住民の状況が変わった。震災後に自殺を図った男性のように、精神的不安定に陥った方が多数見られ、救急搬送に苦慮したこともあった。併せて高齢者の一人暮らしが増え、今まで住民が協力して暮らしていた状況が破綻し、孤独死が多くなったように感じた。

消防生活三年目でここに書ききれない、もしくはいろんな事があり過ぎて覚えきれていない状況を経験したという。

父は後に隊長となり、2011年、東北にも出動した。「兵庫県緊急消防援助隊員として経験したことを東日本大震災に生かす事ができたかと思う。」と最後に言った。

3 母の話

母はあまり当時の事は覚えていないという。少しずつ思い出しながら当時の事を話していった。

北区の実家で寝ていた。ベッドに寝ていたところ突然の揺れに驚き恐怖を感じた。枕元の本棚が揺れに乗って倒れてきて下敷きになったが、布団をかぶっていたため身の安全は確保できた。家族全員無事

だったことに安心した。

北区は、ガスと電気は止まったが水道は無事だった。水があったことで心身ともに安心していった。ライフラインが断絶していた長田区の人たちは有馬街道を徒歩で水を受け取りに来た。その後北区のライフラインはすぐに復旧した。長田区や中央区に比べたら、北区の被害はとても小さかった。

話した内容は少なかったが、言葉一つ一つに重みがあった。ショックが大きかったのは確かだ。

4 祖父の話

祖父は当時、東京で会社経営をしていたため、単身赴任で千葉に住んでいた。21年半の長期単身赴任生活だった。その間、阪神・淡路大震災は発生した。当時、関東から見た阪神・淡路大震災の事を聞いた。以下が祖父の話した内容である。

当時、地震の事を知ったのは、朝6時の朝のNHKテレビニュースだった。テレビ画面では大阪NHK放送局内の蛍光灯や机上の書類等が大きく揺れ、落下しているものが映し出されていた。報道は具体的な被害状況は不明の段階で、「大きな地震が関西で発生した。」という内容のみであった。

神戸は大丈夫だろうと思っていたが、家族が住んでいたのを念のため当時は珍しかった携帯電話を使用し連絡を取った。連絡はすぐにつき家族全員の安否を確認した後、家の中の被害状況などを詳しく聞いた。家具や食器棚が倒れ、物の落下などあったが誰も怪我はしなかった。私が帰省していれば大怪我していたという。普段私が寝ている所に整理ダンスが崩れ落ちたのである。不幸中の幸いであった。

いろいろと情報が入ってきたのは昼休みの時だった。それまでは関西地区の地震があったという話題があがっただけである。当時は今のようにパソコンもインターネットもないからだ。そこで初めて震度7の大震災で甚大な被害が出ている事、阪神高速道路神戸線でバスが落下しかかっていた事、多くのビルやマンションが倒壊して死者が多数出ている事、ライフラインが機能していない事、長田区で大規模火災が発生している事を知った。その後家族のことが心配になり何度か連絡したが、不通。3日間連絡を取ることが出来なかったのだ。地震直後に連絡をしていたため多少の安心感があったが、「あの時連絡をしていなければ不安で仕方ない毎日だったと思う」と言った。

祖父の話を知っている中で、情報の大切さが身に染みるほどわかった。今はパソコンやスマートフォンなどを使用して簡単にインターネットを活用できるようになったが、当時はそのような物はなかったため、自分の身に何が起きているか理解できなかった人もいただろう。当時と現在を比較すると情報社会になったことで災害に強い社会になった。ハザードマップや緊急地震速報などもスマートフォンのアプリケーションソフトという簡単な形で取り入れられる。そのようなものをこれからももっと活用していき、改善すべきものがあればより良いものを作っていく必要がある。

5 叔母の話

叔母は当時、三田市の母子にいた。神戸市から少しだけ離れているが、母子も大きく地面が揺れた。叔母は当時看護師として病院勤務をしていた。以下が叔母の話した内容である。

地震が発生したのは仮眠室で仮眠をとっていた時だった。最初は何が起こったのか全くわからなかった。物凄い地響きの後、体を大きく揺すられた。すぐに布団に身を隠して、身の安全を確保した。おさまった後は、病院内の停電、看護学校の生徒たちの叫び声、看護当直室の電話が鳴りっぱなしなど、すでに病院内は戦場と化していた。

着替えた後、補助の電気で呼吸器の必要な患者の所にアンビューバッグを持って走り回った。患者の命が最優先であるために、身を粉にして看護し続けた。その他、寝ている患者の頭にテレビが落下し、出血しているのを縫うことも多々あった。

あまりに忙しかったのと、停電のせいか神戸市がもっとひどいことになっていると知ったのは発生から約2時間後であった。さらにその約2時間後には灘から出勤している看護師が血相を変えて出勤してきた。そこで初めて神戸の状況を知り、食料の確保やカセットコンロなどを買い集めた。それを持ってまた灘に戻るよう指示した。三田のものを買えるだけ買って長田区にも持って行った。

叔母の夫は消防職員であったため、すぐに本部から連絡があり長田区に向かった。三田消防は一番に長田区で消火活動をしたという。消火活動は父の話と同様で、あまりにも過酷であった。

6 海外の防災 ネパール

神戸には地震は来ないと信じられていた。よって対策も学習も何もしていない神戸の人たちを阪神・淡路大震災は襲ったのだ。人々は無知であったため防げた被害も防ぐことができなかったのではないだ

ろうか。無知は非常に恐ろしいものを感じる。ネパールの地震もその一つだ。

私は環境防災科で防災・減災を学んでいく中で、海外に関心を持ち始めた。初めに海外は日本と何が違うのか、同じであるのかなどを調べ、海外の防災について学びたいと思うようになった。それが、私がネパール訪問に参加したきっかけである。

2015年4月25日、ネパールをマグニチュード7.8の地震が襲い、死者は9000人を超えた。

私たちは復旧の進み具合、募金の使い道を確認するのを目的とし、ネパールを訪問した。ネパールは南アジアの発展途上国であり、先進国である日本とは全くと言っていいほど違う。生活や文化が違えばもちろん防災への考え方も違う。ネパールの人の考え、防災の取り組み方などを知ることができた。

ネパールでは、地震は神の怒り又は地下に大きな魚か蛇の怒りと信じている人がいた。教育が不十分であることがわかる。地震などの災害に対する無知が今回の地震の被害を大きくしたに違いない。

ネパールにはNSETというNGO団体がある。そこではバンドや新しい構造を用いて、建物の耐震補強を行っていた。ネパール地震時の死者の99%が建物による圧死であったため、この対策により、被害を大幅に減らすことができるであろう。ハードのみでなく、ソフトである災害に対する考えも変わって、防災訓練には必死で取り組む。日本の防災訓練は活気がないために、ネパールの防災訓練を見習わなくてははいけないくらいだ。

そのようなネパールは阪神・淡路大震災時、毛織ショール等を寄付した。貧しい国であったが、支援していただいた国として、ネパール地震の復興ももっと支援するべきではないだろうか。

やはり、無知こそ恐ろしいものはない。知ることが自らの命を守る。ネパールについてのみを述べたが、災害に弱い国はまだたくさんある。地震などの災害が発生する場所は日本だけでない。海外だから関係ないと思うことはあまりにも無責任であり、関心を持ち、知識を得ることで守ることのできる命もあるということは決して忘れてはならない。

7 最後に

父の話を読むと多くの人が心苦しくなるだろう。一番驚いたのが被災者の自殺だ。自分の命が助かったことに対する後悔や自責により自ら命を絶つという話は今まで聞いたことがなかった。今私たち環境防災科は関連死について学んでいる。阪神・淡路大震災にも関連死者数は物凄く多くなったのではないかと予想できる。

母は、衝撃的であった震災を無意識に忘れようとしていた。震災を経験した人の中で忘れたいと思っている人もいるはずだ。語り継ぎたいという人がいる反面、そのような人もいるということも忘れてはならない。

関係者の話を聞くだけでやはり阪神・淡路大震災の恐ろしさや悲惨さが読み取ることができる。家屋の倒壊、大規模火災、液状化現象など様々な出来事が人々の命を奪った。阪神・淡路大震災から23年たった今、被災者の心には未だ大きな傷が残っているように思われる。私の家族もその一人である。二度とこのような同じ被害を受けることは許されないことであり、これからもずっと阪神・淡路大震災の惨事を語り継がなくてはならない。

現在、南海トラフ巨大地震や首都直下地震が発生すると懸念されている。南海トラフ巨大地震に関しては、30年以内に発生する確率は約70%を超えている。それは明日かもしれない。今日という可能性もある。それほど危険な毎日であることは防災・減災を学んでいる環境防災科の私たちでも忘れるほどである。この文章を読むことでいかに自分自身が危険な状況にあるのかを再確認することができればいいと思っている。そして少しでも早く避難計画や防災バッグを作ることができれば尚よい。

私は「語り継ぐ」についてももう一度考えた。語り継ぐことは大切であるのか。もし逆に語り継がなければどうなるだろうと思うとそれはそれで恐ろしく感じる。語り継がないという視点で考えてみれば、その一瞬一瞬で喜怒哀楽をし、すぐに忘れてしまうということになる。それでは人類は成長や進化はしなかっただろう。よって語り継ぐのはやはり大切である。しかし語り継ぐのは特別なものではない。私たち人間は普段の日常から何かを語り継いでいると思う。親から言語を学ぶ、学校で道徳を習うなどといったことも全て語り継がれたものであって決して特別ではない。そのように、防災・減災を語り継ぐという事も、難しく捉え、かしこまるようなものであってはならない。防災・減災は難しくてかたいといったイメージまた勘違いがそうさせているのではないだろうか。日常生活のなかで防災・減災を気軽に身に付けることができる社会になることが今は必要であると私は思う。

語り継ぐ

土井 輝太

1 はじめに

私は、阪神・淡路大震災を経験していない。そんな私にできることは、実際に経験した人の話を聞いて語り継ぐことだ。

今回、母と祖父母から話を聞くことができた。

2 地震発生

(1) 母の体験

1995年1月17日午前5時46分。地震発生当時、母は、祖父と祖母と姉と2階の寝室で寝ていた。揺れがドーンッと来て訳が分からず動けなかった。その後、祖父がすぐに駆けつけてくれた。揺れがおさまっても避難はせず、自宅で過ごしていた。余震が来るたびに、怖く、おびえていた。お風呂に入ることもできず、同じ服を毎日着ていた。数日たって、友達の家のお風呂に入らせてもらった。

ライフラインがストップし暖房もないので、七輪で暖をとっていた。

① 困ったこと

一番困ったことは、トイレだ。流そうとしても水は汲みにいかないと手に入れることができなかった。たので、とても貴重だった。食料、水も当たり前だが困ったといっていた。

② 嬉しかったこと

遠くにいる親戚が、テレビを見て食料などを送ってくれたこと。

③ 備えておくといいもの

母は、水、食料、スリッパ、懐中電灯があればいいと言っていた。当時は携帯電話やスマートフォンがなく、今みたいに素早く情報を入手できなかったのも、ラジオと電池もあればいいらしい。

(2) 祖父の体験

祖母と家の2階で寝ていた。揺れで目が覚めて訳が分からなかったが、子供が二人いたので「大丈夫か？」と安否確認のためすぐにかけつけた。揺れがおさまって1階に降りた。真っ暗で何も見えなかった。ので、仏壇のろうそくを付けた。4人で家を歩き回り、テレビが落ちたり食器棚の戸が開いてほとんど割れていたりしたのを見た。犬もいたが、驚いて吠えていなかった。建物などの下敷きになったわけではなかったが、その5日後に犬は亡くなった。その後、祖父の同じ職場の先生も3日か4日くらい一緒に暮らした。結婚して離れて住んでいた娘もいたので、赤ちゃんと旦那さんを連れて帰ってきた。8人で何日間か暮らした。

揺れがおさまっても余震はまだ来ていたので、動ける服装で毎日寝ていた。怖くて寝られないことはなかったが、ずっと気にかかっていたので熟睡はできなかった。

家は大丈夫だと判断し、当時勤めていた伊川谷高校へバイクで向かった。学校の校舎はひどく壊れてはいなかった。体育館の中の電気は天井から落ちて、天井ははがれていた。体育館は修理が終わったばかりだったが壊れてしまった。

① 困ったこと

一番困ったことは水がなかったことだ。水は、近場に汲めるところがあったので周りの人と比べるとまだ助かった。火がなかったのも、家の近くにあったホームセンターに行き、炭を買った。七輪とその炭を使って料理をした。

② 嬉しかったこと

電気が早く復旧したこと。ずっとろうそくだったのですごくありがたかった。

③ 周りの様子

周りの一部の家は屋根が壊れていた。道路はひどく凸凹にはなっていないが車は通れたが、屋根の瓦礫が落ちていたところは通れなかった。

(3) 祖母の体験

祖父と2階で寝ていた。ドーンッと揺れがきて、これはおかしいと思いすぐ「着替えないとあかん」と思って立ち上がろうとしたが、立ち上がれず四つん這いになった。揺れがおさまってから子供の所へ行った。家族で下に降りたが、ゴミがゴミ箱から出ていたり、食器が割れていたりして足の踏み場がな

かった。

当時は、神戸に地震が来ると思われていなかったの、避難所の場所や存在が分からないこともあり、避難所には行かなかった。食料や衣類などの支援物資ももらわなかったの、食料やガスボンベや炭は自分たちで買って過ごした。

① 困ったこと

一番困ったことは水だ。そして、電話が通じるまでが遅かったので、親戚からの心配の電話が通じなかった。水を汲みに家族みんなで行ったが、寒かったので並んで待っているときも、水を入れるときも体中冷えてすごく辛かった。

② 嬉しかったこと

電気が早く復旧したことだ。電気が復旧したことでテレビを見ることができ、情報が入った。家がつぶれなかったことが一番助かった。

③ 周りの様子

近所の家は、ひびが入ったり傾いたりはしていたがそれ以外は普段と変わらなかった。スーパーの食糧やホームセンターの商品がなかった。男女問わず、リュックサックを背負った人だらけだった。

3 環境防災科に入って

私は小学生のころから環境防災科を知っていた。環境防災科のある舞子高校と、私が通っていた多聞東小学校はすぐ近くのところにあり、環境防災科の先輩が小学生の私たちに防災を教えに来てくれたことがあったからだ。液状化の実験をやらせていただいたことは今でも覚えている。しかし、その時はまだ防災に興味がなかった。

それから約1年が経ち、2011年3月11日に東日本大震災が起こった。その日は丁度、私たち家族が引っ越した日だった。当時、私はアニメが見たかったが、まだテレビはつながっていなかったの、父の携帯電話を借りて見た。しかし、どのチャンネルをみても家が崩れ、津波に流され、人が叫んでいる映像しか流れなかった。私は最初、何が起きているのかわからなかった。しかし、父と母の驚いた反応を見て、現実なんだと理解した。この時から少しずつ災害に興味を持ち始めた。

環境防災科に入ってから、災害を知り、防災を学んだ。そして、たくさんボランティアに参加させていただいた。その中でも一番印象に残っているのは募金活動だ。ネパール地震や熊本地震など、何回も募金活動をする中で、たくさんの人と出会うことができた。募金をする際に「お疲れさま」や「頑張って」などの一言をいただいたり、「募金してくれてありがとう」と逆にお礼を言われたりした。中には、舞子高校だから募金をしてくれる人もいた。募金活動を通して人のやさしさを肌で感じることができた。そして、継続することと感謝の気持ちが大切だと思うようになった。これから関わる募金活動や他のボランティアでも必ず必要になると思う。継続することは多くの人に知ってもらうことで災害自体の風化をふせぐことにも、被災者や支援者との関係を持ち続けることにもつながる。感謝の気持ちを持つことは当たり前なことだがとても大切なことだ。ボランティアをする側が「している」ではなく「させていただいている」という意識を持つことにつながる。確かに無償でボランティアをしているが、それは相手が受け入れてくれているからできていることだ。これからたくさんボランティアと関わっていく中で、この2つを大切にしていきたいと思う。

4 自分にできること

初めにも言ったように語り継ぐことだ。経験していないのに何を語り継ぐのか。そもそも語り継げるのか。外部講師の方や語り部さんなどの経験した人の話をたくさん聞いてきて、何度も思ったことがある。しかし、語り継ぐことをやめてしまえば何も残らない。震災を経験していない世代が増える中、震災の話を聞いた私たちが語り継がなければいけない。そして、阪神・淡路大震災を風化させないとともに、新たな災害に対して備える人を一人でも増やしたい。災害が起きた時、過去の災害や備えや防災を少しでも知っているのと全く知らないのでは、全然違うと思う。自分の命を守るためにも、家族のためにも生きてほしい。そのために私はこれからも語り継いでいきたい。そしてもう一つ出来ることがある。それは、今回聞いた話を次につなげることだ。今回聞いた話、備えておくといいものなどを自分自身が災害にあったときのため備えることだ。そして、語り継ぐ中で次の人に伝えていきたいと思う。

5 夢と防災

私の将来の夢は、スポーツトレーナーになることだ。スポーツトレーナーは、普段は整骨院などで働い

ていて、呼ばれたときに派遣としていく人が多い。そして、整骨院という仕事は地域の方との距離が近いので、話す機会も多い。そんなスポーツトレーナーは、防災ととても関連づいている。

スポーツトレーナーは、普段は整骨院で働き、派遣でスポーツトレーナーとして働く人が多いため、ほとんどの人が2つのコミュニティを持つことになる。これは防災を2つの場所で広めることができるので、より多くの人に防災を知ってもらうことができる。そして、スポーツトレーナーになった時、2つのコミュニティを活かしてそれぞれしたいことがある。まず、整骨院側では地域の人と関わる機会が多いので、その地域や年齢にあった防災教育をしたい。防災を学ぶとき、大人の人でもわかりにくいことがあると思うので子供も大人もわかる簡単な防災教育をしたいと思う。この時に語り継ぐこともしたい。話を聞いて備えようと思う人が1人でも増えてほしい。そして、スポーツトレーナー側では、スポーツトレーナー同士のコミュニティを作りたい。スポーツトレーナーは、絶対に必要な資格がなく、様々な資格を持つ人が多い。そういう人たちが集まれば、災害後の被災者の体のケアや心のケアをスムーズに対応できると思う。実際に、熊本地震の際に柔道整復師の資格を持つ団体が被災地支援ボランティアを行っている。震災後、被災者は次来るかもしれない揺れが怖くて寝られなかったり、建物の中が怖くて車中泊をしたりする人がある。そんな人たちの心と体を少しでも楽にしたいと思う。

6 まとめ

今回、語り継ぐを通して母が阪神・淡路大震災の時どのような状況だったのか知ることができた。小学生の時から毎年1月になると、阪神・淡路大震災の話を親に聞くという宿題があった。小学生の時は学校から出される宿題だったから何気なく話を聞いていたし、深く考えることはなかった。しかし、環境防災科に入って過去の災害を知り、防災を学んだ今話を聞くと、一度聞いた話でも思うことが全く違うことがたくさんあった。聞いたことがあっても、何回も聞くことで感じる思いは変わることが分かった。これから語り継ぐ立場として何回も話を聞いて、考え続けたいと思う。そして、災害はいつ起こるかわからない。今回聞いた話や防災について学んだ知識を次につなげなければいけない。しかし、今の私には聞いた話を伝える力も知識も少ない。だから、これからも防災について学び続けようと思う。その中で、もっとたくさんの人の話を聞きたいと思った。今回の話から得たことだけではなく、他の人の話をたくさん聞いて、次の世代へ語り継ぎたい。そして、次の世代の人にも語り継いでほしいと思う。

想いを綴る

中村 公貴

1 はじめに

阪神・淡路大震災から 23 年。残された傷跡は年とともに薄れていく。震災を知らない世代へと移り行くなか、経験した人の言葉をもとに防災を学ぶ一人として私たちが語り継いでいかなければならない。震災を経験していないからこそできることもある。そのひとつとして震災で亡くなった方々の想いを感じながら語り継ぎたいと思う。

2 概要

1995 年（平成 7 年）1 月 17 日午前 5 時 46 分、淡路島北部の北緯 34 度 36 分、東経 135 度 02 分、深さ 16km を震源とするマグニチュード 7.3 の地震が発生した。この地震により、神戸と洲本で震度 6、豊岡、彦根、京都で震度 5、大阪、姫路、和歌山などで震度 4 を観測した。東北から九州にかけて広い範囲で有感となった。また、この地震の発生直後に行った気象庁地震機動観測班による被害状況調査の結果、神戸市の一部の地域等においては、震度 7 であったことがわかった。

気象庁は、この地震を平成 7 年(1995 年)兵庫県南部地震と命名した。さらに政府は、被害の規模が特に大きいことに加え、爾後の復旧・復興施策の推進の際に統一的な名称が必要となることが考えられることから、災害名を「阪神・淡路大震災」と呼称することを平成 7 年 2 月 14 日に閣議口頭了解した。

3 叔父の話

(1) 震災当日の悲劇

前日、1 月 16 日は兵庫県北部にスキーをしに行っていた。1 月 17 日の深夜 0 時頃帰宅し、静かに眠りについた。当日、1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分、「ドーン」という音とともに目を覚ました。激しい揺れとともに 1 メートル先にあったテレビが頭上に飛んできた。怪我はあったかもしれないが、パニックで痛みどころではなかった。

(2) 見逃される現実

当時大学生で、大阪の大学に通っていたため、大学自体は大きな被害を受けることがなく、いつも通り授業はあった。同じ大学の京都に住んでいた友人に大学に行けないことを 6 時頃に連絡。大きい揺れが収まってしばらくすると、近所に住んでいた後輩 2 人が「コンビニ襲撃していますよ！」と家に叫びに来た。その後友人 2 人が安否確認に家に来て、無事を確認した。友人は前日、熱を出し、寝込んでいて、揺れているのかわからない状況だったと話す。食料がなく、困ると考えたのちに自分たちもコンビニに食料を確保しに駆け付けた。しかし、中は電気もすべて消え、外も薄暗かったため、何も見えない状況でとりあえず、下にあったかごに落ちてあるものをとれるだけ入れて家に持ち帰った。だが、手に入ったのは猫の缶詰めと食パンだけであった。それでも、自分は家族のためになれたと思い、母親に見せたが、「電気も通っていないのに食パンなんかどうやって焼くねん。」と少しきれ気味に言われた。その時はまだ今後、食料に困るなどの危機意識はなかった。自分は家の外に出て、コンビニの崩壊した状況を見て、初めてことの大きさに気づいた。母親は外に出ていないからことの大きさに気づいていない。

(3) 復旧作業

その後、父親に勤め先の垂水の水道局に連れていかれ、被害状況の確認から始まった。地下のガス管が爆発して、路上に青い炎が燃え上がっているのを目にした（神陵台）。水道局の配水池に行き、ポリタンクに水を入れて、軽トラックに積んで近所の学校に給水を行った。水を運ぶ途中、信号待ちの時にトラックの荷台から心無い者に水を待っていられるなど犯罪が多発。この作業は水道本管が修繕されるまで毎日行っていた。

(4) 本当に助けになった人材

次は各家の水道の配管の修繕（垂水区→西区→玉津町上池の順に行った）。自らボランティアで修繕を行った。「各家に一か所だけ水が出るようにせよ。」という指示が出た。非常に早急に行わなければならなかった（あらゆるところから水が噴き出す）。工事の際に現地の大勢の方が協力してくれたため復旧がスムーズに進んだ。そこに自衛隊も駆け付けたが、当時は初めての給水で訓練ができていなかったため、自

衛隊の給水車の水道の蛇口がさびていて、水が出なかった。水道局の人が直して、水は出たものの、その水はサビが入った赤水で使い物にならなかった。

次は長田区。長田区への移動の際に前のダンプの荷台から人の手が見えた。整地するために焼け野原の廃棄物をすべてダンプに積んでいたため、ご遺体なども入っていたのは事実である。そこからする異臭もすごかった。長田区の修繕工事が終わったのは夏ごろである。大学にも行けず、夏ごろまで毎日働いていたので季節感もなかった。ここでようやく1日休みが入る。

そして最後に、仮設住宅の応援に駆け付けた（西神、舞多聞）。

（５） 阪神・淡路大震災があったから・・・

阪神・淡路大震災の後、復興に向けて行政と地域の業者の間で防災協定が結ばれたから、今現在、災害後に地域と業者との連携が成り立ち、迅速に動ける状況がある。新潟中越地震の時に風呂の代わりにシャワーユニットなどを神戸から支給できたのも阪神・淡路大震災の教訓があったからである。さらに、今現在、災害時に自衛隊が迅速に動き出すために、被災地に何が必要なのかを早急に確かめる連絡手段があり、復旧・復興がスムーズに進むのも阪神・淡路大震災があったからである。震災前は災害時に自衛隊が救助隊員として被災地に向かうイメージはなかった。

（６） 災害時にあった需要

まずはライフラインの復旧である。生活の基盤となるライフラインが復旧しないと生活自体が成り立たない。そこで、復旧作業に向かう水道局・電気会社・ガス会社などの高速道路の交通費を免除したりするために用いられた「災害後復旧車両」というのが非常に効果的であった。

当時、捨てることのできない布おむつの配給はあったが、捨てることのできる紙おむつの配給が少なかったのに対し、需要は多かった。食べ物は腐らないもの。住んでいた家の瓦礫の撤去。どれも違ったもののように見えるが、すべてに共通するものがある。それはお金。結局は何をするにしてもお金が絡んでくるはずだ。そこで、使うお金を最小限にするためにも最低限の食料を備えたり、耐震工事を行ったりしておく必要がある。それが家族、自分の命を守ることににつながる。

４ 父親の話

（１） 恐怖の体験

連休明けの出勤日。目を覚まし、布団から起き上がろうとすると、巨大な音が地下から湧いてきた（耳に「ゴォー」と響く地面が鳴る音が聞こえた）。その直後に、部屋は上下方向（「ドンッ」と下から突き上げられるような突然の激しい揺れ、または煮ている玉子のような状況）に猛烈に揺れ始め、家全体が何者かに揺らされていると感じる位の極度な地震（まずは上下の揺れ/地面が何かに押上げられた感じ、次に右左に数回）であった。この間約30秒。食器棚が倒れ、電気停止、とにかく懐中電灯を探し当てて部屋の惨状を確認。家族の声が聞こえたのでとりあえず全員無事であることまでは確認できたが、冬なので外は暗闇で、「とにかく何か地震が起きたらしい」ということまでしか分からなかった。足の踏み場が無いほどダンス・テレビ・食器が散らばっている中、とにかく外へ飛び出した。車中に避難し、数時間待機した。数時間以上経って揺れが落ち着いた後、やっとめちゃくちゃになった部屋に入れた。電気・ガス・水道・電話は全て寸断されていた。ラジオで近畿を中心に大きな地震発生と知った。滋賀・京都・大阪の震度を知らされたが、兵庫の状況は最後だった。神戸市・西宮・芦屋を初めとする兵庫県南部は長時間電気、水とガスが止まり報道も遅れていた。

（２） 地獄の車中泊

3日間、車の中で寝泊まりをした。4人乗りの車での中泊。両親、妹と4人だったため、非常に狭かった。狭いし、寝るのに適した形状ではなかったため、寝方にも苦労した。ガソリンを入れることもできず、極寒の中、車で過ごしていた。夜は「誰かに襲われるかもしれない。」という恐怖に耐えきれなかった。

（３） 被害状況

家の屋根が落ち、防水対策でブルーシートを掛けるのが精一杯だった。高速道路は横倒し、一般道路も地割れや凹凸箇所だらけで、車が道を走れる状態ではなかった。発生から三日間、ほとんど毎日緊張と不安の中で過ごした。晩が来ると、余震が何度となくやって来る。ときには一晩に震度3以上の余震が数回起きた（一週間で観測できる地震は700回余り起きた）。

（４） 思いやりの心

4日後にようやく25Kmの道のりを自転車で3時間かけて会社に到着できた。何人も狭い道路を歩いているが、喧嘩や割込みはほとんどない、正しく礼儀を守られ、一方しか通行できないときに、必ず譲り合

うし、広い道路に行ってもできるだけ左を歩き、他の人或いは車が通れるような配慮が道中で感じ取られた。非常に難しい状況だが、秩序と冷静さが保たれていたことに感心した。

(5) 死と隣り合わせた仕事

仕事の現場では十数階建てのビルの1階で経営するスーパーに訪問し復旧応援をした。その際、入店時に念書(建物が崩れてケガや人体に影響あっても補償請求致しません)を書かされたことと、それでも応援させられたことは思い出であるが、今思えば非常に危険と恐怖の大きな仕事であった。

ただ、会社で配給されたおにぎりは製造から3日経ち水分の抜けた白く堅い米だった。しかし、それを持ち帰り、家族で食べた時に、食べられることへの感謝をこれほど感じたことは無かった。

(6) 全て是水

一番重要なものは水だった。特にトイレが流せず排泄物が蓄積した時の臭いがとにかく辛かった。その次に飲料、そして風呂と、全てが水。姫路の風呂が営業していると聞きつけて、現地に向かって数日後に入浴した瞬間は心身ともに癒された。

また、他府県の親戚一同からの救援物資、遠路富山から道中不安定な中、来訪してもらった親戚には心底感謝しかなかった。1ヶ月以上経った30日余の間に5,441人が亡くなり、27万人がまだ避難所にいて困難な生活を送っている状況だった。親戚より頂いた物資を避難所に届けたことも今では思い出となったが、それができたのも周囲の方々からの助けがあつてのことである。そういうことを体感したからこそ、人・食物・服など、ものを大切にする思いと有難味を感じ得たと同時に、よりものを大切にするこゝへの思いが強くなった。

5 話を聞いて

(1) 存在してはならない現実

災害直後には犯罪が多発する。メディアでは被害状況などばかりで、あまり取り上げられることはないが、いたるところで発生しているのは事実である。この現実は見逃されてしまいがちであるが、私は多くの人に知ってほしいし市民が受け止めなければならないことだと思う。なぜ、犯罪が起こるのか。備えを怠ったから。ではないだろうか。災害が起きると、人々の命が奪われ、それとともに多くの財産も奪われる。災害後、人はまず自己防衛の考えが働く。自分が生きるために必要となる食料、飲料を求めるだろう。そこで、日頃からある程度の食料を備えていないから盗むという方向に走ってしまうのだと思う。だから、災害後の未来は災害が起きる前の備えの段階から決まっている。「備えが全て」であることを忘れないでほしい。

(2) 「あいさつ」が命を救う

2人の話の中で、最初に共通して出てきた言葉は「安否確認」だ。やはり、近隣の人との繋がりはいざという時に非常に大切になってくる。私は、自分にとってどんなに不可解なことがあっても、毎朝「行きます」は必ず言うようにしている。それはなぜか。もし、「行きます。」を言わなかった日に家族が亡くなったら、一生後悔するだろうとおもうから。これは、地域の方との繋がりにも同じことが当てはまると思う。朝、家を出て通学途中にはたくさんの自分たちを見守ってくれている方々に出会う。そこで、笑顔で「おはようございます。」を自分から言う事で気持ちがいいし、多くの方に自分のことを覚えてもらえる。そうすると、非常時に自然と助け合いの心が芽生える。逆にその一瞬を逃してしまうと、それが救えた命を落とすことになってしまうかもしれない。一生悔やむことになるだろう。だからこそ、毎日行える防災「あいさつ」は絶対に怠らない。そう、心に決めている。

(3) 経験する前に

人は誰でも一度経験したことは覚えているし、それが恐怖の経験であるなら、よく覚えているだろう。しかし、日本は災害が多発するためか、他の地域で起こった災害は他人事のように受け入れてしまいがちである。生きている中で、一度出くわすか出くわさないかの災害。それが起こる確率が1%でもあるなら、備えなければならない。古き災害は、過去の歴史から想定することはできなかったかもしれないが、今は過去の災害が残してくれたものがある。それと向き合わないのはもったいないことではないだろうか。この文章を読んで、もう一度日常を見直し、災害後の暗い未来を想像してみてほしい。一度きりの人生を無駄にしてほしくない。ありったけの言葉だが、日常を見直すきっかけにしてほしい。過去の災害に失礼のないよう、教訓を活かさなければならない。

6 環境防災科に入って

(1) 入学前

環境防災科に入学する前は消防士になることが夢だった。私が中学2年の夏、家の前の河川敷でビニールハウスが燃えている中、消防士が立ち向かっていく姿は格好良く、今でも鮮明に記憶に残っている。その姿に憧れ、体力、腕っ節に自信があった私は、それを有効に生かせる職に就きたいと考え、消防士を目指すようになったのが原点である。そこから少しずつ消防士について調べるようになり、興味も深まった。消防士といえば消火活動というイメージは徐々に変わっていった。そう、消火活動や人命救助のように表で目にするような仕事だけが「人の命を救う仕事」ではないのである。そのことに気づいてから消防士の根底にある「防災」に興味を持つようになったのだ。そして、当時、全国で唯一（平成28年に宮城県立多賀城高等学校災害科学科設置）の防災を専門に学ぶ学科、環境防災科が通うことができるところにあることを知り、兵庫県立舞子高校環境防災科を受験することを決意した。

(2) 入学後

入学してからは様々な外部講師の方々のお話を聞く場面が多くあった。1年の夏には垂水消防署に実際の訓練など厳しい世界の体験を数多くさせていただいた。そこでさらに消防士への想い強くなった。

しかし、2年になってからは海外の災害についての知識やそれに対する建物の脆弱性に非常に興味を持ち始めた。これが夢を変える大きなきっかけとなった。授業の中で、建築関係を学ぶ、ある大学の教授や卒業生の話の中で、ネパールの建物についての話が出てきた。その授業を通して海外の貧困地域における建物の脆弱性に気づいた。そこで、私は防災を学ぶ日本人の一人として海外でも地震をはじめとする災害が起こる危険性があるにも関わらず、災害について何も知らない人々がそれによって命を落としてしまう現実をなくしていきたいと思った。そのためにも、将来は建築士になり、そういった人のもとへ行き、災害の存在や怖さを日本での教訓をもとに講義を行いたい。そして、災害から身を守るための可能性をできるだけ多くの方々へ伝えたいと考えている。

7 最後に

語り継ぐ。私はこれに環境防災科に入った大きな意味合いを強く感じた。時代は我々が思っている以上に高速に過ぎて行く。長年生きてきた生命は静かに眠り、それと共に新しい生命が誕生する。同じように、遠い昔に起こった災害は静かに忘れられ、新たに起こった災害は注目を浴びる。私は今、ちょうどその間の時代に生きている。すなわち、過去の災害を語り継ぎ、次に起こり得る災害への備えを行う両方を担う運命にあるのだ。体験してきた人の話を聞くことは簡単なことだが、なかなか行動に移す機会はないだろう。体験者が話しやすい環境を作り、気持ちを込めて語ってくれたこの想いは貴重な財産として残り、決して聞くだけで終わってはならない。この先、私は家族の柱の人間になる。家族、地域、そして世界を守っていくためにはまだまだ知識が必要だ。今ある、笑顔でいられる日常を永遠に持続するためにも、災害とは一生かけて向き合っていきたいと思う。そして、日常に「ありがとう」を忘れずに今を生きる。

次の世代へ

沼田 拳士郎

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に兵庫県の淡路島にある北淡町を震源地として兵庫県を中心に襲った阪神・淡路大震災について語り継いでいく。

私は1999年に生まれたので、阪神・淡路大震災は経験していない。その時の揺れがどうだったか、その後の状況がどうだったのかを語り継ぐことは無理な話である。ただ、私には、阪神・淡路大震災を経験している家族がいるので、その話を聞いて語り継いでいきたいと思う。

2 概要

名称：兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)

日時：1995年1月17日午前5時46分

震源地：淡路島北部(北緯34度36分、東経135度02分)

震源の深さ：16 km

規模：マグニチュード7.3

最大震度：震度7

死者：6434人

震度7：神戸・芦屋・西宮・宝塚・北淡・一宮・津名の一部

震源に近い神戸市市街地の被害は甚大で、日本国内のみならず世界中に衝撃を与えた。戦後に発生した地震災害としては、東日本大震災に次ぐ被害規模であり、戦後に発生した自然災害では、犠牲者の数で伊勢湾台風の5098人を上回り、東日本大震災が発生するまでは最悪のものである。

3 地震発生(1995年1月17日午前5時46分)

(1)母の話

寝ているときに「ドンッ」と突き上げられた後、横揺れがいつになっても止まらずすごく恐怖を感じた。

(2)父の話

震災当時、伊丹のほうに住んでおり、牛乳屋さんに勤めていた。震災が起こったときの朝は丁度、配りに行こうとトラックに積んでいた途中だった。もし、倉庫の中で積む作業をしていたら、大けがをしているか、命を落としかけなかったに違いなかった。

(3)祖父の話

地震が発生したときに西の空が光ったので、北朝鮮がミサイルを発射して、落ちたと思った。

(4)祖母の話

家で寝ていて突然、今までに経験したことがない大きな揺れで飛び起きて、いつ揺れが収まるかと思うぐらい長く感じた。

4 震災直後

(1)祖母の話

寝ていた部屋はテレビが落ちたくらいの被害で済んだ。その日は6年生の息子のスキー合宿だったので、お弁当をつくっていた。合宿は中止になった。

テレビのニュースをみて被害の大きさにびっくりした。

(2)叔父1の話

関西電力に勤めており、電車が止まっていたことから電車で出勤できず、当時小学生の弟の自転車を借りて、垂水から兵庫まで自転車で出勤した。兵庫に行く途中の長田付近は火が発生しており、消火の手助けをしたかったのだが、水が出ないことから消火ができず、なくなき会社に出勤した。

(3)母の話

会社に行く準備をしていたところ、先に出勤した弟が家に戻ってきて、線路がクネクネになっていて、電車が走っていないと聞いた。

地震当日は、社員の安否確認の連絡を取るのに大変だった。

(4) 叔父 2 の話

当時、小学生 6 年生だった。震災当日は、スキー合宿に行く日だった。家の周りは倒壊などの被害が少なく、あまりひどくなかった。そのため、スキー合宿に行く準備をしていた。だが、テレビをつけると長田の町が燃えていたり、高速道路が破壊されていたりして、被害の大きさを知った。そこでやっと、スキー合宿に行ける状況じゃないと気がついた。

(5) 祖父の話

地震発生後すぐに避難所へ向かった。住んでいる家に問題はなかったが、1 日目は家族全員、避難所で寝た。次の日からは叔父が帰るといったので、全員で家に帰った。

5 震災からの数日後

(1) 母の話

震災当時、証券会社に勤めていた。母の会社は、地震の影響により全壊してしまったため、母は、1 か月以上自宅待機していた。その間、水道が止まっていたので、近所の井戸があるお家に水をくませてもらうのが、日課だった。銭湯に入るのも、寒い中たくさんの人が並んでいて、やっと入れたと思うと、お湯はあまりでず、何とか身体を洗えるくらいだった。温かい湯船に入れた時は、とても気持ちよかった。

(2) 祖母の話

兵庫区の会社に勤めていて、そのビルは 5 階建てで、1 階の駐車場の部分が地震で壊れビルは斜め倒壊し、3 階の事務所は書類、パソコンなどぐちゃぐちゃになって、もし工作中だったらと思うと、命拾いをした。

(3) 叔父 1 の話

関西電力に勤めていたため、ほかの地域から来た電力会社の人たちの道案内をしていたが、家屋等の倒壊により道が通行できず、目的の現場までなかなか到着できず、到着までに通常の何倍も時間を要した。震災発生後に出勤したが、仕事が忙しく、1 か月程度会社で寝泊まりをしていたため、疲労が溜まって死にかけていた。ただ、停電の復旧によりお客さまが笑顔になるのを見れば、疲れも吹っ飛んだ。

電力会社は地域の住民すべてがお客さまであることから、仮復旧のお手伝いが完了した後、すべてのご家庭の現地調査をした。その際、マンションを登っていったところ、全部の部屋が全焼していて、すべてが丸焦げになっていた。

(4) 祖父の話

家のお風呂が使えないため、家の近くにある銭湯へ行った。周りに住んでいる人達が、銭湯に行くため、銭湯は行列ができていた。私の祖父は、銭湯を営業している人と関わりがあったらしく、裏口から入らそうとしてくれたが、断った。

私の祖父は、今でこそ優しくなってきたが、昔は相当怖かったと母は言っていた。そんな祖父でも裏から入れてくれるのを断り、ちゃんと並んではいったと聞いて少し感心した。

6 復興

(1) 母の話

震災から 1 か月以上たったころから、大阪にある支店まで電車に乗り、途中の電車が通っていないところをバスに乗り換え、また、電車に乗り出勤していた。大阪は、普通に生活しているのを見て、母は、驚いた。

(2) 祖母の話

仕事に行くのに大開駅の上の道路が陥没し、駅は全壊し、復興するのにしばらくかかったが、皆が復興のために協力し、大きなことを成し遂げたことは大きな感動だった。

(3) 叔父の話

震災直後は、とりあえずの停電解消を目的に折れた電柱を使うなど、仮の復旧をしていた。その後は本格的な復興に向けて、街の再建とともに電柱や電線も本格的に復興していった。関西電力に勤めていることで街の復興の手伝いもでき、本当にいい会社で働いていると思った。

電気の復旧は早く、ガスや水道の復旧は遅かった。自分が震災後に頑張った証が数字として出たので、関西電力に勤めていてよかったし、とてもいい会社で働いていることを改めて実感することができた。

7 話を聞いて

私は今回、「語り継ぐ」で話を聞くまでは、私の家族は誰も亡くなっていないので、あまり阪神・淡路大震災の話を聞こうと思うことはなかったし、聞くほどのものでもないし、聞いても話すようなものはないと思い、真剣に話を聞くことがなかった。しかし、真剣に話を聞くと、今までに聞いたことのある話だけでなく、全く聞いたことのない話まで聞くことができた。阪神・淡路大震災で、私の家族が住んでいた場所はあまり大きな被害が出ている場所ではなかった。ただ、祖父は家族を一人亡くしたり、母の友人の結婚を決めていた人が亡くなったりと家族の周りで人が亡くならなかったわけではない。私はその人たちと、実際に会ったことがなければ、深い関係があったわけでもない。ただ、家族の身近な人が亡くなったと聞いて、私の家族が誰1人亡くなっていないことがどれほど幸せなのかとか、祖父や母の友達のように大切な人を失ってしまっても、今を生きている人がどれだけすごいことなのかを感じた。

今回、話を聞いて改めて感じさせられたことがある。それは災害が起きた時、何人しか亡くならなかったから少ない、よかったとか、何千人も亡くなったから多い、悪かったというのは決してないということだ。阪神・淡路大震災では、6434 人亡くなった。この中に、私の家族はいない。ただ、私の家族の身近な人や大切な人はいて、悲しい思いをしている。だから、災害が起きた時、死者がゼロでない場合は、悲しんでいる人がいる。もし、全員が助かったとしても、その後、後遺症などを残し明るい未来を探せない人もいる。そういう人たちがいる中で災害を防ぐことができたとか、死者が少なかったからゼロだったからよかったとかはないと思う。

8 私の将来

私の将来の夢は教師になることだった。ただ、正直今は何になりたいのかわからなくなっている。教師という職業は防災をするにあたって重要な存在になるだろうと思う。なぜなら、教師は人に教えることのできる職業であるからだ。今の日本では、いつどこで災害が起こるかわからない。だから、みんなが災害について知る必要があると思った。教師が災害や防災について教えることによって、若い世代が防災の知識を持ち、国民全員に防災が浸透すると思う。これからは、教師が災害や防災を知り、最前線に行くことで、日本の防災意識を上げる必要があると考えた。

教師は広める以外にも、自分の見ている生徒たちを守らなければならない時が来る。特に、生徒が学校にいるときは、全員が助かる方法などを考えなければいけなくなる。海の近くにある学校の場合は、地震が起きた後の津波避難が重要になってくる。1つ間違った行動をとると学校全員の命に関わってくることがあるため、迅速に的確な判断をする必要がある。ただ、全てのことを教師がするのではなく、日頃から生徒と避難経路などを話し合うことによって、生徒を率先的に避難させる方法もある。

ただ、教師の業務では自分の中で物足りないと感じ始めた。特に、今回の「語り継ぐ」で家族の方々から話を聞いて、震災の怖さを改めて感じたし、人に勇気を持ってもらう職業や人の心を動かせる職業に就きたいと思うようになった。そのような職業は多いと思う。ただ、私は周りにいる少数の人数だけでなく、もっと大勢の人たちに響かせたいと考えた。私はどんなにこの目標が遠く果てしない道のりでもあきらめずに達成したいと思う。なぜなら、私はどんな時でも笑顔だけは絶やさずに生きてきた。私は、笑顔にはとてつもない力が秘められていると思う。笑顔は自分だけでなく、周りの人までを明るく、前向きにできると思ったからだ。教師という夢を持ちつつも、自分の目標に近づく職業を大学に4年間通う中で探していきたい。

9 まとめ

私は今回、「語り継ぐ」を書いて感じたことは、阪神・淡路大震災という大きな災害で家族が被災したのにもかかわらず、私の家族は亡くならなかった。住んでいた土地や建物があまり被害を受けなかったということもあったが、とても幸運だと思う。私の家族は亡くならなかったが、親せきや家族の友達など、阪神・淡路大震災では6434 人も人が亡くなっている。もし、家族の1人が亡くなっていたらと考えるだけで少し怖くなったり、悲しい気持ちになったりする。だから、いま生きている家族を大切にしなければいけないと思うし、守りたいと思う。

震災は人の命だけでなく、その後の人々の生活まで変えてしまうということが分かった。特に、交通網がマヒするだけで今まで通っていた会社までの道のりがとても遠くなったり、今まで勤めていた会社がつぶれて今までより遠い場所まで出勤したりとその人たちの生活習慣を変えてしまう。生活習慣が変わるぐらいならまだいいが、職を失ったりすると、財政的にしんどくなって生活すらままならなくなる。私は災害を完璧に防ぐことは可能ではないと思う。たとえ、災害による死者がゼロになっても今までの生活

を失ったり、今までの生活より質が落ちてしまったり、今までの生活より不便な生活を強いられる人はゼロにはならないと思う。その中で、被害を最小限に抑えたり、生活の質が落ちてしまった人たちへの対応を考えたりすべきである。

10 これから

これからの人生で、30年の間に70%の確率で南海トラフ地震が起こると言われている。ただ、私は30年の間に地震が来るとは思えない。というか、どれほどのものが来るかさえ考えることができない。しかも、地震が起こるまでずっとそれに意識を置くと、精神的にもしんどいと思う。ただ、私はいつどこで地震にあって、どんなことが起きようと私は生き延びることをあきらめないでいようと思う。なぜなら、自分が助からないと若い世代の助ける側の人が減るし、助けられる側の人になるからだ。自分の大切な人たちを守るためにも頑張って生きる道を探して、生き延びて見せる。そのためにも、日頃からの防災訓練や勉強、自分が住んでいる町の状況ぐらいは把握しておきたい。

これからの日本では災害との関係は切っても切り離せないだろう。死者や被害を最小限に減らすためにも、一部の人々が防災のエキスパートになるのではなく、1人でも多くの人々が少しのことだけでもいいので考えたり、覚えたりしておくだけでも違うのかなと思った。災害が起きたときは、誰かが動いてからでは遅かったり、逃げるために必要な時間がたくさんあっても周りの人たちが逃げなかったりと言って逃げないのではやはりだめだと思う。だから、ひとりひとりが最善を尽くしてくれるような社会をつくるためにも興味を持ち、自分の命を守ることが重要だ。

11 最後に

私は今までに家族から聞いた話で一番心に残っているものがある。それは母の友人の話だ。母の友人は阪神・淡路大震災が起こる前日に、結婚すると決めていた人とけんかをして家に帰った。次の日、地震が起きてその人が亡くなってしまった。母の友人は「その日のけんかはその日に解決しないとだめだ」と言っていた。私の中でその言葉はずっと心の中に残っている。誰がいつどこで死ぬのかなんて誰にも分からない。ただ、大切な人が亡くなったときに後悔が残らないようにしたい。だから、何か揉め事をしたり、相手にひどいことを言ったりするときはその場ですべてを解決できる人間関係を作り上げることが重要だ。

阪神・淡路大震災から23年たった今でもまだ、私の家族は鮮明に覚えていた。やはり、被災した人は何十年たってもその時の記憶は鮮明に残っているのだと思ったし、阪神・淡路大震災を経験していない世代がどうやって次の世代へと語り継いでいくのか、次に起こる地震に対してどう対応すれば、被害を最小限に抑えることができるのかなど考えていかなければいけない。

「語り継ぐ」

橋本 賢太

はじめに

23 年前 1 月 17 日阪神・淡路大震災が起こった朝、私の家族の三人は神戸市垂水区で生活をしていた。私の父・母・姉の三人だった。その三人の立場は全く異なり、それぞれの行動も全く異なっていた。それぞれの行動と気持ちについて今回は母と父に聞いた話を語り継いでいきたい。

1 震災の朝（両親の体験）

（1）1995 年 1 月 17 日午前 5 時 10 分（母）

この時間は、皆さんからしたら阪神・淡路大震災の起こる 30 分前という認識があると思う。しかし、私の家族・母の感覚は皆さんと異なる。姉は、当時まだ 1 歳にも満たなかったため自分でご飯を食べたり、動いたりすることもできずにいた。また、自分の感情をコントロールすることもできずにいた。

そして、その 1995 年 1 月 17 日午前 5 時 10 分も同じだった。ミルクが欲しくて泣きだした姉のために母は、ミルクを作り台所に向かった。ミルクを温めるために火をつけて 20 分ほど前に完成し姉に飲ませて時間があるのでまた眠りについた。今考えてみれば、もし 30 分後だったら火をつけていたため怪我を負ったり最悪の場合火災が起ったりしていたかもしれない。それを考えると恐ろしかった。

（2）1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分（母）

先ほどの眠りについた時間から約 20 分後にあの巨大地震が神戸にやってきた。大きい揺れと地響きから目を覚めた母はこの地震が起こった時を「エレベーターの 10 階ぐらいから一気に落とされたような感覚を背中受けた。」という言葉で当時の地震の揺れを表現した。

1 歳にも満たない姉を守るために冬場だったのが功を奏し、分厚い掛け布団を使ってそれを姉にかぶせて地震の揺れが治まるまでしばらく待機をしていた。

（3）揺れからしばらくたって（母）

揺れが収まり母は家の中の様子を見ると、食器棚の扉が開いて手前のほうにあったお皿が落下し割れてしまい破片が飛び散っていた。また、団地だったためトイレに排気口のようなものがあつたがその板のようなものが落下してしまっていた。他にも棚の上に置いてあつたたくさんのぬいぐるみもすべて落下してしまっていた。しかし、幸いなことにタンスやテレビなどの大型の家具は落ちてこず怪我を負うことはなかった。

その後一番驚いたことは、家のベランダに出た時だった。周りにがれきが落下している家などは見あたらなかったが、長田で起こった火災の灰が家のベランダについていた。それを見て「長田から垂水まで火災の灰が飛んでくるなんて思わなかった」と言っていた。

その後しばらくして、祖母から電話がかかってきた。寝室から電話を置いている場所までは遠く、ガラスの破片が通道を塞いでいたけれどもそこを通らなければいけなかった。しかし、この時スリッパを用意していなかった。足を怪我しないようにガラスを避けながら電話に出ることができた。

そして母側の祖母が「風呂の水をためなさい」と言って回線がいっぱいだったため電話が切れてしまった。その後また先ほどと同じようにガラスを避けながら風呂に向かい、水を溜めだし始めた。しかし、水を出すにつれだんだん色が茶色になってきて、最後は錆のような色になってしまった。最終的には風呂の浴槽に全部溜めることができた。そして、この水のおかげでトイレの水などに使うことができた。

（4）1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分（父）

この時間父はまだ寝ていた。激しい横揺れと縦揺れを感じ、いつもの規模の地震ではないと感じた。普段は 2 秒程度しか感じない揺れが、何十倍の時間にも感じた。父はその時の揺れの様子を、「ドンと落ちた感じ」と表現した。寝起きで意識がはっきりしない状態でとっさの判断で寝室にある一番重いもので電化製品の下敷きを防ぐため足でテレビを押さえた。

父も母と同じで、垂水区はそんなに被害は出なかったし、家が団地だったため一軒家に比べたら被害が少なく良かったと言っていた。また、テレビの電源も入っていなかったし、ラジオもその当時用意していなかったためそのとき何が起こったか何も分からなかった。

（5）揺れからしばらくたって（父）

揺れからしばらくたってから、母側の祖母から電話がかかってきた後父は当時明石で住んでいた父側の祖父母に電話をして無事を確認することができた。そして、明石の被害はあまりひどくなかったことが分かった。

そして、震災がやってきて迎えた朝の9時頃余震がまだ30分～1時間間隔でずっと続く中で父は仕事に向かった。垂水区内の会社の状況を見に行くために車をとりに家から5分程度の駐車場まで行く途中で、道のずれが発生しているのを発見した。車に乗った後に、会社に向かうための道を走っている途中でも道路のずれが発生しているのを発見し、信号が消えているのに加えて警察などの誘導する人も全くいなかったため右折や左折などがすごく分かりづらかったし、危なかった。しかし、朝が早かったためそんなに道路が混んだりはしていなかったし、走行途中に目立った瓦礫の倒壊や他の落下物とかは無かった。この車の中のラジオで地震の規模を初めて理解した。

その後会社に着いた後は、その日の会社は休みと言われてその後3、4日後に職場に復帰した。

2 震災後の行動

(1) ライフラインの復旧までの道のり

ライフラインの復旧までの時間を種類別に言うと、電気はその日の昼、水は2月中旬、ガスは2月末だったと母は言っていた。特に、電気は昼頃に急にテレビがついた。その時に映し出された映像は高速道路が倒れている映像だった。家の周りは被害が小さかったためその映像をみることで「えらいことや」と思った。その他のライフラインの水は頂いたり、舞子高校の近くにある水道局に水を取りにいったりして、ガスは会社で配給されたカセットボンベとカセットガスをもらったりして使うことができた。

そして、私は風呂について聞いてみたが、明石は水が止まるなどの被害がそんなにひどくなかったので、そこで風呂を貸していただいていた。しかし、赤ちゃんがいたけれど毎日風呂に入る事が出来ていなかったため、じんましんのようなぶつぶつができてしまった。

まだ被害は小さく避難所等にはいなくて済んだものの、片付けや水とガスのライフラインを使うことができ始めた2月の末ぐらいまでは大変だったそうだ。

(2) 友達の大切さ

母は、この災害で友達の大切さを痛感した。災害時に、物資を得るためにはほとんどの店などは閉まってしまっていたため、救援物資を取りに行かなければ行けない。先ほど言ったように母は赤ちゃんを背負っていたためなかなか行ける状況ではなかった。その時に支えてくれたのが母の友達だった。

その人はもともと住んでいた団地と同じところに住んでいた人だった。その人が、小学校が配給の場所となったときわざわざお水を家まで届けてくれた。その人が居なければ物資を取りに行けなかったかもしれない。その人は災害時とてもお世話になったと教わった。

この出来事から災害時には助け合いが本当に必要だということが分かった。友達つまり地域の方＝地域コミュニティが大切だということと自分自身も困っている人を助ける人になることが大切だという事をこの体験から最後に語り継いでいきたい。

3 これからの災害に備えて

私の家は恥ずかしい話、阪神・淡路大震災の時スリッパやラジオなどの備えが本当に大事だということが分かったはずなのに、まだ家具の固定や非常用持ち出し袋の準備を完全には行っていない。たまに家具の固定や非常用持ち出し袋の話は出てくるけれども、話すだけで実現には至っていない。環境防災科で学んできて最低限出来ることから行わないと命を守ることは不可能だと分かっている。行っていればという後悔を絶対しないために、まず一つ一つ対策をしていきたいと思っている。

地域コミュニティにも目を向けたいと思っている。私の住んでいるマンションは避難訓練やマンションでの催しなどを全くしないため、自分の住んでいる階の人でもほとんど知らない。まして住民全員の顔と名前は全くと言っていいほど一致しない。もし災害が起こったら地域コミュニティがないため共助という部分がほとんど使われない。それではいけないと分かっている。最低でもまずは同じ階の人の顔だけでも知りたいと思っている。高校生が何をできるのかって言うかもしれないけれどまずは、日ごろからあいさつをすることだと思っている。あいさつをすることで顔を覚えてもらえたらいいなという思いで行ってその人とのコミュニティを築けたらいいなと思った。災害時には公助という部分を有効に使っていきたいと思った。

これからの災害に備えては、家庭内での対策を行うことと、マンションでコミュニティの対策を行うことの両方を大事にして備えていきたい。

4 将来の夢

私は将来神戸市の公務員になりたいと思っている。その中で私は地域の防災を行ったり、街づくりを行ったりしたいためにこの職業に就きたいと思っている。

私がこの夢を持つようになったきっかけは東日本大震災の時に市の広報車が津波の接近を伝え回ったと聞いたからだ。しかし、東日本大震災の時に大川小学校の悲劇のような悲しい出来事が実際に起きてしまっている。このような出来事は二度と起こしてはならない。阪神・淡路大震災という大きな災害を経験していて、自分の生まれ育った神戸市で南海トラフ巨大地震などの時にも同じようなことを起こしたくない。そのために、神戸市で日ごろから防災を教えたいと思いこの職業に就きたいと思った。

その中で特に、日ごろからの防災訓練の実施をしていきたいと思っている。日常は非日常を支えるという言葉もあるぐらい日常で行っていないと災害時にできるはずがない。だから、日常でどれぐらい教えるかが必要になってくると思う。そのために、様々な地域で防災訓練などを実施することで日常の防災力を上げられるのではないかと思います。その中で自分も携わりたいと思っている。

そして、私はその職場に就く中で大切にしていきたいことがある。それは、色々な方の大切なものを背負っているということのを忘れないことだと思っている。この仕事をするにあたって重要なのはミスをしてはいけないということだ。災害情報や防災訓練での誤報など自分が重要なミスをするといろいろな方に迷惑がかかってしまう。最悪の場合命を奪ってしまうとても重要な仕事だと思っている。だからこそ、しっかりとそれを任されているという意識や責任を背負って何事も行うことがこの世界では大切にしていかななくてはいけないなと思っている。

自分がこの街をととても活発で素晴らしい街に変えるという意識を持つ事が大切だと思っている。それを夢に思っているだけではなく現実的意識する事で、市をととてもよいところにするのではないかと思います。その為にも行動力も大切にしていきたい。それを身につけるためにも今からできることを見つけ、早めに行動していきたいと思った。

もし、将来の夢が現実になれば、このようなことを大切にしていき必ず神戸市や兵庫県内の他の町も防災力の強い街にしていき、災害に負けない街にしていきたいと思っている。そして、どの職業に就いたとしても防災を仕事の中に埋め込んでいきたいと思っている。

5 感想

私は今回両親から阪神・淡路大震災の話を聞くことができた。今までも阪神・淡路大震災について毎年1月17日ごとや、たまたまテレビや新聞などで災害の特集などを行っていた時に少し聞くことはあったけれども、今回のように深く教えてくれたことは初めてだった。特に、父からはこんなに阪神・淡路大震災のことを聞くのは初めてだった。

話を聞いていく中で両親が震災当時住んでいた町は、まだ被害は少なかったけれども母や父が今の様子とはまったく違ってこんなにも苦労していたのだと感ずることができた。また、被害が少ないと言っても人々が目で見えてわかるがれきの倒壊などの被害は少なかったかもしれないが、精神的な被害やライフラインなどの被害はどこの災害の被害を受けた被災地でも同じだという事が改めてわかった。

これを考えて思い出されたことは、被災地ボランティアなどに行って「私の家は被害少ないから大丈夫という人」が発生するという事だ。確かに、周りから見たら家の被害が見えないかもしれないから本当の相手の内心を考えないで了承してしまうかもしれない。しかし、両親の話を聞いてライフラインなどは苦労したと聞いたから、今回両親から話を聞く事で被害が少ない所のケアもしっかりと行わなければいけないと思った。

また、阪神・淡路大震災という災害を経験してひとつひとつの家ごとにもさまざまな教訓があるということが分かった。両親が阪神・淡路大震災を経験してからでてきた教訓を理解しなければいけないと思った。だからこそ、これからは阪神・淡路大震災を経験して分かったことをもっと両親や祖父母また近所の方から話を聞き、これからの災害に向けて家族全員で対策していきたいと思った。

そして、今回母の話を聞いていく中で妊婦さんや小さい子供を育てているお母さんたちの災害時の立場が本当に弱いことにも気付かされた。自分で何もすることができず、自分の意志も言葉で発することができず泣くしかできない赤ちゃんとお母さんの行動や避難で手一杯なのに赤ちゃんのお世話もしなければいけないお母さんは一般の人よりも避難も大変だし、食事の配給に行くのも大変だと思う。これがずっと続いてしまえば災害時お母さん方に何かあってしまうのも無きにしもあらずだと思う。

だから、これからの妊婦さんまた小さい子供のお母さんたちのため、この人たちが災害時要援護者にな

ったとしても、高齢者・障がい者の方などとともに法律などをつくることにより対策を十分とるべきだということが実際に災害時小さい子供を持った母の話を聞くことから感じ取ることができた。

もう一つ分かった事はお風呂の重要さだ。赤ちゃんはお風呂に何日も入らないと肌がかぶれてしまうということが分かった。お風呂で思い出すのはひまわりおじさんのお風呂だがこのようにボランティアで赤ちゃん専用の小さいバスルームをたくさん作る事も小さい子の安全という部分で重要な役割を果たしてくれるのではないかという事が今回話を聞いて理解することが出来た。

6 最後に

最後に現在の自分の家の周りの様子を想像してみると、阪神・淡路大震災の面影はなく、家の場所も変わってしまった。全体的に見てみると阪神・淡路大震災を経験していない神戸市民が約 40%いる。時が進んできてしまい復旧・復興はやり遂げたかもしれないけれども、その後の阪神・淡路大震災からの教訓を語り継ぐってことは本当にできているのかと思っている。その証拠に今の小学生や中学生が本当の災害の恐ろしさを知らない。

理由は、震災の跡がないからだ。しかし、私たちは現在恵まれて環境防災科に入学できている。周りの同世代の高校生よりも災害・防災にかかわれる機会が多い。自分たちが語り継ぎをしていかないと将来誰も語り継ぐ人がいなくなりこれからはもっと阪神・淡路大震災について忘れられてしまうかもしれない。私達には阪神・淡路大震災について語り継いでいく重大な責任がある。

だからこそ、今回語り継ぎを作成することによって一人でも多くの人に読んでもらい、一人でも多くのひとに阪神・淡路大震災について分かってもらい、一人でも多くの人に災害の恐ろしさについてわかってもらいたいと感じた。

そして、私たちもまだまだ新たなことを学んでいき成長していかなければいけないと最後に改めて感じることができた。そうする事で私たちが大人になったときや子供や孫が出来た時に皆が成長できていて語り継ぎを続けていることが出来ていたら、災害に強い街が出来た将来になると思い、将来が楽しみになった。

語り継ぐ

福岡 祐輝

1 はじめに

1995年（平成7年）1月17日、兵庫県南部地震が神戸を襲った。神戸や洲本では震度6を観測したほか、一部の地域では震度7も観測し、神戸を中心に甚大な被害を受けた。これにより、6434人もの尊い命が奪われた。

1999年、私は神戸の地に誕生した。物心ついた頃には、きれいに整備された道路・建物、冬のイベントであるルミナリエなど、生まれ変わった神戸を見て育ってきて、数年前に震災があったことを悟ることのできないほど、神戸は復旧・復興が進んでいた。だから、神戸で地震があったことを知らなかった。私は、1995年には生まれてない。阪神・淡路大震災は経験していない。つまり、私にとっての阪神・淡路大震災は、記録や経験した人からの話で成り立っている。震災を経験していない世代が経験した人と同じ土俵に立つことはないと思ってきた。こんな私が震災を語っていいのか。常々考えてきた。

2 父の話

（1）地震発生

当時父は、三宮に住んでいた。ゴーという音で目が覚める。窓の外はオレンジ色で奇妙な色だった。その直後、ドン！という下から突き上げられるような衝撃に数回襲われ、激しい横揺れが始まった。部屋にある家具はすべて倒れ、ベッドは部屋を左右に行き来していた。布団をかぶりうずくまることしかできず、揺れの間は身動きをとることができなかった。父はこれまで地震で目を覚ましたことはなかったが、阪神・淡路大震災の際に初めて、危機を感じ目が覚めた。その時、死を感じた、日本が滅びたと思ったのが地震発生の際に思ったことだった。まさか地震が関西で起こるとは思っておらず驚いたとも言っていた。当時は、地震で連想されるのは、東北や関東だったそうだ。人々の災害に関する知識の少なさが浮き彫りになったと言っていた。

地震の揺れや家具の転倒などにより、電気がストップし、情報を収集する手段が途絶えた。とにかく情報が必要だと考え、車へ向かった。幸い、車のテレビが使えたため、そこから情報を収集できた。その時初めて地震は兵庫県で起こったと知った。

（2）それぞれの役割

同じアパートに住む妊婦の方が近くにいた。女性は、「実家が気になる」と言っていた。父は、車を持っていたため女性の実家まで、車で送ることに決めた。実家は、灘区だった。灘区は、壊滅的な被害を受けていた。一階はつぶれ、二階が一階のところに落ちていた。倒壊した家屋の中から、悲鳴や助けを求める声などが聞こえたという。父は、できる限り救助活動に携わった。そして、数人救助した。近くの2号線沿いに1人の警察官が立っていた。なぜ、近くに助けを求めている人がいるのに、救助を行わないのか、当時、疑問に思い、いらだちを抱いたとも言っていた。しかし、今振り返ってみると、その警察官は、交通事故などによる二次被害を防ぐための任務を行っていて、それぞれに今できること、今やらなければならないことがあるのだと思った。

（3）今思うこと

その後、父の実家の安否が気になったので電話をかけて確認をとった。まだ電話はつながった。「動く手段がない」とのことで、実家がある播磨町のほうへ向かった。動く手段はないが無事だったので安心した。実家へ向かう途中、長田区を通ると、すごく燃えていたという。「やばい。」の一言しか出なかった。長田区の鷹取、太田地区の古い木造家屋が密集した地帯が激しく燃えていたのだ。

父の住んでいた三宮の家の電気、ガス、水などのライフラインは、全滅だったという。そして、今思うことは、3つある。1つ目、情報の大切さ。2つ目、家具の固定の大切さ。3つ目、通信手段の大切さ。神戸周辺は、地震の影響で通信が途絶え、情報が少なかった。だから、数時間たってからやっと、震源地が、神戸であることを知ったという。まさか神戸が震源だとは思わず、「東京のほうで地震が起こっているのだろう、これは日本が滅びた。」というのが、その時感じたことだと言っていた。

（4）復興

1995年がんばろう KOBE という文字を掲げ、プロ野球チームで神戸に拠点を置いていた、オリックス・ブルーウェーブが優勝した。これは、神戸に勇気と感動を与えた。人々が協力しお互いを尊重し合うことの大切さを学んだ。また、ボランティア元年とも呼ばれる1995年。たくさんのボランティアが、神戸に

集結した。しかし、何を行えばよいのかわからず、危険な箇所に足を踏み入れるボランティアも多く、怪我も多発した。そして、何よりも神戸の象徴であった貿易の中心港である神戸港が、地震により、使えなくなってしまうことが神戸の経済悪化につながったという。現在、神戸港への復帰を促してはいるも、なかなか回復することができない。今年は神戸港開業 150 周年ということで、もっと神戸の復興をしていく中で、神戸港の存在は大きなものになると言っていた。神戸の復興は、まだ終わっていない。本当の復興は、これからである。

3 母の話

(1) 地震発生

当時母は、須磨区の団地で祖母と祖母の弟と3人で暮らしていた。ドン！という音と同時に目が覚める。構える間もなく、二度目のドン！が襲ってきた。下から突き上げられるような強い揺れだった。カタカタと周囲のガラスやタンスが揺れ、強い恐怖に襲われた。揺れは長時間続き、収まった。パニック状態のまま祖母と祖母の弟とで、家の外に出た。外へ出たものの、3人以外誰もいなかった。

余震が多かったが須磨区は被害が少なかった。ガス、電気、水などのライフラインは、1時間後には普及していた。そのまま、職場のほうへ向かった。

2、3日後、水がストップすると周囲の人から聞いたため、毎日、近くの公園に水を汲みに行った。すると、2日後本当に水が止まった。しかし、比較的被害は少なかったため、ライフラインについては、困ることはなかった。毎日加古川にある銭湯へ行っていたため、衛生面も問題はなかった。

4 祖母の話

(1) 運命

当時祖母は、長田区の母子ホームに勤めていた。地震があった1月17日は仕事が休みだったため、自宅にいた。その日の昼頃、職場から人手不足だという電話がかかってきて、職場へ向かった。地震により地下鉄は停止していたため、線路の上を歩き、職場へ向かった。長田区に近づくにつれ、全壊、半壊の建物が増える。職場へ着くと、たくさんの方が施設に避難してきていた。施設の周りは、壊滅的な被害を受けていたが、幸いにも、祖母の施設は、新築で、かつ、太い杭を打ち込んでいたため、コンクリートにひびが入っただけだった。しかし、周辺の住宅で7名がなくなってしまったそうだ。

その日、母子ホームで夜勤を行っていた女性は、家の状態が気になるとのことで、一度帰宅した。後から聞くと、女性の家も被害を受けていて、一階は潰れ、家具が散乱していたと言っていた。もしも、あそこにいたら死んでいただろうと言っていたそうだ。人間の生と死は、ほんの少しの偶然や運命で変わってしまうのだと心の底から感じた。

(2) 二次災害

新長田から西神中央間の地下鉄は、2日後には回復した。しかし、新長田から三宮方面へは、地面の陥没などにより、まだまだ回復の目処がたたない。線路を歩いての通勤は当たり前だったという。

鷹取、太田地区の火災は特にすごかった。火は、2日間燃え続け、震災の二次被害の恐ろしさを感じたと言っていた。夜になると、一層怖かった。真っ赤になった空。今にも山を越え、須磨区のほうまで火が襲ってくるのではないかと感じたそうだ。

数日後、火が収まった長田周辺は、焼け野原と化し、戦争の爆撃を受けた後のようになっていたと表現した。

(3) 避難

長田区は3カ月間ライフラインがストップしたそうだ。テレビやラジオなどで、長田区の被害が大きいと聞きつけ、他県からたくさんの方が物資を送られてきた。祖母の職場は、母子ホームだったため、食料はもちろん、鉛筆やランドセルなど子供用のものも多かった。だから、食料には困らなかった。

たくさんの方が施設に避難してきたが、避難場所ではなく、物資の調達が不安だったため、近くの避難場所であった育英高校への避難を促した。喜んで移動を引き受け、「ありがとうございました」と言って出て行ったそうだ。

(4) 今思うこと

教訓は、絶対に忘れてはいけないと心の底から思うきっかけになった。また、備えの大切さも実感した。「備えあれば、憂いなし」という言葉を身に染みて感じたと言っていた。だから、今も必ず枕元には懐中電灯、ベッドの下にはスリッパ、玄関には水を置くことを徹底している。もう、あんな災害は経験したくないと言っていた。

5 まとめ

3人の話を聞いて思ったことは、家族から、震災についての話が聞けてとてもよかったということだ。これは、環境防災科で地震や防災について学んでいなければ、このような機会を持っていなかったと思うし、震災と向き合っていなかったと思う。私たちの世代は、震災を経験していない。だから、震災と向き合わなくて良いのか、そうではないと思う。阪神・淡路大震災によって奪われた、6434人の尊い命を無駄にしてはいけないと思う。私は今、防災を専門的に学んでいる。ここで学んでいることは、自分の財産になると思うし、災害を経験していない世代の財産にもしていけないといけないと思う。幸い、今の私たちには、教訓と知識がある。阪神・淡路大震災当時は、地震が関西で起こると思われていなかった。だから、正しい情報と防災の知識をもっと広めていく必要があると思った。また、人々の優しさも感じた。災害時、自分も被災しているのに、人を助けたり、避難を促したりとお互いが協力し合う姿がとても良いと思った。他県から、何か自分にできることはないかと駆けつけてきた方々もとてもかっこいいと思った。たくさんの方が訪れ、ボランティア活動を行っていた一方で、活動をしたいと思いながらも何をすればよいかわからずに動けなかった人、ボランティアがいっぱいでやることがなくなってしまった人などもいたと聞いた。しかし、何かしたいと思って神戸に足を運んでくださっただけでも、私たちに向けての最高のボランティアだと思った。自分も、父のように人のために何かできる、ボランティアの方々のように他人の出来事をわが事意識で思える人間になりたいと思った。

6 環境防災科の存在

(1) 出会い

環境防災科との出会いは私を大きく変えた。

環境防災科。2002年（平成14年）全国ではじめてできた防災を専門に学ぶ学科だ。はじめてこの名を知ったのは、私が中学校1年生の時だった。メモリアル行事で舞子高校の先輩方が防災についての発表を私の中学校で行ってくれた時だ。その時感じたのは、防災に対する関心や興味というよりも、自分たちの学んできたことを堂々と人前で話している先輩たちの姿に対する憧れであった。

(2) 志望理由

環境防災科への入学を考え始めたのは中学校2年生の夏頃だった。私は、将来、人の役に立つ仕事に就きたいと思っていた。具体的に消防士を目指すようになったのもこの時期だった。そこで、環境防災科の授業の一環として行われる、神戸市の消防学校での活動に魅力を感じたのが、環境防災科に入学した一番の理由だった。また、全国で唯一の防災を専門に学ぶことのできる学科というところにも魅力を感じていた。

7 夢

(1) 消防士

私は、将来消防士になりたいと思っている。阪神・淡路大震災の際には道幅の狭さや、水不足などにより消防士は十分な消火活動を行うことができなかったと聞いた。また、自助：共助：公助＝7：2：1と、阪神・淡路大震災発生の際の初期消火・救助活動は、自助で賄っていた。だから、自助は大切だと思う。そこで私は、消防士として、市民の自助意識の向上を試み、実際に災害が発生した際、自分の命は、自分で守れるようにしていきたいと思っている。そのための取り組みとして、地域の防災コミュニティの結束・発展に、地域のリーダーとして携わっていきたいと思っている。そう思うようになったきっかけは、阪神・淡路大震災の教訓だった。さらに、その後押しをしてくれたことが、神戸市独自の取り組みである、自主防災組織、防災福祉コミュニティの存在だった。

防災福祉コミュニティ（通称：防コミ）は、阪神・淡路大震災の教訓である、『自助・共助』を地域単位で育て、次いつ起こるかわからない災害に備えるための訓練を行う自主防災組織だ。阪神・淡路大震災の際には、14分という短い時間の間に54件もの火災が神戸市内だけで発生した。これだけ多くの火災の中から消火・救助活動を行うのは、消防士だけの力では間に合わないと思う。そこで、市民の力、つまり『自助・共助』が必要となる。その力を養うためには、地域のかかわりや、人々の豊富な防災の知識が大切となってくる。そこで阪神・淡路大震災の教訓として結成されたのが防災福祉コミュニティだ。

さらに、救急隊員として救急車に同乗し、傷病者を医療機関まで搬送する間に救急救命処置を行い、手遅れになることのないよう最善を尽くして一人でも多くの人の命を救いたいと思っている。そのために、救急救命士となり必要な医療行為を学び、出動指令が出たらすぐに現場へと駆けつけるために勤務中は

常に気を張っていかなる状況にも対応するための訓練や、救急講習、啓発活動、救急車・医療器具の確認等の事前の備えを大切にして、市民が安心して暮らせる環境づくりに取り組みたいと思っている。

(2) 災害と人間

テレビや新聞などのマスメディアでは、地震に関する話題が多く取り上げられている。日本は地震大国だ。いつ災害が起こるかわからない。一度災害が来ると、次はもう来ないだろうと考え、過去の災害がどんどん風化してしまう。そして、忘れた頃に人々を災害が襲う。すると、甚大な被害を受ける。このような油断をなくすためにも、日々意識をもって生活をする。また、防災の知識を少しでも頭に入れておくことは、被害を最小限に抑えるうえで欠かせないことだと思う。そのためのコミュニティとして神戸市の防災福祉コミュニティをもっと発展させていきたいと思っている。行うことは身近なことでもいい。簡単なことから始めてもよい。目的は、市民一人一人がサバイバーとして自分の命は自分で守ることができるようになれば良いと思う。そして、次いつ起こるかわからない災害に市民全員で備えられるよう促していきたいと思う。

8 感想

(1) 後世に語り継ぐこと

風化させないということが一番大切だと思う。災害が発生すると人々の関心はその災害に向く。しかし、年月が経つにつれ、それは忘れられていく。風化は、抑えられないことだろうか、風化させないためにまず何をすべきか。何を考えるべきか。私は語り継ぐことが大切だと思う。では、語り継ぐためにどうすれば良いか。人々の危機意識の向上が必要だと思う。災害は、いつ起こるかわからない。私は、いつか防災が人間にとって食事を行うことのように、生活の一部になればよいと思う。だから、防災学習は欠かせないと思う。

語り継ぐという言葉は、環境防災科に入学してから知った。とても良い言葉だと思った。何事もフィードバックすることが大切だと思う。私たち震災を経験していない世代は、どのようにして災害を知るのか、次災害が起こってから、身に染みて感じるのでは遅い。だから、過去の災害で浮き彫りになってきた、災害に対する人間の脆弱な部分を改善していく必要があると思う。絶対にしなければいけないと思う。過去は過去。もちろんそうだと思うが、過去を過去にしていけないと思う。つまり、過去に起こった災害を忘れないということだ。震災を知ることは、私たちの身を守るためであり、過去の震災によって、奪われた尊い命の分まで背負って生きているという、自覚にもつながると思う。私たちは、過去の災害で亡くなった方々の命を無駄にしていけない。それは、様々な形で行うことができると思う。私たち防災を専門に学んでいる人間は、正しい情報、防災の知識を促すことが重要だと思う。

震災を経験した人としていない人が同じ土俵に立つことは、できないかもしれない。被災された方の気持ちになろうとしてもきつとなれないと思う。しかし、近づくことならできると思う。私は、過去の災害を決して無駄にはしない。震災を風化させない。だから、次世代に語り継いでいこうと思う。これらのことは、私たち今を生きる人間にとっての責任であると思う。

(2) 最後に

私は、今回の「語り継ぐ」を書くうえで、とても貴重な経験をさせてもらったと思う。それは、初めて自分の家族から震災について聞くことができたことや、三年間を振り返って、阪神・淡路大震災や防災と改めて向き合うことができたことだ。そして、自分が今、環境防災科で防災を学ぶことができていることに感謝しないとイケないと思った。私は、自分にできる最大限の努力と可能性をこれからも忘れずに行っていきたいと思う。

忘れるな震災・語り継ごう震災

藤本 健太

はじめに

1995年1月17日 午前5時46分 淡路島北部を震源とするマグニチュード7.3の地震が発生した。この地震により、兵庫県を中心に大阪、京都も大きな被害を受けた。死者もたくさん出た。地震は、神戸に大きな爪痕を残していった。この地震から4年後に私は、生まれた。そのため、阪神・淡路大震災を経験していない。だから私の経験を話すことはできない。しかし、語り継ぐこと、学ぶことはできる。震災から23年、甚大な被害をもたらした震災後すぐに活動した神戸市消防局について父から話を聞いた。

1 震災の朝

(1) 震災前

私の父は、神戸市消防局に勤めていた。1月16日は本来なら、当務の日であった。しかし、休みが取れたので友人とお酒を飲んでいて。帰宅したのは17日午前2時頃だった。そこからお風呂に入り寝たのは3時頃だった。

(2) 発災

下からドンと突き上げられるような振動で体が浮いたように思い始めは悪い夢を見ていると思った。しばらくしてもう一度来た。これはおかしいと電気をつけた。家族も起きて電気をつけ始めた。テレビをつけて情報を入れようとしたが神戸の情報は全くなくしばらくたって、京都や他都市の情報ばかりだった。やがて、外が明るくなってきて家の外観にも被害があることがわかり祖父と父で次の揺れで倒れそうなものを倒した。

2 活動

(1) 神戸へ

テレビで神戸の映像が流れたとき、当時勤めていた兵庫消防署の救急隊が放水しているのを見た。「これはやばい。」と思い親戚のスクーターを借り神戸へ向かった。西神あたりを走行中何本もの黒煙が上っていた。須磨区あたりを走行中消火活動中の消防隊にあった。通常、建物火災には何台もの消防車が出動する。しかし、はしご車一台で消火に当たっていた。長田区に近づくにつれて空がどんどん黒くなっていった。兵庫消防署についた時には消防車はすべて出動していた。ついてすぐに服に着替えて、湊川の火災に出動した。神戸市では、50件以上の火災が発生していた。当時の消防力では到底及ばない件数だった。

震災後は、一か月ほど休みはなく休憩だけだった。

(2) 緊急対応

消防だけでは歯がたたない現場ばかりだった。そこで、消防広域応援及び自衛隊に災害派遣を要請した。消防は消火活動を優先して行い、警察及び自衛隊は救助活動を行った。

火災の消火方法はさまざまであった。消防車が足りないのを賄うため消防艇による海水利用を行ったり、消火に使えるものを土木局などから借りたりして消火を行った。

何日かすると全国から消防が駆けつけてくれた。その当時、緊急消防援助隊などの体制はできておらず、自分たちの判断で駆けつけてくれた。消防車、救急車、ヘリコプターなどたくさんの車両と人員。北は北海道から南は鹿児島までの約450消防本部から、最大で506隊2434人が駆けつけた。神戸市の消防隊、消防団、他都市の消防隊の懸命な活動により約32時間後、鎮火した。

(3) つらい現場

家屋の倒壊や家具の転倒による生き埋めが至る所で発生していた。どこも重機がなければ手を付けられないような現場ばかりだった。消防士の数も足りず道具も足りなかった。助けられる命が助けられないこともあった。目の前で失われて命があるのに消防はなすすべがなかった。

火災を消そうとしても消火栓が使えなかった。消防車の数もホースの数も足りなかった。「はよ火消さんかい」と暴言を吐いてくる人もたくさんいた。その時、呆然と立ちすくむこと以外何もできなかった。

た。

焼き焦げて崩れそうになっていた建物に「親戚がいるから探してくれ。」と言われた。中に入り焼き焦げた遺体や骨を探した。

(4)うれしかったこと

火災現場で食事もとらず夜中まで消火活動を行っていた。その時、近所に住んでいたおばさんがおにぎりを持ってきてくれた。何もかも失ってつらい時に本当にありがたかった。

(5)震災以降の変化

- ・大規模な災害に迅速に対応できるように緊急消防援助隊が創設された。
- ・震災消防計画が神戸市消防局で作られた。これは、神戸市が作った震災初動対応マニュアルである。
- ・消防により高度な技術などを持った特別高度救助隊の創設。
- ・神戸市消防局では、大規模災害対応救急隊(BLUE-CAT)が創設。
- ・災害派遣医療チーム(DMAT)が発足された。

「たちばな」

17 年を持って神戸市消防局消防艇「たちばな」が更新されることになった。震災当時、消火栓が壊滅し、陸では水不足になっていた。たちばなからホースを延ばし、近隣各地から集まった消防車を何台も中継し、炎上する長田の街へ約 40 時間、海水を送り続けた。このたちばなの更新で、震災当時に活動していた消防車両がすべて更新された。

3 父の話聞いて

今まで父に阪神・淡路大震災のことについて話を詳しく聞く機会はなかった。「語り継ぐ」を書くに当たってこのような話が聞けて良かった。今までは、震災の時は現場に行き火災の消火にあたっていたことなどは聞いていた。今回真剣に話を聞いて初めて聞いた話がたくさんあった。その中で、印象に残っている話がある。倒壊し焼き焦げた建物から人を探してくれという話だった。この話を聞いた時、消防はこんなことまでしなければいけないのかと思った。しかし、遺族の人のためにもつらい現場ではあるが、しなければいけないとも思った。消防の仕事は人命救助・火災の消火だけではない。どんなにつらい現場であろうと耐え抜く力が必要だと思った。自分も消防士を目指すのであればこれぐらいの覚悟をしておかなければいけないことを改めて考えさせられた。

大都市神戸を襲った震災はたくさんのことを教えてくれた。震災であらわになった消防の無力さ、町の脆弱さ。当時の神戸には、たくさんの課題があった。その課題を市民と行政が一丸となり一つ一つ改善し、阪神・淡路大震災と同規模の地震が発生しても負けない町を作っていかなければいけない。それには、市民の防災の意識を変えていかなければならない。そのために、私たちのような防災を学んでいる人たちがもっと活動していかなければいけないと思う。そして、今回聞いた話などは自分の中だけにとどめておくのはもったいない。次は、私が語る人になりたいと思う。

4 環境防災科

(1)環境防災科を目指した理由

私は、消防士になりたいという幼いころからの夢があり、防災を学ぶことができる舞子高校環境防災科に入学した。中学一年生のころに、父から環境防災科のことを聞くまでは県立農業高校に行こうと思っていた。神戸の高校を受けることなど全く考えていなかった。しかし、環境防災科のことを聞いてからはほかの高校のことは全く考えることができなくなってしまった。それほど、環境防災科には魅力があった。防災を専門的に学びそれを若い世代から高齢者まで幅広い人たちに防災を広めることができる高校生はとてすごいと思った。自分もこんな風に防災を広げていきたいと思ったのが環境防災科に入った理由だ。

(2)環境防災科で学んだこと

環境防災科では、3つのことを基本として学ぶ。1つ目は、Survivor になる。災害時において一番重要なのは、まず自分が生き残ることが重要である。2つ目は、Supporter になる。自分の命が助かればそれで終わりではない。周りで困っている人、助けを求めている人を助けなければいけない。3つ目は、市民力を育む。市民のリーダーを育成することである。

私が大切だと思ったことがある。地震から生き残るためには、家具の固定だ。阪神・淡路大震災で一

番多かった死因は圧死である。木造家屋の倒壊、家具の転倒により下敷きになったからだ。

これから起こるとされている南海トラフ巨大地震に備えるためにも家具の固定が大切だ。もう一つ大切だと思ったことがある。それは、非常持ち出し袋を備えることだ。どのような災害が起こってもすぐに避難できるように非常持ち出し袋は備えておくべきである。自分が備えれば他の人がまねをしてまた他の人がまねをする。この連鎖によりたくさんの人に備えてほしい。

阪神・淡路大震災以降の日本では、自助、共助、公助の三つが重要だとされている。しかし、公助というものは全体の数パーセントにしか及ばない。阪神・淡路大震災では自助・共助がとても重要だった。震災当時は、近所との関わりは深く誰がどこに住んでいるかよく知っていた。

しかし、現在の日本は違う。隣に住んでいる人が誰かしらない人もいるだろう。近所との関わりを避けている人がたくさんいる。近所とのコミュニケーションをとらないことには、共助に至る以前の問題である。このような事態を少しでも改善したい。そのために、夏祭りや地区での防災訓練など人が集まれる機会を増やすことが重要だと考えた。これを機会に近所の人と挨拶をしたり話をしたりする場を作りたい。

また、今現在問題になっている高齢化問題は災害時には平常時よりも深刻な問題となっていく。災害時要援護者をどのようにして避難させるのか地域の人全員で考えていかなければならない。地域の人と一緒に助け合っていく社会が必要である。

5 私の夢

私の夢は市民の皆様から信頼される消防士になることだ。阪神・淡路大震災において、神戸市消防局は思うように活動ができず悔しい思いをした。その教訓を生かすために神戸市消防局はたくさんの改革を行ってきた。そして、神戸市は災害対策・地域コミュニティに力を入れ町は強くなってきている。だが、まだ万全とはいえない。どのような災害がおこっても、いつ起こっても対応できる町をつくらなければいけない。そのため、消防士になり安全な町「神戸」をつくりたいと考えている。

私は消防士になってやりたいことがある。

1つ目は、消火隊として現場でのたくさんの経験を積むことである。危険な現場での活動で求められる迅速な判断、適切な行動などこれらを身につけるため消火隊として経験を積みたい。また、救急活動にも出動する消火隊で適切な応急処置なども学びたいと思っている。そして、先輩の技術を盗めるだけ盗み、一人前の消防士になりたい。

2つ目は、緊急消防援助隊として災害現場で人命救助をすることだ。阪神・淡路大震災の教訓を踏まえ、大規模災害等において被災した都道府県内の消防力では対応が困難な場合に、国家的観点から人命救助活動等を効果的かつ迅速に実施し得るよう、全国の消防機関相互による援助体制を構築するため創設された組織である。この緊急消防援助隊として災害現場に行き救助活動や救急活動、消火活動に従事し消防士として培ってきた技術、精神力などを現場で生かしていきたい。また、災害では被災された方々がたくさんの心の問題を抱えることが問題としてあげられる。このように消防士として被災者の方々の心のケアなども行っていききたいと思う。

3つ目は、防災の啓発活動を行うことだ。今まで環境防災科で学んできた防災の知識を生かし市民の防災意識の向上を目標とし、災害から市民の皆様を守りたいと考えている。これは、現場で働きながら防災訓練などに参加し啓発したり、予防課に所属し専門的に市民の皆様には火災予防や防災教育に従事していきたいと思っている。災害時とても重要となってくるのは自助、共助である。自分の命は自分で守る。そして、地域の人たちはともに助け合っていく。これらを教えていくために、防災訓練に力を入れ防災教育などを行い日本の防災意識をそこからあげていききたいと思う。

4つ目は、消防団係として勤務することだ。災害時消防団は、市民と消防をつなぐ役目をするとても重要な存在である。災害時には、消防団は消防よりも市民の方と協力して、人命救助・避難誘導などの活動をする。このように、市民と密接して暮らしている消防団の力を強くすることは大事だと考える。だからこそ消防団の人員を増やし今まで以上の技術を身につけさせることで、一人でも多くの命を救うことができると考える。

5つ目は、救助隊に入り災害現場に急行し救助活動を行うことである。小さい頃から「人の役に立ちなさい」と言われてきた。現場の最前線で人の命を救う救助隊になり市民の皆様を守りたいと考えている。またそのような現場で冷静かつ迅速な行動ができ、地域の人に寄り添う頼れる救助隊員になりたいと思う。

最後に消防士になってやりたいことは、小隊長になることだ。小隊長とは、小隊を指揮し隊員の安全

管理などを行う仕事である。小隊長になるには、昇任試験に合格し消防司令にならなくてはならない。また、小隊長はどのような現場でも迅速に判断し的確な指示を行わなければならない。そのため、小隊長は現場をたくさん経験し経験豊富でなければならない。なので、私は高校卒業後すぐに消防士になりたいと思っている。そして、たくさんの現場を経験しどんな現場にも的確に指揮の執れる小隊長になりたい。

6 語り継ぐ

阪神・淡路大震災から 23 年がたった。今では、震災を経験したとは思えないほどきれいな港町神戸。神戸では、震災を経験していない人口は 4 割を超えた。2021 年には 5 割を超えるといわれている。震災の記憶は風化し続けている。阪神・淡路大震災についてのニュースは毎年 1 月 17 日に報道される以外ほとんどなくなった。このままでは、震災は忘れ去られてしまう。災害の記憶は忘れてはいけない。

「災害は忘れた頃にやってくる。」という言葉があるように震災の記憶がなくなれば、同じように災害が繰り返され同じように悲しむ人が増えるだけである。そのようなことを防ぐためにも語り継ぐことはとても大事なことだ。震災の話聞くことも重要である。だから、震災を経験していない人は経験した人から話を聞き、経験した人は経験していない人に話してほしい。それを機に災害の怖さを知ってほしい。そこから災害に興味を持ち、自分で考えて備えることが大切だ。日本に住んでいる以上災害から免れることはできない。しかし、備えることはできる。非常持ち出し袋を備える。ハザードマップを見る。家族で話し合い、避難所を考える。やるべきことはたくさんある。この「語り継ぐ」を読んでそのような気持ちになってくれる人がたくさんいれば幸いだ但实际上はそうではないと思う。しかし、一人でも備えようと思っていただけたら光栄である。微力だけど無力ではない。小さな力でもそれがたくさん集まれば大きな力になる。そのため、多くの人にこの「語り継ぐ」を読んでほしい。

語り継ぐ

細道 壮太郎

1 はじめに

今から 23 年前、兵庫県南部地震が発生。それにより近畿圏の広域が甚大な被害を受けた。

私が産まれた年は 1999 年で、阪神・淡路大震災を経験していない。そんな私が震災について父から話を聞き、どのような考えをもったのかをこれから書いていく。

2 概要

発生日時	: 1995 年 1 月 17 日 5 時 46 分 52 秒
震源	: 淡路島北部沖の明石海峡（北緯 34 度 35.9、東経 135 度 2.1 分、深さ 16 km）
地震の規模	: マグニチュード 7.3
死者	: 6,434 名
行方不明者	: 3 名
負傷者	: 43,792 名
住宅被害	: 全壊 104,906 棟、半壊 144,274 棟、一部損壊 390,506 棟
火災被害	: 全焼 7,036 棟、焼損棟数 7,574 棟
その他被害	: 道路 7,254 箇所、橋梁 330 箇所、河川 774 箇所、崖崩れ 347 箇所
被害総額	: 約 10 兆円規模

3 父の話

(1) 震災の前日

この日は仕事がなく休日、加古川にいた。その日の午後 3 時に、地震と思われる揺れを感じたが、多くの人達は気が付かないような小さな揺れだった。

(2) 震災の当日

当時、まだ独身の父は実家のマンションに住んでいたが、このとき父は明日の仕事に備え、ベッドで眠っている時で、いきなり大きな揺れが起こり、父は強制的に起こされた。その時の家の中では、タンスは倒れ、食器棚に入れてある食器は落ちて次々と壊れていった。その後、揺れがおさまった時には、家中がめちゃくちゃな状態で、あまり動けるスペースがなかった。

その後、父は他の人に状況を聞こうと、家の電話でかけたが、電気が通っていなかったのか、通信が混雑していたのか、つながらなかった。しかし、父は仕事の関係もあり、まだあまり普及していない携帯電話を持っており、明石にはかからなかったが、加古川にはつながった。その後、車のラジオで情報を得て、日が昇るのを待った。

(3) 外の様子

地震は起こったが会社に行かないわけにはいけないので、午前 7 時 30 分にバイクで出発した。道路には、車が一台も走っておらず、変な不安感があった。

その後、須磨水族館を越えた辺りから、周りの状況が一変した。まず、JR 山側から黒煙が立ち上っており空は真っ黒になっていた。その時、火事が起こったのだと感じ取った。他にも異様な事があり、長田の大橋町を過ぎたあたりで、目の前に車が 3 台ぐらいひっくり返っていた。上には高速道路があったので、おそらく地震によるゆれで車がはねてしまい、落ちてきたのだろうと思った。ちなみに須磨水族館あたりからは、信号はすべて止まっていた。

(4) 仕事

その後、勤め先である神戸中央郵便局に到着したが、上の階にあがるための階段が天井のがれきで、中に入ることができなかったため、一度家に帰った。家の中はぐちゃぐちゃではあったが、水道は通っており、ガスも動き、夕方には電気もついた。神戸のあたりほどの被害は明石にはなく、ライフラインに問題はないので、どこかに避難することはなく、家で生活を送ることができた。

その後、落ち着いたのでまた仕事場に戻ろうとした時、朝は車が全く通っていなかった道路には、大

渋滞が起こっており、バイクですら通ることができなかった。

時間はかかったが、何とか仕事場に着き、地震から3日後ぐらいで会社の中に入ることができるようになった。仕事は、階段で立ち入り禁止になっているところ以外で、入ることができる部屋だった。

主な仕事内容は、保険を勧めたり、貯金を預かったりと、普段の仕事もあったが、震災が起こったことで出てきた仕事があり、それは郵便局にお金をおろしにきた人に対しての10万円の貸し付けだ。郵便局では、お金を預けていたものを引き出そうするとき、必ず証明書が必要になってくる。しかし、震災が起こったことで証明書をなくしてしまったり、取りにいけなくなったりということがあった。そこで、一旦10万円を貸して、あとでまた返してもらおうというものだった。だが、これはほとんど信用払いのようなもので、住所などは取っていたが、偽ることは可能だったので、ほとんどは返ってこないのが前提だったが、後に回収した時に、約9割以上を回収することができ、そこは日本人の素晴らしいところだと感じた。

他にも、定額貯金が満期になった人に対して、避難先である体育館まで、直接お金を持っていくことや、ビルに営業で行った際には、電気が止まっていることもありエレベーターが動かないので、歩いて11階まで上がったことなど、震災は仕事にかなり影響していた。

その中で、仕事で外に出ているときに驚くことがあった。市役所前のフラワーロードに面している15階ぐらいのビルが横倒しになっていた。地震が起こった直後は斜めになっていたただけだったが、その後の余震で倒れる形となった。それを見たときは地震の恐ろしさを改めて思い知った。

4 父の話についての感想

父の話を聞いて、環境防災科に入ったものの、父とはこのような話をしたことがなく、今回このような機会があったおかげで知ることができたので、良い機会だった。

私の父は明石市出身なので、阪神・淡路大震災の被害はそこまで受けていない。だから、震災についての話を父にしても、あまり意味がないものだと考えていたが、実は家の中は無茶苦茶になっていたりと、仕事先は神戸市中央区の郵便局であり、向かう途中で震災が巻き起こした色々な状況に出くわしていたりと、かなり震災と関りがあった。そう考えると、震災とは起こった地域にだけ影響が出るのではなく、他の未災地にも何かしらの影響が出ているのではないかと思った。

また、震災がどれほどの被害を神戸に与えたのかがよくわかった。テレビでも、たまにヘリコプターの上からの映像で、神戸の街が燃えているのを見るが、あまりにも信じられない状況なので、実際に起こっていたという感覚はあまりなかった。父の体験した話を聞いているなかで、山の奥から黒煙が立ち上っているという話のときは、あの映像はやはり実際に起こった出来事だったのだと、確信せざるを得なかった。

5 阪神・淡路大震災について

私は、いまだ大きな地震を経験したことがない。そんな中で、阪神・淡路大震災のことについては中学生まで、道徳の授業の時間かテレビの番組でたまに知るだけで、ほとんど何も知らなかった。だから、阪神・淡路大震災へのイメージは、かつて神戸に大きな地震が起きて、神戸の街はめちゃくちゃになり、たくさんの人が亡くなったというようなどこか他人事のように思っていた部分があった。しかし、今は環境防災科で学んで、あと30年以内に南海トラフ地震が70%の確率で起こるということがあり、とても他人事とは思えなくなった。私たちは常に、震災はいつでも起こるということを頭の片隅に置いておかなければならない。

環境防災科に入って、阪神・淡路大震災について学んで知ったことだが、この震災以降で変化したことがたくさんある。

例えば、建築基準法で、地震国として構造力学に基づいて建材の質や形などを制限した仕様規定から、定期的な仕様または国際的な検証方法によって、実質的な耐震性を測ろうとする性能規定に変わっている。

他には、カセットコンロとボンベだ。震災で、被災者が避難生活中にどこでも使えるカセット式のガスコンロを調理などに利用していたが、当時のカセットコンロ、ボンベの規格はJIS規格によって制定されていたもので、ボンベのサイズや構成部品が厳密には規定されておらず、メーカーの異なるカセットコンロ、ボンベの互換性は完全ではなく数種類あった。そのため、被災者間においてカセットボンベの貸し借りができない場合があり、メーカー側に疑問がでて、規格統一の必要性が認識された。これを教訓として、改正が行われ、ボンベの形状が一種類に規定され、メーカーを選ばず、カセットコンロ

にボンベを装着することができるようになった。

6 私が経験した地震と巨大地震に会う前にすべきこと

私が今まで経験した地震で、印象に残っているのは3つだ。

1つ目が、中学2年生の時の真夜中に震度はわからないが、揺れの感じることができる地震を感じた。その時、何が起こったのかわからず、ベッドの上で寝ぼけていると、父が私を担ぎ上げ、家の外に出ようとしていた。しかし、揺れは途中で治まり、家から出るほどではなかった。

2つ目は高校での授業中だ。あのときは、たしか5時間目の家庭科の授業の時だった。突然揺れが起こり、前に地震にあったときは、眠っていたのでよくわからなかったが、今回は、完全に意識がある状態なので、揺れは震度3ぐらいのものだったが、それでも、かなりの恐怖を感じた。

3つ目は熊本へボランティアに行った時で、この時の揺れは余震によるものだったので、そこまで大きな揺れは感じなかったが、熊本では大きな地震が2回起こり、1回目が震度7だったので、それが本震だと思われたが、翌々日には、2回目の震度7が来たのだ。この地震は1回目の地震に触発されて起こったとされているが、もしかしたら、3回目があるかもしれないということを余震が起こる中で考えていた。

そんな中で、あと30年以内に起こるかもしれない南海トラフ地震が起きるまえに、私はどうすべきか。

まずは、家を耐震化にする必要がある。例えば、壁に筋交いを入れたり、金物で補強したりすることだ。そうすることで家が崩れにくくなり、家の下敷きになりにくくなる。

他に、家具の固定がある。これは家の中で地震が起こった場合、家具が倒れてけがをする可能性があるため、固定する必要がある。主に、テレビ、タンス、食器棚などだ。

次は、近所の人たちとのコミュニケーションだ。これは、阪神・淡路大震災が起こった時に、淡路島で、家が崩れたりして、下敷きになる人が出てきたが、この時に、消防などの公助よりも、住民が助け合った共助のほうが多くの人たちを救っている。それは、近所の人たちでよくコミュニケーションを取っており、誰がどこにいるかを把握することができたために助けることができた。だから、家の中まで把握するほど仲を良くする必要はないが、顔を知っている程度にはコミュニケーションを取っておく必要がある。

次に、避難する際のルート確認と避難場所を予め決めておくことだ。災害時に、避難経路を確保しておくことで、スムーズに逃げるのが可能だが、もし指定したルートが通れなくなった場合を考えて、複数のルートを確保しておく必要がある。そして、避難場所を決めておくことで、親と連絡が取れなくなった場合でも、合流することが可能だからだ。

7 夢と防災

私は、今目指している職業はセコム株式会社というところで、この会社は警備保障サービスを主体とする民間企業で、この分野の業界では「顔」として認知されている現代のセキュリティ会社のパイオニア的存在だ。特に、警備設備を機械化したことで、業界に大きな功績を残している。

グループ全体では本業の警備業に限定せず、セキュリティ関連分野に積極的な戦略で、自社開発の防犯・防災用品販売、病院経営や医療システム、情報セキュリティ分野全般のコンサルティングや各種サービス、日本発の民営刑務所（美祢社会復帰促進センター）経営など、扱い業種は広範だ。

セコムと他社のホームセキュリティー契約を比較すると、セコムは拠点の数が日本一だが、警備員一人あたりの受け持つ施設数も800～1500物件と、他社とは群を抜いて日本一である。さらに警備員の担当業務も警報対応のほか、駐車場やATM障害対応等に渡る。従って異常警備受信時、担当警備員が他の対応等している可能性が高く、他の対応がなければ、契約先への緊急対応到着時間は圧倒的に早い場合もあるが、対応中の場合は極端におそくなる場合もある。

セコムには安否確認サービスというのがあり、まずセコムあんしん情報センターが24時間365日体制で日本国内の災害情報を入手し、そして震度5弱以上の地震、またはお客様と事前に取り決めた災害情報を入手した場合、管理者に電子メールで通知をする。そして、事前の取り組みでセコムあんしん情報センターが安否確認メールを代行送信。安否報告のない社員に対して、安否確認メールを自動的に再送できる。その後、管理者からもメールがくる。

このサービスの特徴は、管理者がどんな場合でも代行があり、確実にメールを送ることができる。また、社員は自ら安否の報告を行うことが可能だ。これは、携帯電話基地障害などで、メールの着信が遅

れた時に有効だ。そして、安否報告や被災地域の建物、電気・水道・ガスなど、事業継続に必須なインフラの被災状況報告が自動集計されるので、管理者は、携帯電話やパソコンから組織・地域・所在地・勤務地単位で、リアルタイムに状況把握が可能だ。

他にも、セコム初動支援サービスというのがあり、災害発生時の初動対策に必要な初動マニュアル作成支援、初動マニュアルの電子化、防災グッズの供給、防災グッズの管理等、企業の迅速な初動対応を支援したり、セコム安否確認サービスと合わせたりして、総合的な防災対策として企業の危機管理に必要な事業継続計画の策定に役立っている。

セコムでは警備会社というだけあって、かなりの災害に対しての取り組みがなされている。その中で、私は今まで学んできたことを生かすことのできる仕事につき、多くの人の助けとなることをいつも考え、生きていこうと思う。

生き抜く力

程野 洸平

1 はじめに

今年で阪神・淡路大震災から 23 年になる。私は震災の 5 年後に生まれた。父と母方の祖父から聴いた話と尼崎市消防局・尼崎市消防団発行の冊子「阪神・淡路大震災尼崎 119 の活動記録」を基にここにつづろうと思う。

2 震災の朝

(1) 祖父

震災の朝の事はあまりに突然で全く予期できぬことだった。体に激震を感じて目覚め、寝床から立ち上がったものの、それからは身動きできずにいた。振動が収まるまで待ち、家族の安否を確かめた後、地元の尼崎市消防団の団長を務めていたため、すぐに家から一番近くにあった分団器具庫へと向かった。

(2) 父

父は西宮で 1 人暮らしをしていた。同じ西宮市内で 1 人暮らしをしていた弟の安否を確認するために駆けつけた。

3 震災発生後の行動

(1) 祖父の行動

器具庫へ向かう道すがら出会ったお年寄りの方がいた。恐ろしくて外へ逃げ出してきたのだろう。その人は制服姿の祖父を見つけて「この人なら助けを求められる」と思ったのか、すがるようにしてそばへ駆け寄ってきた。その人を避難所となっている近所の自動車教習所へ誘導した。

祖父は分団器具庫へ向かった後、消防団員に非常招集をかけ、パトロールを指示して、杭瀬社会福祉連絡協議会会長に分団器具庫に待機している旨を伝える。その後、地域内のマンションの住民から救助の要請があった。家具の下敷きになって、腰を負傷したが救急車が出動することができないため、病院へ搬送してほしいということで直ぐさま近くの病院へ搬送した。時間がたつにつれて、各所でガス漏れが続発したため、団員が交代で日没まで警戒出動をした。2 日後の 1 月 19 日には、芦屋市へ応援出動した。芦屋市消防団の方々と合同で住民の安全確認のためのローラー作戦を実施したときに、1 人の消防団員が「私の父はこの倒壊した家の下で亡くなったのですよ」と話された。家族を失い、住宅が倒壊し、全てが大混乱の中、消防団員としての使命を果たすべく、無念さをこらえて活動しておられるその姿を目にして、「これぞ、消防精神だ!」と感銘を受けた。祖父は最後に、「大震災というものは人の心を荒しただけではありません。正義と勇気をも呼び出しました。そしてこれを機に、今後も私自身が一消防人として一層力を注がんと心新たに決意しました。」と語っている。

また祖父は、屋根瓦を主とした建築業を営んでいた。従業員やその家族の無事を確かめ、出勤できる人は会社へ出向いてもらい途切れなくかかってくる電話の対応や、取りかかれる改修依頼にはすぐに出迎えるように指示をだした。祖父が経営する会社は国道二号線沿いにあった。瞬く間に会社の前の道路は大渋滞となった。神戸方面から大阪方面へ身内や親戚などを頼りに避難していく人々の車だった。祖父は、車の中で疲れ果てている人を見て会社の中にあった飲料水などを配れるだけ配った。その際に、「頑張ろう!」や「気をつけていきや!」などと声をかけ励ましあった。

その後、国道二号線は明石から尼崎杭瀬寺島というところまで一般車両は通行止めとなった。

(2) 父の行動

父は震災発生後、父の住んでいたアパートから弟のアパートまでは直線距離にして約 2 キロ程度であったが辿り着くまでの道のりは、それは長く感じたようだ。なぜならばあたりの民家はことごとく倒壊し、さらに道端で泣き崩れる人や蒼白な表情で呆然と立ち尽くしている人がいたからであった。

不安を掻き立てながらやっとの思いで弟の住んでいたアパートへ到着することが出来た。しかし弟が平穏に住んでいたはずの建物は見事に崩れ落ちていた。弟の名前を父は叫び続けた。ほんの少し力のないか細い声が返ってきたように感じた父は一人で声がした辺りの瓦礫を取り払い下敷きになっていた弟を見つけ出し救い出した。

4 震災発生後の生活

(1) 祖父の家族の生活

1995年1月17日は祖父の60年間の消防人生の中で最も短く、また最も長い1日であったと今でも鮮明に覚えていると話していた。

祖父の家族は祖父と祖母と次女（私の母）と3人で尼崎市内の一軒家で住んでいた。祖父は建築業を営んでいたため尼崎市内の被害は比較的軽かったとはいえども、会社や自宅にまでも震災後ひっきりなしに家の修理の依頼の電話が掛かってきた。直接改修依頼に来る人々は防災頭巾をかぶってスがるような目だった。

祖母は専業主婦であったが、死体腎臓移植を受けていたので免疫抑制剤などの多くの薬を服用しなければなかった。処方されている手持ちの薬がなくなった時に病院でこれまで通り処方してもらえるのかどうか心配になりかかりつけの病院に連絡を取った。

私の母は祖母の看病と祖父の会社のサポートをしていたため家庭を守るのに精一杯だった。

祖父の長女（私の母の姉）は結婚し祖父の家から徒歩10分くらいの一軒家で夫と5歳の長男3歳の長女と4人で暮らしていた。

(2) 父の家族の生活

父の家族は西宮市内で祖父と祖母、長女の3人で暮らしていた。5階建て集合住宅の最上階が住居だった。地震発生の際はすでに起床して朝食の準備が食卓に整っていた。地震の揺れで食器が部屋の中を散乱したり家具などが傾いたりした程度であった。激しい揺れだったが誰も怪我を負うこともなく被害は軽かった。

5 尼崎市の被害状況

ここからは阪神・淡路大震災尼崎119の活動記録と今回話を聴かせていただいた方からの話をもとに書いていく。

尼崎市は、関西地震観測研究協議会設置の地震計で設定の震度を振り切っていて、震度は6だったことがうかがえる。

死者は49名、負傷者は重傷者と軽傷者合わせて7,112名。

全壊は5,668棟、半壊は36,002棟。

消防水利について。消火栓自体の被害はなかったが、地震直後において市内全域で断水状態となり消火栓は使用できなかった。

水道は地震直後市内全域で断水状態となっていたため、市内業者及び、他都市の支援を受けて断水地域の解消に努めた結果、発災14日後の1月31日に市内全域の排水管に水道水がいきわたるまでに復旧した。

電気は市内全地域の239,000戸にわたり停電状態となったが、1月18日14時に復旧した。

ガスは尼崎市内533箇所ですガス漏れが発生。液状化の激しい築地地区の1,000戸は一部供給停止地域となっていたが、2月13日に、本管と支管については復旧工事が完了した。

電話は、発災後かかりにくい状態が数日間続いたが、回線の断線等機能的には障害がなかった。

地震に伴い、1月17日6時00分から18時39分までの間に8件の火災が発生。

1月19日小田南公園という広大な公園とその他の広場を利用して約1,000戸の仮設住宅の建設が始まった。

2月3日の尼崎市災害対策復興本部が設置されるまで毎日芦屋市、神戸市へ特別救助隊、救助隊、消防団が応援出動を続けていた。

消防団では阪神地区、消防分団長が協議し、芦屋市には尼崎市が応援し、被災が大きい地区の住民の捜索活動を実施した。また兵庫県消防協会長の要請により兵庫県庁で救援物資の振り分け作業活動などを実施した。

尼崎市では119番は1本も不通になることなく市民の対応に全力を傾注した。地震発生17日5時46分から24時00分までの119番受報回数は、1,995件で通常の16倍の受報回数であった。

しかし救助活動については138件の発生数に対し搬送人員は122人、不搬送は22件であった。この数は救急車の到着を待ちきれず搬送したものや救助隊が現場で応急手当を施したものが含まれている。その他の消防団の活動としては震災当日にはほぼ尼崎市の全車両全団員が出動、火災・救助・ガス漏れ出動・警戒・調査出動のほか道路・家屋の被害状況調査・給水・交通整理に渡るなどの活動を実施した。特

に17日火災当日、火災発生の現場へは各分団が転戦を重ね火災の延焼を極限に食い止めたことは特筆すべきであると記されている。

6 最後に

(1) 阪神・淡路大震災の活動記録について

今回資料とした「阪神・淡路大震災尼崎119の活動記録」は祖父宅の本棚から借りてきたものである。表紙をめくると冒頭にカラーの写真が一面に現れた。全壊した家屋から消防隊員により毛布に包まれた女性が助け出されている衝撃的な1枚だった。さらにページをめくると新幹線の高架落下や火災現場での消火活動や液化化など無残な写真が目飛び込んできた。

当時の尼崎市長、消防局長、消防団長やその他消防士の方々の体験談や報告が多く載せられていて復旧、復興の流れがよくわかる記念誌となっている。被害の大きさに比較してその記録写真の少ないこと。しかし、阪神・淡路大震災の最中に必死で消火、救助、救急活動をしている中での取材撮影をすることがいかに困難であったことか計り知れない。けれども、この大震災で多くの人が苦痛と悲しみの中で体験したことを教訓として将来に役立てるため消防職の方と市民とが一体となり安全で住みやすいまちづくりを目指していることが伝わってくる一冊である。

私の自宅近くにある小田南公園では震災の2日後から仮設住宅の建設が始まり公園の中にある野球場にまで増設され2年以上にわたり生活していた人がいた。この公園は春先に梅の花が咲き誇る様子が大変美しく、私が幼い頃からアスレチックでよく遊びコマなし自転車に乗る練習をしたこともあった。小学校の時には毎年マラソン大会の会場になっていた思い出深い公園だ。今では近所の人たちから憩いの場として愛され親しまれているこの公園がかつてはこれほど多くの避難者を受け入れていた場所だったなんて想像を絶する思いだ。大災害に見舞われても今日を、今をこの一瞬を必死に生きようとする人々の生き抜く力があってこそ再び平穏が訪れたのだ。

悲しみ、苦しみから立ち直ってきた地域に生まれたものとして伝え聞いたことを胸に留め明日に活かしていきたい。笑顔を取り戻すまでの日々こそ乗り越えてきたものを決して忘れてはならないと思った。

(2) 被災地訪問をして

私は、1年生と2年生の時にネパール訪問、2年生の時に熊本被災地訪問、東日本被災地訪問に参加した。

ネパール訪問について。私が1年生の時に訪問した時はネパール大地震から約8ヶ月後だった。まだまだ復旧の準備をしているという状況で、家が倒壊したまま放置されているという光景が目に入ってきた。2年生の時のネパール訪問では首都圏ではほとんどの家が復旧できていた。しかし、田舎の方に行くと、最近家の復旧を始めることができたという村もあった。このネパール訪問で感じたことはやはり、日本の迅速に復旧する力というのは世界と比べかなり勝っているということだった。そのほかには、ネパールの人々の地震に対する知識は日本と比べ低いということがある。私たちが訪問した学校の中には防災を学んでいる生徒もいたが、実際ネパール大地震の際に地震に対する知識がなかったために亡くなられた方もいたとお聴きした。日本では地震が起きたら自分を守るにはどうしたらいいのかということを知らない人はいないのではないかなと思う。守れたはずの命があったのに守れなかったということはとても悲しいことだ。私たちが訪問した生徒たちが中心になって地震に対する知識を多くの人々に届けてもらいたいと思っている。

熊本被災地へは熊本大地震から約2ヶ月後に訪問した。ボランティアセンターを通しての活動は1日だけだった。ボランティアセンターを通さない活動もたくさんの方々のおかげで行うことができた。この熊本被災地訪問はとても急なものであったが、本当に色々な方の支援などがあって訪問できたのだと思う。

東日本被災地訪問は私が2年生の時に参加した。今までテレビや新聞で見えていたものと実際に訪問して自分の目で見る現地は全然違うものだった。特に大川小学校の近くの雰囲気は様々な場所を訪問したが他の場所とは全然違うものであった。

(3) 将来の夢

私の将来の夢は警察官になることである。私は7歳の時から自宅近くの警察署内にある剣道場で剣道を習ってきた。教えてくれるのは警察官の方だった。優しさと厳しさを併せ持った指導を受けながらいつしか私の心の中には将来先生のような警察官になりたいという夢が芽生えてきた。舞子高校に入学してからは剣道部に所属し、学校の先生方のご指導を受け、さらに剣道とは自分の人生の道しるべなのだと感じるようになった。稽古は苦しいことの方が多く、体力的にも精神的にも辛いと感じることはあったがこ

ここまで続けてこられたのは支え合う仲間や導いてくださる先生方の後押しがあり何よりも夢の実現につながるのだという確信があったからだと思う。自分の心の中にはいつもどんな時でも剣道を志すものとしての礼儀を忘れることなく何に対しても恥じることのない行動を心がけている。それは決して無理なことではなく、そうすることが自分らしさを感じることができるからだ。もうこれでいいと思うのではなく、自分を高めていくことを忘れないように生きていきたいと思っている。剣道で学んできたことと被災地を訪問してボランティアで学んできたことを心に留めながらいつか社会に出た時には様々な境遇の人と心を通い合わせられるような人になりたいと思っている。

（４）最後に

今回の語り継ぐを書くにあたってたくさんの方たちのおかげで書き綴ることができた。私は話を聞かせていただいた方には本当に感謝している。ありがとうございました。

語り継ぐ

松本 美砂

1 はじめに

阪神・淡路大震災は1995年1月17日午前5時46分に発生した。23年経った今でも、震災当時を記憶している父と母に聞いた阪神・淡路大震災を語り継ぐ。

2 震災の前日

父と母は当時結婚しており2人で垂水区にある4階建てのマンションの4階に住んでいた。父は長田区に勤めており、母は専業主婦だった。その日の夕方、4階に住んでいたからか蛇が走ったような気持ち悪い感覚の揺れに気づいた。月がいつもと比べ赤く染まり違っていた。

翌日から、母はある特定疾患の病気にかかっていたので入院だった。それにより、薬も全て使い切っていた。翌日から、父は、次の日から自分の実家に行く予定だったので、食料が全くなかった。

3 両親の記憶

(1) 阪神・淡路大震災発生

揺れが発生した時、寝ていた。地震で目覚めた2人は布団を被った。和室にあるような照明のかさの部分と壁に飾っていた横120センチ、縦50センチ、厚さ5センチぐらいの木彫りの鮭が落ちてきた。台所のシンクの上の開き戸の中のもの床に散乱し、小さなタンスも倒れた。しかし、引き戸の食器棚や、洋服ダンスは少し動いたが倒れなかった。

その日は、入院予定日のため食料がなかった。マンションの1階にうどん屋さんがあり、「このまま置いても食べられなくなるから」という理由で卵とうどんをいただいた。

ライフラインは、電気、電話は差し支えなく使えたが、ガスは使えなかった。水はマンションの屋上で行っていた貯水のおかげで震災発生の当日だけ出た。それから時間が経つと、いつの間にか出なくなった。電話は、市内同士、市内から市外へはかけることが出来たが、市外からの電話はかけられなかった。

何時間か経ってから、近くにあったホームセンターに足を運んだ。5～6時間並び、1人か1家族につき5品までという制限が設けられていた。そこでは、電池、割り箸などを購入した。

その後、母の病気のこともあり、避難所に指定されている近所の小学校に行かないことを決めた。同じマンションに住んでいる人の話によれば、避難所では食事の配給をしていて、たくさんの人がいたという。それ以外にも、地震への不安から、マンションの駐車場で車中泊を行う人もいた。

(2) 地震発生後の約1週間

1月18日、西神戸医療センターに車で、いつもと変わらない所要時間で行った。薬が全くないので、薬をもらっただけだったのにも関わらず、長い時間待たされた。なぜなら、その病院では、医師の診断がなければ薬が渡せなかったのだ。待っている間、ずっと救急車のサイレンの音が病院に鳴り響いていた。出入りも激しく、たくさんの負傷者が運ばれてきていた。その中には、担架のままや、廊下で放置されている患者さんもいた。しかし、その中で血まみれや、泥、すすだらけの人は全く見なかった。このように、病院の中は人だらけでとにかく混雑していた。帰りに、西神中央駅近くのプレンティに寄り、制限はあったものの、ラーメンやパンといった食料を購入した。その日の夜ご飯は、カセットコンロを利用したうどんとおにぎりだった。

1月19日、明石市の二見にある友人宅へ車でいった。ここでは、ほんの少しずつだったものの水が出ていた。9リットルのタンク、紙袋やゴミ袋、ビニール袋を使って車に積めるだけ水を貰った。そして、帰り道にガソリンを入れ、大久保にある大きな商業施設に寄った。そこでは、同じ地震が起きたとは思えない今までと同じような日常が流れていた。そのスーパーでは個数制限もない通常通りの営業だった。ここで、神戸以外は今までのようないつも通りの日常だと実感した。

1月22日、名谷にある母の実家へ行き洗濯をしたり、お風呂に入ったりした。水が出ないのでこの日から、しばらく実家へは毎週通うことになった。この時、新神戸にある父の実家へは電話で安否を確認していた。行くことが出来なかった理由として、いつも利用している山麓バイパスは山側ということもあり、被害もあまりなかったので無料開放されていた。自衛隊や警察、消防の他にも物資を届けに来る人などが利用し、混雑して所要時間がいつもよりかかると予想したため行かなかった。

1週間後くらいから、父は仕事場へ行った。いつもは、最寄りの駅までスクーターで行き市営地下鉄を利用していたが、混雑を予想出来たので仕事場までスクーターで行った。JRで行くことも考えたが、須磨駅までの運行だったのであきらめた。仕事場に近づくにつれ、道がでこぼこになり、建物が黒焦げだった。今まで営業していた食べ物屋さんも潰れ、何もなかった。会社は長田区にあったが、建物自体に少しひびが入ったり棚が落ちていたりしただけで、大きな被害はなかった。近くの建物では、2階か3階のどちらかだけが潰れていた。また、同じ会社に勤めている人も、会社より西側に住んでいる人が多く全員の安否を確認できた。神戸市西区に住んでいた、当時の会社の上司によると、地震には気づいたけれど平気だったという。神戸市内でも被害の差が激しかった。

4 23年経って

話の途中で「思い出したい話じゃない」と父は言った。

私が高校に入学する前、震災20年の時の特別番組が流れていた時「こんな見とったら地震思い出すわ」と少ししんどそうな表情を浮かべ嫌そうに言った後にテレビを避けるような行動をとっていた。それを覚えていた私も、今回震災の話聞いていいのか迷った。

話の最後に、父は震災が発生した年に購入した避難所生活で使えるようなことが書かれたサバイバルの本を見せてくれた。地震が発生した直後は、このような本が売られており防災に興味を持っていたということを確認していた。

あれだけ大きな災害を経験していても、時が経ち今となれば防災に対しての関心が薄れていた。それでも、その人にとっての経験した記憶が薄れることはあっても消えることはないと思う。

母の入院の日だったので、「地震がなかったら…」と考えることも今までよくあった。地震が起きた時に1番大事なものは何かと聞くと、父と母は、地震のときに大切なのは「絶対に薬」と何回も口をそろえて言っていた。なぜなら、地震の日からの薬がなかったからだ。わがままかもしれないが、入院するから薬を決まった日数分出すとしても、病院間で連絡を取り合い何かあったときには薬をすぐ出せるようにすべきだと言った。

5 教訓と風化

教訓を語り継ぐために、活動する人がいるのに神戸では風化が進んできていると思う。

それを感じさせたのはあるボランティアだった。阪神・淡路大震災と防災に関する街頭でのヒアリングをさせていただいたことがあった。そして、被害の大きさと震災経験後の取り組みがこれほど違うのかと感じた。取り組みが違うことで、そこに住んでいる人の防災の意識も違った。それでも、被災者の方は1人1人震災時の経験も違い、地震に対する考え方もそれぞれ違っていた。

23年経ち、市内の震災経験者の人数の減少や歳を取っていくことに伴い、市のような大きな範囲で見ると震災の記憶もいずれは消えてしまうのではないかと感じた。KOBE ルミナリエや、追悼式も同時にいつ姿を消してもおかしくないと思うようになった。

今、被災された方がまだいる中でこのまま記憶を薄れていく方向に放置したままでいいのだろうか。放置せずに、体験していない私たちだからできる、被災者に耳を傾け記憶をよみがえらすことが被災者の方の防災の意識が芽生えることに繋がる。被災された方ももちろんだが、私たちのような経験していない世代もこの記憶を知っておくべきである。風化を防ぐためには被災者だけでなく、沢山の人の「伝える」ということが一番身近でしやすいことだ。また、風化を防ぐことが防災を見直すきっかけにもなると私は感じている。

6 環境防災科

(1) 入学前

幼稚園の時、家にいると地震が起こった。それは、全く被害が出ない程度の小さな地震だが、幼い私にとってどういう行動をとればいいのかかわからず、ほんの数秒の間に恐怖を感じたことを今でも覚えている。何年か経って、人と防災未来センターに連れていってもらった。入館して最初に見たシアターの映像が怖く、その日の夜から何日間か寝ることができなかった。小学校5年生の時、東日本大震災が発生して卒業式の練習から帰ってくるとテレビがついていた。津波の映像を見て「ドラマ？」と聞いたことを今でも鮮明に覚えている。

災害に対して「怖い」と感じていた。いつの日からか「怖い」を紛らわしたいと思うようになったことから、私は防災に本格的に興味を持ち始めたと思う。

(2) 3年間を通して

授業を通して、防災から色々な観点に目を向けることができた。防災を通じて、今まで関心がなかった点にも目を向けることができるようになった。現状で満足するのではなく、「防災と関係ない」と思われる点にも目を向けることが大切だ。関係がないと思われていても、日本に住んでいる限り知っていて損は無いはずだ。知っているのと知らないでは災害時の対応や見方が大きく違ってくるのではないだろうか。例えば、何かあった時に行動や判断をする際に、ひとつでも判断材料が多いと、判断が変わってくると考える。

3年間の中で、よく耳にした言葉は「自分の身は自分で守れ」と「人と人のつながりは大事」ということだ。この2つは何度も耳にしてきた。

災害が起きた時に役に立ちたいと思っけていても、命がなければ何も出来ない。助かったとしても、怪我をしていたら、動けない。日頃から備えたり、「もし、今地震がきたら…」と意識的に考えたり、周りをよく見ておくことが重要になって来るのではないだろうか。

人と人のつながりは「防災とあまり関係ない」と考える人もいるかもしれない。しかし、顔見知りや知り合いが災害時、1人でもいたらどうだろう。安心感が変わってくると思う。また、共助という面でも大きな役割を果たしてくれる。公助があるから大丈夫と思っけているとそれでは、手遅れになってしまうかもしれない。震災時の淡路では、このつながりがあったからこそ、寝ている場所を探してピンポイントで救出することが出来た。人とのつながりは、時に複雑になってしまうこともあるが、つながりは大事にしなければならない。

消防や警察、公務員、ライフライン、大学の教授、専門職の方などたくさんの外部講師の方に来ていただいた。生の声の、様々な分野の防災を知っている私たちだからこそ出来るのではないかと考える。

私は、知れば知るほど「怖い」と思うようになった。災害の恐怖は思っけているほど浅くは無く、深いところまで考えなければ被害を減らすことは容易なことではないと思う。

将来発生すると言われている、南海トラフ巨大地震も私が怖いと思うことの1つだ。これは、私が入学してから、今もなおずっと言われ続けてる。「そんなの来るわけない」と思っけても仕方がないかもしれない。なぜなら、予測されている想定が想像の範囲外だからだ。想像したくないと思うような予測が出ている地域もある。

私が、将来防災を広めたいと思っけていても、広める前に地震が来てもおかしくはない。命を守り、被害を減らす為には今からでも興味関心を広めるべきだ。広めるためには、1人でも多くの人知識を蓄え色々な方法で伝えることが必要だ。今、日本で生きている私たちにとって、防災は誰にとっても非常に重要な事だ。

7 ボランティア

入学前から、人の役に立ちたいという思いがありボランティアに興味があった。中学校でも少し経験したことはあったが、高校での3年間はたくさんのボランティアができる最初で最後の機会だったと思う。いろんな人に支えられ、本当に感謝でいっぱいだ。印象が強いボランティアは3つある。

2年間参加させていただいた東日本大震災の被災地訪問。これは、「被災地を自分の目でみたい。」という単純な理由で参加した。足を運ぶと、思っけた以上のたくさんの思いがそれぞれの人にあった。それと同時に、入学して4カ月の私は東北に来て良かったのだらうかと感じた。特に、大川小学校を初めて見た時は、あまりの衝撃の大きさにどうすることも出来なかった。帰って来たら誰かに伝えようと思っけていたが、上手く言葉で話すことが出来なかった。伝えるということ以前に、整理することに頭が追い付かなかったのかもしれない。そして、1年後にも訪れると景色が少し変わっていた。復興は少しずつ進んでいるのだなと実感した。

熊本地震被災地支援ボランティア。災害直後の被災地へ行き建物の被害を見て衝撃を受けたことよりも、たくさんの人のあたたかさを感じた。私は、個人宅へ行き家の中に有る物の整理をお手伝いさせていただいた。次の日から警報が発令され、同じ個人宅へ行けると思っけていたが、行けなくなってしまった。私たちがお手伝いに行き、明るい笑顔でとても優しくして下さったことはこれから先忘れることはないと思う。また、警報解除の間には、熊本城周辺を散策した。その商店街は思っけていたより人通りも多く元気で、逆にボランティアで訪れた私たちが元気をもらった。

私にとって、この2つの場所はただの通過点ではなく視野を広げるきっかけになった。これらの場所へ、次は自分の足で行きたいと思う。必ず大人になっても、被災地と関わり続けたい。

最後に、3年間参加させていただいた災害メモリアルアクション KOBE。「阪神・淡路大震災をもっと知りたい」と授業などを通して思うようになったのがきっかけだ。先ほど、教訓と風化で述べたことも、このボランティアで感じた事だ。

防災を伝えることは、大きな災害を体験したことのない私たちには難しいのだろうか。確かに、体験した方との大きな壁はあるだろう。しかし、体験していない私たちが伝えることが出来る部分もあると思う。だから、私たちが伝えることに大きな意味があると感じるようになった。

8 伝えるということ

防災において伝えることは非常に大切なポイントであると考えている。しかし、この一見簡単そうに見える伝える行動が非常に難しいと思う。

メディアやSNS、遊びの要素に盛り込む、出前授業など、発信の方法は様々である。特に最近では、SNSの発展により誰でも簡単に発言することが出来る。発信方法も重要だが、発信内容も重要視すべきだと思う。嘘を伝えてしまえば、間違ったことが伝わってしまったり、すでに知られていることと混在してしまったりする事態が発生する。

伝える時には「何を伝えたいのか」をはっきりしなければ、受け取る側も印象には残らないだろう。少しの情報でも印象に残れば、防災に興味をもつきっかけが受け取り手に少しでも届くだろう。

私は防災を学ぶ上で、今まで伝えることが大事と何度も言ったり聞いたりしてきた。それを、私が行動に移した時、相手にきちんと届いているのかと問われると分からない。もしかすると、押し付けの防災になっているかもしれない。押し付けならば、余計に受け取り手を防災から遠ざけてしまうだろう。

伝えるためには、きちんと情報を整理し、抜き出し、話すことや文章にするだけでなく、分かりやすく伝える技術も必要である。相手の気持ちを考えて寄り添いながら伝えることが出来ると、無理なく伝えられるからもっと良いだろう。

9 夢と防災

私の将来の夢は、保育士か幼稚園教諭になることだ。そして、防災を幼児に伝えたい。

防災を伝えると言っても、難しい事をするのではなく「地震が来たら頭を守る」というような簡単な防災を伝えたい。知っていると知らないでは対応が変わってくると思うからだ。私自身が幼い頃に体験したような恐怖を体験して欲しくないからである。

「幼児でなくてもいいのではないかと考える人もいるだろう。地震が沢山発生するこの国で、幼児期に身を守る方法を見つけておくことは非常に意味があると考えている。幼児期に身体を動かした遊び等の記憶は、普通の記憶よりも残りやすい。だからこそ、防災ダックのような遊びをしながら防災を伝えることが出来るようにしたい

防災を伝える中で私が大事にしたい事は、「きっかけを作ること」「人と人のつながりを作ること」の2点である。きっかけを作ると、防災に対して興味を持ってくれると思う。興味を持てば、保護者や友達と話をし、自然と周りにも防災に興味を持たせるバトンを繋ぐことができているからである。つながりを作ることに関しても、行事をするときに友達や保護者同士だけでなく、地域の人や高齢者なども巻き込みたい。子供がいる場所だからこそ、沢山の人が元気をもらい自然と笑顔になることができるからである。子供と防災に関係性を持たせることは、防災を広めるとともに多くの人に関心を持つようになると思うからだ。

10 感想

私は、「語り継ぐ」がなければここまで深く両親の震災の記憶を聞くことがなかったと思う。話を聞くことによって、両親の薄れていた防災への意識が少しでもよみがえっていれば風化を防ぐことに繋がると思う。身の回りから見つめ直し、まずはハード面だけでも行動していきたいと思う。この機会に、3年間を見つめ直すことが出来てよかったと思う。改めて、防災について学べる環境やボランティアのできる環境がありがたいと感じた。

これからは、防災や教訓を伝える使命をしっかりと果たしていきたい。どんな形であろうと防災と関わりたい。

語り継ぐ

丸岡 大雅

1 阪神・淡路大震災の概要

発生日時…1995(平成7)年1月17日午前5時46分
規模…マグニチュード7.3
震源地…淡路島北部(北緯34度36分、東経135度02分)
震源の深さ…16km
死者…6,434人 行方不明者…3人 負傷者…43,792人
全壊…約10万5,000棟 半壊…約14万4,000棟 一部破壊…約390,500棟
水道断水…約130万戸 ガス供給停止…約86万戸
停電…約260万戸 電話不通…30万回線超

「阪神・淡路大震災について(確定報)(平成18年5月19日、消防庁)」より

僕は、阪神・淡路大震災の4年後に生まれた。そのため、阪神・淡路大震災はもちろん経験してないし、大きな地震にもあったことがない。そんな僕にできることは、震災当時の話を聞き、周りの人に伝える・発信することだ。僕は、当時垂水区に住んでいる母の話を聞いた。

母は家族4人でマンションの1階に住んでいた。当時は病院スタッフとして仕事をしており、震災前日は休日出勤で夜遅くまで働いていた。非常に疲れていた。帰り道、月を見て何色か覚えていないけれど、変な色だなと感じた。仕事で非常に疲れていたため、買ったばかりのブーツを枕元に置いてそのまま寝てしまった。

2 1995年1月17日

(1) 阪神・淡路大震災発生

5時46分52秒地震発生。マンションにトラックが衝突したような衝撃で目が覚めた。木のたんすが勉強机にもたれかかっており、その隙間に私はいた。リビングに行くと、食器棚の食器はほとんどが棚から落ちて割れており、足の踏み場がなかった。昨日枕元に置いたブーツはあったが足場の不安定な廊下ばかりで、外はもちろん家でさえも使うことができなかった。マンションの地下からガスが漏れているようなにおいがしたため、玄関にあったスリッパをはき毛布をかぶってパジャマのまま家を出た。家と部屋の扉は壊れていなかったため、すぐに外に出ることができた。

家族全員、避難所である近くの中学校に向かった。しかし、中学校は開いておらず揺れも収まったため、再び家に戻り仕事に向かった。約2日間、母親と妹は近くのお寺の井戸水をくみに行っていたそうだ。

(2) 揺れが起きて

初期微動が来たときは、睡魔のほうの方が勝っていて起きる気がなかった。主要動が来たときは、ものすごい衝撃で飛び起き、何が起こったかわからなかった。

3 発生直後

(1) 周りの様子

近所の人ほとんどが外に出ていた。辺りはまだ暗かったため、目立った被害の様子はわからなかった。幸いにも、道路が壊れているといった状況にはなっていなかったため、スムーズに避難することができた。

(2) 情報

ラジオは誰も持っておらず、情報が飛び交っていた。周りの人の様子から見て、高速道路が倒れたことや長田が火事で大変になることを考えてもいなかっただろう。正しい情報を知ったのは、1日目の仕事が終わった夜だった。

(3) 実際に見た風景

職場に向かう途中の車の中から見た。何が起きているのかわからなくて混乱した。まだ火事などは起こっていなかったが、それでもひどい光景だった。昨日までなんともなかったのに、たった1回の地震で

悲惨な光景に変わるのかと驚いた。

4 被災地となった神戸

(1) 避難所生活

仕事場の病院が避難所のようなものだった。普段、看護師が寝泊まりする寮は、上の階から押しつぶされており、使えるような状態ではなかった。代わりに使えた部屋は、霊安室の真上にあるこたつが3つだけある休憩所のようなところだった。そこで医師と病院スタッフが男女の区別なく全員雑魚寝した。

自衛隊から配られる救援物資は、患者→医師→避難者→病院スタッフの順番で配られる。病院スタッフの中でも若い人たちは後回しになったため、すぐに食事をとることはできなかった。また、下の階が霊安室のため泣きわめく遺族者の声が永遠と聞こえ、しっかり寝ることもできなかった。

(2) 仕事内容

近所にいる同じ職場の人と車で病院に向かった。周りの家のほとんどが倒壊している長田区、灘区を通り、9時頃、東灘区にある病院に着いた。亡くなった人や自宅のことで手一杯な人が多く、人手が全く足りていなかった。

仕事内容は、怪我している人に名前と生年月日を聴くことだった。足があり得ない方向に曲がっている避難者などがたくさんいて、無理に動かすことができなかった。今みたいに怪我の度合いによって色分けをするというシステムはなかった。死者にはエンジェルセットというガーゼ、アルコール綿を死者の鼻や口などの鼻に詰めるという仕事も行った。人は死んでしまうと体液が穴からでてきてしまうからだ。その中でも震災で亡くなった人には、目を見開いたままが多い。それだけ苦しい思いをして死んだのか、と考えて胸がいっぱいになる。けが人に名前と生年月日を聞き死者にガーゼを詰める仕事を延々と行っていたが、慣れることはなかった。

(3) 復旧・復興

2週間くらい経ってようやく家に帰ることができた。運行している阪神電車の駅まで歩いて、駅からもまた歩いて帰った。歩いた時間は、約2時間にも及んだ。家ではお風呂に入れなかったため、小野市の友達の家でお風呂を借りた。心身ともに疲れきっていたため、とにかく寝た。

(4) 人との関わり

近所の人とのかかわりがもともと少なかったため、助け合いなどはなかった。家族とも仕事の関係であり会うことができなかった。しかし、仕事仲間とは長くいたぶん助け合いは多かった。

病院スタッフには、大阪から来ている人も多く、たくさん支援してもらった。水などの食料や靴、いるものを頼んで持ってきてもらった。大阪は、地震の影響が全くないといってもいいほどだった。支援のありがたみを感じつつ、地域でこんなに温度差があるのかと思った。

5 23年後の今、思うこと

震災の話をするのは今回で3回目になる。1回目は、消防士の方が取材を受けるからどのような体験があったのか参考に聞きたいと頼まれた時。2回目は、兄の卒業研究の時。そして3回目が、弟の卒業研究の取材だ。このような機会がないと話さないし、話したくもないと今でも思う。

震災前日、枕元に置いていたブーツは全く役に立たなかった。当時はスニーカーなどの靴を持っておらず、県外の友達からスニーカーを買って渡してもらった。その経験があったからこそ、家にもスニーカーはあるし、職場にも常に置くようになった。

消防士の人から聞かれたときは、みんなで情報を共有しあったけど、それ以来同じメンバーで集まっても震災の話をするとはなかった。

震災が起こってから変わったことがたくさんあった。食器棚がスライド式になったことや水道の蛇口を上を動かしたら水が出るようになったこと、ボランティア、防災という意識が市民にできたことだ。社会がいい方向に進んでいることが分かった。

6 母の話を聞いて

話を聞いて考え、話を聞いて考えの繰り返しだった。病院スタッフとして仕事を行っていた母は、たくさんつらい思いをしている。話を聞いてどんな反応をすればいいのか、もっと質問してもいいのかと思うこともあった。話を聞くだけでは母の気持ちまで理解することはできないかもしれない。だが、理解したいと思った。

病院に来たら何もかもそろっており、もう大丈夫などといった安心が市民にはあった。しかし、実際は

そうではないし、病院スタッフは軽いけが人よりもしんどいかもしれない。高速道路の話を知ったら、そんな大した問題じゃないといわれた。高速道路は被害のすごさを表すものであって、被災者にとってはもっと大変なことがあった。母の場合は病院スタッフとしての仕事だった。だから、高速道路の話だけをされる、聞かれるのは納得がいかない。また、震災時はとても人間性が出ることがわかった。政治家などの偉い人に限って、自分がどれほど偉いかを病院スタッフや医師にアピールし、自分を1番に優先にしないなどといってくる。周りの人はどれだけつらくても我慢して待っているし、病院スタッフは自分のことより患者優先にしているのに、自分勝手にされるととても困るし疲れる。偉い人の枠には医者も入る。家族全員分の食料を持って帰るなど、自分勝手な行動がとても目立った。災害時こそみんなで力を合わせなければならない。

母は、語り継ぐ意味をずっと考えてきた。僕もあいまいな答えしか出てこない。大切なことなのは誰もがわかる。風化させないため、同じ失敗を繰り返さないためなどといった答えは何だかしっくりこない。もっと大切なことがあるような気がする。これから一生の課題として、納得できる答えを探し、考え続けようと思う。

7 環境防災科

(1) 入ろうと思ったきっかけ

環境防災科を知ったのは中学1年生のころだ。僕の兄が環境防災科に入学して知った。防災が何なのかわからなかったけど、話を聞くうちに防災・災害は身近にあるものだとなった。

小さい頃から避難訓練をしていたし、「幸せ運べるように」をよく歌っていた。小学5、6年生の頃は、担任の先生の影響で1月17日「幸せ運べるように」を駅で歌ったこともあった。また、3月11日に発生した東日本大震災。テレビで見た光景にはとても衝撃を受けた。しかし、僕が環境防災科に入ろうと思ったのは東日本大震災がきっかけではない。環境防災科に入った兄の姿を見たことがきっかけだ。親と一緒に垂水駅で募金をしている兄を見に行ったり、兄からボランティア活動の内容を聞いたりしているうちに興味を持ちだした。進路学習の時に環境防災科を調べ、入ることを決めた。

消防士を目指していたため、外部講師の消防関係の人の話、消防学校での体験授業があると聞いてはつきりと入りたいという気持ちが高くなっていった。

(2) 入って思ったこと

はっきりとした夢が決まっている人が多く、そして夢に向かってひたむきに頑張る人ばかりだった。消防士になりたい人が多く、僕もその1人だった。しかし、クラスメイトの消防の訓練などに対するまっすぐな姿勢を見ているとかなわないと感じた。

ボランティア活動はたくさんの種類があることが分かった。被災地に行き瓦礫の撤去などをすることがボランティアのすべてではない。地域の祭りの手伝いや募金をする、電車で高齢者や妊婦さんに席を譲ることだって立派なボランティアだ。

ボランティアをするから偉いなどと思ってはならない。支援する側がいいことだと思っただけで、時には迷惑になることもある。相手の気持ちや現地の状況を考えて行動に移すことが大切だ。また、支援される側もそれが当たり前になってはならない。知り合いが被災地にボランティア活動をしに行ったりするとき、お礼も何も言われず文句ばかり言われたそう。支援の仕方が悪かったなら文句を言われても仕方ないが、被災地にボランティアするのが当たり前といった顔でいられたら気分が悪くなる。どちらの立場でも相手のことを考えた行動をとらないといけない。

8 夢と防災

何の職業になるのかまだはっきりとは決まっていなかったが、将来僕は地方公務員になりたいと思っている。なりたい理由は3つある。1つは、市民から信頼や尊敬、期待をされているからだ。幼い頃は消防士である父の姿を見てカッコいいと思った。2つ目は、収入が安定していることだ。公務員は税金から給料をもらっている。そのため、国が崩れない限り倒産などはない。3つ目は、災害時に公助として役に立ちたいと思ったからだ。災害時は自助・共助・公助の3つのサイクルが必要となっている。ボランティアだけでなく、行政の仕事として支援を行いたいと思ったからだ。

地方公務員になるには、必ず公務員試験を受け合格しなくてはならない。地方公務員は初級・中級・上級の3つに分かれている。基本的には初級は高校卒業した人、中級は短大・専門学校を卒業した人、上級は大学卒業の人が受ける。上級のほうが給料は高いが総合的に何でもこなす力が求められる。しかし、消防は別枠で3つの区分はない。また、地方の役所仕事などでは3つの区分をせず、一括で採用するところ

が多い。

地方公務員の仕事は防災が深くかかわっている。消防や警察、自衛官などの職業は直接かかわるが、ほかの仕事は関係していないように思える。しかし、役所など市町村役員を対象とした防災の学習コースが設けられており、どの職業も防災が大事なことがわかる。

地方公務員になって行いたいことは3つある。1つは、防災情報を伝えることだ。20代の知り合いに防災って何、と聞かれたことがあった。地震に関する危機意識どころか、防災すら知らないことにとっても衝撃を受けた。震災から20年以上たった今、地震を体験していない人が増え、詳しい人と全く知らない人との差がだんだん開き始めていると思う。防災情報を伝え地域全体の底上げが重要だと考える。情報を見てもらえるように、ホームページにわかりやすい情報を提示したり、来客用のチラシやポスターも用意したりしたい。

2つ目は、市民の声に耳を傾けることだ。地方公務員は市民の声がとても届きやすい職業だ。その特性を生かして、届いた声をしっかりと受け止め行動に移したい。

3つ目は、何事にも事前の準備を行うことだ。災害時、備えたことが役に立っているように仕事に関しても準備は大切だ。

公務員だけでなく、どの職業にも防災は関係している。防災をその職場にあるだけのものにするか、役立つものにするかは防災を学んだ僕たちの努力次第と思う。この意識をしっかりと持ち、地域社会をより良いものにしたい。

9 「語り継ぐ」を書いて

これまでは簡単に語り継ぐことは大事と言っていたが、とても難しいことだと分かった。震災当時の話を聞こうとすると、いつもは饒舌な母が静かで口数も少なくなった。重い話でなんて言ったらいいかわからない時もあった。経験した人は、語り継ぐことは大事だと分かっているけど言いたくないものだし、聞き手も重い話で気がやんでしまうものだ。そこで語り継ぐことをやめてしまえば、災害時頑張ってくれた人たちの努力を台無しにしてしまう。また、語り継がないことによって PTSD(心的外傷後ストレス障害)という心の病気になってしまうことがある。話すだけでも周りの人にわかってもらえ、傷を複数人で支えることができる。

僕たち震災を経験していない世代は語り継ぐだけでなく、被災者の傷を支える役割も担っている。そして南海トラフ地震が発生したら、次は僕たちが語り継ぐ世代になる。神戸に住んでいる以上、生きている間に必ず地震を経験するだろう。だから、備えることを大切にしたい。地震に備えて生き残ることで後世に備えは必ず役に立つ、と自信をもって言いたい。

語り継ぐ

三井 唯菜

1 それまでの生活

アパートの1階に母、父、生後2か月の姉の3人で暮らしていた。地震の揺れが起きた時は3人で寝ていた。当時、母は専業主婦で、父は運送会社で働いていた。垂水区に住んでいたためとても大きな被害は無かったと言う。しかし木造のアパートだったため壁にひびが入ったり、床が傾いたりしていた。震災の後もそこに住んでいたため私も実際にそのひびや、傾きを目にした。私は小さい頃の姉や私がいたずらで壁を壊したのだろうと思っていたが地震によってできたものだと聞いて驚いた覚えがある。

2 震災発生

(1) 揺れた瞬間

ドーンという音がして、「え？」と母は思い、何が起きたか分からなかった。その時に「食器棚を押さえろ」という父の声がして母が食器棚を押さえ、父が姉のところに行きかばった。母は押さええている間は何も考えられなかった。

(2) 揺れが収まって

母は外に出ようとしたが、玄関が歪んで開かず勝手口から出入りするようになった。アパートの斜め上に住んでいる方が「寒いやろ、車の中に入り。」と自家用車に母と姉を入れてくれた。

祖母は六甲に住んでいたが、母に電話をかけてきて安否の確認をしてくれた。その後母から祖母に電話をかけようとしたがその時は電話が混線していてもう繋がらなくなっていた。

(3) 町を見て

少ししてから駅へ様子を見に行った。しかし駅は海の近くにあるのでもし津波が来ていたら助かっていなかった。だから津波が来なくて本当に良かったと今は思う。当時は津波が来るかもしれないという知識がなかった。駅のスーパーに寄ってみるとすごい人だかりができていて売られているものがほとんど無かった。レジの店員さんは自分も被災しているにも関わらず、すでに働いていた。そのお客さん達の様子を見た母は自分も何か買わないといけなかったと思った。そして余っていた牛乳を買った。でも、牛乳は冷蔵庫が使えないと腐ってしまうからあまり意味のないものだったと振り返って言う。その時は正常に頭が働いていなかったのだ。また、駅の近くには商店街もありその中にお米屋さんがある。そこに「水売ってくれ」と言う人達が押し寄せていた。でもお店にはもう水がないようで「もう水が無い」と押し問答になっていた。

父の兄がバイクで様子を見に来てくれた。町の人も車ではなくバイクで移動していた。車だと渋滞に巻き込まれる可能性が十分にあるからだという。

3 一変した生活

舞子にある父方の祖母の家に身を寄せた。家が住めない状況ではなかったが、姉の面倒を誰かがみてくれる環境を選んだ。その時に家から持って行ったものはほとんどが姉の分だった。特に必要だったのはお尻拭きシートである。何故なら小さい子供はすぐにかぶれてしまうためこまめに拭かなければならないからである。

寝るときはパジャマなどに着替えず、服のまま寝ていた。余震が続いていたためいつ何が起きてもいいようにするためである。

ご飯・・・オーブントースターで焼けるような料理を作った。この頃には電気は復旧していたのでトースターを使った。その中でも印象に残った料理がアスパラベーコンだという。ベーコンさえ火が通れば良いということに印象的だったのかもしれない。お米は炊飯器で炊き、水は給水車からもらっていた。飲み水は送られてきた物資を父の会社の人が持ってきてくださった。母は母乳が出なくなってしまった。だから代用で粉ミルクとペットボトルの水でミルクを作った。これは姉が3歳位になってから知ったことだがペットボトルの水を使うことはあまり体に良いことではないそう。

風呂・・・祖母の友人の家で入らせてもらった。その家はプロパンガスだったのでガスの復旧を待たずに使うことができた。別の人のお家ではカセットコンロで大きな鍋にお湯を沸かし、冷たい水と温度を調節して体を洗った。どこの家でも快くお風呂を貸してくれた。

4 2か月後

2ヶ月後位には元の生活に戻っていてテレビを見ながら掃除機をかけていた。テレビには長田の様子や三ノ宮の路地が映し出されていた。行ったことがあるところが燃えていた。記者が中継していたが「危ない」という声とともに後ろで爆発していた。この様子を漠然と覚えている。

家は一部損壊の判定を受けた。アパート住まいのため大家さんが頼んで大工さんが来てくれた。そして玄関の歪みを直してくれた。大工さんは姫路から来ていて姉を「姪っ子もこれくらいの年でね」とかわいがってくれた。そこから少し話すようになり「今は色んな所で仕事があって忙しい。」と言っていた。作業が終わるとすぐに次の現場へ向かって行った。

はっきりとは覚えていないが電車に乗っていた。なかなか開通しなかったが途中の駅までや、速度をおとして運行していた。自転車のほうが早いのではと思うくらいのスピードの電車に乗った母は変わった町の景色を見せられているような気がした。それと同時に電車が戻ったことで「少し復興したのかな」という思いも抱いた。

当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかった。ガスコンロの火がついたときに「わあ」となった。

5 全体を通して

(1) 困ったこと

母が困ったことはデマが出回っていたことである。母自身は姉の世話をするためにほとんど家の中にいたため直接困ったわけではないが近所の人に聞いた話だと信じていいかわからない情報が多かったという。

(2) 助けられたこと

当時生後2か月の姉に父が運送会社で働いていたこともあり、多くの水をもらった。だから水に困ったことは無かった。

6 次の世代に伝えたいこと

- ・デマが出回っているので情報を鵜呑みにしないように
- ・近所の人にあいさつはしておく

(1) デマ

情報を鵜呑みにしないためにもあらかじめわかりそうなことなら最低限の知識を持つておくことと、常日頃の意識を高くすることである。

(2) 近所の人と

実際に同じアパートに暮らす人に車の中に入れてもらった母だからこそ言えることだと思う。

7 話を聞いて

一番思ったことは人との関わりがやはり大事なのだということ。今までに何度か話を聞いたことがあったが近所の人に車で暖を取らせてもらったというのは初めて聞いた。姉が小さかったからだというもあるが、それでも自身も被災している中で誰かに手を差し伸べようとしてくれるというのはなかなかできることではない。私も被災したら自分が出来る範囲で何かしたいと思う。また、何もできなくなる状態になるかもしれないためこれからも続けて挨拶をしていこうと思った。

情報については現在特に注意が必要だと思った。当時は携帯電話が日常に深く関わっているわけではなかったが、今は生活の一部と言っていいほど情報社会になった。何もせずとも多くの情報が入ってくるため自分で情報の取捨選択をする力をつけなければならないと思った。大人になると知識を入れる機会が学生の頃と比べると減ってしまう。だが自分も周りの人のためにも最低限の知識を入れておくことは必要である。

家に1人でいるときに地震を経験したことがある。高校生になってからだったが怖かった。逃げ道の確保のために窓を開け、じっとしていた。経験してから生活のありとあらゆる場所で「今地震が起きたら」と考えるようになった。今までは思い出したときに考えるだけだったのに対し、ほとんどと言っていいほど考えていた。その時に経験するということはこういうことかと思った。私が参加している活動で震災を経験した方にお話を聞くというものがある。この中で仰っていたことが「知っているのと知らないのでは違う」である。まさにそうだった。震災について知るたびに新たに考えることもあり、経験して考え

ることもある。母が揺れが収まったあと海のほうへ行ったことも同じで知らないということは時に命を落とすことにつながるのかと思うとぞっとした。

8 今まで学んできて

私が防災を学んできた中で大事だと思ったことは災害というのは特別なことではないということだ。今起こってもおかしくないとわかっていながら備えを後回しにしてしまうのは日常と切り離して考えているからだと思う。町を歩いている人に震災の話を聞くという活動をしたときに、より災害を特別なこととして考えていると感じた。子育て世代の方は「自分の子供のことは心配だけれど、実際にはいつ起こるかわからないから家では何も備えていない。」と言っていた。年配の方の中には「阪神・淡路大震災があったからもう自分が生きているうちは大きな地震は来ない。」と言っている方もいた。テレビなどでこれから起きると予想されている地震についての話題がよく放送されているにも関わらず、そのように思っている人がいると知り、その時はとても驚いた。メディアで災害の備えなどについて放送されていることで何か効果はあるだろうと思っていたが、まだ災害について関心や意識が低い人もいるのだと思った。この活動を通して災害をもっと身近に感じてもらい、備えに繋げてほしいと考えた。

(1) 日常に

日常に防災を取り入れることが大切である。例えば避難所までの道を辿ってみるときにわざわざ時間を取らずに、買い物に行く道を少し変えてみる。とっさに逃げ込めるような頑丈な建物を通勤・通学中に探してみる。防災のために時間を使おうと考えたと後回しにしてしまうが、何かのついでに行ってしまう方が良いのである。防災と向き合う時間を作って家族で話し合ったり、考えたりすることも大切だが実際のところ難しいのが現状だろう。だからどのようにして自分の生活の中に防災を取り入れるかを私たちは考え、広げたいと思った。

していないことが多かったり何から始めれば良いのかわからなかったりするときは家の片付けをすれば良い。片付けるときに気を付けることは物を減らすこと、床に散らばっているものを収納すること、キッチンは燃え移らないように物を少なくすること。ポイントは廊下、ドア、窓の近くには大型家具や荷物を置かない。物を出しっぱなしにしない。重要書類の整理を行い、どこに何があるかをリスト化する。家の周りも片づけておく。片付けるとするのは普段の生活も快適になることなので一石二鳥である。

ローリングストックを行うことも1つだ。ローリングストックとは普段から使う食材を少し多めに買っておき、使ったらその分を買い足すというものである。これにより賞味期限が過ぎていたということも無くなりさらに普段使っているものだから使い方もわかっているという良い点がある。食材以外にもウェットティッシュ、ガスボンベ、乾電池、携帯用カイロなども活用できる。

例えば道を歩いていて角を曲がる時向こうから来た人とぶつかるかもしれないと思うと歩くスピードを遅くしたり、少し大きく回ったりしたことはないだろうか。災害も同じである。ずっとそのことだけを考えていれば良いのではなくて、少しだけ気を付ければ良いのである。

(2) 具体的に考える

家族構成もそれぞれ違い、住んでいる場所の特徴や周りに何があるかによっても必要な備えは変わってくるため、各家庭、個人で考えることも大切である。

- ・家族の人数分の水・・・喉が渇きやすい人はいないか、トイレが近い人は、汗をかきやすい人は
- ・食料3日分・・・3日で食料が届くような地域か、その食料を実際に食べられるか、作り方はわかるか

備えが必要なのは家だけか、職場で備えるときに持ち出し袋などを置いておく場所はあるのか、なければどうするかなど、具体的に考えてみると「この備えも必要かもしれない」「これならすぐにできそう」などといった発見もある。本当に自分に置き換えて考えることが大切だ。

9 将来の夢

私の将来の夢は図書館職員になることである。各図書館では様々なイベントが行われている。その企画をするのは職員である。私はそこで今まで学んできたことを生かしたいと思う。その場所で防災を広げることである。先にも述べたように大人になると知識を入れる場が少なくなってくる。その場を少しでも増やすために防災を学んだり、興味を持ってもらえたりするような企画を考えたい。

大人だけでなく、子供たちも来館しやすいような図書館にしたいと考えている。共働きなどで家に1人でのいる子供を少なくしたいからである。私自身も家に1人であることが多かったため母も不安だったと思う。親の不安を少なくするためと、子供たちにも防災を知って欲しいという思いからこの夢をかなえた

い。例えば子供に防災について知ってもらったとする。それを子供が親に話すことで親も知識を入れることになる。ほかにも親子で参加できるようなもの、大人に向けたものなど工夫はさまざまである。そういう場を私は作りたい。

10 最後に

聞いた話は衝撃の連続だった。その衝撃こそが私が新たに次の世代に語り継いでいく原動力である。

語り継ぐ

森本 愛菜

1 はじめに

神戸は「おしゃれなまち」として様々なメディアに取り上げられ、全国各地や海外からたくさんの観光客で賑わっている。しかし、23年前の1995年1月17日に阪神・淡路大震災が神戸を襲った。今の神戸からは想像もつかないような甚大な被害をもたらし、6434名の尊い命が一瞬にして失われた。私は震災から4年後に生まれ、復興した神戸しか知らない。そのような世代が増えていく中で風化させないために、実際に被災した母と父から聞いた話を語り継ぐ。

当時私の両親はまだ結婚しておらず、母は垂水区、父は大阪の河内長野市でそれぞれ家族と暮らしていた。

2 母の話

(1) 地震発生

突然「ゴォー！」という地鳴りで目が覚め、その直後今までに感じたことのない大きな揺れが襲った。とっさに布団で頭を守り揺れが収まるのを待った。祖父の「みんな大丈夫か！」という声が何度も聞こえてきたが、恐怖でしばらくの間返事をする事ができなかったという。住んでいた家は建て替え工事中だったため、仮住まい生活で築年数の古いアパートで暮らし、揺れの影響でアパートはほぼ半壊状態だった。部屋の中を見渡すとタンスが飛ばされ、食器棚から出た皿やガラスの破片が床一面に散乱していた。建物の外壁は剥がれ落ち、道路には亀裂が入っており被害の大きさを物語っていた。

(2) 揺れの後

しばらくして隣に住んでいた高齢者の方の救助に向かった。タンスに足を挟まれ動けない状態だった祖父と母で協力し、やっとのことで助けることができた。何度も何度も感謝されたという。

余震も頻繁に起こっていたため、これ以上家にいるのは危険だと判断し避難所である神陵台小学校の体育館に父母と兄家族4人を含む7人で避難した。すでに避難所には入りきらない程の人が集まり、辺りは騒然としていた。水や食料は避難所に緊急援助として遠方からトラックで運ばれてきた。給水車が到着すると一瞬で長い列ができ、寒い中何時間も並んだ。石油を入れるポリタンクやペットボトルに水を入れてもらい、小学校から自宅まで片道30分の距離を徒歩で持って帰っては風呂に溜めるという作業を何度も繰り返した。風呂に入れない日が1週間も続いた。

3 父の話

(1) 地震発生

父は大阪府河内長野市で暮らし、仕事へ行くためその日は5時に起きていた。家族3人で朝食を食べていると、どこからか「ゴォー！」という音が聞こえてきた。「こんな明け方からなんやろな～」と話しているとその音は次第に大きくなり近づいてくるような気がした。地鳴りだった。地鳴りの直後地震が発生した。震度4くらいだったという。揺れが収まるまで父は近くの食器棚を押さえていた。

(2) 揺れの後

揺れの後すぐ母の安否確認をするため何度も電話をしたが、電話がつながったのは昼過ぎだった。

会社に向かうため駅へ行ったが、地震の影響で南海電鉄は走っておらず徒歩で向かうことにした。父が会社に着いた頃にはすでに何名か同僚も来ており、状況を確認するためテレビをつけた。すると、そこには変わり果てた神戸のまちが映っていた。波打つように倒壊した阪神高速神戸線や一面焼け野原となった長田区の様子、途切れた高速道路から今にも落ちてしまいそうなバス。画面に映し出される映像全てが信じられず、ただ呆然と眺めているだけだった。

4 環境防災科

(1) 入学のきっかけ

環境防災科を知ったのは中学2年生の頃だったが、一般入試での入学を希望していたため舞子高校のオープンハイスクールでは普通科の説明会に参加した。中学3年生になり本格的に進路を考えていた際、担任の先生から環境防災科の受験を勧められ、2回目のオープンハイスクールでは環境防災科の説明会

に参加した。当初は防災にあまり興味は無かったが、学校のホームページやテレビのニュースを見て環境防災科の先輩方の活動を知り、災害関連の新聞を読むなど自ら防災に関わるようになった。そして私もここに入学し防災を学びたいと思った。

(2) 入学後

私は3年間、環境防災科の一員として地域の夏祭りの運営や防災訓練のお手伝い、聴覚特別支援学校との交流など多くの幅広いボランティアに参加させていただいた。感じるものはそれぞれ違ったが、全ての活動に全力で取り組めた。その中で、私が最も印象に残っているボランティアは熊本支援ボランティアである。

熊本に行くとは知らされたのは出発から約1か月前のことで、震災直後の被災地で高校生にできることはあるのだろうかと不安だった。1日目は移動日だったため、活動は2日目から行った。現地ではアパートで独り暮らしをしているおばあちゃんの部屋の掃除をした。食器の破片が床に散らばっていたり、冷蔵庫が倒れ異臭がしていたり、被害の大きさを目の当たりにした。休憩中におばあちゃんが地震発生時の様子など詳しく話してくれた。お話をしている中で、「神戸も大変だったけど今めっちゃきれいになってるもんね、熊本も頑張るね」と言ってくれたことが今でも忘れられない。神戸から来た高校生の存在が熊本の方の励みになっていると思うととても嬉しかった。豪雨の影響で活動自体はこの1日だけしかできず無力さを痛感したが、この言葉は私に元気をくれた。

入学してから今まで貴重な経験をたくさんさせていただいた。外部講師の方の講義や実践、校外学習、ボランティア活動など、この学科だからこそできたことが本当に多かった。「環境防災科のためなら」と遠方から講義をしに来てくださる講師の方や募金活動で「舞子高校だから」と募金をしてくれる方もいた。このような支えが今日の環境防災科の活動につながっているのだと思う。

5 夢と防災

私の夢はブライダルプランナーになることだ。以前から「結婚式」という華やかで幸せな空間に憧れがあり、人生最大の晴れ舞台のお手伝いができることに魅力を感じていた。しかし、一言にブライダルといっても職種は様々である。装飾やブーケなど会場を花で彩るフラワーコーディネーターや新婦の魅力を最大限に引き出すヘアメイクアーティスト、普段露出しにくい背中や腕を美しく見せるため、ボディケアを行うブライダルエステティシャンなど結婚式にはたくさんの職種の方が関わっている。その中でプランナーという仕事はカウンセリングやドレス選び、スタッフのマネジメントまで幅広い業務を担当する。いわば現場の総監督のような仕事で、新郎新婦と最も関わる機会が多いのがプランナーだ。私は、それぞれが持っている結婚式の夢を具現化し、担当したお客様全員に「最高の1日になった」と喜んでもらえるようなブライダルプランナーになりたい。

環境防災科で3年間防災を学んできたが、ブライダルプランナーと防災は一見すると何の接点も無いように思える。しかし、どの職にもその職独自の防災との関わり方、広め方が存在する。私はブライダルプランナーだからこそできる防災をしていきたい。それは2つある。

1つ目は引き出物で防災グッズの提案をすることだ。引き出物とは、ご列席いただいた方に感謝の気持ちを込めて贈る品物のことであり、結婚式には欠かせないアイテムのひとつである。一般的には食器類やキッチン用品、バス用品などが主流だが近年では防災グッズを選ぶ方も増えてきている。そのような方をさらに増やすため、引き出物の提案として防災グッズを勧めるとともに、防災についても伝えていきたいと思っている。

2つ目は「被災地に結婚式を」プロジェクトだ。大きな災害が起こってしまうと、予定していた式を挙げられなくなってしまう可能性がある。だから私はこのプロジェクトを自分自身で企画し、ボランティアとして被災地に結婚式のプレゼントをしたい。また、過去の災害により結婚式を挙げる機会を逃してしまった方もいるだろう。その方々にも同様に支援していきたい。

私はブライダルプランナーとしてお客様全員の幸せを願い、夢を叶える。

6 災害に脆弱な日本で生きる

日本はユーラシアプレートと北米プレートの大陸地殻にまたがり、太平洋プレートあるいはフィリピン海プレートの沈み込みによって強く圧縮されている。マグニチュード7以上の地震は世界中でこの90年間に約900回起きているが、そのうち10%もの地震が日本で起きている。さらに、海に囲まれており海岸線は長く複雑であるため津波による被害も受けやすい。電力や公共交通機関に依存する大都市においては地震や集中豪雨の自然災害により、その機能が停止すると多くの帰宅困難者が発生し、さらなる混

乱が起きる可能性が指摘されている。

こうした中、東海・東南海地震、南海地震、首都直下型地震など日本で懸念されている災害の対策として私は次の2つが重要だと考える。

1つ目は備えである。日本が地震大国であることはほとんどの人が知っていることだ。しかし、テレビや新聞などで被害想定が発表されているのにもかかわらず、危機感を持ち、備えをしている人はまだまだ少ない。このような背景には「やろうと思っているが、ついつい先延ばしにしてしまう」という意見が多く存在する。具体的な解決策としては国や行政からの積極的な呼びかけ、また備えの義務付けが必要だと考える。強制的に家具の固定や非常用持ち出し袋の備えを義務付けしてしまえば、ついつい先延ばしにしてしまうことは無くなるだろう。

そして2つ目は想定にとらわれないということだ。東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県釜石市では、想定をはるかに超えた津波が襲い4階建ての校舎全てが津波で水没した。そんな釜石東中学校の防災教育が「釜石の奇跡」として注目されてきた。これは「津波が来たら他人に構わず、てんでんばらばらに逃げろ」と言い伝えられてきた「津波てんでんこ」に基づく防災教育である。震災のとき、学校にいた生徒はこの言い伝え通り離れた小高い峠まで小学生と一緒に走って逃げたため、全員が助かった。

日本で想定されている大規模広域災害の対策として、公的な援助の限界という観点からも釜石市のような住民自身の自助力や共助力を高めていく必要がある。また、ハザードマップを設置することは大切だが、それよりもさらに大切なことは災害に遭ったとき、いつでも最悪な場合を想定し迅速に行動することだ。「想定はあくまで想定でしかない」ということを多くの方に認識してもらいたい。

7 おわりに

(1) 語り継ぐ

環境防災科に入学してから今まで数多くの被災経験や教訓を聞かせてもらったが、その全てに共通していたのは「語り継ぎ」という言葉だ。災害の風化を防ぐために語り継ぎがあると思う。しかし、はじめに記したように私は震災から4年後に生まれ復興した神戸しか知らない。震災を経験していない世代が増えていく中で過去の災害を風化させてしまわないために、直接経験したことのある方から聞いた話を代理体験として後世に伝えることが大切だと考える。震災を経験していないからこそ語り継ぐ意味がある。

(2) 感想

「語り継ぐ」を書くまで、防災について家族で話し合ったことはあまりなかった。被災当時の状況を聞いたことは何度かあったが、母は暗い話をするのが嫌いだったため真剣に話してくれなかった。今回も最初はためらっていたが当時の状況を詳しく教えてくれた。父は当時大阪で暮らしていて、阪神・淡路大震災の話をするとはなかったがこの機会に聞いてみると、大阪でも地鳴りが聞こえたことや外から見た神戸の様子など初めて知ることがとても多かった。

母の話から学んだのは地域コミュニティの大切さだ。実際に阪神・淡路大震災では公助よりも自助や共助で助かった方が多かった。これは地域コミュニティが災害時の応急対応や復旧、復興に大きな役割を果たしていると考えられる。日頃から挨拶を心がけ、地域の夏祭りやラジオ体操に参加するなど定期的に住民が顔を合わせる機会を増やすことで災害時、迅速な安否確認を可能にするのだ。

私の住んでいる地域で今すぐにできることはコミュニティを広げるほかにもう1つある。それは避難訓練だ。普段学校などで行っている避難訓練とは違い、地域で行う避難訓練では小さい子供から高齢者の方まで幅広い世代が参加する。このような幅広い世代が生活している場所にこそ避難訓練は必要だと思う。大災害が発生したとき本当に使える安全な道はあるのか、避難所の場所はしっかり把握できているのか、高齢者の方の負担を和らげる方法はないか、それぞれが自分の住んでいる地域を見直す機会になる。また、防災力の向上にもつながり、住民ひとりひとりの防災意識を変えるきっかけにもなるだろう。私はこうした地域全体で行う防災を大切にしていきたい。

生きよう

山崎 歩美

1 はじめに

1995年1月17日 午前5時46分、淡路島北部を震源とする地震が発生し、震度7の揺れが神戸を襲った。一瞬のうちに町は崩れ、人々の命を犠牲にした。それが、「阪神・淡路大震災」だ。私には、震災を語り継がなければならないという使命感がある。しかし、1999年生まれであるため、阪神・淡路大震災の経験がない。震災の4年後に生まれ、当時の神戸の様子を記憶しているわけでもない。だが、過去の震災や教訓を伝えなければ、次の災害で甚大な被害が出てしまう。次の災害での被害を減らしたい。だからこそ、語り継がなければならない。震災を知らない私が語り継ぐことができるのは、震災を体験した両親の話だ。私が両親の代わりとなって、語り継ぐ。

2 母の語り

(1) 韓国にて

「アナタノクニ タイヘンナコトガオコッテイルノニ ナニカイモノヲシテイルンデスカ！！」
私が阪神・淡路大震災が起こったと知ったのは、韓国人のこの片言の日本語だった。

1995年1月17日、私は会社の同期4人で韓国旅行に行っていた。三宮ビル10階の近畿日本信販(株)で総務の仕事をしていた当時、社内では韓国旅行が流行っていた。皆が交代で休暇を取り、私は1月16日～18日の2泊3日で旅行に行く予定で日本を出発。2日目の朝、ホテルを出て朝食を買いに出かけた先の商店街で、「アナタノクニ タイヘンナコトガオコッテイルノニ ナニカイモノヲシテイルンデスカ！！」と韓国人店主に言われた。店の奥のテレビを見ると、長田の街が火の海になっていた。何が起こったのか。ハングル語のニュースでは理解できず、慌ててホテルに戻ってテレビで確認した。海外では現地の言葉が分からないと情報が伝わってこない。しかし、映像から伝わる内容で何となく理解し、ホテルから国際電話をかけて家族や友人の安否を確認した。連絡が取れない人もおり、その間、不安と心配で全く動けずにいた。電話が不通になることもあった。ようやく無事であることの確認が取れ、一安心した。だからといってじっとしていても仕方がないため、明日関西国際空港に降り立った後に空港で足止めされる危険性を考えた上、食料品と寝るためのタオル、防寒具、それらを入れるリュックを購入した。防災の知識がなければ何が必要なのかかわからず、これくらいのものしか買えなかった。

(2) 帰国

次の日、予定通りの飛行機で帰国。関西国際空港からの連絡橋が封鎖されており、予想通り神戸方面に帰るすべがなかった。そんな中、同期の1人に「香川県に親戚がいる」とのことで、関西国際空港から香川県の港に向かうフェリーで香川県高松市に向かった。しかし、香川県から神戸に向かう道も閉鎖されていたため、同期のご親戚の方に泊めていただくことになった。同期のご親戚の方々の温かさで次第に落ち着きを取り戻していた。

(3) 友

時期を見て神戸に戻ろうと思っていた矢先、私の高校の同級生が東灘の自宅アパートで亡くなったとの一報が入った。なんとしてでもお別れに帰りたい。そんな気持ちの中、瀬戸大橋の電車が明石方面まで開通していると聞いて慌てて明石へ。明石駅からは迎えの車に乗り、自宅がある神戸市北区へと向かった。自宅に戻ってすぐに亡くなった友人の家へ。葬儀場がすでにいっぱい予約がとれなかったため、自宅の布団で眠るように横になっている彼女とお別れとなった。彼女とは、お互い気が向いたときに会ったり手紙を書いたりする仲だった。彼女は震災の前年12月4日に西宮市から神戸市東灘区に引っ越したばかりだった。もし引っ越しをしていなかったら助かっていたのかもしれない。

彼女とのお別れ会をした数日後、自宅に彼女からの年賀状が届いた。消印がついていないため、1月17日より前に出されたのは確かだが、彼女がいつ出したかは定かではない。だが、彼女が亡くなったあとに年賀状が届いたために、天国からの手紙のようで嬉しかった。まだ繋がっているような気がした。

北区にある自宅に戻る際、一緒に韓国旅行に行っており、家が東灘区にある同期の1人が私の家で泊まることとなった。その子の両親は避難所の小学校に身を寄せていたが、その子が入ることのできる場所もないくらいたくさんの人でいっぱいだったからだ。だが、何年か経った頃、その子は年老いた両親に付き添っているべきだったと口にしていた。親の身になった今、子どもがいる心強さと若いものが動けるとい

うことに初めて気がついた。

(4) 会社

私の働いていた会社が入るビル（旧 日本生命三宮ビル）は中層階が崩壊し、上層階が折れ曲がって傾いた状態になった。それにより社員は自宅待機で、建物に入ることすらできず書類や金庫、ペン1本でさえ取り出すことができなかった。毎月の業務は震災に関係なくとどまることはできないため、急遽大阪の事務所を間借りして業務を再開することとなった。だが、大阪へと移動する手段があまりにも少なかった。私は三田方面のみ運行している神戸電鉄を利用してJRに乗り換えるという、三田まわりで大阪に出勤した。長い通勤で人が多く、扉も閉まらないほどの満員電車だったにも関わらず、1人として文句を言うことなく譲り合い・助け合いの精神で声を掛け合っている車内は苦痛にはならなかった。

業務内容は主に、会員の方がクレジットカードでお買い物をしたものを月末で締め切り、翌月の中旬に請求書を会員宅に送り、毎月27日に銀行より引き落としになるというものだった。私は、通常は社員の給与や庶務を担当していたが、この時は1月中旬に会員宅に送付した請求書が未着で戻ってきたものの処理や、会員の方からの電話に対応するというものだった。震災で生活が止まってもクレジットカードの請求はやってくる現実。被災された方からの電話はひっきりなしにかかってくる。被災された方が電話をかけることも大変な状況の中、「家が全壊のため銀行の通帳が取り出せず入金や支払いができそうにないのですがどうしたら良いのでしょうか。」といった丁寧な電話が多くあった。会社はすぐに対応策を立てており、支払いに3ヶ月の猶予期間を持つというものだった。その旨を電話越しで伝え、「大変でしょうががんばってください。」と言うと皆さんがホッとした口調になり、電話を切っていた。

それからしばらく大阪で事務所の間借り生活が続き、日々の業務に追われていた。しばらくして西明石に事務所を構えることとなり、また、崩壊したビルの解体も春頃行われると決定し、男性社員総出でビルの非常階段を使って事務所に入り、重要書類を運び出すことができた。建物内は整然と並んでいたデスクも誰の席かわからないほどに移動し書類などが散乱しており、仮に震災の時間に勤務していたら…と考えるととても恐怖に感じたことを今でも覚えている。

(5) 最後に

日々の忙しさとともに、震災を経験したからといえ私は震災当日神戸におらず、非国民的な感覚であったがために震災のことを自分から話すことはなかった。しかし、様々な場所に行くたび「どこから来たの?」「神戸から」「大変だったわねえ」という会話が多く、少し心が痛かった。親友の死を受け入れるのに時間がかかった。東遊園地にある震災の銘板を見に行けたのも、震災から20年が経とうとしていた時だった。このような語り継ぐ場があって初めて娘に震災を伝えるにあたり、もっと早く色々な方向で震災を経験した私たちが記憶を出し合い伝えることがあったのでは…という反省の気持ちである。

3 父の語り

(1) 当時

私は須磨区の自宅で被災した。5時46分、就寝していたがとんでもない揺れで飛び起きた。寝ぼけていたのと、あまりにも大きい衝撃であったため、揺れた時の様子はほとんど覚えていない。食器やガラスが散乱。屋根瓦がずれ、父と一緒に瓦を直した。自分の住んでいた地区はとてもひどい被害だったわけではなく、家も一部損壊だった。物流が止まってしまうため食料がなかったが、普通に仕事に出かけた兄がたくさんの食料を調達してくれておかげで食には困らなかった。ときにはコンビニエンスストアやスーパーなどに強奪に行く人もいた。震災時は電気が通らず、防犯カメラの電源が付いていない。災害時にはセキュリティーなど存在しない。電話が混む前にと、急いで知り合いに無事を報告。電話はすぐにして正解だった。余裕があればすぐに電話をかけるべきだ。テレビは無事であったため、情報は得ることができた。

(2) 仕事

佐川運送で仕事をしていたが、しばらくは仕事がなかった。震災から1週間以上が経ったあと、しあわせの村に集まった救援物資を各小学校に運ぶという仕事があった。物資の集積場ははっきりと決められていなかったために、急遽、物資はしあわせの村に集められていた。物資の輸送は早くしなければならぬので、たくさんの物資を一気に運ぶ。普段の運送と違ってマイペースでできないため、とてもしんどい仕事だったのを今でも覚えている。

(3) 最後に

私は大きく被災したわけでない。環境防災科である娘に震災の大きな被害の話ができないことは惜しいことだ。だが、こうして自分の経験した震災を語り継ぐことのできる機会があってよかったと感じる。

4 私の夢

(1) きっかけ

私の夢は警察官だ。小学校2年生のときから志している。「警察官はカッコいい」「白バイに乗ってみたい」「何か人の役に立ちたい」という単純なきっかけで夢を持ち、10年ほど過ごした。警察官になりたいためにこの環境防災科に入学し、ボランティアなどで人とのコミュニケーション能力をつけ、立派な警察官になりたいと感じていた。しかし、やる気とエネルギーに満ち溢れ、ボランティア活動に熱心だった高1の夏、夢を失いかけたボランティアがあった。東北被災地訪問だ。

(2) 挫折

8月5～7日にかけて東日本大震災の被災地である、宮城県を訪れた。私事ながら8月6日が16歳の誕生日で、自分の中でおめでたい日だった。5日のプログラムが予定より長引いてしまったため、就寝するのは日付をまたいでからだった。そのおかげで、0時ちょうどに先輩方が「お誕生日おめでとう！」と直接お祝いしてくれたのは正直、とても嬉しかった。そんな喜びも束の間、朝には喜びの気持ちなど心に残ってすらいなかった。津波による甚大な被害を受けた「大川小学校」を目の当たりにしたからだ。私が16年間、平和に過ごしてきたことに罪悪感を覚えた。ここで、「大川小学校の悲劇」を少し紹介する。

〈大川小学校の悲劇〉

2011年3月11日14時46分 東北地方太平洋沖地震、東日本大震災が発生。石巻市立大川小学校では全校108名中、74名の児童が死亡・行方不明となり、教員も10名亡くなった。

108名といっても当日欠席・早退・保護者が引き取りにきた児童がおり、最終的に校庭にいた児童は70数名だった。近くにある三角地帯が少し高台であるため、移動を開始した直後、津波に遭遇した。移動を開始したのは15時37分、地震発生から51分後だった。逃げる時間も情報も手段もあったのに救えなかった。4人だけが奇跡的に残り、助かった教職員も1名だけであった。

学校管理下で、このような犠牲を出したのは大川小学校以外にはない。大川小学校より海に近い学校はもちろん、もっと海から遠い、上流の学校や保育所も逃げていた。

小さな命の意味を考える会代表 佐藤敏郎さんの語り より

大川小学校を目にした瞬間、何とも言えない思いと涙がこみ上げてきた。だが言葉にはできない。ただただ虚しく、悲しく、残酷で、恐ろしかった。そしてこの気持ちを誰にも話せずにいた。ついには「警察官になっても災害時には人を助けることができない。自然に勝つことはできない。亡くなった子どもたちの命は返ってこない。」と絶望した。そんな気持ちで過ごす中、災害は容赦なくやってくる。残酷だが、災害は次から次へと人々を襲う。熊本地震が発生したのだ。

(3) 新たな夢

〈平成28年(2016年)熊本地震〉

	発生日時	震度	マグニチュード	主な震源地
前震	2016年4月14日21時26分	7	6.5	熊本県熊本地方
本震	2016年4月16日1時25分	7	7.3	熊本県熊本地方

○死者(合計)…225名(下記に詳細)

直接死…50名

災害関連死…170名

豪雨被害関連死…5名

※災害関連死…避難生活の疲労や環境の悪化などにより病気にかかったり、持病が悪化したりするなどして死亡すること。

※豪雨被害関連死…豪雨被害で熊本地震との関連が認められた死者。

平成29年4月13日(木)18時00分現在 消防庁HPより

平成28年6月17～22日の5泊6日で環境防災科14期生が熊本被災地支援ボランティアに行くということが決定し、やる気に満ち溢れた反面、4年後の東北の被災地に訪れた時ですら受けた衝撃は大きく、被災直後の地域に入るのは初めての私にとっては不安でいっぱいだった。しかし、熊本でのボランティア活動を通して熊本の人の温かさに触れ、人のために何か行動できるのは素晴らしいことだと感じるこ

ができ、再び「警察官になって人のために働きたい」と思い始めた。

そのため兵庫県警察の業務説明会に参加した。そこで「女性特別機動隊」という言葉に出会った。「女性特別機動隊」は女性ならではの特性を活かし、災害が発生した際には被災地へ訪れて被災者の心のケアに当たったり、通常業務の雑踏警備時には柔らかな物腰で群衆に注意を呼びかけたりするといった役割を担う。いつもこのような業務ばかりなのではなく、普段は総務部での勤務や交番勤務など、警察の一般的な業務を行っている。そんな女性特別機動隊は、災害時に人々を助けることができると思い、非常に魅力的だった。大川小学校を目の当たりにした時の「警察官になっても災害時には人を助けることができない」という思いは間違っていた。女性特別機動隊になったら、被災者の心のケアにあたり、熊本地震の際に特に多かった震災関連死(防ぎうる死)者を減らすことができる。つまり、人々を助けることができる。

今の私の最大の夢は「女性特別機動隊」である。

5 感想

私が直接、両親からこんなにも詳しく震災のことを聞いたのは初めてだった。神戸市で被災した父と、揺れを直接経験しておらず、韓国にいた母。2人の視点から見る阪神・淡路大震災は、新しく知ることが多かった。毎年正月に行く父の実家が一部損壊だったことは言われないと分からず、母がまさか震災当日に韓国で旅行していたとも知らず、とても驚いた。今まで環境防災科では阪神・淡路大震災の被害状況やライフライン、長田区の火災などについて学ぶことが多かった。だが、神戸でも大きな被害でなかった北区や須磨区の両親の実家周辺の様子を知ることができ、また物資輸送の様子や関西国際空港からの交通の寸断など、普段ではなかなか知ることのできないことが多く、このような語り継ぎがあったからこそ知れたのだろうと感ずることができた。

それと同時に、もっと小さいときから積極的に震災の話聞いていればよかったとも思った。記憶とは薄れていくものである。阪神・淡路大震災から23年が過ぎた今、震災を鮮明に記憶している人はいるだろう。しかし、私の両親のように「少し曖昧だけど」と話す人も少なくはないはずだ。記憶が鮮明なうちに語ることも大切だと感ずることができた。だが、こうした文面で記録を残すことは素晴らしいと思う。記憶を呼び起こすものとなるだろう。

両親の話を理解できることもあれば、心打たれることもあった。父・母それぞれの体験・教訓を聞くことができ、嬉しかった。何よりも、震災で生き残ってくれて、私を産んでくれたことに感謝したい。こんな娘のために時間を割いて話してくれたことにも感謝をしたい。だからこそ、災害で命を落としてはならないのだと、強く感ずる。

環境防災科に入って防災を専門に学ぶ中、東北や熊本の被災地を訪れ、辛いこともたくさんあった。災害から直接人の命を助けることができないのに、どうして防災を学んでいるのだろうと思うこともあった。しかし、私たち若者は実際に震災を経験していないからこそ、過去の震災や教訓を語り継ぐことができる。事前に備えることができる。被災地の支援を行うことができる。災害の後に被災者に寄り添うことができる。ボランティアや学習を通して被災地を知ることだってできる。私たちが過去の災害の被災地や被災者を、また未災地にいる人を支援することができる。これは、人の命を守ることに繋がるのではないだろうか。

そして、私には環境防災科14期生の仲間や親、先生がいる。特に14期生の仲間は3年間を通し培った絆は強く、信頼できる関係であり、私の心の拠り所でもあった。14期生の素敵な仲間や先生方に会えたことも感謝したい。この14期だからこそ乗り越えることのできた壁がたくさんあったはずだ。

この先、自分がどのような道に進むかはわからない。いつ災害が起こるかもわからない。そんな未来に備えて、今の自分を大切に、目標を持って生きていきたい。

人間の平等で尊い命に失われていい命などない。これを読んでくださった皆さんが、私の文章をきっかけに少しでも防災に興味を持ち、「災害なんかで絶対死なないぞ」と、そう思ってくだされれば幸いである。そして、自然災害は必ずやってくる。次に来る未来の災害で自分の命を守ってほしい。自分の命が守れないと、他人の命を守ることはできない。周りの人の命を助けたければ、自分の命を守るのが先決である。日ごろから周りの人への感謝の気持ちを忘れずに、災害に負けない強い心を持ってほしい。

生きよう。思いやる心と未来への希望を胸に。

生きよう。災害なんかに負けるな。

語り継ぐ

吉川 知里

1 はじめに

(1) 阪神・淡路大震災

1995(平成7)年1月17日午後5時46分兵庫県淡路島北部を震源とした直下型地震が発生した。マグニチュードは7.3、死者6434名、負傷者4万3792名、全半壊した住宅約25万棟犠牲者の約8割が建物の倒壊による圧死である。鉄道や高速鉄道も大きな被害を受けた。地震の名前は兵庫県南部地震である。1995年は「ボランティア元年」とも呼ばれている。

(2) 環境防災科とは

【教育理念】

○阪神・淡路大震災の教訓を活かし、自然環境や社会環境との関わりを視点に据えた防災教育を推進することによって、共生社会における人間としての在り方・生き方を考えさせる。

○大学やその他の研究機関、関係機関等との連携を密にし、実践的・体験的な学習を通して、理解を深めるとともに、「環境」「防災」に関わる様々な課題の解消に向けて、主体的に考え、行動できる力の育成に努める。

○自然現象のメカニズムや災害と人間社会の関わりの学習を通して、自己を取り巻く様々な環境に対する理解を深めたり、災害に対応できる力を身に付けたり、「Think Globally Act Locally」(地球規模で考え、地域で活動する)人間の育成に努める。

【特徴的な教育活動】

外部講師、校外学習、発表、課題発見・課題解決型学習、国際理解・国際交流、小学校との交流、IT教育などの特別な授業がある。専門科目は全体(91単位)のうち27～31単位で、授業は主に実践授業である。

2 1995年1月17日

(1) 地震発生

普段通り寝室で父と母は眠っていた。突然揺れ始め、それによって目が覚めた。そして夫の頭の上に、枕元に置いていた目覚まし時計が落ちてきたり、タンスの上に置いていた人形ケースが落ちてきて割れたりした。この時はたまに起こるちょっとした地震だと思っていて、まだ大きな災害が起きたということに気が付いていなかった。起き上がってテレビや電気をつけようとしたが、どちらも起動しなかった。しかし電話は使用でき、名古屋に住んでいる親戚からの連絡に応えることができた。「神戸で大きな災害が起きたと聞いたけれど、大丈夫か。江井島にかけたけど繋がらなかった。」というような内容で、心配してかけてくれたようだった。そこで初めて自分が住んでいる町が大きな災害に襲われたということを知った。窓から外を見渡したが異常はあまり感じられなかった。当時、お腹の中には子どもがいた。コンビニエンスストアが、住んでいたマンションの目の前にあったのでそこにパンを買いに行った。この日はお風呂に入ることはできなかった。

(2) その後の生活

電気はすぐに復旧したが、ガスは長期間使用することができなかった。そのためコンビニエンスストアに食べ物を買いに行ったり、ホットプレートでできる料理を考えて作ったりした。料理やお風呂など生活の中で使用する水は、家から祖父母の家に行くまでの間にある水道に鍋ややかんを持って行き並んで手に入れていた。お風呂に使用する水はポットで温めていた。洗い物をできる限り減らし節水するためにラップをお皿に敷いて使用していた。

明石市に住んでいる祖父母の家は幸いなことに全てのライフラインに被害を受けなかった。そのため両親は土曜日に明石市に住んでいる祖父母の家を訪れ、泊って日曜日に帰るということを1か月間毎週行っていた。その際にお風呂に入らせてもらったり、水を購入したりした。また、土曜日や日曜日以外の日も同じ垂水区内に住む祖母と一緒に暮らした。父は、電車が運行していなかったため自転車で会社に行っていた。

(3) 良かったこと

母が阪神・淡路大震災の話のなかで唯一良かったと言ったことは、兄がまだ生まれておらずお腹の中に

いたということだった。なぜなら、生まれていたら、水がないためミルクを十分に飲ませてあげることができなかったかもしれないからだ。その分お腹の中に子どもがいる状態で暮らしていた母は2人分の命を守らなくてはいけなくて大変だったと思う。今私が思うことは家族が無事で良かったということだ。

(4) 備える

地震後、今まで以上に震災への備えを行った。非常食である缶詰やカンパン、水などを購入しておいておいたり、地域の交流を大切にしたり、もし震災が発生したらどこに避難するかを家族で話し合ったりするということだ。地域の交流というのは、パトロールや避難訓練、自治会の役員、地域の小学校の開放当番等様々なことを行っている。開放当番では、ほとんどの人が自分の子どもが小学校を卒業すると同時にやめてしまう人が多い中、母は兄や私が卒業した今でも継続して行っている。パトロールでは、地域の安全を守る他にも同じ班で回る地域住民と交流を図ることができるのでいいことだと思う。家族での話し合いは、前から行っていたが阪神・淡路大震災後で兄と私が生まれたのでより話し合う時間を大切にすることを心掛けたそう。また、父の会社でも非常食は備えてある。その非常食は阪神・淡路大震災を忘れないために毎年1月17日に入れ替えが行われその非常食は社員全員に配られる。このことは今でも続けられている。

4 将来の夢

(1) きっかけ

中学生だった頃、私は友達と遊びに出かけた。楽しくてしかたがなかった。しかし友達は「楽しんでる？」と私に問いかけた。その時に初めて気が付いたことがある。どうやら私は、感情表現がとても下手らしい。

それからどうすればこの楽しかった気持ちを誰かに伝えられることができるのか考え、まずは文字にすることを試した。でも私なりの楽しい表情を見て、楽しんでいないと感じた人がこの文字を見ても、あまり信用してくれそうにないと感じた。私はそれ以外に何もひらめかなかった。だから考えることをやめて課題にでていた中学校のフラッグのデザイン案を描き始めた。

次の日の放課後、課題のデザイン案をもって生徒会室に向かった。プロのデザイナーの方が来られていた。自己紹介を行う際に学年、名前の他に「自分にとってデザインとは何か」を言うように指示された。絵や何かをデザインすることは幼い頃から好きだったが、そのようなことを考えるのは当時が初めてだった。といっても直後に先輩に指名され、考える時間をろくに与えられないまま私の自己紹介は終わった。とっさにでた言葉は「デザインとは、誰かに自分の気持ちを伝えられるものだと思います。」という内容だった。私は驚いた。お世辞かもしれないがプロのデザイナーさんの反応も良かった。昨日迷宮入りしたはずの問題が解決したと同時に、私は絵に関わる仕事がしたいと考え始めた。

当時は将来の夢なんていうかこいいいものではなく、特にしたいこともないしそれでいいかというような甘い考え方だった。しかし高校2年生が終わる頃にこれは将来の夢へと変わった。そのきっかけとなるのが「イラストを見ていると元気がでる。」という友達からの言葉であった。この時に私のような人でも誰かを元気づけることができるということを初めて知った。また、環境防災科に入学したばかりの時は、防災と美術は関係ないと思っていたが、そうではないことに気が付き、私にできるかたちで多くの人に笑顔に、元気になって欲しいと思った。そのためには多くの人に自分の作品を見てもらえる環境をつくらなければならない。つまり様々な技術を磨いて有名になる必要があるということだ。そして私は、芸術の道を志すようになった。

(2) 芸術と防災

私は将来芸術の様々な分野で防災と関わっていきたい。

もしも絵本作家になったら防災の要素を盛り込んだ絵本を作りたい。大抵の絵本はその国の言葉でしか文章が書かれていないが、私が最近出会った本は日本語に加えて英語でも記されていた。それを見たときとても良いアイディアだと思った。そのことを通して、多国語で記す以外にも点字を活用すればもっと多くの人々が手に取ることが可能になるのではないかと考えた。他にも本を出版するだけでなく、今の時代に合わせてパソコンや携帯電話などの電子機器でも読めるようにし、それに音声をつけることができればもっといいものになるだろう。

もしもファッションデザイナーになったら、防災に力をいれたおしゃれなブランドを作りたい。今は防災に特化した服はあまりおしゃれではないというイメージが強い。だからその考え方を覆したい。流行をおさえることも必要であるが、流行に囚われず独自性を大切に自分のブランドが流行の発信地とな

るのが理想だ。老若男女問わず多くの人から愛される服をつくり、いざというときにこの服を着ていて良かったと思ってもらいたい。

もしもデザイナーになったら、多くの人目に留まるような防災のパンフレットやポスターを作りたい。これらは、内容はもちろん大事であるが、構成も同じくらい重要であるといえる。全く同じ内容でもイラストがあるものとそうではなく文字がぎっしり詰まっているものがあったらイラスト付きを選ぶ人の方が多いのではないだろうか。またイラストがないにしても、文字が単に並んでいるものと新聞のように枠組みがあるものとは読み手の気分も変わる。だからどのような世代に向けられたものなのかをしっかりと考えて作成できるようにしたい。

もしも建築家になったら、これまでの耐震技術を活かすだけでなく、また新たな技術を生み出したい。阪神・淡路大震災では建物の倒壊による圧死で亡くなった方が多い。今は改善されつつあるがまだ安全と言い切れるものではない。だからもっと研究し発明していく必要がある。その中心となっていきたい。

5 環境防災科

(1) 志したきっかけ

私が環境防災科を志した理由は2つある。

まず1つ目は自分の命や大切な人の命を守りたいという思いがあったからということだ。小学生の時に垂水駅前募金活動を行っていた先輩の姿を見て環境防災科の存在を知った。その印象が残っており中学生のころの進路選択の時期に環境防災科について調べどのようなことを学べるのか、どのようなことを行っているのかということを知った。自分の思いを大切にするためには環境防災科が自分に一番合っていると考えたためこの学科を選んだ。

次に2つ目は、ボランティア活動を続けたかったからということだ。私は中学生のころ生徒会役員をしておりその活動のなかで募金活動を行っていた。他にも有志で地域の清掃活動、お祭りのお手伝いなどを行っていた。初めて地域のボランティア活動に参加させていただいた私にとって周りの方々からの「ありがとう。」という言葉にはたくさんの元気をもらったし本当に嬉しかった。どれも大変なことはあったけれど、とてもやりがいを感じることができた。そのことがきっかけでもっと多くの活動を行いたいと思うようになっていた。

(2) 印象に残っていること

私が最も印象に残っていることは熊本県被災地支援活動に行かせていただいたことである。私にとって被災地に足を運ぶことは初めての経験だった。しかし警報が発令されたため実際にボランティアセンターを通しての活動を行えたのは1日だけだった。無力感でいっぱいになった。活動ができなくなってしまったことが悔しかった。しかし熊本の方や先生方がそんな私たちに様々な経験をさせてくださった。元気づけにいった私たちが多くの元気をもらった。お世話になった菊池市の高校の生徒とも交流を行えて友だちになることができた。その子は『ありがとうございます。同じ高校生がこうやって頑張ってる姿を見て、もっと頑張らんなああって何回も思った！！本当に本当にありがとうございます。かんばう、たいぎや好きばい。』と言ってくれた。私はまた元気付けられた。本当に役に立つことができたのだろうか不安だったが、この言葉を聞いて家の整理整頓や瓦礫運びなどのボランティア以外にも自分にできる支援はあるということを気付かせてもらった。もっと自分にできることがあるのではないかと前向きな気持ちにさせてくれた。この友だちとは今でも連絡を取り合う仲だ。また熊本県に行きたいしこれから先もずっとこの友人との関係を大切にしていきたい。

6 最後に

小学校の宿題などで今までにも震災当時の話を聞いたことはあった。怖くて辛い出来事だからきくと話すのも辛かったと思う。でもいつも私の両親は震災当時の出来事や思いを全て話してくれた。たくさんのことを伝えてくれた。だからこそ私は震災当時の様子や今までに環境防災科で学んだことをしっかりと責任を持って語り継いでいかなければならないと思うことができた。私は人前に出て話すことが少し苦手だ。ずっと話してばかりよりなにか実践的なことを入れた方が良いと捉える人もいるのでそのような場面であれば私の出番だ。伝え方にはいろいろな方法がある。環境防災科に入学した当時、最初に悩んだことはどのように語り継いでいけば良いのだろうかということだった。家族や先生、語り部さんから“話を聞く”という方法しか知らなかった。歌で伝えている人がいることを知ったとき驚いた。そんな風に自分の得意なことで防災を広めることができるのかと感動した。発想としてはそんなに難しいことで

はない。でも全く思いつきもしなかった。もっと難しいことだと思っていた。語り継ぐというとなんだかとても難しそうで行動にうつせないけれど、必ず自分にできる語り継ぐ方法があるということに気付けた。苦手な方法で無理に焦って語り継ごうとしなくていい。自分に合った方法で、自分のペースで伝えていければそれでいいと思った。それと同時に入学当時の悩みは解消された。私はものを作ったり絵を描いたりすることが好きだからそれを活かしていきたい。今現在も新聞でスリッパや入れ物などを作る方法やお菓子を使ったバッグを作る方法が公開されている。身近なもので必要なものを作れるというのは素晴らしいことだ。今発表されているもの以外にもきっと身近なもので作ることができるものがあるはずだ。それを考えていきたいし、もしいいものが発表されたら作れるようになって一緒に広めていきたい。

これから先は今までのように防災を専門的に学んで行くわけではない。しかし、3年間で学んだり身に着けたりしたことを無駄にしないように、環境防災科で過ごした大切な日々を忘れずにこれからの道を進んでいきたい。そしてひとりでも多くの人が防災に関わりやすくなるように、自分の好きなことや得意なことを活かして周りの人々に語り継いでいこうと思う。

3年間のすべてを語り継ぐ

若松 龍之介

はじめに

私は1999年7月、阪神・淡路大震災発生から4年後に生まれた。私自身は被災していないが、震災のことをよく知る、両親から聞いた話をもとに「語り継ぐ」を書こうと思う。

1 阪神・淡路大震災を経験していない私たちにできること

1995年1月17日午前5時46分、淡路島北部を震源とするマグニチュード7.3の兵庫県南部地震が発生した。この地震による被害を阪神・淡路大震災とよぶ。死者6434名、行方不明者3名、負傷者4万名以上、全壊・半壊家屋合わせて24万棟以上に上る。震災発生から23年がたった今、私たち震災を経験していない者たちに何ができるのか。その答えは誰にも分らない。しかし、私たちにもできることはある。それは、語り継ぐことだ。この3年間、ボランティア活動や授業などを通して様々なことを学んできた。環境防災科で得た知識、今回両親から聞いた話、私の夢と防災への携わり方を、後輩たち、そして私の文章を読んでくださった全ての方々に、3年間の思いを込めて語り継ぎたい。

2 母の話

(1) 17日

震災発生当時、母は大阪府大阪市中央区、今でいう心斎橋の近くに住み、兵庫県西宮市の私立高校に体育教師として勤めていた。1995年1月17日の朝、通常なら5時30分には家を出て、職場に向かっていったが、その日はたまたま寝坊し地震が来た瞬間は歯を磨いていた。地震が来た瞬間に電気が消え、水が止まった。茶で口をゆすぎ、生徒の安否確認のこともあるのでとりあえず学校に向かった。高速道路は使い物にならなかったため、国道2号線を利用して職場に向かった。西宮市に近づくにつれてだんだんと明るくなり、その被災程度は大阪とは比べ物にならなかった。家が崩れ道路に飛び出していたり、パジャマで裸足のまま歩いたりする人もいた。今現在はどうされているかはわからないが、学校に到着するまでに崩れた家の中から3人もの人を救い出した。さらに、行く手を新幹線の線路が阻んだ。落ちてきて、道を塞いでいたのだ。しかたなく迂回して学校に向かった。通常なら家から職場まで40分程度で着くのだが、この日は2時間程度かかった。

学校に到着すると、すでに避難してきている被災者がいらっしやった。学校は温水プールを完備していたので、同僚とともに水の運び出しを行った。そうしているうちに、続々と他の先生方も出勤された。電話もつながらず、何も情報がわからない状況なので、とりあえず職員室に向かった。窓ガラスを割って職員室に入って、足の踏み場もない内部の状態をみて、やっと現状がわかってきた。先生もあまり来ない、生徒も登校してこない、電話もつながらず、何をしようかわからなかった。しかたなく上司の指示を待った。しかし、上司も被災していたので、学校にいた母親とその同僚だけでは、学校を避難所として運営できるような状況ではなかった。そして、生徒の安否確認を行おうと思っても通信網が切断されているので、できなかった。初めての被災経験なので、何をしようかわからず途方に暮れていた。

母親が勤める私立高校は、小中高一貫校であった。ちょうど震災発生日から中学校の受験願書受付が始まった。「まさか、こんな日に出願しに来る受験生はいないだろう。」そう思っていた。しかし、出願しに来た被災者が1人いたのだ。電車はとまり、他の公共交通機関もあてにならなかったため、沿線を歩いて願書を持ってきた。もちろん、母は受理した。「絶対合格させてやらないと。」そう思った。

そうこうしているうちに、「自分たちは教師である前に被災者である。今日はとりあえず家に帰れ。」と上司に指示された。帰り道は、かなり渋滞していた。40分の道のりを、12時間以上かけて帰った。その時一番困ったことは、トイレだ。コンビニに立ち寄ることもできないし、公衆トイレもないし、簡易トイレも持っていなかったからだ。我慢して家に帰るしかなかった。家に到着すると生徒から、安否についての連絡が多数入っていた。連絡網として事前に家の電話番号を生徒に教えていたのだ。ベッドを見てみると、頭の位置にテレビが転がっていた。つまり、地震が発生した瞬間その場で寝ていたら、確実に死んでいたということである。もし、地震が発生した時にその場で寝ていたらと考えると鳥肌がたった。

大阪市内は、この日の昼頃にライフラインは復旧し、一応の生活はできるようになった。

(2) 18日

震災発生翌日も、学校に向かった。家に入ってきた安否の情報を学校に伝えるためだ。報告し終えると、学校周辺に住んでいる生徒の家を自転車で回って、安否の確認を行った。安否がわからない生徒の家をすべて回りきることはできなかったが、ある生徒の家の玄関には、「〇〇は△△に避難している。」と貼ってあり、非常に助かった。この日は1日この作業を行った。

(3) その後

その後は、地元の仲間たちが母の勤務先が避難所になっていることを知り、水や食料を大量に提供してくれた。車で学校に向かうとやはり渋滞していて、思うように進むことができないので、物資運搬専用道路を利用させていただき、避難所に物資を運んだ。持って行った物資を1つ残らず配った。

また、母の受け持つクラスに神戸市長田区から通う生徒が3人いた。そのうちの1人から電話で連絡があった。「周りが火の海です。僕の知っている長田区ではありません。熱いです。」と言ったそうだ。なんと言葉をかけることが良いのか、わからなかった。

2月ごろに学校を再開する予定だったが、生徒や先生が集まらなかった。交通網の途絶や、他府県への避難、家屋の倒壊などにより、震災から2か月後の3月に再開することができた。

3 父の話

震災発生当時、父は兵庫県尼崎市に住んでいた。母と同じく、西宮市にある私立中学校の体育の教員として働いていた。父は震災発生前日(16日)、職場の仲間たちと食事を取り、帰宅したのは17日の午前0時を回っていた。それから間もなく就寝し、仕事で使う資料の整理をするために5時頃には起床していた。5時30分頃に資料の整理が終わり、30分程度仮眠をとろうと布団でウトウトしていたら、いきなり「ゴオオオオオ」という激しい轟音とともに、突き上げられるような激しい揺れに襲われた。しばらくして揺れが収まると、火元の確認を行い両親の部屋に向かった。全員無事だった。しかし、食器棚の皿はすべて粉々に砕け、酒の瓶も割れ、家中は破片だらけになった。職場から一番近くに住んでいたのは父だったので、とりあえず職場に向かうために準備を始めた。

6時30分頃に自転車で職場に向かった。信号は止まり、道路がずれ、橋が落ちているという光景を今でも覚えている。職場に向かっている途中、見かけたある学校からは、黒い煙が上がっていた。後から聞いた話によると、理科室の薬品が混ざって化学反応を起こしていたそうだ。その対応は消防に任せ、自転車をこぎ続けた。学校についてまず、体育科室に向かった。建物自体は無事で、火事なども起こってはいなかったが、部屋の中は足の踏み場もないくらい散らかっていた。職員室や体育科室を使えるようにするため、できる範囲での片付けを始めた。できる限りの修復、整理作業は行ったが、余震があるたびに近くの人が校庭に避難してくる。1月ということで、寒さも厳しい状況だったが、校舎内に避難者を入れるわけにはいかなかった。なぜなら、倒壊の恐れがあったからだ。寒さは、毛布やカイロでしのぐしかなかった。

一番に職場に来て、最後に家に帰るという生活を10日間ほど続けていた。次第に、電気、水道、ガスが復旧し、ようやく日常の生活を取り戻しつつあった。そんな中、愛知県名古屋市内に住んでいる父の身内が、ありったけの水を持って尼崎まで来てくれた。新幹線は新大阪で止まり、その他の鉄道も動いていなかったのので、大阪から尼崎まで徒歩で水を運んでくれたのだ。水を運び終えると、ボランティアが被災者に迷惑をかけることはできないということで、また歩いて大阪まで行き、新幹線で名古屋に帰った。父は、職場にいたので会うことはできなかったが、父の母(私からすると祖母)が言うには、とても勇敢に見えたそうだ。

4 両親の話を聞いて

震災発生当時のことを両親から、被災者としての目線、そして教師としての目線で聞くことができて良かった。震災を様々な視点から見るということは、とても大切なことである。今回、今までは聞いたことのない両親の「教師」としての話を聞くことができ、とても自分のためになったと思う。私は、父、母、共に教師としての職務を全うしようと、自分自身が被災したのにも関わらず、仕事をしていたことにとっても感動した。震災を通して初めての経験をし、非日常の中でも自分にできることを精一杯行っていた両親のことを心の底から尊敬している。そして、辛かった出来事、うれしかった出来事を私に話してくれたことに、感謝している。私には、両親から話を聞いたからには、この話を後世に語り継ぎ、次に発生する災害に対して、自分の命だけでなく、周りの人々も巻き込んで防災活動を行うという使命があると思う。環境防災科を卒業しても、防災に携わっていききたいと改めて、強く思った。

5 環境防災科

私に環境防災科を紹介してくれたのは、友人の母親だった。私が消防官になることを夢みていることを知り、身内が通っていたということで紹介してくれた。環境防災科と聞いて、すぐにはイメージできなかったが、調べていくうちにだんだんと、どのような学科なのかがわかった。実際にオープンハイスクールに行って、何事も自分たちでこなしていく先輩をみて、そして楽しい防災の体験授業をさせていただいて、「自分もこの場所で防災を学びたい。先輩のようになりたい。」と思った。しかし、いざ3年間この学科で防災を学ぶとなると、私には大きな問題点があった。それは通学に要する費用と時間だ。私は現在尼崎市に住んでいる。神戸市垂水区にある舞子高校からは、電車とバスを乗り継いで、約2時間かかる。必然的に公共交通機関に乗っている時間も増え、通学費がとてもかかる。このような問題から環境防災科を諦め、地元の高校を受験することも考えたが、私の父と母は、なにがあっても応援してくれた。「あなたが持っている夢をかなえるために、3年間防災を学び、様々な経験をしてほしい。応援している。」と言われ、私は環境防災科を目指すことを決めた。

そして今私は環境防災科にいる。素敵な仲間や先生方に囲まれ、日々勉強や部活動に取り組んでいる。環境防災科に入学してから3年間様々な経験をした。その中でもいちばん印象に残っている活動は、平成28年熊本地震で被災された地域の被災地支援活動である。地震発生直後から環境防災科が一丸となって募金活動からはじめ、いろいろな団体、人々、そして両親に支えられながら、実際に現地に入って被災地支援活動をすることができた。被災地に足を踏み入れることは初めてで、とても緊張したことを覚えている。しかし、思うように活動はうまく進まず、悔しい思いをした。熊本県でも、兵庫県に帰ってきてからも、仲間同士で話し合いを重ね「現地で活動することだけが被災地支援ではない。私たちにできることをすれば良いのだ。」という結論にたどり着いた。例えば、募金活動の継続、現地で交流した高校生とのつながりを大切にする、私たちが見た熊本の現状を兵庫で伝えるということである。どのような活動でも、熊本のためにという気持ちがあれば被災地支援に結び付くのだということがわかった。

環境防災科でできた繋がりを大切にして、この繋がりこれからも防災や減災活動に活かしたと思う。

6 将来は

私の夢は、消防官になって市民の安心安全な暮らしを守ることだ。環境防災科で得た知識をもとに、災害に強いまちづくりを行い、災害が発生した時の被害を可能な限り減らしていきたいと考えている。そのためにはまず、自分自身が町のことをよく知り、今何が必要なのか、市民は何を求めているのかを理解する必要がある。つまり、消防官という仕事は、市民との信頼関係がなければ成り立たないということである。市民が気軽にどのようなことでも相談でき、日常会話などのコミュニケーションを通して、信頼関係を築きたいと考えている。

私がこの夢を抱き始めたのは幼少期である。そして高校3年生の今まで、その夢は一度も変わったことはない。自信をもって言える。些細なきっかけから、憧れ、夢になり、そして今では目標になっている。消防という仕事を目指すようになった一番のきっかけは、2011年3月11日14時46分東北地方太平洋沖地震による東日本大震災である。当時私は小学5年生だった。テレビをつけると、東北の凄まじい被災状況が映し出されていた。そんな中、人命救助のために寝る間も惜しんで活動されていたのが、自衛隊や消防隊である。とくに消防隊は私の目を引いた。助けを求めている人に必死に手を差し伸べていたのだった。不思議とその映像を見ているとき、時間の経過が遅く感じた。その時、「人を助けるということは、難しいことではあるが、その分やりがいもある。私もいつか消防の世界に入って、大好きな町、大切な人をこの手で守りたい。」そう思った。消防官になって、今まで私のことを支えてくれた方々に恩返しをしたい。「大好きな町、大好きな家族、大好きな人が災害に負けないように、私が先頭に立って守っていかう。」と決めた。

私が消防官になったら、災害による被害をできるだけ0に近づけ、町全体で防災活動に取り組もうと考えている。地震や津波などの自然現象を0にすることは不可能だが、その現象が我々に与える被害は、どこまででも減らすことができる。これらのことを実現するためには、徹底した自助、共助、公助を行う必要がある。自助とは、自分の命は自分で守ることであり、共助とは仲間同士で助け合うことであり、公助とは、公的機関が専門知識を用いて救助することである。まずは、この三助の大切さを市民に知ってもらうことから始めたいと思う。阪神・淡路大震災で被害を受けたにも関わらず助かった方々は、ほとんどが自助と共助によるものであった。つまり、はじめから公助をあてにした防災体制では不十分であるということだ。私が考える防災体制とは、自分たちの力で自分たちの命や町を守ることができる防災のことである。私はその先頭に立ち、公助としての役割を全うしたいと思う。

7 ボランティア

環境防災科に来て初めて参加したボランティア活動は、1年生の頃ポートアイランドであったカミング神戸というイベントで行った募金活動だ。高校生が募金活動を行っているということもあり、たくさんのお金が集まった。人々の温かさを肌で感じた。イベントの最後にステージで歌をうたうということになった。私は、何が何だかわからず、皆と一緒にステージに上がった。その時、今まで一度も聞いたことのない歌をステージの仲間や、見てくださっていたお客さんが一斉に歌い始めたのだ。曲名は「しあわせ運べるように」だ。その時初めて聞いたのだから、私は歌うことができなかった。聞けば、神戸ではこの歌を知らない人はいないというくらい有名であるそうだ。しかし、今は歌うことができる。この歌の歌詞にもあるように、毎日を大切に生きていこうと思う。

私のボランティア活動は、募金活動から始まったが、今までに多岐にわたりたくさんのボランティア活動に参加させていただいた。例えば、地域の防災訓練や祭りの運営、視覚障がい者や聴覚障がい者との防災教育、小学生への出前授業などである。どの活動を振り返ってみても印象的なものばかりだ。活動それぞれで求められるニーズが違い、私たちはニーズに応えなければならない。これは、防災活動にもいえることだと思う。ボランティアや防災活動は、自己満足で終わるのではなく、ニーズに応えることが大切である。

8 感想

私がこの「語り継ぐ」を書いていて一番考えたことは、「自分にできることは何なのか。」ということである。私は、震災発生から4年後に生まれたので、当時の状況を全く知らない。人から聞いたり、映像で見たりするだけだった。もちろん授業や、校外での学習、ボランティア活動などを通して様々な経験をさせていただいた。きっと今までの私なら、自分の中に知識として取り入れるだけで精一杯だっただろう。しかし、今回両親にじっくりと話を聞くことができ、「学んだことをインプットするだけでなく、アウトプットしていくことが大切である。」ということがわかった。私の中だけで留めておくのはもったいない。今度は私が語る番となり、話を伝え続けたいと思う。阪神・淡路大震災で被災された方々から、震災の記憶が風化することはない。しかし、震災を経験していない今の若者はどうだろうか。きっと、同じわけにはいかないはずだ。今後発生するとされている、南海トラフの巨大地震に備えるためにも、私たちが伝え続けなければならない。阪神・淡路大震災の経験と教訓を、次の世代へと引き継いでいかなければならない。改めて私が環境防災科に何を学びに来ているのか、学んだことをどう活かすかということを改めて考えることができた。そして、私に与えられた「市民のリーダーとなって防災を広める」という使命を全うしたい。

さいごに

私の「語り継ぐ」を最後まで読んでいただき感謝しています。私は防災を学ぶ者として、これからも防災、減災活動に携わりたいと思います。ありがとうございました。



兵庫県立舞子高等学校

〒655 - 0004 神戸市垂水区学が丘3丁目2番
Tel : 078 - 783 - 5151 Fax : 078 - 783 - 5152